

東北大学東北アジア研究センター叢書 第76号

吾妻家文書を読む 第一集

— 岩出山伊達家の組織 —

荒武 賢一朗

岩出山古文書を読む会

編



1 岩出山要害屋敷跡（墨絵） 吾妻家文書 187

吾妻謙が描いた墨絵「岩出山要害屋敷跡」。大手門・詰めの御門が如実に描かれている。絵中の歌（中央上段）は「後の世のかたみ 過しことかを わかりのまいを 物□せり」と読める。忘れがたい岩出山の風景を描いて北海道に携えたものと思われる。左には岩出山城下の総鎮守「八幡神社」。



2 岩出山要害屋敷跡（現在） 大崎市教育委員会文化財課提供

岩出山要害屋敷の跡地は、現在宮城県岩出山高等学校（写真上部）、岩出山小学校（写真中央）の敷地となっている。大手門は岩出山小学校の校門付近に設けられていた。小学校裏手の段の上には「詰めの御門」があった。



3 荒雄神社奉納絵馬「長勢暮春（長瀬の船着場）」 古川荒雄神社所蔵（大崎市指定有形文化財）

古川荒雄神社所蔵（大崎市指定有形文化財）

明治時代に法橋英泉（絵師）の画によって奉納された。江戸時代到大崎地方の米の集荷場・積出港として栄えた江合川長瀬の船着き場を描いた絵馬である。当時は長瀬から江合川を利用して石巻に米が運ばれていた。



4 川渡温泉絵図 大崎市教育委員会所蔵

幕末期に描かれたと推測される「大口村川渡温泉絵図」より「吉郎右衛門湯守の東湯と御殿」部分を掲載した。幔幕の家紋は岩出山伊達家の「竹に雀と角切雪薄」が記されている。

伊藤五兵衛茂主閉門趣意
 一、下宮村、出立、吾輩、中、高、水、入、并、
 給、分、言、取、扱、以、所、寛保元年、分、水、
 自、受、為、限、中、年、中、年、中、年、中、年、
 君、大、袋、深、底、中、年、中、年、中、年、
 寛保二年、中、年、中、年、中、年、中、年、
 中、年、中、年、中、年、中、年、中、年、

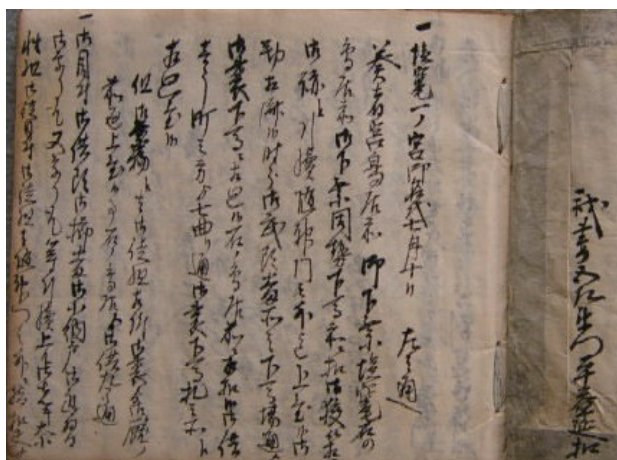
寛保三年、亥、十二月、十日、閉門、趣意、元年、子、三月、九日、閉門、
 門、中、年、中、年、中、年、中、年、
 中、年、中、年、中、年、中、年、

5 本書第2部第1章6
 伊藤五兵衛茂主閉門趣意書 吾妻家文書 25 宝暦3年(1753)

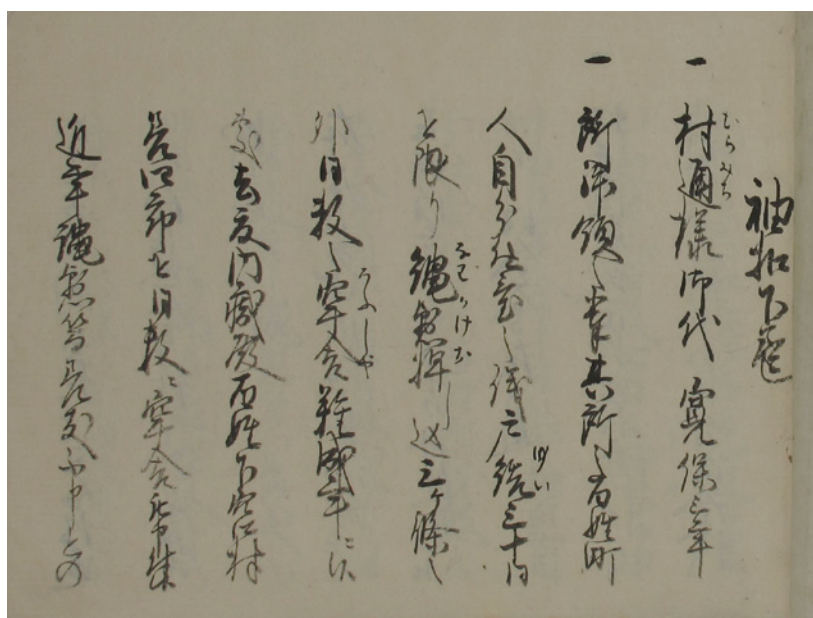
伊藤五兵衛
 弘化三年、子、四月、十日、
 東、仁、家、慶、朝、政、正、忠、綱、吉、重、齋、村、
 周、宗、義、邦、禮、壽、芝、恭、經、微、
 詮、備、義、慮、
 恭、敬、親、緝、則、謝、秩、元、直、
 今、度、改、為、博、奕、御、食、議、相、
 拙、者、大、組、中、家、中、中、中、中、中、中、
 打、中、者、中、中、中、中、中、中、
 中、中、中、中、中、中、中、中、
 以、存、諫、言、杯、右、加、取、法、隱、密、仕、

御目付証文
 秋、書、中、中、

6 本書第2部第1章10
 御目付証文 吾妻家文書 55 嘉永4年(1851)



7 本書第2部第1章12
御供頭方 全 吾妻益延執筆



8 本書第2部第2章23
公内袖控下巻 吾妻家文書 181

目次

口絵

第一部 論考編

1	総説 吾妻家文書 菊地優子・荒武賢一郎……………	1
2	「古事部覚書帳」が語る岩出山伊達家 荒武賢一郎……………	16

第二部 資料翻刻編

凡例

第一章 領内支配と儀礼

1	領内支配条々写 元文元年（一七三六）……………	23
2	岩出山武鑑（写） 年未詳 197……………	23
3	伊藤五兵衛次席永代仰付書 享保一一年（一七二六）……………	32
4	吾妻五左衛門永代列仰付状 年未詳 192……………	32
5	弾正内々不相統ゆえ預穀証文差出等に付書状綴 享保一八年（一七三三）……………	33
6	伊藤五兵衛茂主閉門趣意書 宝暦三年（一七五三）……………	41
7	評定所定例等覚書帳 天保一三年（一八四二）……………	48
8	賜目十郎兵衛退役に付書状 年未詳 158……………	65
9	柳内五郎兵衛退役願出に付書状 年未詳 190……………	65
10	御目付証文 嘉永四年（一八五二）……………	65

第二章 家老たちの記録

11	御目付方手扣	年未詳	岩出山町史・高橋盛解読	70
12	御供頭方全	年未詳	岩出山町史・高橋盛解読	121
13	行列次第覚帳	年未詳	178	136
14	城下触等覚書帳	天保一一年(一八四〇)	49	140
15	貞操院様卒去諸事御用帳	天保一四年(一八四三)	51	147
16	於珖様御婚礼方御用覚書帳	弘化三年(一八四六)	52	148
17	於珖様御召物帳	弘化四年(一八四七)	53	158
18	拝借品等覚書	年未詳	177	161
19	大納戸御蔵検地帳写	寛永二〇年(一六四三)	6	163
20	古事部覚書帳	年未詳	179	165
21	一ノ宮御名代被仰付部覚書帳	年未詳	180	186
22	府内袖扣	年未詳	183	208
23	公内袖扣下巻	181		225
24	岩出山伊達家覚書	年未詳	216	242
25	岩出山伊達家覚書(前欠)	年未詳	215	249
26	見聞雜記	天保元年(一八三〇)	48	254

総説 吾妻家文書

菊地 優子

荒武 賢一郎

はじめに

本書で取り上げる吾妻家文書は、江戸時代に岩出山伊達家（仙台藩一門）の家老を務めた吾妻家が所蔵した歴史資料で、現在は同家の子孫から寄贈を受けた北海道石狩郡当別町が所蔵している。

幕末から明治時代を生きた当主の吾妻謙（天保一五・一八四四生～明治二二・一八八九没）は、明治四年（一八七一）に岩出山伊達家一〇代当主邦直（天保六・一八三五生～明治二四・一八九一没）とともに岩出山を發つて北海道に移住し、現在の当別町における開発事業を牽引した人物である。昭和三十一年（一九五六）に公開された東映映画「大地の侍」は、北海道出身の作家本庄陸男が

著した小説『石狩川』（昭和一四・一九三九年刊）を原作とする映画で、邦直率いる岩出山伊達家の主従が移住する過程を題材として描かれている。この作品で、吾妻謙は主人公の家老「阿賀妻謙」のモデルとしても知られた存在になった。

吾妻家文書については、平成二五年（二〇一三）から吾妻家ならびに当別町教育委員会のご協力を得て、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史学研究部門（以下、部門）と岩出山古文書を読む会（以下、読む会）が共同で調査・研究を進めてきた。その経緯は、既刊『岩出山伊達家の戊辰戦争 ―吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む―』¹、『岩出山伊達家の北海道開拓移住 ―「吾妻家文書」を読む―』²に記載しているので詳細はそちらを参照されたいが、簡潔ながら説明をしておきたい。

吾妻家文書は、札幌市在住だった故吾妻穰氏が所蔵されていた膨大な文書群で、昭和一三年（一九三八）発行の『當別村史』³の根幹をなし、古くから知られた存在である。その後、長期にわたって当別町教育委員会で整理作業が進

められていたが、平成一三年（二〇〇一）より岩出山町史編さん室が、歴史資料調査の一環として吾妻家を数度訪問し、文書の閲覧・撮影・借用などを実施し、調査対象資料の翻刻作業を進めていた。その成果の一部は、『岩出山町史 通史編（上・下）』⁴に反映されている。また、当別へ移住後の記録については倉田守氏（当別町教育委員会歴史研究専門員）によって『吾妻家文書 課中文移録』が刊行されている⁵。

穰氏の逝去後、平成二七年（二〇一五）に文書群が仙台市在住（当時）の吾妻行雄氏（穰氏の二男、当時東北大学大学院農学研究科教授）のもとに移管された。行雄氏からご承諾をいただき、部門と読む会が共同で整理をすることになり、同年四月から大崎市岩出山において作業を開始した。作業の手順は、文書を一点ずつ古文書専用の中性紙封筒に入れ、封筒の表には標題・作成者名などの調書を記載したうえで、目録作成およびデジタルカメラによる写真撮影をするという流れである。その後、同年七月に吾妻家文書は当別町に寄贈され、これ以降は当別町から依頼を受け

る形で読む会が継続して一連の作業を進めた。平成二九年（二〇一七）七月、整理作業の完了をみて原文書は当別町に移り、さらに調査・研究が進められて現在に至る。なお、本書は当別町から提供された最新の文書目録をもとに構成している。

【仙台藩の一門衆】

江戸時代を迎え、伊達政宗・忠宗父子の時代には、仙台藩は「人数の多さは諸大名随一」といわれるように家臣団は肥大化していった⁶。その序列は、一門・一家・準（准）一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒の順序で設定した。政宗期には「御一門・一家・一族衆」との呼称が確認され、少なくとも序列上位は近世初期から定められた⁷。

最高位の一門は、政宗によって設けられて「御客大名」などと称したこともあった。当初は、石川昭光（角田石川）・伊達成実（亘理伊達）・留守政景（水沢伊達）・亘理定宗（涌谷伊達）・白石宗直（登米伊達）・岩城政隆（岩谷

堂伊達）の六氏からなり、四代藩主綱村の時代に増えて最終的には岩出山伊達・宮床伊達・川崎伊達・白河・三沢の五氏を合わせて一一家で構成された。

元和七年（一六二一）、藩主政宗が在国していたときの正月年頭儀礼（仙台城）には一門衆の地位にあった石川、伊達成実、伊達宗則（水沢）、伊達定宗（涌谷）が列席している⁸。いずれの家も政宗の大叔父が開祖・養子入りをしており、「家臣でありながら親族でもある」という立場にあった。このときの座列は、「御座間」に政宗と四男宗泰（岩出山伊達家初代）などの息子たちが揃い、「表（のち大広間）」と呼ばれる一段下がった部屋から、一門衆以下の重臣たちが並ぶという構図である。

一門衆は、藩主の指揮する儀礼や、幕府・親戚大名などへ藩主の名代として使者を勤めることも多いが、全員で参加するのは参勤交代で帰国する藩主一行を出迎えることである。江戸から領内に入り、奥州道中の中田宿を超えて仙台北下に近づく名取川の中田川原に一門衆は藩主を出迎えるために待機する。同所に一門衆は乗物で向かい、すれ

違うときには乗物の戸を開けてお互いに会釈を交わす。藩主の到着が近づくころには乗物から降りて一同が整列して蹲踞の姿勢にて藩主の会釈を待つ。その後、御供奉行が会釈をして通過を見届けたところで、川原にて乗物へ再び戻り、周囲の一門衆へ黙礼をおこない、弁当は各自乗物のなかで済ませ、近隣の中田宿で休息の際にはお互いに見舞の使者を遣わし儀礼を終えた。このような行動規定があり、一門同士の日常的な直談や文通のほかに、数年に一度の交流する機会にもなっていた。当然ながら、一門の当主はそれぞれ目付役・供頭・近習・徒組などを率いており、藩主の大名行列に加えて彼ら一門衆の集団を含めて数多くの人がびとが集結した様子が看取できる。

一門衆には、仙台北藩主からそれぞれに本拠地となる要害（城）と周辺に知行地を与えられ、地方知行制のなかでも最大級であった。領内の地方知行を許される給人（知行主）には知行地からの年貢徴収権があるものの、給人裁判権（自分仕置）は与えられない。また、知行地村々の治安および民政一般は仙台北藩の郡方が担当するため、原則とし

て給人が治安などを含めた領民に対する包括的権限を持つていない。

一 吾妻家文書の概要と構造について

読む会が整理した文書の総数は約九四〇〇点である。文書が作成された年代は、江戸初期から昭和初期までの約三百年間にわたっており、ほぼ間断が無い。その全体像について、整理を開始した段階の印象として次のように分類を想定した¹⁰。

【吾妻家文書の特徴】

- ① 江戸時代初期の書簡
- ② 江戸時代の吾妻家
- ③ 幕末維新の仙台藩・岩出山伊達家
- ④ 明治初期の北海道移住
- ⑤ 移住後の当別村・当別町
- ⑥ 当別村史編さん資料
- ⑦ 明治時代以降の吾妻家

⑧ 吾妻家の人々

⑨ 夥しい数の書簡

⑩ 多数の書籍類

年代から大別すると、近世（江戸時代）岩出山時代、明治初年の北海道移住、それ以後の当別時代、となる。

近世から近代にかけて作成された文書群の内容は実に多岐にわたっている。右に示す当初の概観はおおむね間違いはないと思われるが、それぞれの時代の文書を詳細に見ていくと、もっと多様な構造がみえてくる。たとえば一点ずつの作成者に焦点をあててみよう。一口に「吾妻家文書」と呼んでも、吾妻家の歴代当主や家族たちが個人的に書いた文書のみならず、さまざまな他者が記して同家へ送られてきた手紙、歴代の役職や社会的地位によって作成および入手した書類が含まれている。また、所属組織や団体の発信文書、親戚などから託されて吾妻家所蔵となった資料も多く存在する。

このように多彩な文書類を現在に至るまで大切に保存さ

れてきたのは、ひとえに代々に培われた家風であろうか。それぞれの文書の存在自体に歴史が内在することが実感されるのである。

北海道移住関係は既刊書で詳細を述べているが¹¹、移住者がどれほどの意識を持っていたのか、詳細な記録によって岩出山伊達家主従の挑んだ移住の顛末を知ることができ。平成二八年（二〇一六）九月一〇日から二五日まで、部門と読む会では吾妻家・当別町からの許可を得て、「吾妻家文書展―岩出山から当別へ 歴史の架け橋」を開催した。この展示会は「大崎市誕生一〇周年記念事業」の補助金を活用し、その主要部分については展示図録に収載している¹²。吾妻家文書は、岩出山時代から当別時代の文書が間断なく包括されており、その内容によって岩出山と当別の歴史のつながりが顕著にわかることから、まさに「歴史の架け橋」なのである。

ただし、数量的にみると大半は移住後の記録が占める。当別で岩出山から渡った人々は大地进行を切り拓いて農地をつくり、新たな村を築いて生活を安定させる、というリアル

な「生活史」の記録である。これらによって、現在の当別町が歩んできた足跡をたどる貴重な記録だと考えられよう。この時期の記録については、先述の資料集が手がかりとなり、今後の幅広い研究が期待できる¹³。

二 吾妻家文書の近世史料

本書は、吾妻家文書のうち、岩出山時代の近世史料を採録する。対象となるのは約二〇〇点を数え、ほかに各種の書籍があり、とくに吾妻謙が仙台の養賢堂時代に学んだ経書などが目を引くが、本書では紙幅の都合から書籍類や武芸・武芸書などは割愛した。

所収文書の年代は、近世初期から明治二年（一八六九）までとした。明治二年は、仙台藩が戊辰戦争の敗戦直後によって混乱する時期で、伊達邦直は本拠地の岩出山要害屋敷を召し上げられて仙台屋敷に移ったうえ、これまでの主従関係は断ち切れ、家臣団は無禄・解体と決定された。家臣たちの生活困窮に直面した邦直は、北海道への移住を決意し、自ら跋涉（はつしやう）することになる。藩祖政宗以来の地・岩

出山に思いは残しつつも、新天地に生きる道を模索している混沌の最中を示した記録を含む。

現存する吾妻家の最も古い文書のひとつは、岩出山伊達家初代宗泰（慶長七・一六〇二生―寛永一八・一六四一没）からの知行宛^{ちぎやうあてが}行状である。初代宗泰に仕えた家臣はわずかであったため、この時期の書類を所持しているのは極めて希少といえる。現在のところ、吾妻家の確かな出自は不明であるものの、先祖は伊達郡東根三十三郷（現・福島県）を領していた伊達家譜代の家臣で、修理良重・備前重治（五左衛門）兄弟が宗泰付きを命じられて岩出山にやってきたようである。修理の家は孫の代で改易となり、備前の長男八蔵は、宗泰の江戸駐在にしたがい同行し、一九歳の時に没した。吾妻家文書のうち、「八蔵宛」の黒印状や書状が最も古い。本書の取り上げる吾妻家は、八蔵の弟（重治の三男）十蔵が五左衛門重恒と名乗り、家督を継承している。十蔵改め重恒は、岩出山伊達家四代村泰（天和二・一六八二生―享保一六・一七三二没）のときに家老へ昇進し、享保一一年（一七二六）に座列（家臣団の序列）では

永代着座を命じられた。

本書では副題に示すとおり、岩出山伊達家の組織（殿様から家臣団）を明らかにする資料を紹介していくが、とりわけ家老の作成文書、さらに家老が知り得た情報を中心に収録した。

収載資料には、もともと吾妻家が所持していたものではないものが多数含まれている。出所不明も少なからず存在し、それを解明するためには吾妻家歴代の系譜や事蹟、そして親類縁者の関係をたどって、問題を解決していかねればならない。なお、本書には岩出山伊達家の永代家老席にあった伊藤家が所持していた文書も含まれている。伊藤家と吾妻家の由緒については次号に所収の予定だが、幕末期の伊藤家は、同じく岩出山伊達家の重臣戸田嘉右衛門の次男律之介を養嗣子として迎え入れた。この伊藤律之介（号は東溟、文政一〇・一八二七生―慶応二・一八六六没）は、有備館の督学として知られる人物で、若いころは養賢堂で大槻平泉（安永二・一七七三生―嘉永三・一八五〇没）に学び、その後江戸で安積良斎（寛政三・一七九一生―万

延元・一八六〇没）に師事し、昌平黌書生寮に入寮、のちに舎長となり、仙台藩の命により国情の探索活動に身を投じたが、仙台藩の江戸屋敷で病没した。遺品は、戸田・伊藤両家に引き継がれたが、伊藤家には吾妻謙の弟^{かなえ}鼎が後継となった。その鼎も若くして亡くなり、さらに謙の次男直樹が伊藤家を継いだものの結局途絶えてしまい、同家の来歴を知る資料や、東溟の遺品のいくつかが吾妻家に残された。この経過を確認してわかるように、吾妻家文書は「伊藤家旧蔵文書」を内包することになった。

岩出山要害屋敷内の文書蔵にどれほどの正式記録が納められていたのかは定かではないが、「公内袖控下巻」（第二章二三号文書参照）によると、家内の重要文書は「長棹」に保管されており、その管理は八代伊達宗秩^{むねつね}（天明四・一七八四生／弘化三・一八四六没）がおこなったと記載されている。また、公務に関する文書に「当日帳」とよばれる冊子があったといわれる¹⁴。この所在を示す文書には、「明和元年（一七六四）八月に（岩出山伊達家の）仙台屋敷普請に使用するため、「当日帳」六五冊を襖の下張り用

として送った」というのである。「当日帳」の具体的な内容についてはわからないが、公務日誌であったとすれば、それは保管年限が過ぎた文書は下張り用として再利用されていたことを意味しているのではないだろうか。江戸時代の公文書の管理がどのようにおこなわれていたのか興味深い。こちらは今後の課題にしておきたい。

三 本書収載の史料

第一章には「領内支配と儀礼」として、岩出山伊達家の領内支配に関する資料と葬送や婚姻などの儀礼に関する資料をまとめた。支配の中には家臣、及び家臣の職務も含めた。第二章は「家老たちの記録」として、内容は第一章と重複するものもあるが、とくに歴代当主たちの多くが家老などの重席を担った伊藤・吾妻両家が作成した詳細で重要な記録類を特集した。

【第二部第一章】

1 領内支配条々写 元文元年（一七三六） 20

宛先の伊達大力は、岩出山伊達家六代村通のことである。この年五月に九歳で家を継いだ幼少の大力に対し、仙台藩は家政取締のために在所目付を岩出山へ派遣し、取締条目を与えた。本資料は写しであり、実物は当別伊達家が所蔵している¹⁵。吾妻家、または伊藤家が家老の立場で写しを作成しておいたものかと推察する。

2 岩出山武鑑（写）年未詳（慶応三年の写本を明治時代以降に筆写） 197

明治時代以降の写本で、幕末期の岩出山伊達家の家臣団全体を示し、それぞれの役職や座列（家格）・知行高などの情報を含んでいる。当別町で確認されている家臣録としては、文久年間（一八六一―一八六四）と慶応三年（一八六七）作成の写本があるがいずれも原本は発見されていない。本資料は作成年代が不記載でありながら、「イロハ寄せ家中録」の筆頭に「伊藤鼎」の氏名がみられることから、伊藤

律之介没後の慶応三年の家臣録を写したものと考えられる。

罫線が印刷されたノートに鉛筆書きで筆写しており、文字が薄れていて不明瞭な部分が多いのが難点である。『當別村史』¹⁶編さん事業の際に作成したものかもしれないが、「岩出山武鑑」の表題は中表紙に書かれており、写本作成者が付けたものと思われる。

3 伊藤五兵衛次席永代仰付書 享保二十一年（一七二六）

13

吾妻五左衛門が三代宗親（敏親）・四代村泰に対する勤功により、永代家老の席次が伊藤五兵衛の次席に取り立てられたことを記す。

4 吾妻五左衛門永代列仰付状 年未詳 192

文書3と前後するが、吾妻五左衛門が「永代之列」に入り、遠藤五郎二郎の次席となったことを示している。包紙の表書には「御真筆」とあるが、実際には後年の写

しである。

5 弾正儀内々不相続ゆえ預穀証文差出等に付書状綴享保

一八年（一七三三） 17

志田郡福沼村長瀬（現宮城県大崎市古川）は、江合川沿岸に位置し、仙台藩の御蔵場（米穀貯蔵施設）が設けられており、流域の各地から集まる年貢米が納められていた。御蔵場には、仙台藩の蔵七棟、岩出山伊達家の蔵二棟があり、それぞれの御蔵役人が職務を担当していた¹⁷。とくに本資料に関しては、五代村緝期の享保一七年の冬に、伊達家の重臣たちが絡む大掛かりな不正が行われていたことが藩の知るところとなってしまった。伊達家では商人の大文字屋から借りた八百石が返せず、やむなく偽装を図っていたのである。この件につき、吾妻家の由緒書上¹⁸には「長瀬一儀二付、同役一同ニ享保十八年二月御役目被 召放、閉門被 仰付候」とある¹⁹。

6 伊藤五兵衛茂主閉門趣意書 宝暦三年（一七五三）

25

岩出山伊達家六代村通が幼少であり、叔父の伊達将監（村敏、岩出山伊達家出身で、同じく一門の川崎伊達家へ養子）が後見役をつとめていたところに、岩出山伊達家知行地の玉造郡下宮村（現大崎市岩出山字池月）の百姓善四郎が昨年の年貢米不納を催促されたところ、暴れて騒動に発展した。役人から通報を受けた月番家老の伊藤五兵衛は自分の判断で岩出山の牢屋へ収監してしまったが、江戸時代には知行主の警察権行使には制限があり、あくまで仙台藩が規則を定め、知行主の判断で入牢させることを禁止していた。責任者の伊藤は、主人村通にも、後見役の伊達将監にも相談せずに独断で行ったということで、仙台藩から厳しい取調を受けた後、御役御免となって閉門を申し渡された。その顛末は、第二部第二章20「古事之部」にも詳細を記載する。

7 評定所定例等覚書帳 天保一三年（一八四二） 50

表紙には「評定所定例・類族方・御膳番御供頭・御格留」とあり、我妻五左衛門益延が役目上で必要な定例や先例・実例などを写し書きしてまとめた文例集である。この年、益延は三十九歳で前年三月に御目付仮役に、七月には御目付本役に就任し、御小人頭も兼帯していた。評定所は裁判・検察を担う司法機関である。詮議の時の担当役や、事案が発生したときの対処法などを筆写し、自分の仕事で活用したものと考えられる。

8 鵜目十郎兵衛退役願に付書状 年未詳 158

筆者および年月の記載がなく、宛先は伊藤惣左衛門となっている文書である。鵜目の退役願について吟味をするという流れが理解できる。

9 柳内五郎兵衛退役願出に付書状 年未詳 190

この文書も、年月日と差出人・宛先の記載がない。しかし、柳内五郎兵衛は家老などの要職に就く家柄で、文面か

らも本人の退役の希望理由（おそらく病気か）はよくわかるが、後任（跡役）になりそうな人物が若年（重役之義年齢二も至りかね）だから、勤務の負担を軽くして、役職の継続を求めるような書きぶりである。

10 御目付証文 嘉永四年（一八五二） 55

御目付役の我妻五左衛門が、その任務をまとめた覚書である。弘化三年（一八四六）に仰せ渡された内容は、①博打の禁止、徒横目・小人による町内巡視、②家中手作場田畑の収穫物夜中運搬の禁止、夜廻衆による鉄砲持参の警戒、③乞食に対する施しの禁止、④御林の立ち入り禁止、竹林盗人の防止、⑤侍に対する無礼の禁止、⑥許可なく館下町での屋敷所有の禁止、といった一四の項目が記されていた。目付役の職務範囲は広く、さまざまな事案に対処していることも理解できよう。また、違反者が出た場合は五人組の連帯責任となっている。

11 御目付方手扣 年未詳 岩出山町史・高橋盛解読

御目付役の吾妻益延が岩出山伊達家の年中行事や交際の仕方、伝統的な規式などを、職務遂行のため自分用に記録しておいたものと思われる。年代は安永・天明年間（二七七二～八九）から文政年間（一八一八～三〇）あたりの記事が多いが、内容は年代順ではなく、横帳五〇丁に雑記が書き留められている。これにより、江戸時代の岩出山および周辺地域で暮らす人々、とりわけ家臣団の生活環境を垣間みることができる。

12 御供頭方全 年未詳 岩出山町史・高橋盛解読

御供頭を勤めていた吾妻五左衛門平益の手控である。仙台藩の一門である岩出山伊達家当主の大きな職務には藩主名代がある。御供頭は目付とともに御供衆や草履取りなどを率いて、主人が藩主名代として臨むさまざまな儀式や、参拝が滞りなく執り行われるように万全の手配をする。本資料は備忘録として平益が書き留めておいたもので、このなかには過去の留帳などから抜粋して書き写したと思われる

部分も数多くみられる。また、領内だけではなく、岩出山における参拝などに際し、御供の心得を記録しているところも重要である。

13 行列次第覚帳 年未詳 178

岩出山伊達家の行列次第を書き留めたものである。年代が明らかではなく、おそらく仙台へ上府するときの規模や役割分担などを記録したものとみられる。このとき、家老は中川伊兵衛・伊藤五兵衛の名前が確認でき、多くの人々で隊列を編成したことがわかる。

14 城下触等覚書帳 天保十一年（一八四〇） 49

御供頭、御目付役を務めていた吾妻氏歴代当主のうちの覚書と推定する。資料中の天保六年四月の記事に「此度分先規通り御目付御上二付御供歩御供被仰付候段」「御目付役身分昇進被仰付候砌二有之」とあり、この年御目付役に昇進したのかもしれない。全体としては、御供の段取りや、岩出山館下における治安の手配などについて記載して

いる。

15 貞操院様御卒去二付諸事御用扣 天保一四年

(一八四三) 51

貞操院は七代村則の妻で、出身は前沢邑主三澤頼母村保の娘嘉代子である。天保一四年七月二六日に七五歳で没した。本記録は貞操院の葬送における役割分担や慣例などが詳しく書かれている。仙台藩一門衆の正室だった女性の葬送儀礼を知る手がかりとしても興味深い。

16 於珖様御婚礼方御用覚書帳 弘化三年(一八四六)

52

17 於珖様御召物帳 弘化四年(一八四七) 53

18 拝借品等覚書 年未詳 177

三点はいずれも於珖様の輿入れ(婚禮)に関する記録である。弘化三年に於珖様の婚礼が行われることとなり、吾妻五左衛門益延はその婚礼係を命じられ、準備の子細を書き留めたものと考えられる。吾妻家の由緒書上によれば、

於珖様は「松山江御入輿候」とあることから、松山邑主・茂庭周防升元に嫁いだ一〇代邦直の姉で、当別伊達家の系図に小字「多満」後「佐太」と呼ばれた人物である可能性が高い²⁰。この人物のことだとすると、天保二年(一八三一)八月二六日の生まれで、輿入れは数え年で一六歳だろうかと察する。五左衛門は婚礼係として、持参する品々の準備を行っているが、弘化三年一〇月に準備を開始し、一二月四日に結納を済ませた。また於俣様と呼ばれる女性から細々としたものを拝借しているが、於俣様は姉の志久、後の英(はな)であろうかと推測する。

19 大納戸御蔵検地帳写 寛永二〇年(一六四三) 6

寛永二〇年三月九日、濱田四郎兵衛ほか五名が作成した検地の記録である。当時、仙台藩では寛永の総検地と呼ばれる領内一斉の調査が実施されており、そのなかで岩出山伊達家の知行地内に関する記録の一部だろうと推測できる。

【第二部第二章】

20 古事部覚書帳 179 ※論考編2で詳述

21 一ノ宮御名代被仰付部覚書帳 180

22 府内袖控 183

23 公内袖控下巻 181

この四点は一括資料で、同じ体裁の横半帳に同一の筆跡で丹念に書きまとめられた留帳である。どの記録にも筆者名は記載されていないが、家老職にあった伊藤家が書き残した記録と考えられる。

24 岩出山伊達家覚書 年未詳 216

25 岩出山伊達家覚書（前欠） 年未詳 215

岩出山伊達家覚書は、表紙も欠けており綴じも切れて丁はずれになっていたが、もとは竖帳である。本書では、左端に記載された丁数と目次から脈絡を付けて翻刻した。一二丁以後二一丁までは見つからなかったので、残る前半と後半に分けて所収している。

全体として、先に所収した古事部覚書帳にはない城下や

知行地内の出来事が記録されており、個人の備忘録というよりは岩出山伊達家に関する文書の筆写ではないかという印象である。

とくに大口村湯守吉郎右衛門が湯守を務めている川渡温泉は、岩出山伊達家七代大丞村則の入湯で知られているが、その普請の状況を詳しく書き留めている。口絵に載せた絵はこの時建設された川渡温泉の姿を書き表している可能性がある。

26 見聞雜記 年未詳 48

幸いにも家老職にあった吾妻・伊藤両家は、自分が携わった職務について詳細に「手控」を残してくれた。本書に所収した彼らの記録によって、岩出山伊達家の運営や家臣たちの職務内容を知ることが可能となった。そして近世の武士にとって不可欠な年中行事の様子、また知行地の実情などを明瞭にとらえることができる。今後の仙台藩や、近世武家社会の研究にも貢献できるだろう。

謝辞

本書は、東北アジア研究センター叢書として刊行することができた。出版審査に尽力をされた同センター編集出版委員会に厚く御礼を申し上げる。また、我々の調査・研究に快く応じてくださった吾妻家、当別町の皆様方、いろいろな教示をいただいた関係者に深謝の気持ちをお伝えしたい。

¹ 友田昌宏・菊地優子・高橋盛編著『岩出山伊達家の戊辰戦争―吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む―』（東北アジア研究センター叢書第五三号、二〇一四年）。

² 友田昌宏・菊地優子・高橋盛編『岩出山伊達家の北海道開拓移住―「吾妻家文書」を読む―』（東北アジア研究センター叢書第六四号、二〇一八年）。

³ 吾妻阿蘇男編輯『當別村史』（當別村役場、一九三八年）。

⁴ 岩出山町史編さん委員会編『岩出山町史 通史編・上巻』（大崎市、二〇〇九年）、同編『岩出山町史 通史編・下巻』（大崎市、二〇一一年）。

⁵ 当別町歴史資料集（一）『吾妻家文書 課中文移録』（当別町教育委員会、二〇二四年）。

⁶ 齋藤銳雄「仙台藩の家臣団構成―成立期の考察―」（『日本歴史』二一九号、一九九六年）

⁷ 小林清治による一連の研究が重要である。小林清治著作集編集委員会編『戦国大名伊達氏の領国支配―小林清治著作集一―』（岩田書院、二〇一七年、第二部「家臣団構造」、第三部「領国支配」）。

⁸ J・F・モリス『家からみる江戸大名 伊達家―仙台藩』（吉川弘文館、二〇二三年）一六ページ。

⁹ 本書第二部第二章20、論説編2参照。

¹⁰ 注2前掲書一六ページ、菊地優子「刊行に寄せて」。

¹¹ 注2前掲書。

¹² 東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門・岩出山古文書を読む会編集・発行『吾妻家文書展 岩出山から当別へ歴史の架け橋 展示図録』（二〇一六年）。

¹³ 注5前掲書。

¹⁴ 注4前掲書『上巻』三三四ページ、「伊達氏の系譜」。

¹⁵ 翻刻文は岩出山町史編纂委員会編『岩出山町史文書資料第七集 当別伊達家文書・岩出山伊達家関連 文書・補遺』（岩出山町、二〇〇四年）に掲載。

¹⁶ 注3前掲書。

¹⁷ 岩出山古文書を読む会編集・発行『古文書が語る地域の歴史

第四号 志田郡内各村々寺社古館人頭等書上』(二〇二四年)
一五―一六頁「福沼村」の項に記載がある。

¹⁸ 本書の続編『吾妻家文書を読む』第二集に掲載予定である。

¹⁹ 荒武賢一朗「一門衆の組織と運営―岩出山伊達家の考察から―」(荒武賢一朗・野本禎司編『仙台藩の組織と政策』岩田書院、二〇二五年)で詳しい考察をしているので、あわせて参照されたい。

²⁰ 注15前掲書。

「古事部覚書帳」が語る岩出山伊達家

荒武 賢一朗

はじめに

本書は、吾妻家文書所収のうち、岩出山伊達家の組織を明らかにする重要資料を収載しているが、第一章では「領内支配と儀礼」、第二章には「家老たちの記録」と題してそれぞれの史料性格を整理した。この二本の柱によって当時の歴史的特質が浮かび上がってくるが、仙台伊達家（仙台藩）の一門を担い、知行高約一万五千石の岩出山伊達家を動かしていた「主役たち」の素顔に迫りたいというのが調査参加者の一致した目的である。そこで、大きな手がかりとなる「古事部覚書帳」（第二部第二章20）の紹介から、実態の把握について述べてみたい。

この資料に、筆者および成立時期の明記はないが、岩出山伊達家の家老職にあった者、おそらく伊藤五兵衛家の旧

蔵と推測でき、内容の記載から岩出山伊達家一〇代邦直の家督相続があった弘化三年（一八四六）一〇月のあとに作成したと考えられる。もう少しゆるやかな時期設定をするならば、弘化三年から嘉永年間（一八四八～五四）ごろとして良いだろう。

【岩出山伊達家歴代当主一覽】

初代 宗泰（むねやす） 通称・苔巖（岩）

慶長七年（一六〇二）生→寛永一五年（一六三八）没
家督 慶長八年（一六〇三）→寛永一五年（一六三八）

二代 宗敏（むねとし） 通称・功巖（岩）

寛永二年（一六二五）生→延宝六年（一六七八）没
家督 寛永一五年（一六三八）→延宝五年（一六七七）

三代 敏親（としちか） 前名・宗親 通称・俊巖（岩）

慶安四年（一六五二）生→享保六年（一七二二）没
家督 延宝五年（一六七七）→宝永六年（一七〇九）

四代 村泰（むらやす） 通称・崇巖（岩）

天和二年（一六八二）生↗享保一六年（一七三一）没
家督 宝永六年（一七〇九）↗享保一六年（一七三一）

五代 村緝（むらつぐ） 通称・信巖（岩）

宝永四年（一七〇七）生↗元文元年（一七三六）没
家督 享保一六年（一七三二）↗元文元年（一七三六）

六代 村通（むらみち） 通称・智巖（岩）

享保一二年（一七二七）生↗天明三年（一七八三）没
家督 元文元年（一七三六）↗天明三年（一七八三）

七代 村則（むらのり） 通称・徳巖（岩）

明和二年（一七六五）生↗寛政一三年（一八〇一）没
家督 天明四年（一七八四）↗寛政一三年（一八〇一）

八代 宗秩（むねつね） 通称・隆巖（岩）

天明四年（一七八四）生↗弘化三年（一八四六）没

家督 享和元年（一八〇一）↗天保一二年（一八四一）

または弘化元年（一八四四）

九代 義監（よしあき） 通称・松巖（岩）

文化六年（一八〇九）生↗弘化三年（一八四六）没
家督 天保一二年（一八四一）または弘化元年（一八四四）↗弘化三年（一八四六）

一〇代 邦直（くになお） 後名・英橘（えいきつ）

天保五年（一八三四）生↗明治二四年（一八九一）没
家督 弘化三年（一八四六）継承

右の歴代当主から、「古事部覚書帳」の成立期を推定したのは、記述のなかに「御先代様」という言葉がたびたび登場し、それが九代義監のことだと察するからである。そうすると、一〇代邦直が後を継いだころと考えられる。内容には家政に関するさまざまな決まり事や先例、さらには儀礼における当主の所作など細かな規定も含まれる「公務マ

ニユアル」と評して良いだろう。ただし、近世初期の話はほとんどなく、おおむね享保年間（一七一六～三六）以降、四代村泰から幕末期までを取り上げていると想定できる。

一 岩出山伊達家の成立

一門衆には、仙台藩主からそれぞれに本拠地となる要害（城）と周辺に知行地を与えられ、地方知行制のなかでも最大級の存在といえよう。そのうち、伊達政宗の四男宗泰を初代とする岩出山伊達家を事例として稿を進めていきたい。一門衆のみならず、領内の地方知行を許される給人（知行主）には知行地からの年貢徴収権があるものの、給人裁判権（自分仕置）は与えられない（後述）。また、知行地村々の治安および民政一般は仙台藩の郡方が担当するため、原則として給人が治安などを含めた領民に対する包括的権限を持っていない。

慶長八年（一六〇三）十一月、伊達政宗は本拠を岩出山から仙台へ移し、自身の居城であった岩出山には四男愛松丸（のち宗泰）を据えた。前年、伏見屋敷で誕生した愛松

丸はわずか二歳で岩出山城と「家料三千石」を有するが、傳役（守役）の山岡志摩重長が城代となって家政を代行した。仙台藩の機構や序列が整備されていくなか、岩出山伊達家は一門衆に位置づけられて知行高一四、六四三石を得ている。これは、戊辰戦争まで維持され、家臣団も宗泰期の六四名、三代宗親継承時の延宝五年（一六七七）に三二五名、一〇代邦直の慶応三年（一八六七）には三五三名の規模が確認できる。

二 家老の選任

岩出山伊達家は、このように多くの家臣団（仙台藩主からすると陪臣）を形成し、仙台藩とほぼ同ような役職を配置する組織を有している。初代宗泰以来、当主の次席には家老が任命され、家内を統括する仕事を担っていた。これは、ほかの一門衆も同様で、運営面において誰が主導権を握っていたのかと考えれば、家老が実務の主導者であることは想像通りであろう。そこで、家老に関する情報を以下で説明しておきたい。

近世中期以降、家老への昇進がみられる我妻五左衛門家の事例を確認したい¹。同家の先祖は岩出山伊達家初代宗泰の「御附人」になった我妻備前重治で、その三男五左衛門重恒が本家より分かれて成立した。重恒は御金遣²の役職に就いたほか、新田開発の願書を上申し、その成果を含め延宝七年（一六七九）には知行高三貫九一〇文（三九石一斗）を得て、重恒の嫡子重益も元禄九年（一六九六）まで御金遣役を務めた。重益の後を継いだ重統は、岩出山三代宗親のもと、元禄元年（一六八八）に御膳番へ配され、同一一年に父から家督を継承して知行高四貫四一〇文（四四石一斗）を拝領する一方、四代村泰期には大納戸役用人、小姓頭へと昇進する。正徳三年（一七二三）には村泰より知行高一貫文の加増を受け、家老に任命された。そして享保十一年（一七二六）には「年久敷御家老御役目迄親切相勤候（長年にわたり家老をよく勤めた）」功勞として、永代家老席では伊藤五兵衛（後述）に次ぐ役列に位置づけられた。この重統以降、我妻家は家老職へ昇任することのできる永代家老席の一角を占めていく。

三 役列と実務

後年に家内の役職を記した「岩出山藩制」では、家老について「藩主補弼の重職にして、部下の職員を指揮監督し、政務を総裁する」とあり、先述した通り家政全体を掌握する立場にあった³。慶応三年（一八六七）には定員五名⁴、それ以前に一時は六名だったように複数名が任命されており、そのうち一人は月番を務め、一か月交代で家政を主導するが、非番の家老は月番ではないため月六回の評定や儀礼に出席するのみだったという。さきに永代家老席という言葉を用いたが、個人が役職に任命されて機構の序列で上下が付けられることとは別に、現職とは異なる家格の体系を「役列（または座次・座列）」と呼んでいる。たとえば、我妻や伊藤など家老職に就くことができると思われるのは次の「役列」から理解できよう。

【岩出山伊達家の役列とおもな役職】

① 永代家老席（八家）…家老

※ただし、この席次以外から家老職への登用あり

②代々着座一番座（一三家）…小姓頭、大番頭

③代々着座二番座（五家）…出入役、奥用人、仙台留

主居

④代々着座三番座（二家）…町奉行、目付

⑤代々着座四番座（一三家）…足輕頭、小人頭

⑥代々着座五番座（一一家）…金役、膳番、供頭

右の役列により、①に含まれる者が家老就任の資格を得て、原則としてこのなかから家老が選任される。しかし、家の格式だけで役職を得ることは難しく、たとえば岩出山九代義監は「家老と小姓頭は「両之肱（両腕）」であるため、其器に当り申さざる者（その器でない者）を任命してはいけない」と述べていた⁵。この義監の意向をそのまま受け取るならば、少なくとも両職については個々の能力を重視しながら適任者を探すことになる。

四 家老の「払底」

それより少し遡るが、六代村通期の宝暦三年（一七五三）には、「家老払底（家老がいない）」のため小姓頭を務めて

いた高野甚右衛門を家老仮役に申し付けた。永代家老席出身ならば小姓頭から家老へ昇進する事例は珍しくないが、この場合は正式な家老職ではなく「仮役」であることに注目したい。高野の役列は⑥で、本来は金役や供頭などの職位が相当とされ、それ以上の重職には就けない役列にあった。想像するに甚右衛門の能力は高く評価されて、格式を飛び越え小姓頭まで出世を果たしたと思われる。しかし、家老と小姓頭の間には大きな壁があるとみえ、仮役という扱いに落ち着いたのであろう。

八代宗秩期にも同様の家老不足が発生し、ひとりその職にあった宇和野傳右衛門の仕事を「小姓頭安積此面・氏家平九郎・戸田嘉右衛門・赤沼源之進」の四名に担わせることになった。史料では、「同役中（小姓頭の四名）へ、まづもつて家老方家政承り候様申し付けた」とあるので、役職は小姓頭に据え置きつつ、実際には家老の仕事をしていてとみられる。

本項では、岩出山伊達家の組織を束ねる家老の選任について素描してみたが、①家老就任には役列（①永代家老

席)へ入っていることが前提である、②定員は五名ないし六名でありながら適任者がいない場合は「家老払底」が生じる、③家老が不足したとしても下位から簡単に昇格させることはしない、といった特徴が浮上する。

¹ 吾妻家文書一一「先祖代々由緒書上(安政四年閏五月改)」。幕末期以降、我妻から吾妻へ表記を改めるため、現在の子孫ならびに文書群の名称は「吾妻家」となっている。

² 御金遣という役職は不明であるが、後年財政を取り仕切る出入役配下の「表金役」にあたるものと推測する。

³ 「岩出山藩制」(『岩出山町史文書資料』第二集)。この「藩主」とは岩出山伊達家当主を指す。

⁴ 遊佐家文書「岩出山家臣録」(慶応三年三月、明治三六年筆写、北海道当別町教育委員会所蔵)。

⁵ 前掲吾妻家文書七五。

第二部 資料翻刻編

【凡例】

一、本編は、当別町教育委員会所蔵吾妻家文書に含まれる資料を選択し、全文翻刻している。表題に当別町教育委員会所蔵吾妻家文書目録の文書番号を記載した。なお、11・12については、岩出山町史編纂室調査資料（高橋盛解読原稿）を大崎市教育委員会から提供していただいた。

二、原則として人名など固有名詞の一部を除いて、常用漢字に改めている。

三、かな文字については、原文のまま表記した。たとえば、「者（は）」「茂（も）」「江（え）」「与（と）」、合字「𪛗（より）」などである。

四、改行については、原文のとおりではない。ただし、欠字・平出・台頭は一部そのままの表記とした。

五、判読不能の場合は字数にあわせて□で表記し、原本の破損や虫食の箇所は■で同様に示す。複数の文字が想定される場合は、「」で表記した。ただし、破損箇所の

うち推定できる文字は□のなかに記す。

六、史料には、編者の判断で読点（、）や並列点（・）を付けている。

七、原文にふりがななどが書き込まれている場合は、そのまま記載するほか、原文の筆者による誤記および難解な用語については「ママ」として、注記を付けた。

八、史料の翻刻は岩出山古文書を読む会が担当し、全体の編集を荒武賢一郎が統括した。なお、最終的な文責は荒武にある。

第一章 領内支配と儀礼

1 領内支配条々写 元文元年（一七三六） 20

条々

一領内四民不困窮様ニ為專一、且家中等無我俣仕置可被申付、徒党等於有之ハ訖度可処嚴科、兼而稠可被申付事
一重役大分之加増等申聞候上可被申付死刑、侍之分扶持放候儀、不事急儀ハ品々被申聞上可被申付事

附、事之品により急な類儀ハ目付へ断可申付事

一其方為幼少之間仕置申付者共無私可申合之惣家中之者親類曆々を始、仕置申付者共之申付儀、不可違背候事

右条々、不可有違背者也

元文元年六月十六日御朱印

伊達大力殿

2 岩出山武鑑（写） 年未詳 197

岩出山藩ニ於ケル役数

人々

同

御家老	仙台御留主	御先手組頭
御奉役	御町奉行	御長柄組頭
若老	御目附	御勘定奉行
御小姓頭	御当地御足輕頭	表御金役
御番頭	御弓頭	御納戸御金役
大番頭	御小人頭	御膳番
御出入	御屋敷奉行	御守役
奥御用人	御作事奉行	御供頭
御勘定所目附	御檢知	奥方御破損定奉行
御櫛番	御本蔵役	本郷用水方
御近習御小姓	長瀬御蔵役	御茶道
御側御小姓	人場割	仮屋番於舟船村
奥小性	御召御具足役	御酒造方
御祐筆	大工屋本	御下屋敷御火消并御馬
表御小性	大工屋小奉行	屋頭
御留附	御扶持方并御囲籾方	御鷹匠御鳥屋頭
御供目附	御臺所持	御鷹匠
御溜	明礬□□方役	

上郷御野場締	御軍用方始末
下郷御野場締	御徒横目
御馬方	大番頭下役御出入
御伯楽	御書御金役方
御物書	物書
御勘定所	
御留主居指代	
尿前御関所役	
御家中士通高	五千九百二拾八石五斗
大番組高	
御徒組高	
御当地御足輕方	四拾参貫拾九文
船越御足輕方	参拾壹貫七百二拾七文
馬放御足輕高	二拾貫六百九拾六文
新御足輕	二拾貫六百九拾七文
御口取組組方	五百四拾文
御弓組方	拾壹貫八百五拾参文
御飼指御含馬	四貫百八拾壹文

御駕昇四人同人	八百文		
御駕籠持頭取人	三百文		
惣御家中七通いろは寄			
ノ高	姓名	ノ高	姓名
六、五〇〇	伊藤鼎	三、七一二	石田玄蕃
五、五八八	猪狩縫殿之輔	二、七五七	石川久馬
四、七〇〇	石田豊三郎	二、二一二	岩渕安三郎
四、三六五	犬飼与平	二、〇〇〇	伊藤玄達
一、四六〇	池田喜代治	三、〇四六	波多野三太夫
一、三五〇	伊藤七兵衛	二、六二二	濱田清之進
一、〇〇〇	岩渕善三郎	一、七三五	早坂定之進
、九七六	石崎栄治	一、八〇四	畠仲兵衛
御切米二切	五十嵐直之輔	一、五〇〇	芳賀文之進
、六六三	岩崎左兵衛	一、三三五	濱田右源太
一、一三三	伊藤郡藏	一、五〇〇	西川重之輔
四、〇〇〇	岩渕右門	御切米三切	西野伝太夫
三、〇〇〇	畑甚吉	一、四八六	西野小伝太
、七六七	新妻平大夫	二、二三一	千葉庄三郎

一、一五七	星愿安	一、八〇〇	千葉虎記	四、五〇〇	笠原武之輔	一、七六三	菅龜松
、九六四	星民三郎	一、二五二	千葉源之助	四、三三一	菅全之丞	一、六九〇	菅利左衛門
三、七六七	戸田定之允	一、〇八一	千葉繁太郎	四、〇七一	菅野丹弥	三、九九七	横尾喜兵衛
三、五四二	富田三郎輔	一、〇〇〇	千葉運治	三、八六三	神崎左司馬	二、九六四	横内郷太夫
二、〇〇〇	富岡四朗右衛門	無祿	千葉菅藏	三、三六〇	鹿野丈之進	二、〇〇〇	横山権之丞
一、五六五	遠澤三太左衛門	二、四八一	江崎武左衛門	三、三一八	片平亥三郎	一、五〇〇	米倉菊治
三、四七六	千葉格左衛門	五、八四〇	小野省八郎	二、三五〇	菅武藏	、八一八	米倉一角
三、二三七	中鉢丹治	五、五八六	小平東之進	二、五五九	菅原伝兵衛	、五六八	横山民治
五、八六〇	大内玄安	一、四〇〇	大内喜右衛門	一、九八四	吉岡松太夫	一、六一四	館内又治
三、〇〇〇	大内紋太夫	一、三七二	大内金治	四、〇五〇	高橋直治	一、五〇〇	高橋善兵衛
三、〇〇〇	落合平馬	一、五五〇	大橋利助	三、五四六	館内東吾	一、四六五	館内長兵衛
二、九九九	大内清左御門	一、〇〇〇	大泉政志	三、二九〇	高橋菊四朗	一、〇六二	武澤勝之助
二、五三〇	大内嘉右衛門	一、〇〇〇	大泉安海	二、二二四	高野恒之進	二、〇五〇	高野台記
二、四七〇	大内丹右衛門	一、〇〇〇	大内熊治	二、一六六	高橋福治	、八五七	高橋仲五郎
二、三四二	大内久左衛門	無祿	大内玄八郎	二、〇〇〇	高橋軍治	、六八一	高橋栄助
二、三〇〇	大内助之丞	二、〇〇〇	渡邊右傳治	一、八三二	館内健左衛門	、五〇〇	武田栄治
二、〇〇〇	大内孫左衛門	一、五一六	渡邊□己	一、六七一	高橋市之助	、二五〇	田村玄郁
一、〇、五〇〇	門脇兵衛之輔	二、〇〇〇	片平養五郎	二、四〇〇	曾根判之丞	一、五〇〇	中川伊兵衛

一、〇〇〇	坪田平左衛門	一、〇二六	中田尉之進	三、一八五	梁川秀達	三、一〇八	梁川九十九
一、八五七	坪田助左衛門	一、〇〇〇	永根龍太郎	一、九一三	山口與右衛門	二、八七五	山中健藏
四、百〇九	永根隼人之輔	、五〇〇	中森友治	一、六七〇	山中東右衛門	一、五〇〇	矢内要之輔
三、〇〇〇	永根權太夫	二、〇〇四	村上七右衛門	五、三〇三	松岡此面	二、〇〇〇	増井雄七郎
	中嶋十左衛門	一、六〇五	村上權右衛門	二、七六六	松浦權左衛門	一、四〇六	松岡慶助
二、〇〇〇	中森泰助	一、五〇〇	梅森廣治	二、七七七	松浦繼濟	一、〇八〇	松岡治右衛門
一、八〇〇	中森幾之進	五、九二〇	宇和野文之允	二、〇二九	蒔田芳松	、七九九	松村市之允
一、七〇〇	中森要之助	四、八〇〇	上野勘右衛門	二、〇〇〇	松岡留治	二、〇九〇	藤田五三郎
四、四三二	氏家善助	一、六五八	氏家新助	二、一〇〇	福田英三郎	六、八二八	吾妻五左衛門
四、二二九	宇和野治部之輔	一、二九七	牛坂陣三郎	一、三〇〇	藤田周之助	五、一二九	安積權兵衛
三、九三一	上野長齡	一、二六五	牛坂權太夫	三、四七二	小原木七郎太	四、四四〇	阿部禎之進
三、六五二	氏家惣右衛門	、九八四	氏家□策	一、八四〇	後藤吉右衛門	三、九五五	阿部孫四郎
三、二七二	氏家市兵衛	、八一九	宇和野久兵衛	一、七九七	今野左五郎	三、六二一	青木源太
三、〇〇〇	氏家宮之助	四、五六三	国井市左衛門	三〇、五五二	手嶋雄八郎	五、〇〇〇	赤沼虎之助
二、三八五	薄井佐五郎	二、三三三	国井十郎左衛門	七、五〇〇	手嶋幸三郎	三、〇〇〇	阿部東庵
二、〇〇〇	牛坂幸三郎	一、六九四	熊谷豊治	五、一六九	手嶋五平治	二、四〇六	青田吉昭
一、八六七	氏家廣人	二、〇〇〇	草刈新助	一〇、〇二八	鮎田四朗左衛門	二、二九六	荒砥理元
五、四〇〇	矢内清兵衛	五、六九五	柳内仲之丞	二、〇九〇	阿部志津馬	、八〇八	阿部波右衛門

御切米惣切

二、〇五〇	阿部五郎右衛門	四、四九二	佐々木豊治	二、九〇五	宮本順三郎	、六九三	下郡山勇助
一、二七七	阿部源助	四、三七七	佐藤市右衛門	二、〇〇〇	御宿庄兵衛	四、〇〇〇	遠藤繁治
一、七〇〇	阿部小左治	二、三二二	齋藤昌庵	二、〇〇〇	三浦第藏	二、六七五	引地求馬
一、一二三	荒卷朝之助	二、三三八	桜井豊治	四、三〇六	白井十右衛門	一、〇七六	菱沼權十郎
一、〇〇〇	荒井金助	三、五七一	佐藤孫九郎	三、三九八	下郡山弥五左衛門	七、五七九	賜目左近之助
、八九四	相原虎治	二、三八一	佐々木栄三郎	三、〇〇〇	渋谷良助	一、二六九	瀬戸勘三郎
、八六一	阿部清太夫	一、八〇〇	桜井小右衛門	二、〇六八	庄司駒治	一、一九八	関重之助
、八五〇	荒砥惣七	一、六八五	桜田九左衛門	一、六六七	下郡山弥八郎	、九〇〇	関口小左衛門
一、四四四	佐久間長八郎	四、六一五	遊佐新右衛門	三、一四三	菅谷七郎右衛門	二、三一〇	鈴木八郎治
一、三二五	佐藤東庵	四、一五〇	遊佐源太夫	二、二〇〇	鈴木林七	二、〇九五	鈴木傳治
一、〇〇〇	斎藤健治	四、〇〇〇	遊佐幸七	大番組			
、八〇〇	佐藤清七郎	三、九九九	遊佐平太夫	二、二〇〇	野村重右衛門	一、九三五	湯村長太郎
、七八一	佐藤齋	(空白)	湯山丹下	一、七九七	日野久右衛門	一、六六九	熊谷安兵衛
四、〇五三	君ヶ袋強助	一、〇〇〇	遊佐浪江	一、二五四	佐々木孝四郎	一、六一四	加藤太仲
三、二一〇	菊地衛門七	、五〇〇	庵原東藏	一、二四〇	駒場惣兵衛	一、二三一	中鉢勝衛
、九〇三	木村源左衛門	二、四〇〇	目黒市左衛門	一、二〇〇	木村久米藏	一、一二一	小館円喜
	北村勇	、九五五	目黒順禎	一、二五六	黒澤小三郎	一、〇〇〇	佐藤甚兵衛
三、九〇五	皆川市郎	一、〇〇〇	渋谷今朝治	一一九八	鈴木廣治	、八四五	蜷川武一

一、〇七八	小関雄四郎	、八五六	吉岡今之助	、九八八	柿沼嘉平衛	無祿	遊佐軍治
一、〇八八	結城源六	、七〇〇	岡本九左衛門	、六〇〇	末長金二郎	、九〇〇	今野周記
一、一七九	鶴原清治	、六九六	横山梅治	、九五〇	加藤徳太郎	、八九〇	須和部庄兵衛
一、一八〇	鶴原富三郎	、六八三	野村源治	、八八〇	山崎判治	、八六五	伊藤金助
一、〇〇〇	山内萬三郎	、六三八	結城菊松	、四四七	奈須野善七	、八三七	菊地彦太郎
一、〇〇〇	遠藤鶴治	、六〇〇	高嶋源四郎	、八〇〇	伊藤養七	、七四七	北村長右衛門
、五〇〇	高橋弥兵衛		佐藤登	、七〇〇	佐々木平左衛門	、七〇〇	宇和野禎治
一、四八四	真山左兵衛	、七〇〇	岸勝之丞	、五〇〇	佐藤三右衛門	、九六五	地所富吉
、四六二	木村久濟	、五九八	高梨市之輔		加藤久七	、二〇〇	阿部庄右衛門
、三四八	大沼兵治	一、〇〇〇	佐藤清太郎	、九六二	菊地庄治	、三五〇	大沼勘助
、五五〇	千葉善右衛門			一、〇〇〇	柳田幸三郎	、六九九	牛坂勘兵衛
御徒組				、六六五	佐々木惣右衛門	、六九〇	小松編戸
一、五七七	藤島四郎五郎	一、五七三	大沼周助	、六七五	菊田常之助	、六三八	村上幸
一、二三八	門田与太郎	一、一二八	鈴木勇藏	、五六〇	佐藤九右衛門	、五六〇	松田吉治
一、〇六七	菱沼弥兵衛	一、〇三三	三浦惣右衛門	、五五〇	千葉善六	、五三四	菊田仲三郎
一、〇四七	大塚秀濟	一、〇四四	村上原右衛門	、五二五	渡辺軍藏	、五〇二	遊佐波助
御身一 生大番組				、五〇〇	阿部勇之丞	、五〇〇	菱沼十角
一、〇三一	籬駒藏	一、〇〇〇	門田善之丞	、四九九	横山菊三郎	、四〇〇	湯村勇治
一、〇〇〇	二階堂傳五郎	一、〇〇〇	今野惣七				

、三九三	小嶋小三郎	、四〇〇	加藤金三郎	内田專右衛門	大内運治	飯田千代松	佐々木三代治
、三〇〇	佐々木仲助	、二〇〇	齋藤作兵衛	松下伊左衛門	畑山孝太郎	岡本傳治	渋谷善治
、二〇〇	今野俊蔵	、一〇〇	鎌田又治	、六九六	山中熊蔵	、六九四	鈴木喜内
無禄	佐々木茂右衛門	、九三三	梨崎喜濟	、六五〇	齋藤繁治	、六四六	柿沼運蔵
無禄	小野齊藏			、五五五	氏家勇治	、五八八	小野木利右衛門
御当地御足輕		一、四〇〇	湯村吉左衛門	、五四一	渋谷和右衛門	、五三一	館内仲左衛門
一、一四五	齋藤卯左衛門	一、〇二七	松岡源助	、五一七	佐藤源太郎	、五一五	佐々木良蔵
、九七〇	佐藤菊治	、八二二	坂本八郎兵衛	、五二三	坂本周蔵	、五〇四	須和部甚作
、七九〇	喜家川源左衛門	、七八〇	草刈勝三郎	、五〇七	氏家庄兵衛	、四八七	大浪長右衛門
、七五〇	横山安吉	、七四四	岡本重兵衛	、四八〇	草刈林七	、四七〇	草刈喜善治
、七〇〇	渋谷留吉	、七〇〇	岡本佐七	、四三七	手嶋行右衛門	、四〇〇	小野木和右衛門
、七〇〇	佐藤文四郎	、七〇〇	佐藤文四郎	、三七〇	須和部傳之丞	無禄	館内善八
、七〇〇	山崎善内	、七〇〇	山崎亥之助	、五〇〇	内田圓藏	、二二五	野村三太郎
、四五九	岡本佐吉	、七〇〇	松本久三郎	、五〇〇	廣瀬平三郎	、五〇〇	坂本林左衛門
、七〇〇	結城傳吾	以下同上	山中清治	、五〇〇	佐々木吉助	、五〇〇	佐々木定吉
岡崎鉄治	草刈又七	岡本佐助	喜家川弥平治	船越御足輕			
山崎留之助	岡本久七	菱沼田利助	守谷秀吉	一、一三五	畑伝兵衛	、九九六	木村長兵衛
星仲左衛門	斎藤久助	山崎嘉蔵	森多膳	、九三〇	栗田喜左衛門	、九三〇	佐々木健蔵

、八五〇	佐藤利左衛門	、八三〇	栗田丈輔	同	高橋五郎右衛門	同	栗田喜代治
、八五〇	佐々木八郎兵衛	、七〇〇	佐々木仲治	同	施谷千太夫	同	阿部源之丞
同	佐々木天元	同	佐々木新十郎	同	佐藤久之助	同	村上久太郎
同	駒場甚左衛門	同	佐藤儀右衛門	、四四〇	伊藤卯右衛門		
同	栗田森藏	同	佐藤市郎右衛門	新御足輕			
同	佐藤左治衛門	同	安部孝右衛門	、九〇〇	盛平四郎	御扶持二人分 新高九〇〇	加藤十兵衛
同	尾形丹藏	同	佐藤徳治	御扶持二人分 九〇〇	守屋与兵衛	一、〇八六	猪股文藏
同	佐々木善右衛門	同	鈴木文治	同	高橋已之助	、五三六	平塚傳四郎
同	及川長左衛門	同	高橋平左衛門	、九〇〇	関惣十郎	、八七九	大沼十治
同	衣川惣五郎	同	高橋新七	、八七九	石野傳治	、七二六	大田平七
同	栗田三右衛門	同	衣川仁右衛門	、七〇〇	齋藤喜四郎	、六九〇	相沢利右衛門
同	遠藤傳四郎	、六七〇	佐藤文輔	、六七五	沼田長兵衛		
、六〇〇	加藤惣左衛門	、六四〇	佐藤辰治	御弓組			
、六四〇	佐藤吉四郎	、六一七	下山松十郎	一、〇二〇	中鉢善兵衛	、二四〇	早坂三左衛門
、六〇〇	佐々木利右衛門	、五五〇	高橋四朗右衛門	、五四〇	高橋勘兵衛	、二四〇	今野善五郎
、五五〇	阿部運治	、五五〇	栗田治左衛門	、四五〇	高橋庄左衛門	、二三三	遊佐永藏
、五二〇	栗田与五郎	、五二〇	駒場直吉	、三三三	高橋丹治	、二〇〇	遠藤今朝治
、五二〇	加藤惣吉	同	阿部長之丞	、二九三	遊佐長右衛門	同	結城善三郎

31 第二部 資料翻刻編

寺院

藤軍山 真言宗

御連枝格 満願寺 地藏院共

御借高壺貫四百五拾文

京都醍醐寺末寺 御膳料五五拾文^マ

諸法山 曹洞宗

御連枝格 伊達三河守
御再興 実相寺

高二貫文 大徹派

格式同 玉揚山 臨濟宗
宗敏公建立 祥光寺

松光山 延寿寺

格式同

自貞山 曹洞 松窓寺

光照山 浄土 来迎寺

3 伊藤五兵衛次席永代仰付書 享保二一年（一七二六）

13

（端裏）

御書付

吾妻五左衛門

若年之頃、俊岩様御代より御当代迄 御両公様江之御

奉公引続年久当御役目迄親切ニ相勤候ニ付、永代之座席伊

藤五兵衛次ニ被 仰付旨

御意之事

享保拾壺丙午年六月十日

4 吾妻五左衛門永代列仰付状 年未詳 192

（包紙表書）

御真筆

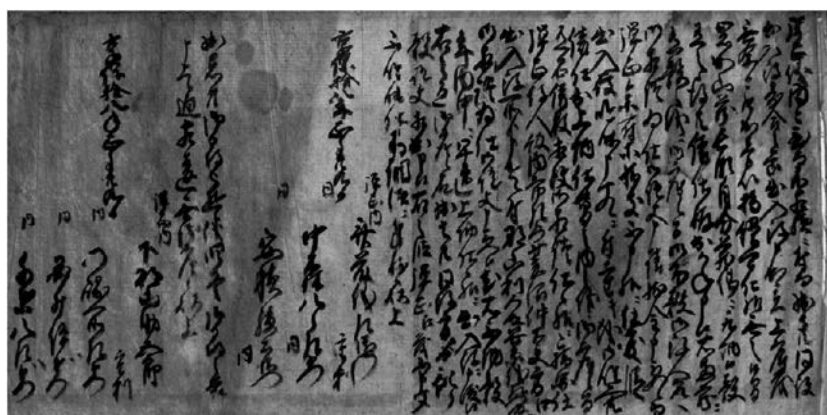
吾妻五左衛門

大殿様御代、幼少、年久敷神妙ニ相勤候ニ付、永代之列遠

藤五郎二郎次ニ被 仰付候事

5 彈正内々不相続ゆえ預穀証文差出等に付書狀綴

享保一八年（一七三三） 17



彈正儀、内々至而不相続二付而、拙者共同役出入役寄合之節出入役申出候者上府茂無余候罷成、旁以指繰可仕様無之候間、岩出山藏・長瀬自分藏場二取納候穀有之候得共俵仕拵出かね申候、右両藏二有穀之儀二御座候而御本穀御役人衆へ御相談為仕御証文申請持金申受候而、彈正参府等指支不申様二仕度段出入役吟味申聞候二付、重キ儀二御座候へ共俵仕出上納仕候間之内之儀二御座候而有石俵数相改御相談仕候様二と指図仕、彈正役人館内市左衛門・菱沼仲太夫方江出入役所今申遣候付、郡山利右衛門殿・笠原儀左衛門殿へ御相談為仕御証文申受候、尤右不納穀年内中二早速上納仕候様二出入役二申渡候、右之通御座候故拙者共同役方今預り穀証文相出申候、右之段彈正江茂不申聞不吟味仕不調法二奉存候、以上

彈正内

斎藤儀左衛門

重判

享保拾八年正月廿九日

同 中森八郎左衛門

拙者共御尋被遊候儀、旧臘御尋之節申上候通相違無御座候

以上

彈正内 館内市左衛門

重判

享保拾八年正月廿九日

同 菱沼仲太夫

〃

拙者共御尋被遊候儀、旧冬御尋之節申上候通相違無御座候、以上

彈正内 下郡山助五郎

重判

享保拾八年正月廿九日

同 門崎所左衛門

〃

同 国井伊右衛門

〃

同 千葉八左衛門

〃

同 牛坂彦兵衛

〃

彈正内 松浦与惣右衛門

重判

旧冬御尋之御覺書を以申上候通、彈正長瀬自分蔵可被相改由、有路善兵衛殿・鈴木長兵衛殿を手前役人館内市左衛門・菱沼仲太夫方へ被仰聞候付、市左衛門・仲太夫右之段申聞候而御一分之御吟味ニ御座候て被相改儀被相控候様ニ仕度由、口上書を以申遣候儀彈正へ者不申聞拙者指はからいニ而出入役之者申付指遣申候事
一 在家屋さかし同前ニ相聞候、身分柄無抛被存候と申訳者
旧冬御尋之節覺書を以申上候通ニ御座候事
一 有石之通、蔵之内ニ而御見届被成候儀ハ指支不申候、蔵を俵数被相出被相改候儀者被相控候様ニ仕度由申達候、是悲不被相改不叶義ニ御座候ハ、御挨拶次第二仙台へ申

達、御下知次第追々可申達由、申遣候訳ハ旧冬御尋之節
覺書を以申上候通相違無御座候、役目初心ニ而不了簡仕
候儀只今土貢可申上様無御座無調法ニ奉存候、以上

彈正内

永根権太夫 重判

享保拾八年正月廿九日

右之通之順ニ一同之ニ被召出、御尋之上口書茂連名ニ而
相出申候、以上

正月廿九日

大内惣右衛門

五兵衛様

高橋十助

直々御座候而御書相調候而、新五郎申達候ハ五左衛門義
被召出印判仕候様ニ被成置義ニ御座候哉申達候ヘハ、大
病之義ニ候而広間江罷出候ニ者不及候而、勝手ニ而印判
突出出可申由御申候而、勝手ニ而印判つき如判共ニ仕指
出申候事

一彈正殿去年分大文字屋前金米八百石余不納之分、其方共

吟味之上長瀬御本石御役人方々納証文為出、其方共連判
ニ而右石預リ之証文を相出置候、御藏へ上納も不仕石高
皆済不仕して証文を取候儀不罷成事ニ候処ニ、何様之吟
味を以右之仕方ニ候哉、尤右之段彈正殿不被存儀ニ相聞
へ候、此品々可申上由御尋ニ御座候

右御尋承知仕候、右之儀御百姓共手前々段々取納為仕自
分藏ニ入置候之处、石高過分之儀ニ御座候付、尤当所之
儀者雪所ニ而馬足も相叶不申候而、段々春中迄上納仕度
段、拙者共同役吟味之上出入之者共ニ申渡御役人衆へ
願、右之通首尾仕候処不吟味仕、此度御尋之上可申上様
無御座候、尤彈正ニ而ハ被存候儀ニ者無御座候

一去年極月六日ニ長瀬御役人有路善兵衛・鈴木長兵衛方へ
彈正殿口上之趣ニ而、右不納石之預証文其方共出候ニ付
而、自分藏有石見届候様ニと之品々書調指遣候、此段も
彈正殿不被存事ニ相聞へ候、御主人へ不申聞其方共自分
を以申遣候哉可申上由御尋ニ御座候

右御尋承知仕候、去年極月六日長瀬御役人有路善兵衛
殿・鈴木長兵衛殿方へ彈正口上之趣ニ而右不納石之預証

文拙者共相出候ニ付而、自分藏有石御見届候様ニと之品々書調指遣候、此段も彈正ニ而者不被存事ニ御座候、拙者共自分を以申遣只今ニ至リ土貢可申上様無御座候、以上

我妻五左衛門

印判

享保十八年正月廿二日

熊耳左四郎殿

右之通御尋書御取候而、七ツ半頃ニ毛利正左衛門旅宿へ御帰被相出候、廿四日ニ^者七北田辺に寓り可申上、御朝ハ後日罷有候と申候、尤長左衛門にも正左衛門所へしかと相附罷有候事

一御尋之上口上書指出候通、早々指出候様ニと五兵衛殿へ新五郎を以可申渡候而、御役目衆被相帰候而御尋書之通相調指遣、勿論御尋之様子新五郎委細申達候、且長瀬御役人有路殿・鈴木殿へ口上書之趣意通ニ案見申候へ共失念仕、尤書付等も無之候而御月番方御留帳ニ有之哉と新五郎ニ中合色々御留見申候へ共見得不申候江、五兵衛殿

被申候由罷帰申聞候、御城へ被為呼候而新五郎罷出御尋之様子申上御尋書之通御用之由、尤右口上書趣意失念仕候故行当候段も新五郎申上候ニ付而失念之儀覚候様ニ申達候義、其品も御心元無之拙者申達候義不可然候而、今夜相調明朝指出申候而取替指出さセ可然下書為御書、惣左衛門新五郎吟味被仰付候而新五郎致持参候事

一其夜五ツ頃ニ菅谷七左衛門罷越申聞候者御尋序書之内彈正殿不存と書出シ申所、御一門衆之御事疎略ニ書出シ申候間、書直シ指出候様ニ被申候而調査シ指出申候

一右ニ有之候有路殿・鈴木殿へ之口上書之儀御指図と申、御尋之節ニも申達下書新五郎指出候節共ニ失念仕候儀を覚申候様ニ、此度申上候而ハ先キ々如何可有之候哉、同役三人之引はりニも可罷成哉、長瀬右御兩人衆へ遣候義廻状を以相談仕、五左衛門も承知仕罷有候由ニ員従申達被置候、又尤御指図ニ而右紙面ニて者何方へも指支ニ不罷成文言故、先以七左衛門ニ其夜申合致候而翌廿三日朝明々ニ致持参候処、御徒目付衆いまた起不被申、七左衛門ニ致内談候而起被申候上ニ、七左衛門を以指出申候事

二ヶ條目之御書二

右御尋承知仕候、去年極月六日長瀬同然に相聞身分柄無
扨被存候間指控候様ニ仕度旨、其方私のはからいを以彈
正殿口上に取なし申遣候由ニ候、惣而公義として御役人
沙汰に及び候事ハ貴賤によらず違背すへからざる儀とい
ひ、況前金穀高納さる以前に家老共等私に御役人請取之
証帖を出させ候上ハ俵数改之儀不及異儀事ニ候処、私慮
を以主人のしらさる事迄を口上に造り都而大義を忘れ不
敬之仕形重疊不届至極ニ候、依之進退被召放御城下并彈
正殿知行外ニ可罷有旨被仰付候事

同出入役 下郡山助五郎

同 門崎所左衛門

同 国井伊右衛門

同 千葉八左衛門

同 牛坂彦兵衛

其方共旧冬伊達彈正殿大文字屋前金穀之儀ニ付、家老共ニ

吟味之上御役人ニ相對し、穀高納さる以前に請取之証帖を
出させ法外私なる仕形ニ候、殊ニ此儀ハ家老共方江其方共
了簡申出候由ニ候得者一入不届至極ニ候、依之役目被召放
閉門被仰付候事

同役當時隱居 松浦与惣右衛門

其方在役中旧冬伊達彈正殿大文字屋前金穀之儀ニ付、家老
共ニ吟味之上御役人ニ相對し、穀高納さる以前に請取之証
帖を出させ法外私なる仕形ニ候、殊ニ此儀ハ家老共方江其
方共了簡申出候由ニ候へ者一入不届至極ニ候、依之閉門被
仰付候事

同藏役人 館内市左衛門

同 菱沼仲太夫

其方共旧冬長瀬におゐて伊達彈正殿大文字屋前金穀高納さ
る以前に御役人に相對し、請取之証帖を出させ候儀ハ家老
出入役之者共吟味之上ニハ候得共不都合之事ニ候間、一應
了簡を茂可加之処ニ、無其儀剩納懸り有之分を茂其方共計

ひを以証帖を取都而法外私なり仕形不届至極二候、依之役
目被召放閉門被仰付候事

右之通御評定所におゐて御町奉行新田勘助殿被仰渡候事、
一役宛段々被仰渡候

一孫右衛門・八郎左衛門・儀左衛門、出入役長瀬役人ハ
屋敷へ罷歸候而支度仕仙台の罷下候、権太夫儀ハ御評定
所の大町一丁目之所江めぐり堤ノ茶屋ニ而荷物乗馬を合
せ何茂のハ先ニ罷下候へ共道中ニ而出合申候、尤青木新
兵衛・小平弥左衛門より相附罷下候事、月番五兵衛江弥
左衛門罷出候節、五左衛門方江被仰渡候儀何様ニ御首尾
被成候哉、品々相達シ相聞得候而相扣候様ニ仕度と申儀
不都合ニ相聞得候、何様ニも御役人之勝手次第第二為相改
可申二候、上之御役人の方指図申事ハ何事ニ而も指支申事
不罷成候、乍当座も家老役相勤居候身分ニ候間折入吟味
可申事ニ而一分ニも指はからい可申身分ニハ候得共、余
之口上等相計申付とハ違不輕仕形ニ候被罷立候様ニと有

之退出仕候

右之通昨日ハ口書無シニ口上ニ而計申上候、別而折入御尋
も無御座、先述之通り之御尋ニ御座候、廿一日・廿二日頃
ニ茂落居可仕かと奉存候、昨日之御尋之趣可申上ため如此
御座候、以上

大内惣右衛門

二月十九日

高橋十助

五兵衛様

追便 昨日御町奉行衆の我妻五左衛門歳書出候様ニと御
申候付、我妻五左衛門六十三歳之由書出申候而、右御尋
之趣此段共二五左衛門殿へも御通達被指置候様ニ仕度候
一昨日御尋之上、測尻喜内、長瀬仲四郎・甚七・喜惣兵衛
御聞済之上御詮儀中縄御免ニ而出牢仕、昨夕の国分町ニ
罷有候由輕キ方ニ罷成候と相見得如此御座候
御触承知之訳只今ハ稠敷御尋有之、塚ノ目藤右衛門と申
者昨日御牢へ被相入候由承候、以上

大内惣右衛門

高橋十助

五兵衛様

右之通五兵衛殿ハ廿日昼致承知候様ニと御申越候事

二月廿七日朝、御評定所ハ御留主居方へ指紙を以御尋ニ

相請候者共不殘、我妻五左衛門義ハ病氣之由ニ候間、小

性組以上之親類居合候ハ、可差出候、若親類居合不申候

ハ、相応之者名代可差出候

右之者共御用之儀ニ而、今昼時評定所江差出候様ニ首尾

可被申候、以上

二月廿七日

彈正殿

御留主居

我妻五左衛門名代差出候様ニと申来候、右名代小平弥左衛門相出申事ニ御座候、段々被仰渡候ハ、品々可申上候、以上

二月廿七日

大内惣右衛門

高橋十助

伊藤五兵衛様

伊達彈正殿家老役

安積孫右衛門

同 中森八郎左衛門

同 斎藤儀左衛門

同 我妻五左衛門

其方共旧冬伊達彈正殿大文字屋前金穀之儀ニ付、出入役之者共吟味之趣ニ任セ、私之計らひを以御役人等相對し、穀高納さる以前に請取之証帖を出させ法外私なる義といひ、剩右之事ニ付主人のしらさる口上を造り彼是役目不似合仕不届至極ニ候、依之訖度可被為御沙汰候得共、自分勝手之儀ニも無之主人用向之事ニ候故、以御有免役目被召放閉門被仰付候事

右之通於御評定所新田勘助殿被仰渡候由、小平弥左衛門何茂江相附罷下り、月番五兵衛殿へ罷出相達候、五左衛門儀宿ニ慎罷居候条何様ニ被仰渡儀ニ御座候哉伺候処、名代

之義ニ候而直々罷越五左衛門へ可申渡由被申候ニ付、右之品々委細ニ申聞候、尤閉門之首尾ハ手前分門を指堅メ御上分御始末被成置義ニ無之由申聞候ニ、右之通手前分指かため置相慎罷居候事

二月廿七日

一西隣屋敷矢内安之允所分兼而通用口御座候へ共、此節戸を拵相附置申候而、間柄近キ親類安之允所へ申入此方へも申聞候上、密ニ相入候事、先ハ右之戸ゆい切置通用不仕候事

一右安之允所迄首尾届ニ参候者之分、不寄誰々ニ帳ニ名本留等申聞候、屋敷ニ近キ親類之外誰も相入不申候事

一五左衛門病氣ニ付、旧冬、廿三日迄ハ梁川玄瑞致薬用候処、同廿四日分ハ大内友安薬用申候付、病氣様子等為見薬用仕候様ニ仕度と御投薬御座候義ニ候哉と、親類を以五兵衛殿へ伺申候処、病氣之義ニ者指支不申候由御申聞候而其段友安へも相通申候、尤五兵衛殿分も御申渡候而、夫分友安参被申様子脈等見申候而薬遣被申候事

一花洲安兵衛御家老仮役被仰付、御用番三月 日分相勤被

申候処、矢内安之允ニ御用有之ニ而罷越候様ニと申来リ宅へ罷越候処、閉門中掃除等其儀共公義内之定御座候而、右書付一通相渡候而五左衛門ニ而致承知候様ニ被申渡候、掃除儀ニ隣屋敷分可仕由御書付ニ候而、柳内仲之允・矢内安之允・毛利庄左衛門・小平弥左衛門四人、右之通御書付致承知置首尾可仕由御申渡候而、残ル三人へも安之允申聞候而仲之允と安之允申合掃除可仕と申合掃除仕候事

右御書付左ニ

一御通之御道筋寄麗に掃除可仕候、遠慮等之者屋敷ハ其向又ハ隣屋敷分掃除可仕候、輕キ遠慮之者ハ手前之者へ掃除可為仕候、閉門等之者屋敷前草抔生候ハ、見苦敷無之様ニ向敷隣屋敷分草為取可申事

一火事節、逼塞・閉門・蟄居・遠慮之者屋敷危キ体ニ候ハ、立除、其段支配頭へ可相達候、且又自火ハ不及申近所分火事出来候ハ、屋敷之内火防キ不苦候事

一閉門等之者、病人有之節行当候儀可有之候而、隣か近所

ノ者心ヲ相附へし、主人不居合時分ハ内之者宿守等用弁之様ニ可仕候、尤就夫不慎成儀無之様ニ可仕事

附急病之節、品ニ付閉門之者方々不申通候而不叶儀於有之而ハ、内之者若指支候節ハ子弟ニ候共蜜々ニ相出シ、近所之者へ頼医師呼候義不苦候事

右之御書付、右安之允持参掃除仕候、外三人へも申聞候品々共ニ申聞候事

右之通安兵衛江罷越、五左衛門父子ニ為申聞御書付相渡、掃除等之義仲之允・庄左衛門・弥左衛門ニも為申聞候様相達候事

一 掬穀御停止之旨、惣而御分領中御ふれ被相通候処 右京様御穀千俵測尻之喜内と申者掬穀仕候而、長瀬御蔵へ相納候儀ニ付、右喜内其外肝入御升取等被召登段々御せんき之上、凡下之者共左之通落居被仰付候事

御構無

測尻

喜内

6 伊藤五兵衛茂主閉門趣意書 宝曆三年（一七五三）

25

（表紙）

「 癸亥閉門の除夜

門閉てかくるゝ甲斐もなかりけり

いつこよりいる老の年乃矢

寛保三年亥十二月十八日閉門、延享元年子三月廿九日

開門

茂主閉門趣意」

伊藤五兵衛茂主閉門之卷

一下宮村御百姓善四郎と申者、御蔵入並給分高所持申候所ニ寛保元年分御年貢難洪申二付、其節之御年貢取立役君ヶ袋江介段々責付申候得共相済兼、寛保二年ニ罷成候而も催促相付責付申候所ニ御年貢も相済不申、四月六日晚右善四郎、江介宅へ押込催促を扣くれ候様ニと様々理不尽ニねたれ、其上悪口あばれ法外之仕形共江介何様ニ

ももてあつかひ、同日暮半過當番之御出入江相達可申と御城へ罷出候処ニ、其節仙台御役人江御下屋敷ニ而御馳走被遣候付、御出入も相越 御城ニ居合不申ニ付、直々月番ニ付五兵衛宅江介罷出候処ニ、折節五兵衛同役花淵安兵衛・氏家治右衛門・中川伊兵衛・大内惣右衛門・矢内清兵衛、延寿寺へ振舞ニ而相越、右寺ニ居候所へ江助罷出詰合へ御次物書、中森作右衛門を以右之品々委曲相達、土貢何様ニも可仕様無之候間、御小人被遣繩被相懸被下候様ニ仕度由申聞候、同役連座ニ而承知相談申候処ニ御小人兩人遣シ繩為相懸候様ニ吟味相濟、則御小人支配頭松岡喜右衛門ニ申渡、御小人兩人繩心懸早速江介所へ相出候様ニ申渡候事

一御小人兩人同日夜五ツ過ニ江助所へ相越、善四郎ニ繩相懸直々引立、御村預千葉左惣右衛門所へ召連參引渡申候所ニ、左惣右衛門夫々善四郎町宿ニ相渡置、下宮村々善四郎組合等呼寄町宿ニ而相預置、江介処ニて之案外悪口之品々左惣右衛門ニ申付為相尋候処ニ、其節ハ酒ニ給酔一円ニ前後覺も無之由申事ニ御座候由、扱又六日晚江介

相達候ハ酒ニ一円酔申様子ニ無之由申聞候、仍善四郎平生之行跡御村預等ニ承候所ニ御村にても常々案外あばれ者にてもあつかい申由申聞候

一同月七日於会所、御出入小原木弥兵衛・高野甚右衛門・青田咲右衛門・下郡山九郎兵衛、吟味役人才藤義右衛門・戸田喜惣治・高橋卯太夫ニ昨夕江介相達候善四郎不義ノ品々繩懸候始末等為申聞候事

一同月九日於会所、御出入吟味役申聞候ハ此度善四郎不被相尤メ候ハ、江介相達候趣意も不被立下、此末御年貢取立も仕兼可申候間、案外之御尤メ牢舎被 仰付可然と奉存候、尤時節柄組合共預居候も迷惑ニおよび申段御村預も申出候御吟味牢舎被 仰付候様ニと相達候付、則同役中へも吟味申候処ニ同役人中之了簡も無異義ニ付、十日迄繩相懸町宿ニ而組合ニ預置候所ニ、十一日朝牢舎被仰付候間、左之通口上ニ而申渡、牢舎之首尾仕候様ニ御村預千葉左惣右衛門ニ申渡候事

仰渡書

下宮村御百性

善四郎

過ル六日君ヶ袋江介所へ相越御年貢方之義二付、様々
悪口仕、案外之仕形二付、則繩被相懸其後品々被相尋
候所二酒ニ給酔一円覺無之段申出候といへとも、御年
貢方之義相達候ハ、肝入を以可申達所ニ直々罷出、右
之仕形重畳不届至極、依之牢舎被 仰付候事

四月十一日

右ハ左惣右衛門口上ニ而申渡書付相納候

右牢舎日数御役人中八十日か十五日かと申聞候得共、同
役中吟味之上、七日牢舎八日ニ出牢可申付と、左之通左
惣右衛門ニ申渡候

一十八日朝、善四郎出牢被 仰付候而古御勘定所ニ而牢舎
御免之段申渡、組合共ニ善四郎相渡下宮村へ相返候首尾
可申候、仍組合之者共十七日ニ呼寄置可申事

一其後御蔵分ハ御年貢相済、給分花刈安兵衛年貢米壹石四
斗余懸り石有之事

寛保三年

一九月始、安兵衛方御村預千葉左惣右衛門方へ手紙を以

申遣候ハ当前穀も罷出候付、善四郎古懸り年貢相納候様
ニ申渡呉候様ニ頼入候由、依之左惣右衛門善四郎ヲ呼
寄、右之段申渡候所ニとやく違却申二付、左惣右衛門
同役猪又安右衛門・館内甚太左衛門ニ相談、善四郎ヲ相
糺申候処ニ、内々引張共肝入弥四郎始有之ニ付、同月廿
七日ハ段々引張之者共呼寄古御勘定所ニ而右三人之御
村預吟味之上詮義申内ニ、十月六日善四郎何方へ参候
哉、下宮村ニも居不申候由いか、と沙汰申内ニ仙台江罷
登、同月十一日ニ御目付衆武田奎之助殿へ直訴仕候由、
依之御評定所始末ニ罷成、下宮村ハも肝入弥四郎始段々
被為相登御詮議、此方ハも君ヶ袋江介・猪又安右衛門・
館内甚太左衛門、御蔵役人牛坂正之允・氏家友右衛門・
遠藤門太夫など段々被召登再往御尋有之、十一月十九日
ニ右御役人中被相下候

同月廿日、氏家治右衛門宅へ御家老・御出入吟味役相
越、右御役人中仙台ニて之御尋之品々承知申候事

一十一月廿五日、善四郎北上ノ川北江御追放ニ罷成候由、

仙台御留主居落合清左衛門申下ス

一同日、落合清左衛門ニ御評定所ニ而御町奉行衆被仰渡候ハ不被相達、御自分ニ牢舎ハ不罷成事ニ候所ニ繩懸等差支不申所へ御間違候哉、自今御自分牢舎ハ不罷成事之由被御申渡候ニ付、清左衛門此方へ申下候、其後御承知被成候段清左衛門罷出相達候

十二月七日、御宿老津田丹波殿ハ清左衛門方へ申参候ハ御家来へ御用被成御座候付、来ル八日九日ノ内罷登候様ニ申参、九日ニ中川伊兵衛罷登候所ニ夜ニ入上着、其段清左衛門方ハ丹波殿へ相達候得ハ明日ニ罷出候様ニ申参、伊兵衛丹波殿御宅へ罷出候所ニ直々御出会被仰候ハ、下宮村御百性善四郎と申者直訴仕候ニ、去年牢舎被成候由不被相達、御自分ニ牢舎不罷成事ニ候条、何様ニか被相達様も可有之所ニ無其義御延引御手前ハ御不念不被相達 御上ハ被 仰付候而ハ重キ事ニ候間被相達候ニと被申候、尤御達書相調候ハ、先以御留主居清左衛門を以丹波殿へ懸御目候様ニ被仰候、伊兵衛ハ右御宅ハ罷帰清左衛門ニ相談可被相達、御趣意内々ニ而御評定所御役

人氏家九十郎殿へ頼入相調候所ニ、九十郎殿了簡ニ其節之月番家老伊藤五兵衛、当番出入青田作右衛門慎申付候、仍私も致無調法候と被相達可然由ニ而草案御調預候左ニ

口上

私百姓玉造郡下宮村善四郎義、御目付へ致直訴ニ候ニ付被遂御詮義候所ニ、先達自分牢江日数七日戒置候旨申出候、牢舎申付候義ハ地頭自分仕置難成義ニ御座候ヲ、近年繩懸等差支不申との義及承牢舎も不苦事と心得違申候哉、向後ハ可被相扣旨留守居ニ御町奉行申談候趣委曲致承知候、仍其節携り候家老伊藤五兵衛・出入青田作右衛門不念至極ニ付慎申付候、仍私義も無調法之至ニ奉存候、以上

十二月

御名

御奉行衆連名

右ニ付伊兵衛ハ、先以 将監様へ此節内藏様御幼少ニ付此方御内外之御用被為聞候付 為可申上十二日ニ川崎へ罷下候、此方

ふも吟味仕、同役之内壺人罷登候様二十一日二伊兵衛申下候付、十二日二大内惣右衛門上仙申候事

右十一日二伊兵衛方申下候付、則御家老中五兵衛宅へ寄合御百性等古来の牢舎御仕癖二候間、何様二可被相達様も可有之歟、乍去 将監様御了簡も難計、此方之吟味相決兼候間、兎角明十二日惣右衛門上仙申様二吟味相成候事

一伊兵衛方申下候、九十郎殿草案之通被相達方二候へハ、月番之家老・当番之出入相慎申趣意二付、五兵衛・作右衛門十一日晚に相慎罷有候事

一十二日二伊兵衛川崎へ罷下、右之品々申上候所二

将監様被 仰候ハ、先年御百性等牢舎も被成来候処二、此度 内藏殿迄御不念被相達候義御氣之毒二被思召候、依之丹波殿へ右之訳御書通等にてハ間遠ニ而埒明兼可申候間御上仙可被成由ニ而、急二十二日御夜通シニ御上府、十三日二丹波殿へ御出、古来の岩出山ニ而御百性等牢舎之義致くせ二候処ニ、此度 内藏殿不念相達候所無御扱被思召候由丹波殿へ御取会被成候由、尤此段ハ御

奉行後藤孫兵衛殿へも御間柄ニ被成御座候而 将監様御出御直談可被成由被仰候処ニ、丹波殿被申候ハ先以思召相通シ可申候間、孫兵衛殿へ御出被成候義ハ此方申上候様ニ可仕由ニ而被相扣候処ニ、十七日二将監様孫兵衛殿へ御出被成候様ニ申来御出被成候処ニ、孫兵衛殿被申候者元禄年中輕罪ニ而も御自分御仕置不罷成筈ニ被 仰渡候品々之御書付被相出候ニ付、将監様ニも御引当思召も難被相通其段ハ御存知不被成候、尤岩出山ニ而も何茂不存義二候、左候ハ、被相達様いか、と御相談被成候処ニ、其節ノ月番家老役目召放閉門申付候、仍私も不念相達候由、内藏殿御上府御親類丹波殿を以被相達可然候由、左様も無之候而ハ 公義江之仰訳も相立申間敷由ニ而、十七日夜過ニ此方へ右之品々申来り、十八日明々右御飛脚下着之事

一十二月十八日朝五ツ過、花洲安兵衛・矢内清兵衛兩人五兵衛宅へ相越仙台今朝申来候者 将監様ニも御上府首尾能相済候方、此間品々御吟味も被成置候所ニ無其甲斐無御扱被 思召候得共 公義へ之仰晴も無御座候間、月

番忢人惣名代ニ御尤メ被成置外無之、御吟味ニ而五兵衛御役目被召放閉門被仰付旨被申渡候

次ニ両人衆被申候ハ仙台ノ申参候紙面も披見申候様ニ被申候、右書中ニ同役共一同ニ吟味仕、牢舎も申付候処ニ、月番忢人之越度ニ被仰付候義無扨品々 將監様へ伊兵衛・惣左衛門縷々申上候処、尤ニハ被思召候得共、左様ニ事広ク罷成なと 内藏殿御為ニも罷成事無御扨義ニ被思召候得共、月番ニ相当候所無是非事五兵衛忢人惣名代ニ被相尤メ外無之、御吟味然者五兵衛ニも利人なとを以訖度被仰渡事ニも無之候間、安兵衛・清兵衛直々相越、五兵衛ニ具ニ申含候様被仰渡候事

一兩人衆五兵衛宅被罷帰、則門ヲ閉、西隣宇和野菊十郎方ノ通用口相明候事

一右ニ付同十八日昼八ツ時 殿様ニも此方御出達御夜通ニ御上府、十九日ニ御不念御達書大内惣左衛門丹波殿へ持参、御奉行衆迄被相頼御遠慮被成置候事
一將監様ニも 内藏様御幼少ニ付此方御用被為聞砌ニ而、

是又御同日丹波殿へ被相頼御不念被相達候事

一同日晚、此方・川崎両御留主居御奉行遠藤対馬殿御宅へ罷出候様申参、両方ノ罷出候処ニ對馬殿御直々左之通被仰渡候事

伊達内藏殿

貴体様百性玉造郡下宮村善四郎儀、去年御自分牢江被戒候旨申出候、御自分仕置候義ハ格も有之儀ニ御座候所ニ御家来其心得違、貴体様并伊達將監殿へも不申達牢舎申付候ニ付而、御家老伊藤五兵衛役目被召放閉門被仰付候、仍貴体様ニも御自分遠慮被成候段上府被成被相達候、此御時節ニ付不及御沙汰相済候義ニ候間不及御遠慮ニ候、御家老御仕置被仰付候義御尤之義承知仕候、江戸へも為申登相達御耳候様ニ可仕候

伊達將監殿

此度伊達内藏殿家老伊藤五兵衛義品々有之、内藏殿ノ仕置被成候段被相達候、右用事貴体様へも不申達候得共内藏殿用事御聞被成候様ニ被仰付置候義故、上府被成御自分遠慮被成候段被相達候、此御時節ニ付御沙

汰相濟候義、且貴体様へハ不申達事ニ御座候間不及御遠慮候、江戸へも為申登相達御耳候様ニ可仕候

右之通両御留主居ニ被仰渡候事

一右ニ付將監様ニハ則十九日御夜通ニ御在所被成置候、殿様ニハ廿一日御在所被成置候事

寛保四年 三月改元 延享元年子

一閉門日数寛保三年亥十二月十八日分当延享元年子三月廿八日迄百日也、仍同廿九日朝御月番花洲安兵衛殿分氏家平九郎を以閉門被成下 御免旨被仰渡候

即日有髮ニ而御家老中へ平九郎召連御礼罷出候事

但御奉行衆并丹波殿へも百日ニ而閉門可被相免哉之段、御内々ニ而御相談被成置候所ニ何方ニ而も御

同意ニ付右之通之由也

一閉門中 將監様分被仰付候ハ、元禄年中輕罪ニ而も御自分御仕置ニ不罷成 仰渡書一覽仕候様ニ被仰付候事、其後此方ニても為御尋被遊候へハ御代々御讓之御印符御文庫ニ右御書付有之由ノ事

一閉門中 殿様分御丁寧之被成下 御意、其後御膳番賜目十郎兵衛当番候節、氏家平九郎御支(使)支者ニ而御意御尋ノ事

一清鏡院様分御内館御番頭大石又左衛門を以度々御丁寧之被成下御意候事

一開門已後十日計過、又左衛門・十郎兵衛方へ御礼ニ罷出候事

一五兵衛出勤不申ニ付、門十郎前々ノ通御近習御小姓に被召仕段四月十日ニ被仰付、同十一日分出勤仕候

但御不相続ニ付、御家中へ重役可被相懸御吟味ニ

而、去年三月分親懸リ御奉公被相除候付、門十郎も此節休番ニ而罷有候所ニ、右之通被 仰付候也

一七月廿二日五兵衛退役ニ而居申候間、門十郎番代ニ御武頭牛坂佐右衛門へ頼願相出申候所ニ、八月十九日無御取上被相返候事

一八月廿七日清兵衛殿分門十郎被為呼被遊 御意ハ其後何角 御目見候不被 仰付候間、五兵衛罷出候様ニ被仰付旨被申聞候、其節病氣ニ而不罷出候所、其後快方次第ニ

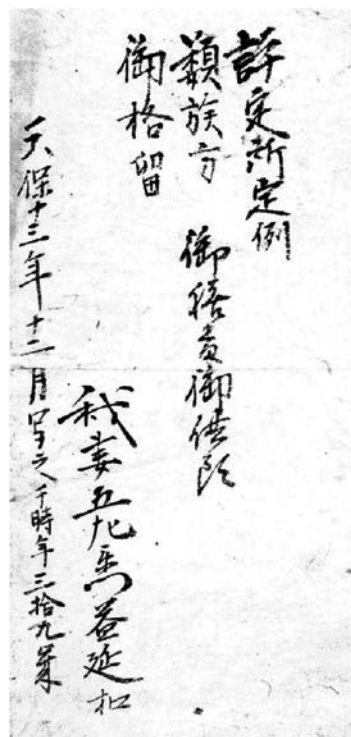
押而も罷出候様二被 仰付、十月七日罷出候所二御目見
候上様々御丁寧之被成下 御意、夫々 清鏡院様 聯珠
院様へも御機嫌伺申上候 清鏡院様二而ハ 御目見候
上、閉門一義等品々御丁寧之御事共御吸物ノ上御酒被下
置下宿

一延享三年二月廿一日、又以門十郎ヲ番代ニ願相出ス此節
願候通済 御武頭松岡喜右衛門取次

一宝曆三年酉八月朔日、段々願之上隠居被仰付候、行年
六十一歳 御武頭菅谷七郎右衛門取次

多栄老々館内平兵衛を以被仰聞候事

7 評定所定例等覚書帳 天保一三年（一八四二） 50



（表紙） 評定所定例

類族方 御膳番御供頭

御格留

我妻五左衛門益延 扣

天保十三年十二月写之 干時年三拾九歳

評定所定例

御家老御問合之節御役人左二

一御小姓頭 一御目付

一御徒目付 一御詮儀物書

一使番

一御詮儀二相成候得八町奉行立合

一月番立合

一御小姓頭 一御目付

一御徒目付 一使番

御家老御役被召放候節ハ、御小姓頭宅御役障無之節八月番宅

御相伴通御詮義

一御小姓頭 一町奉行立合

一御目付 一御徒目付

一御詮義物書 一使番

一落居被仰渡候節町奉行

其外同断

御役目付ハ平士大番組迄御尋之節指紙

一誰被相尋儀有之候間、召連罷出可被申候

宅之節ハ誰宅と相認可申事

兩人

月 日

何之誰殿

御徒組江

一誰被相尋儀候間、召連罷出可被申候

宛処右同断

御足輕以下御組付江

一誰被相尋儀有之候間、親類召連罷出候様御首尾可有之候、以上

兩人

月 日

支配頭

何ノ誰殿

封なし直組頭江

一御問合之節親類不付本人江直指紙

御問合御用之儀候間何方江罷出可被申候

月 日

兩人

誰殿

被相尋節着席之次第

一御役目付平士迄揚り口ハ横疊二疊目・三疊目之尾、大番組ハ平士ハ僅二下り座ス

一御徒二疊目頭横疊之内

一御組付上り口横疊之内ニ而 但疊取筵一

口書認様

一士通ハ御徒迄御尋承知仕候、御組付已下ハ御尋奉承知候

一士通口書重判

一御徒以下印判計り

一両宅之内江直訴有之、早速御足輕等相入候節ハ直々御城

下御足輕与頭方江首尾召仕候様被 仰渡候

但直訴之節親類有之哉之訳承届、親類有之候ハ、親

類江相渡置吟味可申事、若親類請合無之候ハ、如何

様之品ニ而不請合段屹度承届可及始末事、親類無之

候ハ、組合不指支事

月番安積孫右衛門殿江青木新兵衛相届相すむ

一御尋之上引取候節、其者親類江御尋之上慎可居旨首尾可申事

一手負之者相尋候節ハ其宅江罷越相尋候義も有之事、御組以下ハ御徒目付を以相尋候事

一女相尋候節ハ口書江親類判形可為仕事

一繩掛之者相尋候節ハ口書江判形無之手錠右同断之事

一御詮儀之上繩為懸候節ハ懷中小道具有無之訳御徒目付江

首尾御小人相改候事

一女相尋候節、士通之妻子ハ格別御徒已下其宅江相越候義

ハ吟味有之、其訳申達御指図之上可相越候事、押而可罷

出由親類江屹度首尾可申事

一御足輕以下口書ハ其名前江何々御組と肩書可為仕事

一御問合ハ腰物不取、御尋ハ取可申事

但士通ハ御徒迄羽織不苦候、御組付指支候事

一対談之節羽織ハ指支之事

一御詮義之上申上口不都合ニよつて大小召上申渡候砌、右

大小御目付印符御徒目付を以親類江渡ス

一不念と覺得候様申渡候ハ、口書江判形不仕已前、其者江直々首尾申候事

一御牢舎被 仰付候節

牢鑑

繩懸御小人兩人付添其所江相出候事

一中町甚太郎所ニ而、同町伊右衛門南沢村長五郎借屋長助と申者ニ被切候處、深手ニ付内外御医師相願候ニ付相達候、本道ハ書物ニ而可相達候得共手負難指延申達候、則石田玄意・荒戸理泊被 仰付、其夜九ツ時死亡之段申出、御医師見届之上無疑相達候事

但家中引張無之、無御達之事

一安永七年八月三日氏家卯十郎出奔ニ付、同性喜七郎并老母御尋、右親類大内千太夫・瀬戸文吉御問合、右喜七祖母病氣ニ付卯十郎宅御詮義被 仰付候事

一先年西野寛左衛門御詮義中、祖父同性助惣病死ニ付、御役人中其宅江被遣御詮義、縦忌中候共御詮議江ハ被相出不苦訳也

將監様御後見中之由也

一矢内佐左衛門出奔ニ付、親類矢内甚藏・引地源右衛門右兩人蒙仰渡時分罷出候節、兼而之通腰物為取候事、本人同前有之候事

一御馬取御沙汰相濟何ニか被 仰渡候節ハ、着用之羽織為取候事

一火元御尋之上慎組合御問合、近隣御問合被仰付御格也
一矢内七兵衛居家焼失、火元七兵衛家内不殘御尋、組合柳内五郎兵衛殿・鮎田四郎左衛門右兩人御尋、五郎兵衛殿御家老ニ付御町奉行手前々親類を以口上書御問合被 仰付候、御問合承知仕候と認、四郎左衛門御相伴通ニ有之候處、出火之節計御町奉行詮義也

一御山守勘平居家出火、小家其外不殘焼失、其節同役病氣不參ニ付兼而ケ様之節ハ在郷御足輕頭・御町奉行向仮役被 仰付置候由ニ付、千葉權十郎仮役御目付・御徒目付・物書、其夜幸七宅ニ而勘平御尋、同人父子共二口上書取、幸七・助十郎御聞届

一斎藤雄助居家出火、広間共ニ焼失、但類焼無之、雄助父

子御尋、妻娘ハ病氣ニ付親類斎藤儀右衛門を以御聞届口上書取揃、組合大内加内・赤沼甚四郎何茂在郷嘉内借家蒔田文十郎御問合、永根茂左衛門御問合、御下屋敷守御問合、永根茂左衛門書院ニ而御役人兼而之通相揃御聞届一御評定有之日被相尋者罷出候ハ、御詮儀前御徒目付を以右之者知行高・年・其身とか、部屋住とか次第為書出候後被相尋候事

一是迄御詮儀之上御格之慎被 仰付、輕御詮義相分候得者直々私共手前分御免之首尾致来候処、吟味之上相達向後御格之慎ハ慎輕候共、別而何とか被仰付私共分併なし切二而

類族之例

五人組仲間取替証文之事

一如毎年之切支丹宗門御改ニ付五人組被 仰付、何誰義妻子ハ不及申、内之者・屋守等迄右宗門之者一人も無御座候、若疑敷者有之段訴人も有之候ハ、請人相立可申分候、誰兼而之旦那寺何郡何村何宗何寺院ニ付兩受状相

添、毎年支配頭衆江申達候上、仲間取替之証文相互ニ指遣可申候、為其仲間五人組証文取替如斯ニ御座候、已上
請人親類誰

重判

元祿十三年

二月朔日

何ノ誰殿

一不届有之 上分隱居被 仰付、諸役所通用不罷成者御証文ニ親類何ニ付請合之訳相印、親類印形御本帳江組合請合判為突可申事

但シ忌中長病之者右同断之事

一上人数之内并添人等、都而年数御暇之者人数減少不罷成候

但先之人数ニ相附候段承届無相違候ハ、人数除キ可為相出候事

一新規被召出之者、寺請証相出候事

一 添人等相入願相濟付出候ハ、其段其者江承届、御月番江相伺之上御本帳江証文之通可相印事

一 末期願等相出、家督安堵被 仰渡者親類請合、勿論安堵被仰渡而も繼目御札不相濟内ハ右同前御証文江親類請合御本帳江組合請合之事

一 御組付等之内、出減之訳其支配頭江承届御本帳江人数之處可相印事

一 支配頭兩人役之者、一人病氣指合等有之出席成兼候ハ、一判二而不苦候事

一 名年書上等有之、年都而支配頭之内其手前々々兼而取置、此処へ相出不成物申出候ハ、先例有之儀不相成訳相答為相出候事

一 享和二年名歳書上被 仰付物書所付■被相出候事

一 五歳以下 茂書上被 仰渡候処、先年者男女共ニ為書出候所、近年御請改も無之ニ付別紙ニ男子計為相出候事

一 直判之者近年病氣と称し組合請合多ニ相見得候ニ付、御改日数之内押而も罷出候様首尾可申事

一 無余儀近親ニ而も家内人数江付出候事願相濟、其御首尾

合無之内聞濟付渡不罷成候、添人同断委細前ニ有リ

一 他国御暇等之者ハ親類請合判御証文御本帳江ハ組合受合判之事

一 御証文相出所延引ニ而罷出六日ニ至急ニ御用等有之直判成兼候ニ付、組合請合ニ致度由申聞候ハ、同所有之所延引急之段申合、宅寄合之所江相出直判可為致事

御組付人頭増減之節、支配頭左之通始末為相出可申事 横半紙

一 去年御改人頭何人ニ御座候所、被相出候とか御改易とか被 仰付候ニ付人頭出減之訳書調、当御改人頭何人ニ而御証文指出候、仍而右之段致御断候、已上

支配頭

年号

月日

御町役名前

一 親病氣ニ而御改中罷出兼候ハ、子共・親之判持参突可申事

一番代之者ハ直判差支不申候事

■年番代之者直判致候事

番代二相出候者印判不相成候

右ハ青木新兵衛・藤田郷右衛門勤仕中之旧例

組合入之始末書左之通

一拙者共組合去年御改何人ニ有之候所、何ニ付誰被相入候

とか、被相除候とか当御改分誰々相入何人組ニ相成申

候、仍而始末如斯ニ御座候、以上

組合連名

年号

月日

御町役名元

一名年書上之例

横折紙

名歳書上

何ノ誰

何歳

同性嫡子

何歳

隠居・番代共ニ嫡子跡

五歳已下有之分ハ別紙ニ認、無之者ハ名歳書上之末ニ拙者共組合ニ五歳無之訳を認可申事

一寺請証

一何之誰并妻子ハ不及申、何宗ニ而、切支丹宗門ニも無

御座候、当時旦那二紛無之候、若訴人茂御座候ハ、拙

僧罷出訖度可申訳候、仍而寺請証如件

何宗何寺

重判

年号月日

立紙

一御月番分組合入之御指紙

一誰被召出候ニ付、組合入之首尾可有之候、以上

一御山守御屋敷守吾町分相出候、御目付証文之末ニ右之通

訖度相守候様申渡候、以上

御町役

年号月日

御目付連名殿付

一十七歳以下幼少之分、去年中迄有役・無役不同有之様二相見得候所、当御改^〆御留之通有役・無役共、無差別御証文親類受合御本帳組合請合為相改御証文取納候所、同日御目付我妻弥市左衛門相談有之候二ハ、去年中御月番遠藤弥右衛門殿江同人相伺候処有役之分ハ幼少たり共御証文御本帳江直判無役之分ハ別書之通請合二相濟候由二付、即刻月番柳内五郎兵衛殿、安兵衛・善太夫一同其次第相達候所、差懸之儀先以存慮之通致候様御首尾、其後五郎兵衛殿^〆指紙到来、安兵衛罷出候所以来無間違存慮之通致候様被 仰渡候事

一組合割新帳仕立手控二致置、来春迄之内増減候ハ、右手控江書入来春御改二都合致候事、尤右組合割之儀も御目付手前江書写遣候事

一名歳五歳以下共二相改候様被 仰付、右二付御徒組一人

被相出候様御首尾、来ル享和二年

一組合入替之御首尾相成候様仕度正月末申達、御首尾次第控組合帳江書入候後、御目付江茂入替之次第申遣^久、又入替相成候組江茂首尾致候事

一新規召出御証文江者寺請証指添相出候事

一御本帳相納候六日取仕廻、八日之会所日御改方御役人召連一同可相出候事

他村大肝入等都而凡下御取扱之事

其御許被官新六義、内藏殿家中人数之内江相入申度段願之上、当御改^〆此方人数二相入申候、此者切支丹類族・御金山定判持二も無之由、仍而人請狀如件

藤田郷右衛門

安永八年

五月

青木新兵衛

草刈兵三郎殿

内藏殿扶持人惣助、依願永代之暇相出候、此者切支丹類族二無之候、仍而暇狀件如件

両人名許

役江相出ス

年号

月日

何郡何村

肝入

誰殿

名年書上

一

我妻五左衛門

四十三歳

一

嫡子

同姓 謙吉

三歳

右之通書上仕候、已上

弘化三年

二月

我妻五左衛門判

無重判

右之通銘々耆人宛五人組二候ハ、五枚横折紙二而御町

一御上府之節之次第

一仙御着、則被仰渡置候通、火之用心并博奕ハ不及申二惣而諸勝負仕間敷候事

一遊女・賤女何不分御門江相入申間敷事

一御門江立居申間敷事

一御見舞之衆江慮外無之様可致事

惣而御出入之衆江僉略仕間敷事

一誰二不寄、不図被参候衆直々相通不申、御門江其者为控置、其段相通指図次第御門番案内可致事

一諸商人猥二相入申間敷事

一御番所二而猥二売買仕間敷事

一惣而御門出入仕候者江氣を相附可申事

一御屋敷前不審成事有之候ハ、早速可申間敷事

右九ヶ条之通、仙御屋敷着、則御徒目付并御門番江首尾可致事、尤御窺触御徒目付江致首尾、惣間所江可為相触事

一御会釈之次第

大番頭已上^{江者}

御下乗

番頭已上

御乗物下二置戸開

詰所已上^江

戸開

大番頭組^{江者}

御直也

一塩竈御名代之御次第

日数御斎替、御屋敷御出立之節、御医師・御小性頭・御目付、大手御門外二控居候処、呼懸申間敷事

一北目町通御出之節^者斎替二而被罷通候^{与誰二}而も御出会之節相断可申事

一塩竈^江御出之節、奏者之宮二而御下乗、夫^ハ塩竈近所^江

御案内相詰居申候大肝入・名代・肝入・検断・組頭等罷出候間、名元承届呼懸可申事、同所御宿土井喜三郎罷出

候間呼懸可申事、尤御着、則法蓮寺^江御使者被遣、明日

之御時指御取合之事、右御小性頭持前之事

一塩竈^江御参詣之砌、鳥井前竹之立候所二而御下乗、中鳥

居御手鍵其所^江指置、御挟箱計二荷御先^江隨臣御門外二

相控、同所二而御徒・御脇共二下座仕、御跡^ハ唐御門迄

御供御手水被遊候節^ハ下座可仕事、唐御門之内^{江者}御先

番并御草り取計御供仕事、御先番二^ハ御小性頭御挟箱役

唐御門^江御献納役相控居申候、御名代相済御自分拝之節、

御先番之者共ひときた下り可申事、夫^ハ御自分拝も相

済、御宿^江御帰宿惣御供支度仕、同所御出立之事、御出

之節二同シ大肝入・名代・肝入・検断・組頭・御宿土井

喜三郎罷出候間呼懸可致事、御案内奏社宮迄迄罷出候

間、御案内大儀と呼懸可申事、尤御出之節奏社宮二而御

下乗御出之節と^ハ違ひ御会釈御座候間下座候間、下座有

之候^ハ、其身分次第御礼請被遊候事

一原町検断方^江御立寄被遊候、夫^ハ大町通御月番^江御出被

遊候而、直々御帰館相成候事

御膳番方

一御料理人、兩人已上之節^者触書手前苗字書可申事

一配下諸願済候節、御礼者左二

一縁組願^ハ 御家老衆同役壹宇

一 養子願濟 右同断

一 遠慮御免相成候御札

御月番と同役壺宇

一 御料理被下候節御札

御家老衆壺宇 同役壺宇

一番代願

但御家老衆壺宇 同役壺宇

父子共御札廻り可申事

一 何か拝領物御札品ニ付御月番

同役壺宇

一 御酒・御吸物之上、拝領物ハ

御家老衆壺宇 同役壺宇

一 御酒計御札ハ当番詰所江計相出候様可申事

一 御吸物・御酒御札

同役当番宅江罷出候様可申事

継目御札

一 御家老衆壺宇 同役壺宇

一家督并御目見得御札

右同断

一 御番ノ見習御札

御月番同役壺宇

一本板頭御札 御家老衆壺宇

同役壺宇

一 御鼻紙代・御酒代等之節ハ

御月番同役壺宇

御格留

一 御加増并御召出等江

御割御留村

一 鳴子村 一大口村

一 鷺目村 一上一栗村

一 志田郡村々 一 遠田郡村々

但シ御用地ニ被召上御割替・御役料之義者被相候、
村々相応之地無之節ハ御留村も相加割渡可申事

一 御借上之地御加増之義者勿論、御役料等ニも御割被相留

候事

一 鳴子村・下宮村夫馬壹疋御免之事

一 鳴子村・下宮村御台所夫并御上府之砌、御夫馬卯時御免之事

一 村々被召仕候人足今代五拾文宛

一 卯時壹人壹ヶ年八切之割二而貫代之節被相定候故、御仕成二而八貫文並割之事

一 夫馬壹疋今代二百文

一 長瀬御駄賃代俵仕壹俵二付五拾壹文宛

一 本郷・上下野目村ノ三ヶ村御藏分御年貢駄賃代御免之事

一 本郷・上下野目村三ヶ村百貫文丈役八百屋并在郷取立地肝入江被相頼候事

一 水油壹升分定灯三十二

此升 三勺壹才二抄五圭

一同大半夜 六十四ツ

此升 壹勺五才六抄二圭五粟

一同小半夜 百二十八

此升 七才八抄壹圭三粟

一味噌壹人二付中白之御賄江者四十人壹升之割

一同下白御賄江ハ六十人之割

一 塩百五十人壹升之割

味噌煮方

一大豆壹升也

一米 五合也

一 塩 四合也

但升二見申時ハ大豆米斗升二相立候事

一 玄米壹石分上白七斗也

碎米四升五合七勺

小糠二斗五升五合三勺

出る法也

一同壹石分中白八斗也

碎米壹升七合六勺

小糠壹斗八升二合四勺

出る事

一同壹石分下白九斗也

碎米五合六勺也

小糠九升四合四勺

出る事

一 搗米壺石〆上白七斗也

中白八斗也碎米小糠無シ

一 仙台御大所米搗方碎米

小糠出次第外同断

一 仙御大所薪冬月者壺石

八駄之割夏月ハ六駄之割

一 御役目附仙御屋敷ニ而御賄被下候節、茶代丸代六文宛

御上府之節油

一定灯 御納戸

一同 辻行灯二ツ

一大半夜 御広間

一同 御小姓頭之間

一同 御出入之間

一同 御廐

一小半夜 御膳番之間

一同 御近習御小姓

一同 御物書所

一同 御茶道之間

一同 御仕立屋

一同 御徒部屋

御買物御直段

一 小こや千は 壺切

但壺はニ付壺文也

一 卯時壺ケ年八切之割

但壺貫文壺切ニ而壺ケ年割合可申事

一人足二拾人壺切之割

但壺人ニ付五拾文宛也

一 夫馬壺疋二百文也

一 苧麻柄金壺切ニ付

百二拾丸壺丸ニ付八文三分三厘三毛

一 太繩金壺切ニ付四千尋

百尋二付二拾五文宛也

一中繩金壺切二付壺万

尋百尋二付拾文宛

一わら二拾駄二付金壺切

但七拾式は壺丸、壺は二付六分九厘六毛

一屋くれ壺枚二付四文

壺分六厘四毛

仙台味噌煮方

一大豆壺石二付

一糶六斗之割

一塩四斗六升壺合五勺之割

鳴子村御買物御直段

一小かや壺は 六分六厘六毛

一ぬか壺石 六文六分六厘六毛

一すくろ麻から 壺は二付

五文五分五厘五毛

一浦こも 壺枚五文宛

一わら 壺は五分也

一かふ 壺丸拾二文

一つけな 八文宛

土地位付

一上々田 百七拾文

一上田 百五拾文

一中田 百参拾文

一下田 百拾文

一下々田 八拾文

セ反二付六間

一上々畑 八拾文

一上畑 六拾文

一中畑 四拾文

一下畑 貳拾文

一下々畑 拾文

茶畑壺反歩二付

一上々畑 五百文

一上畑 四百五拾文

一中畑 四百文

一下畑 三百文

一下々畑 二百文

間竿之事

一御検地竿 六尺三寸

一普請竿 六尺四寸八分

一海道竿 六尺五寸

一屋敷竿 六尺

直高之事

一御大所壺人御扶持方此直

高九百文

一表壺人御扶持方此直高

四百五拾文四ツモノ成割

一御切米壺切也

此直高百四拾三文

七ツ物成の割

但壺人御扶持方四ツ物成之割、四ツ物成ハ四石銘之割

を、切米ハ金石七ツ物成割、但七切銘割也

一御知行高三分三厘三毛ハ六分六厘六毛水損・干損致候得

者引方之通御免之事

一御知行高六分六厘六毛ハ八分三厘二毛水損・干損致候得

者御知行高壺円御役御免被成下候事

一御知行高八分三厘三毛ハ拾分迄水損・干損致候得者御知

行高御役御免之上、高三貫文ニ金壺両御合力被下置候事

但シ水損・旱損ニ限り青立皆無之分江ハ引高二相成不

申事

目方定法

一塩壺升 四百匁

一米壺升 參百八拾匁

一大豆壺升 參百五拾匁

一味噌壺升 五百匁

御酒造定法

米壺石ハ

一御前酒	二百拾盃
一中夏酒	三百二拾盃
一新酒	三百六拾盃
一滿願酒	百四拾盃
一諸白	百六拾盃
一上夏酒	二百四拾盃
一上新酒	三百盃
一忍冬酒	五拾三盃
一味淋酒	百二拾盃
一本直二	百二拾盃
一諸味	三百盃
米	石 六
一酢	六百四拾六盃
拾年	壹石 六
一油	壹斗四升
醬油造方	
一小麦	二斗

一塩	二斗
一大豆	二斗
一米	壹斗五升
右合七斗五升	
百八拾四盃	
御格御定法	御留守居
一高四貫文	御役料
一金拾三切	筆紙墨明料
一本馬拾壹疋	
但年中飯米為登駄賃代	
一代壹貫五百文	
但御年始御酒料	
一金四切	
但大寄合之節入料文化拾三年二月松岡第八郎相勤申候	
節	
一上白五升二合	
一味噌二升	

一塩二合五勺

一小割木 三拾九は

一起炭 壹俵

一金二切

一代壹貫文

一金壹切五分也小寄合

但文化五年七月中森三太夫相勤申候節、斯相成候事

覚

一諸侍御組集、都而御知行并無年高其壹貫文已上拝領之輩

迄失在之半作御減少之罪ニ被 仰渡候砌、其身壹代之内

壹度ハ五百文之地被相殘候而殘高被召上、五ヶ壹・三ヶ

壹等之御減少ニ而殘拝領高五百文之内相成候分も右ニ准

シ五百文之地ハ被相殘候事

但御扶持方拝領之輩も四人分已下拝領輩ハ二人御扶持

方ハ被相殘候余は右ニ准シ候事

如斯同断

一持来五百文以下之輩者壹度ニ罪ハ被相渡候迄ニ而被召上

候事

傳九郎

金右衛門

惣左衛門

茂左衛門

十郎兵衛

文化三年三月二十八日

可心得事

一公儀御沙汰ニ而御知行書上之節、二貫九百九十九文迄ニ

候得者半地被召上候共、被 仰渡迄ニ而御知行御減少者

無之由、但し二度目ニ者品ニ分壹字被召上候由ニ候間、

三貫已上ニ者書出申間敷事

一実相寺御法事之節、御頼御名代被 仰付、病氣相達候節

ハ御法事奉行江相達可申事

一御脇合御呼懸ハ御家老江者御直、御小姓頭合御膳番迄名

元計呼懸、御掃除奉行ハ苗字共ニ呼懸可申事、御掃除奉

行江御廟ニ而者呼懸ニ不及候事

一御法事奉行御出入、御地走¹役寺附御火消御武頭・御目付・御膳番・御徒目付・御徒横目、水吞²御給仕二人・御茶道壺人・御掃除奉行二人・小奉行・次物書・御料理人、御先番二御小性頭・御小性

一自分拝相願候者御目付呼懸、苗字共二

一御頼御名代³者御地走役呼懸

一実相寺御帳ハ御掃除奉行始末 但シ二冊也

但御役付平士壺冊也、時次第

一自分拝相願候張札⁴者次物書⁵御目付請取張可申事

8 賜目十郎兵衛退役に付書状 年未詳 158

賜目十郎兵衛退役之願、先月番相咄候通、弥以明三日被相戻候方首尾可被下候、尤月番等氣随二相勤候様首尾可然哉之訳も候処、右義者先以見合置追て願等二てもさし出候節吟味申付候事二候ま、右之振合二首尾可被下候
一去月中分段々被相尋候

一件之者共へ又以誰々被相尋候て可然哉、町役申出候二順

¹ 地走：馳走の意。

へ吟味被下候て被相尋候旨、委細承知申候、以上

二日

伊藤惣左衛門殿

9 柳内五郎兵衛退役願出に付書状 年未詳 190

柳内五郎兵衛退役願

文面至極無余義者相見得候へとも、先以跡役申付候人も重役之義年齢二も至りかね候様之義、月番加判相免会処日計勤仕候義と存候、氣分次第為相勤候様致度候、左候へハ御手前共勤番二相成無処者候へとも、始終之義能々勘弁致相勤候様致度候、右之段者片平三郎介二申付申含候ま、今夕中二願相戻申度可被下候、以上

10 御目付証文 嘉永四年（一八五二） 55

（表紙） 御目付証文

我妻五左衛門

御留字 弘化三年年梁川氏出入

恵仁家慶朝政正忠綱吉重齋村

周宗義邦礼寿芝恭綏徽

詮備 義廣

御家

泰敏親緝^{ツク}則通秩^{ミナチ} 元直

壹

今度改而博奕御僉議稠被 仰付、拙者共組中・家中内之者・屋守迄博奕打申者無御座候、自今以後組中下々迄之内ニ博奕打申者有之節、何^茂乍存諫言忤相加取鎮隱密仕候儀

御本帳ニ靜と有

堅御停止ニ被 仰付候旨畏入奉存候、博奕打申品少^茂存候ハ、組中打寄穿鑿仕、於実儀^者急度可遂披露候、若実正博奕打候者を内々ニ而異見等仕品有之儀を取鎮隱密仕候段、脇々於致露頭^者如何様ニ^茂可被 仰付候、勿論御徒横目江御小人相加昼夜 御城下・御町共ニ被相廻疑敷寄合仕、夜更迄居候者^茂有之怪敷相見得候ハ、無遠慮押込見届遂披露候様被 仰付、右之趣相心得畏入奉存候事

二

一御家中手作場田畑作毛、夜中取運申儀御禁制被 仰付候、若違背之者於有之^者夜廻衆鉄炮ニ而討候様ニ被 仰付候由奉承知候

附面々田畑作毛^者不及申、不寄何ニ盜申^者搦捕惣而惡

事仕候者不限諸寺院誰々訴訟被申候共、内々ニ而相濟中間敷旨被 仰付畏入奉存候、盜人搦取申候ハ、各方江無隱可遂披露候、組中之内右 仰渡違背仕候者組中立会実正承届可遂披露候、右 仰渡相背候段乍存知隱置候ハ、如何様之曲事ニ^茂可被 仰付候事

三

一從前之御法度被 仰付、乞食修行者ニ物呉申間敷候由被 仰付、自今以後相背候者於有之^者五人組仲間可申出事

四

一兼而被 仰付候通、御林江家中并内之者・屋守等相入申間敷候由、尤御内林之竹木盜取候者を隱置候者於有之^者其者勿論品ニ主人迄曲事ニ可被 仰付旨奉承知候事

五

一拙者共、家中并内之者・屋守等二至迄対諸士二乗打・冠物ハ不及申、無礼成儀不仕様ニ可申付旨奉承知候、又者対拙者共二無礼仕候節見逃不申、急度其主人江申断、則各方江披露可仕候、若無礼仕候者見逃申候段脇々露顯仕候ハ、曲事可被 仰付旨畏入奉存候事

六

一御当地屋敷申請品無之取移不申候者有之候ハ、右屋敷可被 召上旨奉承知候、併御役目之品ニ可當時取移かたき儀有之、屋守指置候ハ、屋敷主御書立之趣屋守之者二稠申付、急度為相守候様ニ可仕由畏入奉存候事

七

一御扶持人之分、作場山等江刀無シニ而馬二乗罷出候節公儀御役人ハ勿論、又家中ニ候共、侍之分ニ出会仕候ハ、下馬可仕旨、従前々被 仰渡候通奉承知候事

八

一御城下小路煙草給往来仕間敷旨被 仰渡奉承知候事

九

一内之者遊日御定之外、猥ニ為遊申候由相聞得不届之事ニ

候、自今組合切ニ申合別紙遊日御書立之通為相守候様被 仰付畏入奉承知候事

十

一親類縁者ハ不及申、懇意之者ニ候其他村ノ参候者扶助仕置候敷、又者屋敷之内貸置候儀有之候ハ、其時々遂披露御下知次第可仕候、若隱置何か有之右之類相顯候ハ、組合中江茂曲事可被 仰付旨組合切ニ訖度相改可申上候、将又当座ニ茂所縁無之者指置申間敷候、若右之通之者乍存一夜成共指置候ハ、組中ニ茂品ニ可曲事可被 仰付候事

附右之類指置申者有之候ハ、組合切ニ吟味仕指置申間敷候、乍然指置不申不叶訳有之候ハ、品々申上 御下知次第可仕候事 本字欠字無シ

十一

一御扶持人之分、質物人主口入ニ相立候事 御停止ニ被 仰付候、併無異儀事を以相立候儀有之候ハ、其時々遂披露 御下知次第可仕旨被 仰付候事 御本帳ニ欠字無シ

十二

一諸禿買物不応身分借置金代相払候節、指滯等有之 上之御苦体二罷成候儀至而不宜候間、自今以後応身分指滯無之様二相心得可申旨被 仰渡畏入奉存候事

十三

一屋敷守指置候ハ、其者人元承届慥成請合相立証文取候而、ケ様之者屋守二指置候段五人組 江茂相通於無異儀者指置可申候、無首尾指置其者何ぞ出入 茂有之時分不埒之儀有之候ハ、其時二至五人組迄急度曲事可被 仰付候事

拾四

一諸侍者不及申御扶持人之分、町屋二而市酒猥二給不申答二先年被 仰付候処、近年二至リ猥二給申候者 茂有之様二相聽得甚不届之至二候、自今市酒給候者有之候ハ、曲事可被 仰付候、惣而町屋江出入寄合等仕間敷候、何か用事等 茂有之候ハ、自用相達、則罷帰可申由被 仰付候事、右拾四ヶ条此度被 仰渡候通奉承知候組合切二相守可申候、若違背之者 茂有之御穿鑿之上相顕候ハ、五人組共ニ如何様之曲事被 仰付候共異儀仕間敷候、年々如此被 仰付候故如何 茂と相心得守 茂ゆるき事も可有之候

間、当年々訖度被 仰渡候間、何 茂相心得相守可申候、相背候者ハ各方始御徒目付其者 江申断御披露可被相遂旨畏入奉存候

右之通訖度相守可申候、以上

末席

菅野保□ 此間五分

(花押) 二分

上り

弘化三年二月

小平東之進○五分

(花押) 二分

殿

一幼少之者 一御沙汰中之者 一他国御暇

一忌中 一遠慮中 一勤仕指扣

右六ヶ条者御証文 江者其身之肩 江親類請合、御本帳者組合

請合 一 三ヶ年々長病ニ被仰付候事

給置 遂畏入 疑敷 証文

御留字

惠 仁 家 慶 朝 政 正 忠 綱 吉 重

齊 村 周 宗 義 邦 礼 寿 芝 恭

綏 徽 詮 備 義 廣

御家

泰 敏 親 緝 則 通 秩 監 元 直

切支丹宗門御改、従前々被 仰出候通、此度弥以御
穿鑿被 仰付候、拙者共妻子者不及申、家中内之
者・屋守等迄

嘉永五年改

一 上三人 合七人内 男四人
下四人 女三人

我妻五左衛門

右之通嘉永六年二出ス

一 上三人 合五人内 男二人
下二人 女三人

梁川玄亮

一 上八人 男四人
女四人

花淵源治

一 上二人 合四人内 男二人
下二人 女二人

小平慶治郎

一 上三人内 男二人
女一人

菅野保

右人数合二拾六人内 男拾四人
女拾二人

右人数之通、切支丹宗門無御座候、若此已後不審成者於
有之者急度可申上候、右之通御改二付家中内之者・屋守
等迄寺請証文取候而、拙者共銘々手前江取置申候勿論仲
間取替之証文相互二取置申候、五人組之内無異儀品を以
組合替り申度儀茂候ハ、其旨各方江組合合相達可申候、
拙者共宗旨之寺請証文相添指出候通相違無御座候、若宗
旨之寺自今相替り申度候ハ、其時々相達寺請証文相直指
出可申事
追加

一牢人²鉄炮所持之儀、鉄炮をも指南仕候ハ、不苦候、何方²牢人參候共相改鉄炮所持仕候ハ、其品早速可申上候事

一拙者共、組中之内致所持候鉄炮、百姓・町人・牢人当座二茂借³申間敷候事

一御扶持人者輕キ者二候共御構無之候、御扶持人鉄炮稽古杯相止候儀二ハ無之候事

右之通訖度相守可申候、鉄炮猥り預り置申間敷候、以上

嘉永四年二月

松岡寛太夫殿

下郡山助五郎殿

(裏表紙)

五年平太夫出ス

11 御目付方手扣 年未詳 岩出山町史・高橋盛解説

吾妻益延

○御目付方手扣

² 牢人：浪人の意。

³ 借：貸の意。

一正月三日御野初メ

一同四日諸寺院 御書院二而

一諸寺院献上物、御家老上ル萬願寺・延寿寺・揚泉院・圓登院・大性院・載行院罷出、御家老披露御礼申上ル座敷上下有之着座、畢而献上物御小姓頭引、則御盃・御肴上ル、御酌御加中座扣処、図ニ有御酌壺度さし上扣ル両寺返盃也、畢而御肴計り能しを引替、次より揚泉院・大性院御盃頂戴、畢而御酌扣中座引込御肴御盃ひく

一兩寺之御肴こんふ返盃、揚泉院御肴ハ能し、尤御銚子の口取上なし申候

一揚泉院子供御盃被下候、座ハ御目見得座也

一諸出家御目見得、御闕々二疊目御盃被下候、座ハ御金老座也

一大性院已下之山伏ハ段々其組ニ有之、御三の間御障子際也、御目見得并御盃頂戴所図ニ在リ

一五日晚御謡初

一七日御連歌

一十五日村々肝入

一御客様方被為入候時分、御脇指御取り被成候時分ハ御給士之御小姓も指料取御給士仕可仕事

一御客の間江御家老衆被罷出候節、御小姓たはこ盆上可申事

附リ御小姓頭間ニ而御家老衆被出候節ハ、左ニ不及

候、乍然御客之間ふさかり居候而、ヶ様之節^者御客之間同様之事

一御物成定之節、御目付当番江御仕立屋ニ而御酒拝味被仰付候時分、席何方ニも指支不申候事

天明八年九月

一御客・御使者等有之節^者御城中木覆はき申間敷候事

一御客様・御使者等も無之節とても木覆はき候ハ、御門番所之脇ハ大工屋後通、会所前坂ハ通用可仕候事

一木覆はき不申節ハ会所前坂ハ通用可仕候事

但シ三ヶ条御足輕御小人等江被仰渡候事

一大御門番所之者、御客・御使者等在之節ハ御番所前江おりて各罷候事、右番所之口江はき物指置申間敷候事

卯の日

一二月初卯ノ日前日宅番之大工耄人御出入江首尾致、卯ノ日朝御広間之戸障子はつし方可為致候事

但シ嗜致宅番之大工耄人罷出候

候⁴様御出入江可申出事

同

一人馬首尾致候而、一時已上出立延引ニ有之候ハ、首尾致候者可為不念首尾致候、剋⁵限通り二人馬不相詰候ハ、延引之訳承知断候而可申出候由、天明八年被 仰渡候事
一御家中五拾歳已上家督無之者、養子家督相願候様御定也

一御家中諸侍御組付迄独身之者、後家女ニ当座手伝ニ頼置候儀不都合ニ有之候段被 仰渡候事

一田畑働天明年中被相免候、但シ凡下之身体ニ相成働候節者同輩ハ勿論、下輩之者たり共士の装束ニ而通り者
ニ出会仕候ハ、凡下之身体ニ罷成、冠物等不仕屹度礼義仕、先之士を相立可申被 仰渡候趣を不相守見逃罷

⁴ 候…原文ママ。

⁵ 剋…刻の意。

通候義露顯候ハ、双方共ニ屹度被相咎候事

安永七年

一御目付証文之事

一日限之事

右例年二月二日ハ六日迄惣御家中御証文指出ス也、御組

附者支配頭取揃支配顚末書ニ□重判を以指出也

一張紙之事

右御張紙大方壺帖前以請取仕立書方共ニ御目付方也

一組合拔之事

右ハ前以御町奉行江取合直判帳江可印事

一証文為相出候事

右御目付四人之内二人御役替候得者御証文相出ス、御法

度之趣申渡相濟候ハ、御月番江相達可申事

天明八年二月朔日朝 永井ハ高野也

一永井丹後罷出候砌之事

於御書院御三ノ間上リ口ハ二疊目ニ而御目見得被 仰付

候、夫ハ御中ノ間下ハ壺畳目御闕ハ際ニ而御盃被下置返

盃申上ル、御盃唐ぬり九寸也、御内所御家老衆披露、御

家老衆御三ノ間表上リ口江詰居服付裏打上下御小姓頭同

断、其後於御広間丹後壺人ニ御料理拝味被 仰付候、同

人弟子江ハ於御小広間肴被 相出候事、宝曆八年御例也

但シ正月ニ候得者麻上下ニ而相勤候、尤御三方御長柄

ニ而被下置候事

一揚泉院看坊無量小寺御目見得、御書院御仲の間下の方の

闕ハ壺畳目頭ニ而被 仰付候、同ニ疊目下ハ少シ上り候

而指上候

一御徒組御取扱の者分、御小姓組披露改而被 仰付候、本

町又藏継目御目見得之時分、御月番大内左右衛門殿ハ御

首尾合在之候事

一他郡肝入共御目見得、御広間杉戸際ニ而被 仰付委細繪

図ニ有也

一御役付已上御免川の場所者五十嵐軍治前ハ三光測迄也、

平土御免川之場所内川二の構橋ハ落合迄也、近年心得違

之者一樣ニ相心得候様右之通り御座候、頃日かち御印

判被相渡候ニ付、鮎川様之外、右場所ハ切被相禁候故、

御家老・御小姓組・御目付、右三役之外、右御免川通御

印判無之候間取候事不罷成候事

一侍通御免川大川平士の御扶持人之分、内川三役之義然度不度候

一水祝義之事

但シ同役同間之朋友たり共組合之外ハ堅く祝義遣申間敷候、押而指遣候者在之候ハ、屹度可被相咎候事

寛政四年

一惣而御祝義日不限、御目見得有之候節ハ御目付肩衣着用致候様被 仰付候事

一町家之者共の内、御用達等御徒御取扱等之身分被下候分、御城中計右之身分ニ而御城外ハ並町人之御取扱ニ有之候事

一凡下江少分之身分被下候節、御広間ニ而被 仰渡候事宮

本平内江被 仰渡候事

寛政四年

一大御門通判之事、都而諸役人々相出候通判毎月月末取揃可為相納候事

一大番組侍御目見得席之事

但シ侍分御取扱同様ニ御座候間、木圍の二疊目ニ而被 仰付候方被 仰付候事

寛政元年

一豆腐濁酒売買之事

但シ先年御吟味之上、豆腐壺丁ニ付代拾文濁酒壺盃三拾文之直段を以相払候様被 仰渡置候処、直段不同ニ相払候段、粗相聞得候間甚不都合ニ而、依而此度屹度被 仰渡候処、心得違も無之様可仕候とうふ寸法先年者寸法を格別ニ御用捨被成下候ニ付、壺丁之長三寸壹分・横二寸七分・厚壹寸三分ニ致、直段拾文ニ限り相払可申候、濁酒三拾文ニ限り相払可申候、但シ右者角銭割也

右之通り被 仰渡候所、諸色高値ニ付迷惑之品々相願申候ニ付、又以被 仰渡候事、長二寸七分・横二寸五分・厚壹寸五分如願之被 仰付、直段拾三文ニ濁酒三拾四文ニ相払候様被 仰渡候事

一大御門通用之事

右御門日暮候而出入之者名元承届御用・私用共ニ承、何

方江罷越候段承届相通可申事、夜中五ツ打候ハ、小門メ置御用・私用有之罷通候品承届開申へき事、此段御門番江申渡候事

寛政三年

一御小姓頭披露之砌相詰候様ニ、永根助兵衛殿ハ被仰渡候事

一高祭ニ付御門下張番之事、右御手伝御年限中張番被相扣候段、助兵衛殿ハ被仰渡候事

一出火ニ付被相尋候事

右居家出火之砌御町奉行御詮議、御目付・御徒目付立会、物書之物相詰ル、但シ物書ハ兼而御首尾相成居御町奉行居不合候砌者在郷御足輕頭・御町奉行仮役相勤申候御定ニ御座候、御家老衆不懸候在郷御足輕頭も不出合候節ハ御目付手前ハ物頭之内江御町奉行仮役首尾致候而御詮議可相成候事被相尋候、人数ハ火元并ニ隣家四方御町奉行手前ニ而口書取納御月番江相達ス、隣家之内御家老衆ニ候人ハ親類ヲ以御向合被成候事、右ヶ条御留ハ書被召上候事

一出火之砌御相伴通り被相尋候事

右御相伴通火元ハ不及申、近所ニ而茂被相尋候砌、御町奉行詮議者勿論御詮議之上慎等被仰付候事も御町奉行手前ハ申渡候段、賜目新左衛門殿ハ御首尾合也

寛政二年

一兵法御覽之事

右御広間於御三ノ間被仰付候人数之内御相伴通御役目付通ハ御小姓頭ハ引続御縁通ニ相詰居可申候、指南役者障子際正面ニ而相詰ル、御目付ハ御式台上リ口御ふすま際ニ相詰候事

寛政三年

一御囲糶被相出候事

右糶被相出候、立合之御役人御出入当番御目付糶役人兩人也

同

一御林ニ木伐候事

右於猪子澤御林、目黒幸治薪伐申候ニ付、為過料金三切被召上候事

同

一鉄炮又者二貸渡候事

右鉄炮永根助兵衛殿家中甚三郎と申者二、猿猪為防之鉄

炮被貸下候様首尾被成候事

天明六年

一刀見分事

右片平善太夫鹿切留候ニ付、刀見分ニ指出し無相違見分

致候而同人ニ相渡し、直々御月番江相達ス

安永八年仰渡ニ

一他村大肝入小肝入書通之事

右書通殿付ニ而苦かる間敷也之訳被相伺候処、御附札を

以無異儀旨 公義被仰渡候事

但シ御野名ハ格別之事

同五年

一烟草給候事

右御供行列不礼候様ニ見合代リ合御旗江下リ給候事被相

免候事

同

一草鞋等はき替之事

右下座致候而、御跡江下リはき替可申候

但シ大小便同前たるへき事

同

一又者羽織着用之事

右御騎馬之衆之手鍵持并草履取等其外都而之又者羽織着

用不罷成候事

同七月十八日

一松窓寺煙位之事

右於御書院 御目見得被 仰付、御家老衆披露扇子箱献

上、右三疊目之尻御目見得相濟候而、御障子際二下リ御

囲合二疊目江着座、夫被御盃被下返盃有之頂戴之序献上

同席也、御前御肩衣、御家老・御小姓頭・御目付御小姓

迄肩衣着用也

若殿様・御前様・御姫様江も扇子箱献上也

同

一帯刀御免之者御目見得之事

右家喜久四郎家督清助御徒御目見得之所ニ而献上物御出

座前二直々指置御目付呼懸、御小姓頭披露、御月暮も被相詰候事

寛政六年

一 於御広間前二獅子躍御覧之事

右踊御上覧之節ハ御広間御仲の間中程二御屏風御しつらひ被成候少し御進被遊候而、御着座内中之間敷井際上之内御廊下際江進む御みす屏風御しつらい御女儀様中御屏風下通、奥御用人御継之間上り口杉戸際、御目付同御継之間、御小姓頭・御小姓中御広間、御番人常之通御路路平治御門之所二けいこ二十人被 仰付候、御的場之方二も右同断

安永五年

一 鳴子村御百姓高橋治左衛門永々御番組侍二被召出候事

右御広間上ノ間二被 仰渡、御家老衆列座、大番頭御出入御村扱相詰、当番御目付申渡ス

同七年

一 御能之事

右御能之砌、御目付二人御書院口ニ相詰、耄人ハ御勝手

之方埒外江相詰、耄人ハ御樂屋江相詰代り合ニ而相詰可申事、勿論御徒目付二人御廊下江相詰、耄人御座之間上り口、尤御城中廻番御徒目付江被 仰出候、御門番増番兩人被仰付也

安永七年

一 他所御家老御人払之事

右水沢御家老御間被遊候砌、同所御家老罷出御人払之砌御次ニ相詰申間敷旨被仰出、先年御家事被遊候時分右之通ニ而罷在候処、久々他所へ罷越御人払も無御座候事故不心得之者も可有之候間、何分相心得候様被 仰出候事

同

一 御靈屋御仏參之事

右先年ハ実相寺番僧罷出候所、御手伝御年限中不罷出候事、尤蠟そく可相出候事

同八年

一 八月十五日御祭礼之事

右八幡江御父子様御参詣之同日渡物御見物二大門下江

御父子樣被為入御供之外御棧敷詰 但シ御出先ニ相詰

〃

一同拾六日

〇

右御の場江○若殿樣御出被遊候、安永六年・同八年御出之節、御目付御供被相控候事、天明元年ニ御供被 仰付候処、相違被相扣候事

附リ御弓場御木屋之節、御供人数御小姓頭引統罷在候

樣安永七年被 仰渡候事

一御広間御普請出来ニ付御祝儀之事 ○

右御父子樣被為出、御家老衆耆人、当番御小姓頭、当番

大番頭、当番御出入主立之御出入、御作事奉行、当番御

部屋御番頭、当番御目付、小奉行兩人、右江御盃被下

但シ御相伴通江ハ呼懸御用達者於御広間ニ御盃被

下、御同日詰合床上下、惣詰合江御酒被下候事

天明二年

一諸願相出候事

右御家老衆会所日昼九ツ時迄ニ相出可申事

〃

一御村扱御勘定之事

右翌年三月卅日限リニ被 仰渡候事

〃

一諸役人ハ呼候刻限延引之事

右於延引ニハ訖度御沙汰ニ可被為及候事

〃

一繼目御礼申上候事

右繼目御礼申上候砌、目錄ニ而指上候義被相留候、正錢

ニ而指上候樣被 仰渡候事

天明三年

一無役ニ而も席有之輩ハ番代ニ候ハ、其身同前ニ御目見得

御出伺被 仰付候事

一悴共樂書致間敷事

右御厩屋并町御門、其外御城中者不及申、御家中前扉江

悴共心得違者樂書等不致樣親々申含、尤家中・屋守等迄

大体之儀無之樣、主人ハ申付候樣被 仰渡候事

一借宅之事

右拝領屋敷家作無之、勝手を以借宅致候者ハ双方ハ願相

出候様前々被 仰付置候所、心得違之者も有之願不相
出借宅仕者も有之由二候所、已来願可相出候事

但シ御屋鋪奉行江相出申事

一家督之事

右十三歳迄之内、家督并御目見得可相願候事

但シ心得違之者も有之候条、已来訖度可相願候事

宝曆十年

一寺院後住願相濟候御首尾渡之事

右実相寺・松窓寺両寺後住願之通被 仰付候節、御首尾

有リ

天明六年

一五ヶ町諸売買之事

右御当地万物取替売買之儀、向後五ヶ町検断共逐吟味候

上、直段等相立売買セしむへき事

寛政八年

一御供掛荷貫目御定之事

右夏荷五貫目、但四月々八月迄御徒組已上也、御足輕已

下之者二人寄合二而五貫目、冬荷九貫目、但九月より三

月迄御徒組已上、御足輕已下之者二人寄合九貫目也

寛政九年

一悴共木の皮貝吹候事御停止之事

一鉄炮打間敷事

右御家中前二而玉入并大豆玉鉄炮打候儀、先年之通被相

留候事

天明四年

一御改易御追放之者隠シ置候事

右先年不届有之御改易御追放被 仰付候者、立歸り御当

地二徘徊致候者、万壹隱置露顯二及候ハ、五人組合ハ勿

論、親類迄訖度御沙汰被為及候事

同四

一させこの事

右先年々被 仰渡候通、内々者・屋守等之悴共させこい

たし、御家中并町通異形衣速⁶致罷通り祝儀相受候儀、

前々御停止被 仰渡候事

ク

⁶ 衣速…装束の意。

一道中往来之事

右出立刻限朝七ツ時迄泊りは夜の五ツ時迄を限り、往来有之宿ニ泊り之儀ハ無掬子細有之、繰替之儀者格別為指義も無之候ハ、兼而定置候泊り宿猥ニ繰替被致間敷候て、成丈ハ夜通之飛脚指立候儀も相止可申事

一諸間所祝義之事

右一向指扣候様先年々被 仰付置候不相止事ニ粗相聞得候、諸祝義并御知行御割替等之節過分之物入為致、又ハ町場江寄合馳走相受候事ニも有之候様相聞得甚心得違之事ニ候、向後前書之通り相心得候様被 仰候事

文政二

一蛭沢川并御堀御普請之事

右御普請相成候砌、非番之御目付忝人御普請場江相詰ル也

寛政元

一勤仕刻限之事

右御家老衆并御出入五ツ半時出勤、八ツ半時下宿八ツ半時過、都而御用申出候共御取上無之事

附 過急之御用ハ格別之事

一諸役人出勤朝五ツ時迄八ツ半時迄御用相達候様被 仰付候事

附 諸間所館代り合之儀者前々々被 仰渡置候通無延引候様被 仰付候事

天明元

一升之事

○

右升ハ東三拾三ヶ国樽谷藤左衛門升之外無判之升遣候事堅く御停止之事、万お祭日ハ曲事たるへき事無判升判方等いたし見セ店江相出し縦判升ニ候共、古升売買致義不成事ニ候条、訖度相守候様可申事

一御精進日之節諸祝義相調候事

右重キ御精進日之節、諸祝義相調候儀不宜候事ニ候条、右体之義無之様可致候事

一語唱違之事

右近年心得違之者間々有之 御城下之儀を城下と申、或ハ御酒蔵之儀を蔵と申、或牛坂権三郎下の坂をくらとの坂と申唱候者有之所至而心得違成義候条、自今左之通相

唱可申候事

一 仙台表之儀を御城下と可唱申事

一 御酒藏之儀を御酒屋と唱可申事

一 牛坂権三郎下の坂を蔵人坂と唱可申事

天明八年

一 博奕之賽札売買仕間敷候事

同

一 百姓町人衣服絹類着用御停止之事

右着用者見当候ハ、召捕候様被 仰渡候、御先代ハ被

仰渡置候御制法ニ有奢ケ間敷義候ハ、組合・肝入・検断

迄可及御法候事

宝曆五

一 御役替之節首尾合之事

右目付忝人江指紙を以申遣、仲間中江相通候様申遣、御

徒横目江も同断、御門番江ハ呼候而申付也、又指紙を以

も申遣御役目被 仰付候節も被相除候節も同断之事

同八月十六日

一 御祭礼之節、大小姓之間御役人御散敷御用之方江被 指

置候事

一 御門外土手草刈之事、御出入江申出て、右御目付措番可

致候事

宝曆八年取締リ

一 正月三日御野始ニ冠物着用之事

右御堀土手外、北ハ内川橋外、東ハ町御門外ハ御騎馬御

山賦リ御村扱等都而上ハ兜頭巾着用御免、前行之者ハ通

丁出放レ満願寺下ハ冠物着用御免御責子同断、宝曆八年

相伺候而済ム

同八年

一 火事場目印小旗為持候事

右昼出火之節目印ニ家紋相付候小旗為持相出度旨御武頭

相達候処為持候方ニ相済、併内之者等不居候砌ハ為持兼

候節も可有之候条、右之心得罷在候様御月番中森左内殿

ハ指紙ニ而御首尾有之候事

宝曆八年申遡リニ有リ

御留主中御書院江印符相成候事 右不審也

〃五年

一 御城中御掃除之節、不天氣之節ハ御下男冠物常ニ御免之事

一 詰之御門草薙之節冠物御免之事

宝曆六年

一 御家中所持之鉄炮元日二日印府之事

一 御規式之事

右諸寺院御出院ニ而例之通御規式之節、御家老衆呼懸同願、当番明之御目付耆人罷出候事

一直奏之事

御徒組已下之直評候ハ、御当地御足輕頭江申越、御足輕御用人を以始末為致可申候事、侍通直奏ニ候ハ、親類江相渡し可申事

他所者直評ニ候ハ、役前江首尾致引渡可申候事

一 御町御用立共、如例年於御仕立屋ニ献上物在之、御小姓頭披露、御町奉行相詰御一札上ル、同所江御目付相詰ル
一 御広間上の間諸寺院被出候節、烟草盆御小姓火鉢ハ御茶道相出ス

一 山伏共罷出候節、御広間中之間たはこ盆火鉢御徒相出ス

五日晚

一 御謡初ニ付麻上下ニ而相詰ル、御地謡御目見得之節御小姓頭呼かけニ而罷出候

寛政七年

一 御堀藻卷之事

右もくまき之節、非番同役相仕廻候迄罷出候様御首尾有之候事

一 御能拝見之事

右御能拝見人仕立之御小姓頭手前ハ被相渡、御門番所江相渡し相過候ハ、取締ル

一 御能之節寺院方拝見之事

御家老衆後ノ方江相詰候様相見得申事、但シ然と不致候
一 八幡御祭礼之節御徒目付も、立ニ而御散式前欠通相勤候様矢内外記之助殿ハ御首尾合之事

一 御徒御目見得之事

右先年之通、御目付呼懸候様御月番御首尾在之候事

宝曆十四年遜り

一 焼切之事

右野火相入候所、焼切被 仰付候而、前広御首尾在之相付仕廻二相成候ハ、則御目付手前江申聞候事

一御城下并御家中前不掃除候ハ、措番可申事

右上野様御出砌、御城中并御門下掃除為致候様被 仰出、御目付ハ御出入手前江首尾御城外同断也

一御祈禱御札之事

右臺目御札指上候間、大御門櫓之内柱江為張候様被 仰出候ハ、大工屋小奉行二相渡ス

一御守札之事

右御守札御目付始末、仙台江為相登候様御月番ハ御首尾候ハ、御膳番ハ受取御出入江包道具申談御返次第可為相登候事

一鉄炮拝借書付相納候ハ、直々御月番江可相納候事

一八月十五日御祭礼之事

右御門下御散敷絵図左之通、御作事奉行御用留写

御絵図

右之通御意之由二而、御目付高橋才一ハ品々申聞候ニ付寛延二年御散敷向羅者詰候様共二相直候、先年ハ御厩角ハ四

間目江羅者詰候様ニ寛延二年之御祭礼ニ五間目江詰候様ニ被 仰付候ニ付、当年ハ江詰申候間、已来先年通四間目江詰申候様御意之旨、右才一ハ申聞候ニ付御散敷絵図仕置候事

同御作事奉行御留写

一正月二日御在所之節、御広間ニ而御規式御座候節、大工忝人戸はつしニ御日用頭忝人召連罷出候様之事

出火之節御城中之次第

一御城御近所ニ而出火之節ハ御小姓頭・御納戸御出入御目付之内御台所持共居合次第兩人無遠慮奥方江罷通 上方様御立除被遊候様申上御供相勤可申候、若右之者共居合不申候ハ、当番御膳番右之通相勤可申候、御供兩人之外、奥方江罷通御道具為相出可申事

一御納戸御道具之外、所々之御道具当番之者ハ不及申、御扶持人之分翔付次第無遠慮相出可申候事

一上方様御立除被遊候ハ、当番之者不及申、不寄誰御扶持人之分、奥方江罷通御道具相出可申事

一御留主之節、御小姓頭・大納戸兩人金役代仕当番相勤可

申事

一奥方江不寄何事二急事二罷通候様指図有之候ハ、不寄誰

指図次第可罷通事

右之通享保十年二月被仰渡候事

御呼懸之次第

一御城中・御城外共、御出先江御相伴通下座仕居候ハ、呼

懸なしに御意被遊候事

但シ御間無之節ハ誰相扣候段可申上事、尤御通筋相隔

候ハ、御意之趣取次可仕候事

一仙台御登之砌、御供之御医師・御小姓頭・御目付御門下

二相居候節ハ只今之通呼懸有之事、仙着之節御家老衆御

迎二被罷出候ハ、御家老罷出候と計可申上候、其外御相

伴通御武頭等迄只今之通呼懸相成候事、御下之節柳町江

御迎二罷出候分、右同断

但御供頭呼懸

一御法事之節於実相寺御迎二罷出候御相伴通共呼懸候事

但シ御家老衆罷出候居候計可申上候事、御家老之外指

出候節、右同断

但シ御法事之節、御目付御供被 仰付候事

御野先之事

安永八年十一月十一日

一金沢蛭澤御鳥屋御供雪中二候ハ、股引着用御免之事

上使之事

一御触申来承知之段、名元印突附札二而御物書所二在

一何茂麻上下

但シ足輕組頭麻上下并組法皮着之

一附人之事

一大御門開

門内江留主居家老間を置相出候事

一玄關二薄縁外シ石垣二取次兩人罷出候事

一主人式台板之間出迎、直々書院上之間江案内可申事

一上使刀持還^ケ閑繁戸際江可罷出事

一右同所番頭・小番頭之内案内二罷出居リ主人先江相立書

院下ノ間縁通可相扣事

一上使書院上ノ間二着座

上意を蒙則退座

次二

一長鮑出シ

但シ吉事ニハ相出凶事ニハ相出不申事

一烟草盆

一火鉢

一千菓子

一茶

右相出段々ニ見合引也

畢而

一主人御請ニ出座之上直ス送り初之通り玄関板之間迄被相出

一家老留主居

上使之帰之節初之通可罷出候事

一上使宅江御大義之段使者遣ス麻上下

一御奉行御目付御小姓頭江共

上使着前無之候間一同ニ可仕事

詰之御門之事

一詰之御門夜の五ツ時分ニ拾人相立候事

真岩様御部屋之節分被扣候様ニ相聞得候事

附二拾人右御門たて候始末ハ当番御武頭指図之由、此

節二拾人二人番、安永六年十月之御留分御見出被遊

候由相記置候様被 仰出、御小姓頭扣ニ有之候

一小性通新キ召出之事

一小性通御馬家業 米倉周吉

但シ御広間ノ間ニ而御家老衆連座、非番御小性頭壺

人、当番御目付呼懸読候而申渡御書付直々相渡ス、

夫分御礼御目見得被 仰付ニ而御目録心懸直々御盃

被下置候事

諸間所代り合勤仕刻限之事

一三月分八月迄先代り之者朝五ツ半時迄ニ登城、後かわり

之者四ツ迄ニ罷登、晚かわり八ツ時下宿八ツ半時迄ニ登

城、後代り之者七ツ時迄ニ登城可申事

一九月分二月迄先代り朝五ツ時下宿四ツ時迄ニ登城、後下

り之者九ツ時迄ニ登城、晚替り八ツ時下宿七ツ時迄ニ登

城、後下り之者暮時迄ニ登城可申候事

附壺人番之者ハ朝四ツ時迄登り八ツ半時下宿可申

事

寛政四年八月

一 大力様御出之節、御守役并御小性・小者弘被相出候時分ハ股立二而御供仕候様被 仰出候事

一 御足輕共、自分山仕度由二而拾匁御筒拝借仕度候段、自分山二而ハ被 貸下かたき段被 仰出候事

仙台御留主居之事

一 仙台御留主居ハ御家老御用人等被 仰付候節、急速跡役不相登候砌ハ留主居御用相勤候内、取扱紙面等御留主居取扱之由、永根新内殿被 仰付候節、御首尾御座候訳御小性頭御留二在リ

御改之事

一 閏正月有之候節ハ同月御改相出候事

寛保三年三月十日

将監様左之通被 仰渡候事

但シ享保三年御目付役を御町奉行次席江被相入候事

御供頭を已前之御目付席江被相入候、当時末席ハ御勘定目付二有之候事

一 永代着座拝領之輩、自今以後御勘定目付以上之御役目被 仰付候ハ、座之高下を以先役之高席二も、或者割入候而も本座之次第を以被指置候事

一 有席之者其身と有席之嫡子部屋住二而同役相勤候節ハ座たり共部屋住之者ハ後席に被差置候事

一 有席之者之嫡子と無席之者嫡子相勤候節ハ本座高劣次第可被 指置候事

一 御家老役之嫡子無役之節、御挟箱之上座二被 指置候事

但シ正月之御規式之節御盃被下候節、御膳番次席二而被下置候事

一 永代座之者無役二而も罷在候者も左之御祝義日二出仕被 仰付候事

七種 三月上巳 端午 六月朔日 七夕 八朔 重陽

一 御相伴通御役目之者継目御札申上候節ハ御盃返上御肴御直直二被下置候事

一 御勘定目付格已上之者継目二而御札申上候節ハ御肴御直二被下置候事

一 無役ニ而茂永代座之者同断右ハ御直ニ御意も被下候事

一 永代座之者と無役無座之者一同ニ継目御礼等申上候節ハ

永代座之者先ニ被 相出候事

寛政三年

一 御小姓頭配下之分ハ御小姓頭披露ニ被 仰付候事、併家

督并御目見得継目等之節ハ御月番披露可申事、尤二拾人

ハ御序テ之節月番披露可申事

天明三年御用留

一 三日御野初之節、御責子奉行之者共江御呼懸御帰リ之節

御門下ニ而計呼かけ候様勿論御普請等有之節、右場所御

通之節小普請奉行罷出候共、其場江相出之節計御呼懸有

之、御通筋ニ而御呼懸無之由、賜目新右衛門殿御首尾

合之事

一 四日諸寺院御一礼ニ罷出候節、御目付ハ御勝手之方江相

詰ル、御家老披露

一 夜中御兵藏被相披候節ハ御目付立会也

一 五日晚御謡初之節、御小性宮仕之節ハ御騎馬江御目付相

詰ル、御地謡御目見得之節ハ当御小性頭披露、此節ハ御

目付相詰不申候事

一 御徒組御取扱之者共御小性頭披露ニ被 仰付候事

御一門

一 御客等在之節、御武頭耆人・御目付耆人・御先立耆人ハ

御刀持仕候事、御刀御客の間迄被為指候節ハ指不申候事

△表御小姓御刀持不申事

右御客等有之節ハ大御門江乱リケ間敷事無之様首尾可申

事

槍首ニ印

御広間御取次ハ大番頭御書院ハ御小性頭之由

一 御俵約之制等御役目付列格迄於御書院被 仰渡候節ハ当

番御目付読候事、席之儀者御中之間御ふすま之方御畳御

式居合三丁目末之方江御月番後合引続忝同ニ罷出、右之

所江座付申候

一指か、り御詮義等之節、御精進日等ニ候へハ御町奉行宅

ニ而承届候事、委細明和二年言遜リ君ヶ袋源助家中御広

間合入申候時分之次第ニ有リ

一 八幡御神事ニ付渡物有之、御火消御武頭被相出候節ハ二

ノ構之内ハ下馬仕歩行ニ而相通候事

御出仕之節并御目見得事

一御徒目付を以忒宇引揃ニ而御部屋江申上候而 源九郎様御客之間江被為入 当番御武頭御先立居合不申候ハ、御目付也而、御騎馬座敷之向屏風ニ而囲ひ、此所ニ而御扣被成置但シ御火鉢御烟草盆等之類上ル 夫ハ御目付御膳番を以御出座申上候ハ、直々御月番江申達御月番呼懸殿付ニ而御目見得被遊候、又以御目付御先立ニ而御客之間江被為入、次ニ御月番退座、次ニ御内座相済候ハ、御月番江其訳申達、御家老衆忒宇一同ニ被相出、銘々名元計 御意在之、夫ハ又以 御意在之節ハ座上之御家老衆 御答申上、則月番外ハ退出可申候、夫ハ御目付御月番江表座之者罷出候訳申達候と御月番 御前江申上、則御目付名元計呼かけ、夫ハムグ式居入候時分御月番名元計呼かけ、夫ハ 御前ハ名元 御意被成置候而退出、次ニ永代座之者ハ順々を以御座江引揃御目見御月番披露

但シ表座御町奉行ハ初ル朔望・三朝・五節句共ニ名元

計呼かけ、但シ朔望廿八日御出仕ハ御手伝御年限中

詰合計被 仰付候事

一繼目家督并外指立候節御礼御目見得等之節ハ何も苗字迄呼懸候事、将又御目見得ハ御月番披露、永代座之者ニ候へ者たとへ家督并御目見得候共名元計 御意被下置候事但朔望・五節句等之節、序手在之節御役替御礼御目見得・繼目御目見得等一同ニ在之候節ハ御出仕ハ先ニ仕、次ニ御役替御礼御目見得、次ニ繼目家督并等被仰付候事

一家督并 御目見得願并繼目御目見得願ニ限り、御月番江直々其身相願候共不苦事、尤誰を以相願候共指支不申候右之通り相願候ハ御月番御同役中忒応御相談之上、左之通被窺候様ニ相定申候、誰 家督并願か繼目御目見得願か申出候ニ付御序之砌被 相伺願度候、已上

月日

当番

御月番

御小姓頭衆

苗字共ニ

但シ御小姓頭之御番名元相知候ハ、諸苗字様付申候由

也

都而被 伺候義披露等之節ハ御月番ハ御小姓頭江諸苗
字様付也、名元相知不申候節ハ御小性頭衆と計也、又

当番御小性頭江御出勤之節ハ直々御相談も有之由也

一高役ハ下役被相願候時分ハ常服ニ而引揃、御目附呼懸ニ
而被相出誰江身例是迄之通りニ而、何役被相願と御月番
ハ被 仰渡、畢而御目見得被 仰付節、麻上下着用ニ而
御目見得也

但シ御礼廻りも御月番江計罷出候方罷成、残御同役江
ハ不罷出候事

寛政四年二月

一御祝義月ニ無之節、御役替并御目見得等被 仰付候節ハ
御前ニ而も御肩衣被為召、披露之御家老・御目付共ニ着
用仕候様ニと、遠藤弥右衛門殿御月番之節被 仰付候事
一家督并御目見得之外、御小性頭配下之分侍并御徒組二十
人共ニ壹宇、御小性頭披露被仰付候事

御座之間御指支之儀在之、於御書院御出仕被 仰付候図

(図省略)

御相伴通繼目

一繼目之節、目録御小性上ル、夫ハ御目付苗字共ニ呼かけ
中程ニ而御月番呼かけ、御礼之節御意被下則退出、夫ハ
目録御小姓引御月番ハ 御盃頂戴相済迄其席ニ被相扣候
事

一御盃御肴 御前江御小姓上ル、夫ハ御□持出 御前江御
酒指上候を見合、御目付苗字共ニ呼かけ御月番右同断、
此節ハ御意無之御盃頂戴御肴御直ニ被下置候、此節者脇
指取候而罷出、返上之節ハ御会釈被遊候、其節御礼申上
御盃御酌ニ渡ス、夫ハ御盃御取上之御礼申上退出也

但シ御相伴通り計返盃也、此節酒かわらけ入、天保六
年ハ御家老当役ニ限り返盃外ハ無シ

一御勘定目付格已上之者繼目御礼申上候節ハ御肴御直ニ被
下候

但シ呼かけ前ニ同し

一無役ニ而も有席之者右同断、御直ニ御意も被下候事

一 永代座之者と無役無席之者一同繼目御礼等申上候節ハ永代之者先ニ被相出候事

一 無座之者繼目之節ハ御月番ハ御肴被下候事

一家督并御目見得無之罷在繼目御礼申上候節ハ別而家督并御礼二者相及不申候事、繼目御目見得ニ而家督並共ニ相濟也

一家督並 御目見得之節ハ御目付呼かけ前ニ同し、御礼申上候節ハ御月番呼かけ前ニ同し、御礼申上候節ハ御月番ハ名元計呼かけ申候事

一 繼目家督並御目見得相濟候者御月番江詰所江御礼ニ罷出候事

但シ家督並 御目見得仕候者ハ御小性頭之間江も罷出御礼申来リ候事

一家督並 御目見得相願申候親ハ御家老江御礼廻仕候事

一家督並 御目見得仕候者ハ御小性頭江も御礼廻リ仕候事

一 御家老支配之者ハ御礼廻リ之節ハ御家老江計也

一 御小性頭配下之者ハ家督並御目見得相願候、親ハ御家

老・御小性頭江御礼廻仕候事

一家督并繼目共ニ御目見得相濟候ハ、御両館様江も御礼申上候事

但シ右ニ不寄御役替等ニ被 仰付而も、兼而御親等申

上候所江申上候、奥方ハ奥御用人江家督并繼目御役

替被 仰付難有仕合申上候事

御徒士御目見得之事

一 御徒組之者共、繼目家督並御目見得共ニ御廊下侍通御目見得之節之扣処也、御目付ハ御廊下詰所扣候而苗字共ニ呼かけ候也 但シ近年御目付 呼かけ不申事ニ有

一 御月番呼かけ前ニ同し、御前ニ而ムグ式居之辺江御うつし被遊候事

天明四年ハ御徒献上物并御目録共ニ御徒前広ニ上置御目見得被 仰付候事、已前ハ御小性上引

一 享保四年十二月廿二日須和部小右衛門・鈴木萬右衛門・

佐藤平三郎、御徒組ニ被成下候節、御肴壹種ツ、献上也

一 御徒目付被 仰付候儀も、御小性頭吟味ニ而後御月番江

伺濟候後被 仰付 御目見得御小性頭披露也

一 星傳五郎御扶持方壺人分被返下候節ハ鳥目五拾疋献上御

礼御目見得被 仰付候事

一 御相伴通已上被 仰付候節ハ何々之御役被 仰付と御意

二 御座候と御月番被申候

一 御町奉行上ノ列々以下之御役之平士迄も、何之御役被
仰付と申也

御家老御役被 仰付候次第

一 御家老本役被 仰付候節ハ左之通御家老衆分指紙 御用
之儀御座候間、何時 御登城可被成候、已上

月日

猶以麻上下可被御心懸事

諸苗字殿付

一 御目付江之首尾合前々同御廊下通江御目見得之節引揃

一 被 仰付候節ハ御座之間江御家老耆宇罷出候と則相出候

段、御目付御月番江申出候、御月番 御前江申上御目付

苗字共二呼かけ前二同、御月番二而も苗字共二呼かけ也

御前ハ八名前計御意在之ヲ見合、御月番ハ左之通被申上

候事 御家老本役被 仰付候段 御意ニ御座候

右畢而御家老耆宇退出

一 夫々御礼 御目見得被 仰付候節ハ御目付御廊下通江為

相詰置、其段御月番江申出、此節ハ御月番計罷出呼かけ
等前二同シ

一本役被 仰付候節ハ献上物無之候事

一本役被 仰付候節ハ御親類様方江不被仰遣候由、仙御留

主居江ハ被申登候事

○御局被 仰付候次第

一 御局被 仰付候節ハ御家老詰所江奥御用人召連罷出、何
ぞ御扶持方等被下候節ハ御家老読渡之始終御目付立合不

申候事

○御家老見習御用人被 仰付候節ハ御家老衆分指紙左

二

御用之儀在之候間、明朝半時登城可被申候、尤麻上下心

懸可被申候、已上

一 御目付引揃呼かけ等前二同シ

但シ御家老見習被 仰付候得者御小性頭を以御家老見

習被 仰付候所、何々之次第二而難相勤御免被成下

段被申上候様承伝申候、御吟味を以被 仰付候間可

被相勤旨、御月番ニ御答之由也

一夫々御礼御目見得申上候様との義、御月番々御目付江御首尾有之候事

一御礼御目見得之節ハ御肴壺種献上呼かけ等前ニ同し、

御礼御目見得相済候後、見習被 仰付候、御家老御月

番詰所江御礼ニ罷出候由、其之節者刀此方江御持参可被成と御月番被申候由也

一御家老被 仰付候人 御仲間様并 京都江 為御知被申上候事

一御家老ハ部屋住ニ而者御指支申候事、小平弥左衛門殿御家老見習被 仰付候節部屋住ニ付、頭立衆井上安右衛門殿江御向合之上、同性治太夫ニ内々被申談隱居願為相出候願相済候後、被 仰付候事

御家老仮役被 仰付候節之事

一宝曆十三年五月十八日、高野甚右衛門御小性頭々御家老仮役被 仰付候節、指紙ニ而当番御目付相詰於御客之間ニ半左衛門殿・孫右衛門殿列座ニ而、甚右衛門相出、御用人当座仮役被 仰付候而孫右衛門殿被申渡候事也

御医師御番入被 仰付候事

御月番々 御用之儀候間、明朝明半時登城可申候、尤十徳心懸可被申候、已上

一御家老衆壺宇御座之間江罷出、御目付呼かけ前ニ同し

一御月番々御番入被 仰付候と御意ニ御座候

右畢而御礼御目見得前ニ同し、御薬種金四切被下置但シ御月番指紙ニ而

一御医師江御武頭格被下置候節御客之間ニ而被 仰付候御目付相詰

○御小性頭被 仰付候次第

御用之儀候間、明朝明半時登城可被申候、尤麻上下心懸可申候事

何ノ誰殿 月番名前

但シ御相伴通々被 仰付候ハ、御用之儀有之候ニ

付と被相認候、御役付々被 仰付候節、御用之儀候

間と被相認候、右ハ凡而切封計ニ大方ハ被認候事

一御座間江被相詰候義并御目付呼かけ前ニ同し

一御相伴通者皆以於 御前ニ被 仰渡、諸首尾合并御月番

二申達候義ハ同様ニ在之候条、併病氣指支等ニ而不罷出
ハ親類共取次之者ニ御役被 仰付候次第被 仰渡候節ハ
於御客之間ニ而被 仰付候事

附

一御歳暮惡魔払御式台ニ而打候事御例之由

御子様方被 為在候哉、御指支之節ハ大御門ニ而打候事

但御供頭方天保三年之御歳暮ニ伺候事

安永八年留ニ

一御野初之節、諸供法皮江帶仕付候不同ニ在之節処、法皮

着用者ハ法皮江帶仕付不申上、帶ニ而仕付候様被 仰付

義、御目付心得居候様御小性頭分申聞候事

一御小人廻番定首尾、七月十一日・十四日・十五日・十六

日、十二月廿六日外

廻番之首尾次第

○御武頭方勤方

於評定所仰渡方被仰付節指紙之次第

何ノ誰江御用之義在之候間、同人連立御用所江只今

之内罷出可被申候、已上

月 日

何ノ誰

親類衆 何ノ誰

殿

御徒江

何ノ誰江御用之儀候間、同人召連只今之内御用所江罷出可
申候、已上

何誰

親類衆

殿

御組江支配頭名前ニ而遣ス

御配下何ノ誰江御用之儀候間、只今之内御用所江親類附添

罷出候様首尾可有之候、已上

支配頭名

何ノ誰殿

御相伴通以上ハ御町奉行宅ニ而被 仰渡候事、指紙文面之

事ハ替事なし

御町奉行分御問合御詮儀御呼出、指紙も不寄誰ニ可被申

候、組江者可申候、御足輕以下江ハ支配頭江遣ス也

大番頭方

一御納戸御藏者都而御召物計有之

右ハ大番頭持前二候、御前御手道具之由二付也

一御兵藏之分下役持前二而大番頭者上メリ也

一二月卯ノ日御飾ハ前日ニ指紙相出候分、御藏下役壹宇・

御具足師・御具足役・御歩馬割役明、則罷出候様指紙ニ而遣ス、外二人足二人明、則相詰候様御出入江申候事

一卯ノ日御具足二両御飾御前飾物之内、二両江御新酒四領

内二領ハ御前分御相伴通始物御家中罷出候者江被下候、

残二領ハ壹領ハ奥方江御膳番を以指上ル、残り壹領ハ大

番頭下役并御具足師江被下候事

尤御飾餅三献肴等も同断也

一卯ノ日御広間戸障子はつし方ハ御目付持前也

一御土用干之節ハ御広間戸障子はつし方為致候儀者此方持

前也、前日・明日御虫干二付御広間戸障子はつし方宅番

之大工壹人、明朝罷出候様御出入江申出ル、尤人足六、

七人も御出入江可申出候事

一御虫干之節、下役共壹宇、御弓師氏家半太郎、御矢師中

鉢弥惣太、御矢師方江被相頼候下郡山弥兵衛、御具足師

御ときし牛坂万治・高梨専左衛門、右両日御干方繰合次

第罷出候様指紙を以前日ニ首尾可致候事

一しよのふ御出入分下役二可為請取可申事

附

下役ハ御徒之内分勤ル由也

永代座者之次第

一永代座拝領之輩、自今御目付已上之御役目被 仰付候

ハ、座之高下を以先役之高席ニも、或ハ割入候而も本座

次第ヲ以被指置候事

一有席之其身と有席之嫡子、部屋住ニ而同役相勤候節ハ座

上たりとも部屋住之者後席ニ被指置候事

一有席之者之嫡子と無座之者同役相勤候節ハ部屋住ニ而茂

無座之上席ニ被指置候事

一有席之者之嫡子之御役相勤候節ハ本座之高劣次第可被指

置候事

一御家老役之嫡子無役之節御挟箱役之上座被指置候事

御家老永代座

鮎田巳之治

矢内清兵衛

永根忠治

中森奎之助

柳内五郎兵衛

伊藤五兵衛

吾妻弥市左衛門

安積此面

中川千治

手嶋雄三郎

沓番座御医師永代座

上野除安

石田玄意

大内意安

梅崎朝順

梁川亀三郎

御小姓頭永代座

宇和野文治

花渕小二郎

小平東之進

御番頭無所

大番頭永代座

西川久右衛門

永根勘治

皆川市郎

大内紋太夫

遠藤丹治

賜目左近之助

菅谷弥五右衛門

是迄沓番座

宇和野傳右衛門

上野周平

御出入永代座

氏家平九郎

上野勘右衛門

奥年寄永代座

梁川源太

村上七右衛門

是迄二番座

仙台御留主居此所

御町奉行上ノ列此所

御町奉行永代座

菅直人

横尾雄五郎

御萃定已後御目付昇進被
仰付役列此所

御当地御足輕頭永代座

落合清左衛門

菅野茂平治

在郷地御足輕頭永代座

石田助右衛門

御弓頭役此所

御小人頭永代坐此所

中森助九郎

安部軍記

御作事奉行此所

御長柄組頭役列此所

御武頭格列此所

御勘定奉行此所

追腹永代座

御宿庄太夫

高橋直江

熊谷友治

庄司源治郎

御厩屋別当永代座

片平善太夫

藤田源太左衛門

御厩別当次之座

是迄四番座

宇和野甚助

戸田嘉右衛門

是迄四番座

御金役永代座

咲久間百弥

湯山丹下

御納戸御金役此所

御膳番永代座

葉田野治助

濱田清見

高野助左衛門

御懷守此所

御改萃已後御諸頭此所

御部屋御附人此所

御勘定目付此所

御目付永代座

矢内清太夫

引地源吾

千葉友之助

門脇新六

三

猪狩縫殿之助

二遊佐曾呂吉

是迄五番座

御取次之次第

一御一門衆

御取継番二人横薄縁迄、外出下座兩人御出・御帰共二御案内一人横薄縁迄、御広間上ノ間江御案内御刀持一人可相扣居事 △御一門ハ御書院江御案内可申候事

右ハ御書院無之節候事ニ相見得申候

一御奉行・御宿老

御取次番横薄縁迄二人御出・御帰り共二無指別上ノ間江御案内可申事

一御一家・御一族・大番頭格以上

御取次番一人御出之節、鏡板迄御帰之節横薄縁迄中ノ間上之方近通り申上ノ間江

但シ大番頭格大御門開可申事

一番頭格以上

御取次大番頭格同様中ノ間下ノ方 但シ大御門開不申候

事中ノ間上ル

一詰所已上

御取次番忝人御帰之節計、鏡板下ノ方薄縁際迄送り可申事、繼之間上ノ方襖際迄中ノ間・下ノ間江通

一大番組以上平士

帰リ之節計、鏡板中程二而下江付送り可申事、繼之間二而

一御一門衆御使者

帰リ之節、鏡板中程上ノ方江付送り可申事

一御一家・御一族の家老使者指越候節、役柄之儀候而家老

二限り式台迄相送候様心を用可然事

一組士重戸際下ノ方付送

但シ家老已下之使之者重戸際上ノ方二付送ル

御上府之次第

一於御門下二御供之騎馬相扣居候間御会釈之事

右御騎馬町御門外へ乗馬御免二御座候、惣御供冠物通丁
開放、釈迦堂橋へ御免二御座候、右相調向々江首尾可申
事

一新田町入口江同所御案内相詰申候、右江ハ相構不申候、

町中程大手二而御輿相立申候、町はつれ二御案内相扣居

申候間、御案内大キ与呼可申事、若検断も計呼懸可申事

一大衡御昼、右近所二相成候ハ、御用人・御足輕内御先江

遣シ可申事、御宿卯左衛門罷出候間呼懸可申事、惣御供

間取可申様御徒目付江首尾可申事

一吉岡町ハ中新田同前、御案内検断茂相出候事

一新町へハ御案内相出不申候検断計也、新町熊野堂前二而

御輿相立申候、北二而ハ御輿寺二而相立申候、右寺江ハ

大小性御使者二参候事、御案内等相出不申候事

一仙御着之節、御迎二罷出候者共江御呼懸在リ

一御道中御供之節、木綿合羽着用御免之事、尤御野合ハ格

別不天氣之節計、着用之筈二御座候、右ハ前々之御例也

一御騎馬・手鐙持・草り取其外、又草り取等羽織着用御指

支之事

右之通御小性頭衆へ御供頭江首尾相成候事

一於御家中前弓張灯燈御指支無之段被 仰渡候事

一本荷目数三拾六貫目乗下拾八貫目蒲団跡付ハ目数之外人

の目数拾八貫目、合三拾六貫目也

但シ四拾貫目迄御国中不苦候事

一 輕尾二拾八貫目乗下拾貫目人之目数拾八貫目、合二拾八貫目蒲団跡付ハ目数之外

一 輕尻駄賃代ハ本荷之三ツ割二ツ分、輕尾駄賃代之割也

一 徒夫本荷之駄賃代半分也

但シ徒夫老人ハ荷物五貫目、繼夫之返夫ニ而ハ三貫目也

一 鞍馬ハ本荷之駄賃代也、但シ手前鞍ニ而ハ輕尻之駄賃代也

一 暮六ツ時迄夜の八ツ時迄輕尾ニ而茂本馬之駄賃代ニ馬子之外馬添相立申候筈ニ、口取計ニ而馬添相立不申候ハ、輕尻駄賃代相渡可申事、夜ノ八ツ時迄輕尻駄賃代翌日之分ニ相成候故、九ツ時より輕尻代相渡可然事

江戸千住町荷物改所写

一 乗掛二拾貫目、其外蒲団跡付并小付老式ニ而三、四貫目可為用捨事

一 輕尻拾二貫目、其外右同断一式ニ而二、三貫目可為用捨

事

一 駄荷 四拾貫目

一 人足 五貫目

一 乗物老挺 六人懸リ

一 山籠老挺 四人懸リ

一 長持老棹 三拾貫目

但シ六人懸リ

○御役列格

御一家准御一家

一 御奉行 御一族 一 御宿老

一 若年寄 一 御旗奉行

一 大番頭

是ハ上大番頭格以上

一 御近習御申次 一 江戸番頭

一 出入司 一 御小性組番頭

一 御小性頭

御一家惣領・御一門衆次男三男

御一家并之惣領御一族惣領

一御申次
一御鑓奉行

是合上番頭格以上

御奉行惣領・若年寄惣領・御旗奉行惣領・大番頭惣領・御

一家御一族次男三男・御奉行次男三男

一御徒小性頭
一江戸入方本

一御懷守
一詰所上脇番頭

一御鷹匠頭
一奥年寄

一御城番
一御納戸奉行

一御町奉行
一御祭祀奉行

一御近習目付
一御不斷頭

一御給主頭
一御名懸頭

一御旗本御足輕頭
一公儀使

一御郡奉行
一御近習

一御目付使番

永代着座無役者此所

同着座御医師

一御番医師
一江戸番組頭

一御物置ノ役
一御小性組頭

一并御武頭
一御屋敷奉行

江戸番頭惣領・出入司惣領・御小性組番頭

惣領・番頭格已上之惣領

一御留主居組頭
一御勘定奉行

一御作事奉行
一京都御留主居

一龍ヶ崎奉行
一御二ノ丸御留主居

一山林奉行
一相去御足輕頭

一御祐筆頭
一評定所御役人

「御目付

一御証文預主立
一諸木植立方

一新規御廣敷番

是合上詰所以上

○覺

一鑓印之儀短冊二枚上二而中をとり付太刀打二付可申すた

めん二而横九分・竪五寸七分五リ之短冊二可仕事、是又

御家中押なへて下々迄相調可申候事

○御徒目附方記録

一御牢入在之節近辺り二而出火等之節ハ御沙汰係リ之御徒

横目早速御牢屋江相詰居、御牢危見得候ハ、御番人御足
輕ニ右罪人江繩相懸出牢之上訖度メリ居可申事

一御沙汰係リ之御徒横目御沙汰落居前遠方出行相扣居可申
事、無拗指合并病氣等ニ候ハ、順々相達同役江申合可置
事

右之通り定首尾ニ被 仰付候間、御徒横目江首尾可仕事

一元日・二日・三日・四日・七日・十一日・十三日、右ハ
毎年定首尾ニ被 仰付置候事

一初卯ニ者壹宇罷出候事

一初卯御改七月十三日・八月十五日・九月九日、右定首尾
ニ相成居候事

一二拾人正月三日之内御社參被遊候節ハ麻上下為着可申
事

一二月初卯・六月廿四日・八月十五日ニ限り継肩衣着可申
事

一盆中御仏參御供之節并御法事奥様方御供之節ハ袴着可申
事

其外御供之節ハ袴着申間敷候事

右之通文化十二年二月四日御足輕組頭江首尾相成候事

俟使之節貸被下候者

三人

一鞍馬壹疋 草り取壹人

持夫壹人 御小人壹人

右之通被貸下候事

一肝入組頭先立ニ而俟使可仕事

見分書上之次第

賜目村なニロノ山焼死之者在之候ニ付俟使仕候

右焼死之者人骸ニ者相違無御座候得共、死骸之上江灰等沢
山ニ相かゝり居候而、男女之見分等仕兼候、右之通見分書
上仕候、以上

何年

誰判

何月幾日

右書上者横紙ニ而相調、御月番江指出候事

一出火等在之候節、火しつまり候ハ、御人改之方江壹人相
廻り評定物書ニ名寄書留、右名本しらへ御月番江可指出
可申事

一侍通御問合之節ハ脇指・羽織着用不苦候、本詮儀ニ罷成候而者脇指・羽織不相成候事

一御当地御足輕ハ脇指・羽織・足袋不成候事

尤繩懸ニ相成候ハ、白す江被相廻候事

一在郷御足輕凡下御扶持人迄ハ白すニ而被 仰渡候事

一侍揚リ屋江相入候節ハ手錠被 仰付候、尤手錠ハ徒目付
ハ横目江相渡シ、下ノ間ニ而横目ニ手錠為懸御徒目付見
届也

一凡下ハ御徒目付ハ横目江首尾仕、横目御小人ニ繩為懸横
目之見届也

一侍大小被召上候節者横目受も御徒目付江相渡ス、右役受
も目針拔候而見届、尤袴之模様留置候而御目付江相渡ス、
右役印封也

一引取候時分召連候親類江御沙汰中被相預置候儀、御徒目
付ハ右親類江首尾相渡候事

一メリ役江之首尾ハ御町奉行ニ而も、御徒目付ニ而も、横
目ニ而も不苦候

検使之次第

本郷本町御百姓嘉蔵手負疵口見分

一月代之後之方、中剃之内真中ハ少シ右之方刃物疵指渡

シ、耆寸二、三分

一深サ四、五分位

右之通見分仕候、已上

年号月日之儀前ニ同シ

觀音院寺内之内死骸見届書上

一男年齡

一死骸 裸犬喰散

一曲把二ツ

一わんはれ 脇方ニ有

乞食と見届仕候

右之通見届書上仕候、以上

年号月日前ニ同シ

御詮儀之節指出書様

一高何貫文 何役 何ノ組

何拾歳

右之通指出仕候以上

何ノ誰親類

誰判

右指出江八年号月日無之

口上江ハ以上無之

右之外可申上様無御座候与書候所江以上与書候事也

年号月日ノ下江

誰印形

新年之御慶賀目出度奉存候、弥御勇健ニ可被遊御踰歳珍重

之御儀ニ奉存候、右御祝詞為可申上如斯御座候、猶奉期永

陽中ノ恐惶謹言

月日

若狭守様 参人々御中

隠岐守様 参人々御中

改年之御慶賀不可有尽期奉存候、弥御安康ニ御踰歳可被成

珍重奉存候、右御祝詞為可申上如斯御座候、猶奉期永陽中

ノ恐惶謹言

田村織部様

人々御中

御奉行衆

様

御宿老衆

一筆致啓達候冷気ニ候得共、御堅固ニ被相勤候哉承度存

候、拙者無異義罷在候無音ニ罷有候間、如斯ニ御座候、恐

惶謹言

月日

御状敬拝見 入御念

仰預忝次第二御座候、恐惶謹言

御一家衆

様

御一族衆

一筆令啓達候冷氣候得共、弥御堅固ニ御座候哉承度存候、

拙子無異儀罷在候無音二候間、如斯二御座候、恐惶謹言
御小姓組

様

脇番頭

一筆令啓達候寒冷二候得共、弥御堅固二候哉承度存候、拙
子無異義罷在候無音二候間如斯二候、恐惶謹言 御状令拝
見入御念示預忝次第

御鷹匠頭奥御老

御曹司様御小姓頭 様

是迄ハ一筆申達候といたし、末ハ此旨可申遣と相調可申候

御城番

御武頭迄 様

一筆申達候寒冷候得共、弥御無異候哉承度存候、吾等無異
儀居申候無音二候間如斯候、恐惶謹言 御状致拝見候
入御念示預忝次第

御勘定奉行

評定所御役人迄 様

一筆申達候寒冷二候得共、弥御無異二候哉承度存候、無音
二候間如斯候、恐惶謹言

御芳札致披見候、入御念示預忝次第

御番衆 様 様

一筆申入候、弥御無異二候哉承度存候、我等無異義居申候
無音候間如此二候、恐惶謹言

芳札令披見候 入御念示給忝次第二候

仙台重御寺院方

一筆致啓達候寒冷二御座候得共、弥御安康二被成御座候哉
承度奉存候、然者無異儀罷在候無音二罷過候間如斯二御座
候、恐惶謹言

御役者江殿 殿

一筆申達候寒冷二候得共、弥御無為二候哉承度存候、我等

無音候儀居申候、恐惶謹言

芳札令披見候

示諭過当之至 恐々謹言

御仲間様中江様

一筆致啓達候甚暑之節二御座候得共、弥御安康二被成御座

候哉、土用中為御見舞如斯二御座候、恐惶謹言

御狀致披見候 就土用中

被入御念被 仰聞忝次第奉存候、恐惶謹言

一御取繼御格式之事

一御一門様

御先立

壹人

諸士横薄縁江

二人

御徒土下座

二人

但シ御先立重役之者御入見合横薄縁江真向ニ落可申御入

被遊候節、御先立御書院上リ口江相扣 御刀持ハ

下茂ニ付可罷出 御帰之節ハ御先立重役之者も下ニ付直

二横薄縁リに落送り申上候

一土下座無之節之義有承可申事

一三席衆

御取次

壹人

横薄縁へ

壹人

右之衆御越之節、重役之者鏡板下程ニ罷出御先立可仕事

一御帰之節下ニ付横薄縁江下リ

可申候大御門者三席衆并大番頭衆壹統為開可申事

一御奉行衆并

一御宿老衆 一片倉殿

御取次

壹人

横薄縁江

壹人

御取次之者横薄縁江下リ御先立・御帰共ニ同シ

一大番頭以上之衆

一若年寄衆 一御旗奉行衆

一大番頭衆

御取次

壹人

横薄縁江

壹人

但シ御越之節、御先立御取次之者鏡板全敷居際ニ罷出居、御先立・御帰之節横薄縁下ニ付送可申事

一大番頭衆并両古内・佐々・黒澤之四家無役ニ而も三千石已上ニ付大番頭已上ニ而、御下乗被遊大御門迄茂為開候事

是上御広間上の間江

一番頭衆

御取次

壺人

横薄縁江

壺人

御取継振り者大番頭衆同様ニ者候得共、大御門者開不申事

一詰所已上之衆

御取継之者御玄関中程江相出居被帰候節ハ下ニ付横薄縁

際ニ相出可申事

一代々御宿老之家ニ而も御宿老職不被 仰付、前者詰所也

従是上御広間御中ノ間

一大番組

右之衆ハ御広間御三ノ間江御玄関重戸際ハ少進被出候

御番人取継申候ケ、其仁ニハ取継之者被帰候節者御式台之鏡板江中程迄送可申事

但大番組以下之諸士者何茂御番外也

一御徒小性組・御徒御給主三組・御鷹匠組・御馬乗・御同朋、右御組罷出候砌ハ帰之節重戸際下之方江座付相送可申事

一御仲間様御使者帰之節、鏡板中程迄上ニ付相送可申事

一三席衆ハ家老留主居直使者ニ候ハ、鏡板上ニ付送り可申事、無左候ハ、重戸際上之方ニ座付送り可申事

一詰所ハ御仲間様江使者不相成直越也、御親類方ニ候ハ、格別也

御引揃方

一御一門衆 一同隠居 一同息方

詰所御書部ノ間

一御一家 一御奉行 一准御一家

詰所御対面所表御座ノ間

一御一族 一御宿老

一御隱居様御年寄 一御一家隱居

一元御奉行隱居 一御部屋御年寄

一遠州様御家老 右忼席分

伺公之間

一若年寄 一評定役

一遠州様組頭 一同中老

御客ノ間ノ次ノ間

一御旗奉行 一大番頭

右八大番頭已上

一家柄御申次 一三千石已上着座

一御隱居様御用人 一御部屋御用人

一大番頭已上相勤候者之隱居

右番頭格已上

伺公之間 御次溜御座敷

一江戸番頭 一出入司 一御小性組番頭

右番頭格已上乘物

一御小性組 一御近習御申次

伺公之間

一御申次 遠州様御番頭

一同御用人同御小性頭一御一門二男三男

一御一家嫡子 一御奉行嫡子

一准御一家嫡子 一御一族嫡子 一田村家

鈴木舍人 一御宿老嫡子

一法眼法橋 一御留主居番頭

一御鑓奉行 右八大番頭格已上駕籠

一若年寄嫡子 一大番頭以上嫡子

一御一家二男三男 一御奉行二男三男

一准御一家二男三男 一御一族二男三男

一御宿老二男三男

一御隱居御年寄二男三男

同

同

一御給主頭

一御名懸頭

一御部屋御年寄二男三男

右壹席

同

一御徒小性頭

一御隱居御小性頭

一田村様御用人

一御旗元足輕頭

一御部屋御徒小性頭

一脇番頭

一御兵具奉行

一御部屋御懷守

一公儀使

一御預り地方郡代

一御鷹匠頭

一奥年寄

伺公ノ間ノ次ノ間

伺公之間御縁頼

一御郡奉行

一御納戸奉行

一田村様御家老

一御城番

一御近習

一御隱居御近習

伺公之間ノ次ノ間

伺公ノ間ノ次ノ間

一御部屋御近習

一御目付支番

一御町奉行

一御祭祀奉行

右ハ御召出シ以上之詰所以上也

御次溜御座敷

御客ノ間ノ次ノ間

一無役着座 一遠州様御勘定奉行

一御近習目付

一御不斷頭

一同先輩

一同隱輩 一同列之者

一番頭已上 一隱居 一番頭格已上隱居

一良学院

一着座御医師 一御番医師

右御召出已上相勤候者之隠居之列

伺公ノ間次ノ間縁頼

一江戸番組頭 一御物置ノ役

御溜御さしき

一御小性組頭 一并御武頭

一遠州様御目付同御近習一同本ノ

一同御武頭格 一番頭以上嫡子

一若年寄二男三男 一大番頭已上次男三男

伺公ノ間御縁頼

一御繰合方吟味役 一御勘定奉行

一御知行割奉行 一御屋敷奉行

伺公ノ間次ノ間薄縁横 同

一京都御留主居 一龍ヶ崎奉行

一御子様方御附人 一御二の丸御留主居

一御金奉行 一津方奉行

一山林奉行 一相去御足輕頭

伺公之間次縁頼

一評定所御役人 一田村様御番頭

一同寺社方 一本ノ 一同御小性頭

一袖ヶ崎御小屋敷役 一御証文預り主立

一無役ノ着座嫡子

右ハ詰所已上

一田村様御町奉行 一同御目付

一同御目付格 一同並之者江戸

番馬上之者

一御番医師 詰所以上之格隠居

御小性之上

一御目見所有之者

一御刀奉行 一御勘定所吟味役

一御広敷番頭 一出雲御前様御用達

一御奥方目付 一御納戸本メ

一御二の丸御留主居添役

一御中奥目付兼役

一御奉行手前頭立物書

一堂方指南役 一大的奉行

一御持弓頭 一御乱舞頭

一御預り地御取次役 一大坂本メ

一考役 一御村横目

江戸奥方女中列

一上臈 一御年寄 一若年寄

一中臈 一若キ衆 一御小性

一御錠口 一御祐筆 一呉服之間

右ハ侍格

一三の間 一御末頭 一御仲居 一筆下

仙台列

一老女中 一若年寄

一中臈 一若キ衆

一兒小性 一表使 一御錠口番

一御次ノ間女中 一御物締

一御台子之者 一御末仲居御出之者

一御兄弟様附女中台子之者次御末之上

出火之節

一上ハ良覚院屋敷之辻ハ狐小路本荒町柳町之南浦北目町卜

染師町之西浦ハ吉田仲兵衛殿屋敷ハ下ハ佐々三弥殿辻切

米ヶ袋一丁本御預リ屋敷切

寛永十五 十二月廿三日

実相寺殿前大夫苔岩青公

三河守様 御年三拾七卒

慶安二 十月廿四日 水澤ハ

花岳妙蓮大姉

明暦二 四月十二日

祥光院殿淨林良清

三河守様御母公 同七十四

寛文拾三 四月廿一日 同六十九

瓊林院心鏡榮信

宗敏公 御母公

延寶六 三月晦日

徳雲院殿功岩恵勲

宗敏公 同五拾四

元禄七 八月廿日

松岳院殿玉圓蓮好

宗敏公奥様 角田 同六拾七

享保六 二月廿三日

茲雲院殿俊岩義英

宗親公後敏親公ト 同七十九

享保二十 四月廿六日

安養院殿興嶽壽盛

宗親公奥様 京都 同七十九

享保十六 四月廿日

慎徳院殿崇岩泰禪

村泰公 涌谷 同五十

寛延戊辰 八月十二日

清鏡院殿圓嶽月照

村泰公奥様 京都 同五十八

享保二十一 二月廿五日

觀照院殿真岩淨空

村緝公 同三十

寛政四年五月廿九日

聯珠院殿信巖⁷淳貞

村緝公奥様 角田

天明三年十一月十五日

真觀院殿智岩恵明

村通公

宝曆十一 二月二十六日

江月院殿永嶽壽照

村通公奥様 佐沼 三十一

⁷ 巖：原文ママ、嶽カ。

享和元年九月二日

榮昌院殿孝嶽貞順

村通公後奥様 真坂公

寛政十三年正月廿日

実照院殿徳巖道性

村則公 三十七

天保十四年七月廿六日

貞操院殿盛嶽壽栄

村則公奥様 前沢公

弘化三年壬 五月廿五日 六十三

顯徳院殿隆巖清純大居士

宗秩公

文政三年三月廿三日

松翠院殿操嶽貞節

宗秩公奥様 岩谷堂公

弘化三年八月十四日 三十八

凉照院殿松巖清月

義監公

文政二年大御門 江板御制札書替被相渡候次第

覚

一火の用心稠敷相守可申事

一御門兼而通用之者外面体不見知者猥リニ相通間敷候、無

余儀品有之候ハ、相通可申事

附リ何方者ニ候共 御城中拝見等者不及申、無品御門

下辺リニ立やすらい候義堅可制之事

一暮六ツ時分御門通用之義、御役人之高下ニ不寄承届相通

可申事

一夜五ツ時分小門ノ可申候、急御用ニ而通用之者ハ名元并

何方江罷通り候訳承届相通可申事

一御城中分相出候之物器財者勿論、何ニ不寄通判無之相通

申間敷候、夜中之通判御目付ニ限り可申事

附リ諸役人分相出シ候通判御目付当番替り合之砌、見

届ニ可指出事

一御役人中江礼義兼而被 仰渡候通、無礼無之様可相守事

一大御門明立之義籠略無之様可仕事

一大御門辺疑敷者見当候ハ、承届怪敷候ハ、搦取則可申出

事

一御客様并御使者等有之候節ハ大御門番所より下り居可申事
一番所前江はきもの類不指置様可仕事

一平士之者杖つかセ申間敷候品有之、被相免候者ハ格別之事

一御門江御扣被遊候節者番所前江下り候而可罷在事

一指立候節、増御門番人兩人被 仰付候事

右之通取締訖度相守可申事

文政二年四月十七日

大御門番所江

御家中内之者遊日

一正月三ヶ日・七日・十四日・十五日・廿日

一二月朔日 初卯 彼岸中日

一三月三日・十八日 田打休日迄日

一四月八日 田植休日 一日・十八日

一五月五日 送物夏一日大さなふり

六月朔日・十五日・廿四日

一七月七日 盆三日 送物秋迄日

一八月朔日 十五日 彼岸中日

一九月九日 十八日

右ハ御町役留ニ在リ御目付扣ニも留置

弘化二年二月十五日

繼目家督有被 仰付次第

御家老

番役二付 柳内五郎兵衛

返盃在リ

中森全之助

我妻五左衛門

安積尽全

右三人御直御意御肴返盃無之、但御目見得之義者御目録指

上候節、御目見得平士大番組ニて繼目之分相濟、別段ニ御

引揃ニ相成御盃被 下置節事

宇和野文治

花淵源治

永根新内

右者御相伴通席外品々同断

村上七右衛門

遊佐曾呂吉

下郡山助五郎

御役目付席ニ而被申外品々同斷、但シ永代着座之嫡子ハ御目見得御直御意計

但シ家督有之節、御役目付之嫡子ハ御直御意無之事

大番組無祿ニ付

岩崎常藏

佐藤登

右兩人ハ御目見得計ニ而御盃不被 下候事

大番組御取扱

高橋萬右衛門

御目見得計ニ而御盃不被下候事

新規被召出御礼御目見得之者共、御知行頂戴之者ハ御盃被

下候事、但御高壺貫ニ付鳥目壺貫文宛献上

繼目者壺貫ニ付百文宛

実相寺繼目者

殿様御麻上下被為召候式日ニ無之候共

満願寺

延寿寺

実相寺

祥光寺

右四ヶ寺繼目之節ハ御麻上下被為召候外御役人御宮仕御小性迄同斷、但献上物ハ御小性上ル

実相寺御書院御目見得処

(図省略)

御肴頂戴候節ハ御酌相廻リ罷出御盃頂戴返盃、畢而御酒道具引、畢而御料被下置御意在之、退出之節御見返リ被遊候間御礼可被申事

同日満覚院繼目

但御家老指次格御書院ニ而左ニ

(図省略)

満覚院御盃頂戴御直御肴計ニ而返盃無シ、御徒士御目見

得者御小性頭披露、御目付詰居候計御組付御当地御足輕ハ

御家

但シ

一御仕立屋ニ而御小人御馬取

御目見得之節ハ

御家老御小性頭御目付支配頭

御目見得之次第ハ

繼目御札繼目御盃頂戴

大番組迄畢而

家督有

御徒士ハ御足輕御小人迄

相済満覚院ハ祇園寺

戴行院明王院畢而

別席ニ而実相寺被 仰付候事

但シ満覚院ハ御盃頂戴ニ付別席ニ伴候事

平士御番帳次第

御役相勤候者ハ初二致候事

新規ハ跡ニ致候事

御徒士組五百文已下繼目代御割合在リ

三河守様御代本侍

山岡 喜八郎

安積茂右衛門

石田久右衛門

遊山 宗雪

柴崎 善九郎

遊山 清九郎

栗野彦右衛門

二ノ関 伊豫

今野二

大川原加平二

○安積 土佐

山岡 内記

花渕 権六

○石川 半兵衛

○富岡 形部

○中島 九内

三澤 兵部

小島 久助

布沢 久兵衛

○菅ノ大炊之助

橋本 豊後

大江文左衛門

○小原木半内

樋口 佐土

高橋佐左衛門

齋藤 甚兵衛

引地庄右衛門

中川也

遠藤治右衛門

石川 久三郎

○犬飼内藏之助

館倉 肥膳

○上ノ 越後

下飯坂 空

国井也

○沼崎 但馬

「」衛

○柳井喜右衛門

○者田ノ 治助

○桜田九左衛門

○矢内 助兵衛

安部惣右衛門

落合 丹後

栗ノ 源内

○宇和野加兵衛

宇和野「」

松本 主計

安部 長門

○荒戸 宗与

成田 武兵衛

桑崎 備前

西ノ 右近

坪田 監物

大内 要人

瀬戸喜左衛門

○大内久左衛門

大内 茂兵衛

○咲間六右衛門

菅ノ 弥兵衛

佐久間与左衛門

保志 左馬允

○相田 大隅

安藤 内記

我妻 修理

○遠藤弥右衛門

草苅 新助

伊藤 長庵

○下郡山 源兵衛

青木 丹後

弘化三年十月

御朱印御座之間ニ而頂戴、但シ松岩様御卒去ニ付御家老御

名代ニ而渡ス、壹席切ニ台ニ置壹人宛罷出候而被相渡候事

御膳番方

一御家老衆江御料理等か、御拝領物之御披等被下節ハ豎紙

ニ而左ニ奉書也

都而初之

一筆啓上仕候

○館内 大角

安部 藏人

手代木 備後

遠澤 弥二郎

齋藤太郎左衛門

○菅ノ八郎兵衛

平間 勘七

○中森 式部

濱田 隼人

□と終り

明後十五日昼

同し二可調

御拝領之干鯛御披被下

由也

置旨

御意ニ御座候 恐惶謹言

月日 花押計

猶々九ツ時御登 城可被成置候

誰殿 実名

裏江 吾妻直治

(図省略)

御用之儀被 遊御座候間、同役相揃罷出候様ニ

御意ニ御座候、以上

月日 切紙ニ而誰殿卜書

常之文通ハ

誰様卜書

実相寺江御野菜等被遣候時明幾日

誰様御正忌日ニ付御野菜一品を遣候、以上

月日

実相寺 吾妻直治

御心付之節毎日二人数承ニ遣候事、明幾日 誰様御心付

被遊候付、御寺内惣人数相入申候間御書記可被遣候、以上

月日 吾妻直治

実相寺

御役僧衆中

御賄被下覚

御相伴通江ハ上白也

御振舞之節ハ二菜也

御小姓頭・大納戸・御目付・御留主居番之節ハ上白朱塗足

付也

一御客有之節、御城外御馳走人下々迄毎々之通也

一御町奉行・御武頭・御目付迄、中白ニ而一菜円盆也、御

料理被下節ハシユンケン膳壹菜也

一惣侍御料理被下候ハ中白シユンケン足付ゼン平生之認ニ

ハ中白円盆也、御賄被下ニハ丸盆ニ而無菜也、惣而御慰

事被 仰付御賄被下候節ハ其時々見合候而天氣次第

一仙台此方御仕立屋ニ而□仕候分ハ二合半無菜也

一御徒・御足輕・新御足輕・御小人仲間迄御振廻被下節ハ
中白米ニ而大盆也一菜付

一御徒・御足輕御賄被下候節ハ中白米無菜也、大勢之時ハ
飯台少大数之時ハ丸盆也、折敷ニ而も有合次第

一新御足輕・御小人御仲間御賄ハ下白米無菜

一御相伴通御料理被下候節ハ御客之間ニ而被下也、其外ハ
御仕立屋上ノ間ニ而被下也、御賄ハ誰ニ而も同所平士ハ
御仕立屋ニ而も吉也円盆也、御料理人已下ハ御料理被下
ニハ円盆御下、被下候ハ、惣侍シユンケン足付也、御相
伴通ハ御賄ハ足付也、仙台御供之時分ハ御家老・御小性
頭・御医師・御出入・御金遣・御膳番・御目付足付ニ而
被下、御小性杯ニも円盆ニ而出スコレハカスアチカ、大
小性杯ハ膳無シ、御料理人小円盆也、北村傳兵衛願之膳
之義ハ此末横山源助並と申渡候、不時登候節ハ侍格御相
伴通江ハ朱塗テウ足膳、仮役之内ハシユンケンセン也、
御相伴通江ハ汁の実入ニ而無菜御役目付ハ鏡汁無菜也

一清鏡院様御奉公之節、薙髮之輩御料理被下事 実相寺ニ

而

永根勘兵衛 薙髮

結城玄秀

客殿佛段脇之間ニ而被下朱塗セン

宇和野治兵衛 半薙髮

大橋七郎兵衛

茶ノ間次ノ間ニ被下シユンケンセン

佐藤甚八郎 半薙髮

茶ノ間下ノ方ニ而被下

門七 薙髮

クリ下ノ方ニ而被下

一御料理被下時ハ誰ニ而も御実入候而

一菜

一御一門様・御一家・御一族・准御一家萬御前並黒塗ソウ
ワ膳モ同御引菜等御酒・御菓子等迄黒塗九寸ニ而上ル、
平士同座之時ト言共朱塗赤ワン同膳万相出シ候ハ、子丸
盆ニ而出ス、御食鉢・御酒等も別段ニ御次物ニ而出ス也

一上使之節ハ御のシ三方御タハコ等也、御菓子・御茶上ル、朝二候ハ、のシタハコ盆計上ル

一仙台衆御料理被下候も御賄二候共菜等も万同

一甚太左衛門所江被為入候節、同人夫婦御盃返上也、定之丞兄弟ハ御盃返上無也

一大肝入御料理被下候節、上白米足付平生ハ中白円盆也

一他所者ハ誰ニ而も香の物三彩朱すりぜんニ而被下

一仙台衆町人ニ而も同酒等相出候ニハ万小盆江取コエニテ

イタス

御膳番方

延享丁卯之頃御道具写

一保昌五郎貞宗御刀 少キレアリ

御太刀拵 二尺四寸二分

一新藤五郎国光御刀 二尺三寸九分

御拵右同断

一豊後辰房御陣刀 二尺三寸九分

御拵在

一越前千代鶴太刀 二尺二寸八分

御腰ノ物御拵在リ

一備前兼光御陣刀 二尺四寸五分

折紙目数百八拾匁御拵在リ

一実正御小サ刀 壹尺五寸四分

御拵アリ

一長谷部御陣脇指 壹尺七寸九分

御拵アリ

一三原御腰物 二尺三寸二分

御拵付

一志津御腰物 二尺二寸二分

右同断

一三条吉則御小サ刀 壹尺五寸

右同断ニ通在

一文字御脇指 壹尺九寸八分

御拵在リ

目メカフラ

一字津御刀 御拵アリ

一真長御腰物 二尺五寸

御拵アリ		同断	
一祐定御腰物	二尺五寸	一相州物御小サ刀	壹尺五寸五分
右同断		同断	
一盛命御腰物	二尺五寸壹分	一綱宗公御作御刀	壹尺五寸五分
右同断		一光忠御脇指	壹尺六寸壹分
一摺上御脇指	二尺九寸	一備前法光御刀	
右同断		一無銘御刀	二尺七寸四分
一雲重御刀	二尺四寸三分半	鬼首ト申	
同断		一元重御刀	二尺四寸四分
一秀影御刀	二尺二寸	一了戒御刀	二尺四寸
同断		一永重御脇指	壹尺八寸七分
一備前一文字御脇指	壹尺八寸壹分	一了戒御刀	二尺二寸五分
右拵二通在リ		御拵アリ	
一孫六御脇指	壹尺八寸三分	一家次御刀	二尺三寸御拵アリ
御拵アリ		一品川様御作御刀	御拵アリ
一兼光御刀	二尺四寸	一安倫 ^{トモ} 御刀	二尺三寸四分右同断
同断		一輝廣御脇指	壹尺三寸七分
一兼高御脇指	壹尺五寸九分	一兼次御腰物	二尺四寸四分

	御拵アリ	一其外色々	四腰
	一宇多ノ国光御小脇指 御拵アリ	一志津御脇指	
	一御佐次賀御小脇指 同断	一法成寺御薙刀	御拵在
	一左文字御小脇指 同断	一金道御長刀	
	一山城御腰物 二尺五寸五分半	一下坂薬師寺御鑑	
	御拵也	一當麻御小サ刀	御拵アリ
	一国包御脇指 御拵アリ	一吉光御小脇指	同断
	一與兵衛打御脇指 右同断	一摺上御小サ刀	壹尺六寸壹分
	一綱宗公御作御刀	新古二通り	
	一上ノ銘御脇指 同断	一備前清光御脇指	新古二通
	一無銘御小脇指 同断	二尺五寸	
	一信国御脇指 同断	一安倫御刀	二尺壹寸同断
	一海部打御脇指 三腰	一宗次御刀	二尺四寸三分同断
	木柄鞘スハキ	一鬼首御刀	一尺九寸同断
	一貸小サ刀 丸腰	一上総之助御脇指	一尺七寸同断
内		一加賀清光御脇指	一尺七寸九分同断
一国包	壹腰御拵アリ	一左文字御小脇指	
一与兵衛打	四腰カウカイ九本	一真長御刀折紙	同断

一藤原国包御脇指 同断

一長谷部御刀 壹尺三寸五分

御拵アリ

一宇津御刀 御拝領御拵アリ

一勝家御刀 御拝領同断

一無銘御刀 二尺二寸七分同断

一重助御刀 御拵在

一兼貞御刀 二尺七寸同断

一元日朝御局御歳男

御隠居様御局「」之通「」

一同朝奥御膳番一汁一采

一同朝奥惣女中御雑煮被下「」

一同晩御歳男同断

一御年始御振舞□□此節□□之御番江計御膳部之通

一右同断之節御供之御膳番「」一汁一采御両館様御歳

男二中白米二而御膳部之通

一十五日前ハ御湯之分無之又御膳之湯上ル筈也

一十四日晚御局御歳男

御隠居様御局江も御膳部之通、表奥御膳番御隠居様御膳番江も一汁一采二而被下也

一十五日朝右同断

一晦日晚過而御年直シ節、御局御歳男御膳部之通

一右之節奥御膳番一汁一采

一十二月晦日ハ正月七日迄不事二而、上七日ハ末御膳部之通二而上ル、常々御振□有之候節ハ壹日分之御膳部代相出候而不足之所ハ不事二而取可申事

一二月晦日御歳直シ之節、正月晦日晚之通

一七月御生身玉之御祝義御相伴遊シ御局御膳番被召連候

ハ、御賄一汁壹采被下也

一八月十五日ハ幡御神事ニ付鮎ニツ遣、十六日御弓ニ付御出之節ハ御料理人御酒役壺人

12 御供頭方全 年未詳 岩出山町史・高橋盛解読

御供頭方 全

吾妻五左衛門平益延扣

一塩釜一ノ宮御名代七月十日 左之通

奏者宮鳥居前御下乗、塩釜石の鳥居前御下乗、同勢下馬前二扣御狹箱ハ 御跡江引続随神門之外迄上置候御勤相濟候時分、御武頭番所之下馬場通御裏下馬二相廻候、石ノ鳥居前二相扣候御供屯宇町之方七曲り通御裏下馬札之所江相廻置候

但御乗物江者御徒組相附御裏御厩ノ前通上置候事、

石ノ鳥居御供左之通

一御目付・御供頭・御櫛番・御小納戸・御近習・御草り取・又草り取等引続上ル、御先キ大小姓組・御徒目付・御徒組者随神門之外二指扣、夫御脇御供引続何茂随神門左之方江付相入

一御手水御供之内上ル 御献納物役御武頭衆被扣居候向通唐門之際ニ而御上草り被為召 御刀番江被相渡御先番兩人東之方東之方常之出入口玉垣之内江上草りニ而相入、御刀ハ外ニ為持置兩人共へ内相廻り、唐門之外雨落際江罷出居被為入候得者御供御草り取御上草履指上候ハ、早く出入口相廻内江入、御下り之節も早く出入口

ハ廻り、唐門之外江相廻居候事

一御献納之御太刀馬代御請取相濟、唐門被為入法蓮寺御先立ニ而別宮御拝殿庇縁ニ而御長御上下之く、るとき上ル、法蓮寺御先立ニ而御拝殿之中御通り合之間ニ而御名代被遊御勤候、御先番兩人御拝殿之庇縁ニ扣居、左右宮江御移り、御拝殿左之方上り左宮右宮被遊御勤、御拝殿右之方座敷江御通り西之方江御着座、法蓮寺ハ東之方江座付、御応対之所江社人御神酒指上御頂戴、右御土器御懷中被遊候 御名代相濟御自分御拝御初穂白木台江載、御先番番所江持参役僧江相頼被相備役僧御先立御拝相濟、唐門御下り御先番御供之節ハ唐門通用仕候事 一御裏通御下り御厩前小坂中程ニ而御乗物二被為召候

一御衣裳熨斗目御長上下二夜三日

御斎戒

一御名代不相濟内ハ御直御礼受無御斎戒中故、御供頭ハ品々相断

但御脇礼ハ候事、御帰之節ハ常式之通り

一月番御奉行衆江御出之節、熨斗目御長上下御供者旅装束、

正月五日御名代之節も右同斷之事

一法蓮寺江御出之節、門前二而御下乘

一塩釜江御名代 天明五年正月五日・七月十日・同九年正月五日也

一東圓寺江御出之節、門前二而御下乘

一亀ヶ岡八幡宮江 屋形様御家督相濟候節、御名代下馬札之少シ向板橋之向江鳥居下二而御下乘、御狹箱此所扣居、御先番鰐口之下江相出ル、御刀被相渡御先番庇縁江扣居、御手水庇縁二而御先番之者上ル

一大崎八幡宮石ノ鳥居前二而御下乘、御先番・御刀番共二御錫之下掾側二扣居、御手水御目付庇縁二而上ル

一東照宮常式御名代之節、下馬橋本二而御下乘二御供黒門之際迄御徒組迄御先番黒門之内江罷出ル、御草リ取内江入 隨神門之際二何茂扣居、此所二而御手水御先番之者上ル

一真淨殿黒門之内ノ御門半戸口内江者御先番茂入不申御手水御自身

一仙岳院江御出之節者御先番式台江罷出ル、御挟箱御跡ハ

入、御帰之節見合御挟箱同院門外迄御先江出入、雨天之節御長柄相入、御門之内ハ御徒組上之夜中御燈灯御奉行之節御徒組待之

一貞山様御廟瑞鳳寺之少上、御門之際二而御下乘、此所二御挟箱等指扣、御靈屋之唐門際二而御刀番江被相渡御上草リ被為召、ねはん門被為入御手水御自身、御供・御先番共二ねはん門之外江扣居

ス

一瑞鳳寺江御出之節、同寺門の前二而御下乘、御先番式台江罷出ル

一心鏡院様江御自分御参詣之節、役僧江憑御香奠被相備、御手水等之義御先番之者心懸相憑置、御香爐も相出させ置候事

一大年寺様 獅山様 忠山様 性善院様江御名代之節、御裏ハ直々御廟江御出之節ハ政徳院様御廟之入口手前二御下 忠山様乗所石碑有御廟柵ノ御門之外二而御刀被為取御刀番江被相渡、御上草リ被為召、御手水御自身御先番

御供ニ柵ノ御門外ニ扣居

一 大年寺江御裏カノ門ハ直々御出之節ハ御先番式台江罷出ル、御刀番者方丈玄關脇幅耆間廊下之内左之方壁際ニ扣居

一 表坂ハ御通之節ハ鎮守堂前御下乗、山門前ニ而御下乗、山門ハ被為入候節ハ右御門之内御仏殿ノ御向通り筋違ニ飛石据候処ハ左之方江御むちり御出被成候、御先番・御坊主等知隨寮之方御幕際江罷出ル、雨天之節ハ御長柄入ル、御仏殿御幕上り候節者御長柄御遠慮也

一 萬壽寺門之際ニ而御下乗、御廟之御門際ニ而御上草り被為召、御刀被相渡被為入御手水御自身、御先番御供御門外ニ扣居、此処迄御供仕ル

一 光明寺門之際ニ而御下乗、御先番式台江罷出ル、御刀御刀番江被相渡、客殿江上り御掾通ニ扣居

一 満勝寺下馬札無北八番丁遠門前ニ而同勢扣居、同寺門際ニ而御下乗、御先番式台江罷出ル、同上り口客殿ノ掾通ニ扣居

一 御城御堂 因縁殿 萬善堂

詰の御門ニ而御下乗、御武頭衆江御会釈、御小人目付居候節ハ御手被下候、御先番兩人・御坊主御式台江罷出ル、御挟箱御跡ハ内江入、外兼而之通御式台前ニ而ハ御挟箱相立申候

右神社・仏閣江寛政二庚戌年七月十日・十一日

屋形様御名代被為蒙 仰被成御勤候節、御衣裳布衣ニ而被成御勤候事、御先番御供麻上下 宮床村烈ス

一大屋形様御名代十日神社江 但木下野殿長上下大姫様御名代、同日石川筑前殿長上下

一大屋形様御名代十一日仏閣江 石川中務様長上下大姫様御名代、同日茂庭大隅殿長上下、御供・御先番共ニ麻上下着用候事

但屋形様ハ齊村様 大屋形様ハ重村様

一大年寺ニ而御法事之節、山門前ニ而御下乗、山門内江者侍三人・御草り取耆人、御門番所御武頭江御会釈御仏殿脇回廊通口ハ御上り被成候、御先番兩人・御出入之御坊主耆人同所江罷出居、方丈御扣処江御通り被成候、御刀番ハ方丈玄關脇幅耆間廊下之内左之方壁際江扣居ル

一夜中ハ山門マ内御焼灯マ二つ被相入候、御燈灯持ハ御定御人数之外二大小性組被相入候事

一雨天之節ハ御長柄被相入事、但仏殿御マン幕上り居候節ハ御長柄遠慮被成候事

一御宿坊二止宿杯之節、御刀指御跡マ見合御供仕候、廻廊之十文字目之所知客寮之方マ者後二相扣候、御廟江御詰被成候節、御供御定之通方丈玄関江相廻候、台所之方マ相廻り廻廊腰掛之脇半戸マ薄縁りをはね越、玄関前江相詰事、惣御供ハ方丈裏門之方江相廻り居候事、外前之通カマン門也故略之

一常式獅山様江御自分御参詣之節、御先番大幼耆江相憑御香篋被相備、御香爐御手水等相頼心懸被相出、大幼耆之前半戸口マ被為入御自分、御先番御供半戸口二扣居候事、御刀半戸口二而御刀番被相渡、御上草り指上候事

一明和二年四月十三日マ東照宮百五拾年御法会二付 屋形様御名代被為蒙 仰候節之留拔書

一飯八木屋方丈江御詰被成候、御供侍四人・御草り取壺人・御狭箱対、右之事御門マ仙岳院飯方丈式台迄

一御名代御勤被成候節、式台マ役僧御先立仕ル

一御先番三人黒御門内江詰居ル、御草り取ハ御供二而入右四人之御供也

一黒御門之内御火消御武頭衆兩人御礼、御足輕江御手被下候、東之方江少御出御手水御仕、西ノ方御坂石壇御上り初之所二而御上草り御脱キ御上り被成候

一飯方丈江御先番相詰居候節、御小人目付本田曾助申聞候ハ黒御門マ内ハ御小性二人・御供頭壺人・御草り取壺人、右之外不被相入筈二相木勝之丞殿マ御首尾合二御座候間無間違御首尾被成候様二而申聞候間承知致候と相答、黒御門マ内右之通被召連候事

一十七日東照宮江御出随神門二御扣被成御座候 屋形様真之御将束マ二而御通勤懸之御目見 御意有之相濟而御法会相始、夫マ御太刀馬代御目録入御直之御持参役僧江被相渡御献納御拝有之、畢而屋形様御退去之節御跡マ宝蔵院江被成御出、又以同寺二而御目見有之被成御帰候事 御衣裳熨斗目布衣二而御勤被成候事

8 将束：原文ママ、装束の意。

一安永二年六月十二日 惇心院様十三回御忌御法事二付

屋形様御名代被為蒙仰候留之拔書

一仙岳院詰ノ御門ノ内江ハ御供一向指支候段、同寺役僧申

聞候ニ付段々吟味有之候得共、御小人目付ニも右之趣ニ付御供相入不申候 御下遷御座候得者御仲間様ニ而も誰様ニ而も御供相入不申と申候処、前々之御例ニ相違致候様相見得候へとも無是非、此度ハ其通ニ相成候已後者能々致吟味候而御出被成候様可致候、御先番ハ宮殿之式台之脇式台ニ兩人罷出様御上り御供仕ル、客殿と書院之間壹段ひきく候、廊下東之方半間口有之所の脇ニ扣居候、前々ハ客殿ノ玄関ノ御上り被成候処、御下遷座ニ付重戸立切置候故脇ノ御上り被成候、尤摺筵御座候故御草り召不申候

一真淨殿江御上遷座 御名代御勤被成候、唯今迄客殿式台壹切通用不相成候様脇式台ノ御上り被成候処 御上遷座相済候故就式台明候故式台ノ御下り被成候、御先番兩人も右式台江罷出候事、右ハ八日ノ十一日迄之御留也

一十二日仙岳院江御詰被成候節、御供侍四人仙岳院門之内

式台際迄御供仕候、御先番兩人式台江罷出ル、御草り取御挟箱ハ内江入不申、裏門ノ相入候御帰之節ハ門前江揃置候而御供仕候事

一下馬橋本ニ而御下乗、御武頭衆御門番ノ内御定ニ而人数之外ニ雨天之節ハ御長柄持相入申候、夜半者御挑灯^マ杯御定之人数之内ノ持候、併仙岳院之門之外ノ挑灯為持候門之内不相成候

一御先番之者徒之者召連候事不相成候、草り取壹人ニ候右故刀指之者小走と名付、先キカ跡カニ召連候事

一東照宮・龜ヶ岡・大崎兩八幡宮江御名代之節、御斎戒ニ而御勤被成候事

服付覚

一御城中惣麻上下之節ハ御供御先番共ニ麻上下何か品在之御主人様計御麻上下ニ而御登 城之砌ハ御先番裏付上下帷子着用之節ハ戾子^{もし}肩衣御供ハ常服

一朔日・十五日・廿八日ニ相当り、御主人様御麻上下ニ而御登 城之砌ハ御先番裏付上下

但帷子着用之節ハ戾子肩衣、御供者常服三朔共ニ右之

通也

一五節句御登 城之砌、御麻上下御先番御供共二同断

一中田二而ハ御羽織御袴御登 城之節ハ半御上下御供者旅
将束御先番ハ麻上下着用可仕事

但御登城之砌、御三の箱並御大小櫃ハ下馬切前以首尾
致置可申事、尤吟味可有之事

一寛政四年五月五日 齐村様御入部之節者中田二而御羽織
御袴 御登城之節ハ御長上下被為召候、御供者旅将束也、
此節式部様・安藝様御供者麻上下着用相見得候御入部之
節ハ麻上下着用宜敷方ニ可有之事、涌谷・登米御供之外
ハ旅将束二在之候事、追而心得ニ中田二而込合候間、御
乗物角二心付可申事、御雇御轆尺ニ折入御箱と日通ハ御
雇江ハ百文位被下

一上使等之御礼ニ御月番江御出之節ハ御麻上下御供者常服
一塩釜一ノ宮江重キ御名代之節ハ熨斗目御布衣、正月五
日・七月十日御名代之節ハ御長上下、御先番麻上下、御
供御小姓已上麻上下 御名代相済、御月番江御出被成候
節者御名代御勤被遊候通二而御将束、御供旅将束

一村義様始而御目見得之節、宮床村烈様・村義様御麻上下
二而御登城殿様御供者常服、若殿様御供者麻上下、御先
番麻上下

一御名代御帰御目見得之節御先番麻上下、但シ追而御登
城二而も同断

一東照宮 亀ヶ岡 大崎両八幡宮 真淨殿

因縁殿 萬善堂 大年寺 萬寿寺

光明寺 満勝寺 瑞鳳寺 御名代之節御先番麻上下

一御野初壱騎打御勤被成候節、御羽織御裁付松森村御弁当
御相伴被 仰付、右済而御帰仙之節御直々御登 城被遊
御羽織御裁付、御供者旅将束御幼少カ御病氣等二而御上
府不被成候節ハ以御使者御野陣江雉子二ツ御献上被成候
事、御使者羽織立付着用可仕事 御帰城已後御使者を以
御歛被 仰上候節ハ御使者麻上下着用、但シ御上府不被
成候節之事也

一御献上雉附札 右雉子壱掛衣二而く、り札ハ雉子之鼻江
染糸二而相附候、右御使者羽織立付也、介添御徒組壱
人・持夫壱人・刀指壱人・草り取壱人

一松森御弁当場、坊主部屋江申入、御奉行衆之御物書衆江相勤答承寄罷帰候事、松森御使者鞍馬ニ而相勤答也

時次第

一卯之日御祝義御登 城被成候節御供

麻上下

一歳暮御礼御登 城被成候節者御供麻上下之節ハ御先番麻上下也

一松島陽徳院江天明三年五月十一日

御曹司様御弘之 御名代御勤被成候節、同寺詰之門ニ而御下乗、内ニ役僧罷出直々御先立陽徳院様御靈屋江御上り階之下御手水桶有之所ニ而御手水被遊、御刀御先番江被相渡、此処ニ御先番扣居、階上り玉垣際外ニ御献納致物役僧扣居、玉垣之内ニ住寺扣被居、玉垣之内石壇ニ而御名代御勤被遊、夫々役僧御案内御寺江御出式台御上り客殿脇掾側江御手水桶上り居御手水被遊、御位牌江被遊御勤御将束御布衣、御供御乗物脇計、御先番計麻上下、其外旅装束俣ニ而相勤候事

一瑞岩寺江御自分拝被遊候、此節御麻上下詰之門之外鷹の

羽石之所ニ而御下乗

一孝勝寺江村義様御仏參、寛政四年五月廿六日同寺門ニ而御下乗、御先番式台江罷出ル、僧二人式台江罷出役僧御先立ニ而龍珠院様御位牌江御焼香被遊候、夫々役僧御先番ニ而御靈屋江御出、御門之内御手水御先番上ル、御門際ニ而御刀御先番被相渡、浄照院様江御焼香被遊候御麻上下、御供常服、御先番麻上下、御香典ハ御先番持參、役僧江相憑被相備候事

一正月元日・二日何か重立候御祝義等ニ而詰之御門々御式台迄摺筵敷候節、左之通可相心得事

一御一門衆侍四人、御一家・御一族衆侍三人、御家老侍三人、御番頭格已上之輩侍二人、詰所以上之輩徒之者壹人、右之通詰之御門内江被相通候、御一門衆挾箱ニツ小門々相入直々中之口江可被相通候、右人数之外ハ不殘可相留候

但シ雨天ニ而摺筵取候節ハ御一門衆并御家老ハ立 傘

壹人・草り取壹人、其外詰所已下之者迄草り取可相入事

右之通御武頭江申渡候間、御一門衆始左様被相心得候様兼而ノ通相通可被申候

右之通御奉行衆分申来候間御目付申聞候条、其心得可被成候事

享保十四年正月九日

彈正様

但本土佐

一御城中并仙岳院ニ而摺筵敷候義ハ草りはき不申為之義ニ候処、御心得違ニ御座候哉、稀ニハはき被成候御方も御座候様相聞得候、右之訳ニ御座候間重而ハ被相扣候様可然事

享保十四年五月十六日

右者但本土佐殿江水沢之御留主居被相呼被仰渡事

寛政四年五月廿三日

齊村公御入部御祝義御能見物之節、詰之御門分御式台迄摺筵敷候節侍四人小雨ニ而筵取不申、御門地移迄御上草リ被為召候御草り取入不申候、至而之小雨故御手傘指上候、

御挾箱ハ御跡分御徒組付相入中ノ口江相廻ス、小門ハ開不申故大御門分相入、但シ摺筵敷候上横通り不罷成候故御挾箱ニツハ御門江向右之方筵之外を通り相入候事、御供之者御跡分相入候義者幾人相入候而も出入指支不申事、始終四人分不相成候、御仲間様方御不同有之摺筵取不申候共、御立傘御用被成候御方様も被成御座候、信濃様御供御手傘上可申と存候処、御門外ニ扣被御足輕申候ニハ御立傘ニ而宜敷御座候段申候ニ付御立傘御用被成由、其節御供分承候事

右之通小雨ニ而摺筵取不申とも御長柄傘御用被成候御方様被成御座候間、以来ハ前々分御用相成来候之趣を以右之通御用可然哉之事吟味物也

一御家督無御相違御奉行衆・御宿老衆以上使被仰渡候節、

御礼御月番江御出被成候節御麻上下

一御繼目御礼被仰上候、御登城之節御礼麻上下

一御官位御悦被 仰上御上府御登 城之節同断

一御入輿之義被 出御悦御上府御登 城之節尤御入輿相済候、御歛御上府御登城之節同断

一御入輿為御祝義御能御見物御料理被遣候節同断

右三ヶ条ニ准シ□□候御悦ニ御登 城之砌御供麻上下

文化八年九月十七日

一東照宮御神事ニ付 屋形様御名代被蒙 仰候ニ付御行列
御先キ江公儀御小人目付二人、御手前御箱相添御小人床頭
黒羽織ニ而壹人、御挟箱夫手替共ニ紺羽織ニ而四人、大鳥
毛黄九よふ御小人手替共ニ三人、中鳥毛手替共ニ黄九よふ
御小人四人、御長刀御小人黄九よふニ而壹人、御徒四人、
麻上下ニ而御馬方壹人、同御留付壹人、同大小性二人、右
ハ御先キ御乗物御脇六人、御轆尺八人、御目付壹人、又草
り取共ニ二人、御手鑑御長柄御小人黄九よふ二人、手替壹
人、御茶弁夫二人、御坊主壹人、御供小走白九よふニ而二
人、御馬口取赤九よふニ而二人、沓箱夫二人、紺看板ニ而
御召替馬御口取二人、赤九よふニ而沓箱夫二人、御挟箱夫
手替共ニ三人、御三の箱夫紺羽織壹人、合羽籠夫紺羽織ニ
而手替共ニ三人、同合羽籠紺羽織ニ而手替共ニ三人、傘備
夫紺羽織ニ而手替共ニ三人、御目付草り取壹人、御目付手
鑑御供頭手鑑夫二人、又草り取二人、押御小人石畳二人、

惣御供勢

一侍通十二人 一御徒御坊主迄五人

一御小人床頭迄十四人 一御燈灯御足輕拾六人

御草り取二人 御馬取四人 御轆尺八人内四人

御雇惣夫二十六人 惣御供人数上下ノ八拾人

十七日曉八ツ時迄之御供揃ニ而八ツ半之御出駕

一晚七ツ半時御供揃ニ而七ツ半時御出駕

惣御供勢左ニ

一侍通麻上下拾二人 一御徒坊主迄五人

一御小人床頭迄拾四人 一御燈燈御足輕十六人

一御草り取二人 一御馬取四人

一御轆尺八人 一惣夫二十六人惣人数九十人

一仙岳院江之御通筋御屋敷横丁ノ柳町塩倉丁通壹番丁、是

ノ御宮町直々此処下馬諸道具相扣下乗、橋之上ニ而御下

乗被遊、夫ノ御箱ニ而仙岳院江御入御箱同院門前ニ置、

其内ハ御城中と同御同所ニ而御時刻御待被遊、御時刻之

砌御同所ノ同院門前ニ而御出直々黒御門ノ御上リ被遊、

右黒御門ノ内ハ侍三人・御草り取壹人、未明ニ候ハ、御

徒二人相入御挑灯二ツ相入可申事

但シ仙岳院江嘉永三年御名代砌 御箱入候事ニ相成候

由

右御門内江御先番兩人相詰、鳥井ノ外ニ而御手水上ル、其
ハ朱塗橋迄御供申上ル、其ハ上ハ殿様計、役僧耆人ほんほ
リ持參、御先立御名代相濟、御下山黒御門前ハ御先番ニ而
下乗、橋之上ニ而御乗物被為召、直々御帰御通筋ハ御宮町
ハ壹番丁二日町同所ハ柳町伊勢屋横丁ハ御帰、其ハ御屋敷
御門留之首尾相成候事

一惣詰合中何ぞ御用在之罷通候節ハ御目付衆ハ通判相出
事

一晚ハ七ツ半時之御出駕、御通筋ハ御屋敷横丁ハ北目町通
御出、柳町通ハ清水小路直々御宮町下馬ニ而御下乗被
遊、仙岳院江御入御時刻御見合之間、朝と同御時刻之節
黒御門之内も朝と同ニ而御入、鳥井外ハ御脇坂江御廻り
随神門之脇く、リハ御上リ此く、リ迄ハ御供并御先番相
扣、是ハ内ハ役僧御先立ニ而 殿様計御下山、御同所ハ
御下リ黒御門前ハ朝と同御帰之節者御宮町ハ壹番丁通御

月番福原縫殿殿江御届相濟、其ハ御帰御通筋者御月番次
第御通行宜可申上事

一公儀御小人目付兩人者御祭礼ニ限り御頼被成候様相達可
申事

已上

或家之筆記 御供頭方

一二拾人組御供之節、麻上下并繼肩衣袴等年中之通着用

寛保三年三月十日

御吟味之上着用被 仰渡候

一正月三ケ日之内御社參等被遊候節麻上下

一二月初卯 一六月廿四日 一八月十五日

右三ケ度繼肩衣

一御法事之節ハ袴計 一盆中御供之節袴計

一奥様方御供之時分常式共ニ袴計

近年袴着用之節法皮着用ニ成

○御当地御地廻り

御社參之節御供御行列

一小先払 御小人耆人 但袴着用候而看板杖ニ而御先立雨

中赤合羽

一 対御挟箱 二人 但看板か黒法皮 雨中赤合羽

一 御徒 麻上下 雨中傘

一 大小性 同断 雨中同断

一 御乗物 御轆尺六人 但看板時節物着ス、雨中肩越赤合

羽菅傘

一 御左脇 御目付忝人 麻上下雨中傘

一 御櫛番

一 御右脇 御供頭忝人 麻上下雨中傘

一 御草り取 忝人 御草り二通御木履御傘御杖

一 二十人組 忝人 袴二而

一 御手鍵 御小人忝人

一 御長柄 同忝人 但袋諸共二

一 御引替 御口取二人

已上

一 御乗物御しとね御轆尺二相渡御乗物江敷セ可申候、雨

中者唐油

一 雨中者御手鍵御長柄御桐油御小人江相渡可申候

一 雨中之御出ハ又草り取忝人御大所江申出二而召連可申候、自然雨晴候傘等為持候而も可然候時節ニよるへし

但シ御下男不足ニ候間吟味物

一 二拾人御出・御帰共二御先江途中通シ指遣可申候、当番之者御供

一 御供触者二十人、御小人・御草り取ハ御供頭ハ首尾可申候、補言但シ笠籠夫・又草り取等御出入江可申出事

一 御馬者御小性頭ハ御馬屋江首尾可申、又ハ御供頭ハ触候時も有、兎角御小性頭ハ

一 御下乗所 八幡ハ鳥居際ニ而 御歩行御先江御上り御下り之節も同然、御下り之節者御小道具役御先江立、御乗物御供御引揃御乗物為召候様ニ可仕事、御仏参同然 補但満覚院義三坂江出ル御上り・御下り共二例御仏参之時分前条無之候

一 御靈屋御参詣之節ハ一下乗橋際

一 御手鍵御手柄も止ル也

一 御下乗處御門前小橋越被遊候而御門ハ内、御徒御先二御

9 手柄：原文ママ、長柄の意。

供

一御子垣内江大小性以下ハ不入御脇御草り取計入

但大小性御脇御供なれハ入

一御歩行ハ切石際迄御先立、夫々御供頭御先立直々御手水上ル、御先番無故也

一御廟所江御拝相済、御下り之時御役人御先立御供引揃御乗物為召候事

一祥光寺江御参詣 下馬遠門際御手鑑御長柄

一御下乗所曲り橋際外

一祥光寺ハ御先番御小性二人

一御廟参ハ御靈屋同然其外品々御靈屋同様也

一實相寺御参詣 下馬遠門際戸つなき有御手鑑御長柄止

一御下乗山門外品々同断

一実相寺ニも御先番有 一御廟参之時并同然

一御本丸御社参時分ハ御歩行ニ而御出被遊候、九月九日御祭礼之時者御手鑑為御持候時分ハ立所御馬屋前之時ハ大御門外ノ方出崎ニ立可申候、四方々見得候様ニとの心也、馬場之時も梁川玄亮前ニ可然也、兎角見合可然也

一御人留指置候事 馬場之時者御米藏門前ニ二十人我妻五

左衛門脇ニ御小人老人指置申候、二歳馬之時同然也

一火繩壺把二十人ニ為持可然也

一御鷹野御出之節之次第を以行列可然也

一御手鑑御小人老人、韃黒塗前ニ在り

一御挟箱壺荷 肩替共ニ二人、是ハ御挟箱役手前々首尾也

一御徒二人 一御馬 御口取二人

一御目付 一御供頭

一御挟箱役 一御小性

一御草り取 時服可申付事

一二十人 御鉄炮だひ袋火繩為持可申候、但シ御持筒次第時服等申付候事

一御鷹野春々秋迄御飼籠出ル、御小人老人可申付事

二

一御鷹匠 手あき壺人、御小性頭々首尾可申事

一一明野江御出之節ハ御鳥羽馬壺疋、口取壺人、是者御小姓頭々首尾

一御供頭巾御免之義者御目付首尾申候、若無心付候ハ、

少々心付可申

一御笠御草り取二渡可申事

一御合羽ハ御挟箱役始末小道具方御前三の相出候ハ不及候也

一夜中ニ及候ハ、御挑灯二ツ御歩行なれハ御徒等ふる、御馬なれハ御口取ふる、御乗物ナレハ二拾人ふる

一仙台二而

一中田町御宿在り 屋形様岩沼御昼成ハ未明ニ御屋敷御出、中田町御宿ニ被成御座候、補言只今中田川橋向ニ御扣被遊候事

一御仲間様方江御双方御使者在、大小性勤ル召連候又草り取御足輕耆人ツ、補二時次第と見得申候

一二十人増田江遠見ニ指遣可申事

一補言時次第と見申、昼余者御足輕代りニ指遣可然事

一御迎場ニ被為出候節ハ御一家衆中田川橋際ニ御座候、橋駒よけ際ニ而御下乗、夫々直々土手御上り、御供も土手を越御後ニ相詰へし、此時ニ御供こみ申候心得へし

一屋形様御登り之節ハ先安房様江被為入、是々御立大町耆

丁目々通丁ニかゝり御出被遊候

一御一門様方ハ安房様被成御座屋形様御立、則御跡々大名小路直々土どひ江御かゝり、長町橋切御先御出被成候而御門送被成置候、此時御馬ニ而御出被成候、無左候得者間二合不申候事

一御出夜中ニも御かゝり被成候時者兼而御足輕江申付持夫耆人御大所江申付へし、御挑灯あかし箱入ニ而相渡可申候

一仙台出火之節ハ御持前之所ハ御出、尤御宿を以御指図御出之節申来候ハ、御出也、河内¹⁰出火なれハ御供中將束致御敷台江相詰可申候事

一御小性頭 法皮立付

一御目付 法皮上帯

一御供頭 法皮上帯

一御櫛番 同断

一御近習御小性 同断

一御徒目付 九よふ法皮同断

¹⁰ 河内：原文ママ、川内（現・仙台市青葉区川内）。

一大小性 同 同断
 一御徒 同 同断
 一二十人組 御供小走白九よふ法皮上帯
 一御足輕 白九よふ法皮上帯
 一床頭 黒地輪九よふ上帯
 一御小人 黄九よふ上帯
 一御口取 赤九曜法皮上帯
 一御草り取 浅黄輪九よふ上帯
 一御挟箱持 羽織上帯
 一沓箱持 紺看板
 一仙台御地廻り 大番頭已上御下乗
 一御仲間様 御一家御一族 御奉行衆
 御宿老衆 若年寄衆
 元若年寄衆 御簾奉行衆
 大番頭衆 両古内二佐々 黒澤四家大進三千石已上也
 右之内ニ而見違茂有之、御下乗不被成候ハ、御駕籠脇之者
 名本承届候上見違処外仕候段可申也、若向合下馬なくハ屹
 度聞へし、時々心を付へし

一大橋脇番所ハ御足輕罷出候ハ、御脇合あかりと可申候
 一松の木番所ハ御脇合あかられいと申也、昔ハ御乗物戸を
 明御手被下候也、夜中者御脇合申候也
 一下馬二止るハ一御馬一合羽箱 沓箱 笠箱等也、第三の
 箱御大小櫃 一御手鑓 一御長柄
 雨中者詰ノ御門迄御小人持参、但シ袋をはつし逆ニ持、
 詰ノ御門合内ハ御徒上ル
 一御挟箱係詰ノ御門迄
 一又草り取ハ御供也
 一御浦下馬江御供廻シ可申被 仰付候ハ、扇坂合ハマハし
 ましき也不通所也
 一詰ノ御門摺筵敷候ハ、侍四人摺筵之脇通相入可申候
 一詰ノ御門迄御挟箱参候
 一大手御門番江も昔ハ御直々御手被下候也、扇坂之方御門
 番、是又同然詰ノ御門同然
 一御武頭衆詰所前ニ而御腰に御心ある也
 一御式台脇二うろこ罷出是又
 一御先番兩人御同朋衆頼候而登城之由通ス御式台江出入、

御先ニ立御入御広間被為入御腰 御刀御ぬき御先番ニ被相渡、中ノ間・上ノ間御腰、虎ノ間ト上ノ間之間之御廊下ニ御先番詰御刀持也

一御挟箱ハたまり江上ル、御挟箱役壱人・大小性壱人御乗物江御徒壱人番ニ付へし

一御下り之節ハ詰御門外ニ御乗物有り、早く行見はからい御乗物立置へし

一其外脇々様方ニ而御門前ニ而御下乗也、下馬ハ表下馬¹¹切もの也、後下馬わるし昔之事也

一享和二年七月御上府被遊候節、御仲間様ニ而下座ニ仕候様被 仰付候

一新役共計御供前二候ハ、先役壱人被相登候様、享和元年十月被 仰付候事

一御徒已上自分合羽 一御小人御口取赤合羽

已上

一草り取江足袋相用御供立不相成候、鞋ハ足袋用よし

一両下座ハ亘理計御申合次第

¹¹ 下馬…下座カ。

一御下乗相成候得者上り之方々御入小門ハ下り也、御前御供頭・御小性・御目付・御櫛番
一仙御城江下々都而無看板ニ而者難成事

13 行列次第覚帳 年未詳 178

江戸仙台出入ニハ黒はつい着シ御先扨

御先扨 文六

御先扨 七郎左衛門

六助 門兵衛

御乗替 御乗替

喜内 五助

小頭

惣助 御沓箱持壱人

御挟箱 肩替壱人

御挾箱
肩替忝人

御簀箱忝人
大鳥毛
左五左衛門

黒太右衛門
中鳥毛
本右衛門

岡右衛門
小鳥毛
太兵衛

茨右衛門
対御鎧
九之助

粂右衛門
対御鎧
梶之助

柿右衛門

御長刀
嶋右衛門

権三郎

権兵衛
御小人床頭

与五左衛門
御鉄炮
坂元

傳左衛門
佐藤戸右衛門
御鉄炮

小野寺又内
鈴木五助

御弓立
遠藤佐傳次

今野六平
御弓立
遠藤

新八
中鉢平七
御具足

継夫

箱才料忝人
御小旗竿

継夫

御茶弁持二人
宍戸喜斎

菊地市郎右衛門

氏家竿左衛門
伊藤臨之丞

池田卯左衛門

御水吞

御指替

御挾箱役忝人

御草履取 何平

館内平兵衛

高橋太左衛門

御指替

御手鑑

文六 八助

廣井喜右衛門

庄子新平

御唐笠

岸右衛門 弥次兵衛

賜目新左衛門

館内二兵衛

二助

岩崎織右衛門

御挾箱役二人

御召馬

山中權兵衛

戸田幸太夫

浦助

上野七五平

高橋奎左衛門

市助

御沓箱忝人

宍戸八左衛門

西野三次郎

平岡團右衛門

菱沼仲太夫

御召替

御乗物継夫才料忝人

氏家江左衛門

菅井弥五右衛門

又者忝人

抑 出来之助

御駕

又者忝人

抑 岸右衛門

梁川又八

遊佐平右衛門

徒之者

手鑑忝人

御挾箱役忝人

御草履取 鹿助

乗掛

中川伊兵衛

草履取

徒之者 挟箱𡔷人

馬取 𡔷人

乗替 沓箱持𡔷人

馬取 𡔷人

徒之者 手鑓𡔷人

乗掛 石田玄益

徒之者 茶箱𡔷人

徒之者 手鑓𡔷人

乗掛 宇和野茂助

徒之者 挟箱𡔷人

徒之者

乗掛 菅井七左衛門 乗掛

草履取

徒之者

高橋助太夫 乗掛御挟箱

草履取

徒之者 徒之者

御役人 乗掛御挟箱御役人

草履取 草履取

徒之者

乗掛 戸田庄内

草履取

徒之者

乗掛 下郡山助五郎 手鑓𡔷人 乗掛 横山

草履取

徒之者

權之丞 手鑓𡔷人 乗掛 阿部

草履取

徒之者

新五郎 手鍵壺人 乗掛

草履取

徒之者 手鍵壺人

伊藤五兵衛 草履取

徒之者 挟箱壺人

馬取壺人

乗替 沓箱持壺人 雨具荷

馬取壺人

(裏表紙)

才料 二人

14 城下触等覚書帳 天保十一年(一八四〇) 49

文化三年十月十三日

一仙台御供御道中馬二而草り取壺人被貸下候、仙台御地廻り御供被仰付候、御脇跡御脇欠候節者御脇江相立候様被仰付候事 御目付方

寛延四年御留ニ在り

一秤之事、守隨彦太郎東三十三ヶ国者東海道・東山道・北陸道・丹波・丹後・但馬

寛延三年五月五日

一五節句・三朔日 殿様 御不快ニ付御出仕無之節、御目付格已上之輩・御小性頭之間ニ而、御帳ニ相付可申事、尤代々着座之輩御帳ニ相付、当番御目付御前江指上候様被仰渡候事、右之通佐内殿可被仰渡候、以上

安永五年正月十五日

一御目見得大肝入渋谷平右衛門、三間席下上の闕々壺畳目二而献上物前ニ置、御月番披露

一同御村々肝入共三間席下二而献上物前ニ置同断、右御座敷しつらい之儀御小性頭之間ふすま二間はつし、三間席

下間二板戸後屏風ニ而相囲、御家老・御小性頭・大番頭
御書入、御村扱右之しつらへ所江相詰居、御目付御書院
上り口方三間席下り方江向相詰、御席下屏風ニ而仕切也
一御仕立屋ニ而御目見得、名生定村所平
一同 村々上下御免之物右御小性頭披露、御目付詰所御
はしり角御小性頭者御棚之方

安永五年

一御道中御供之節、木綿合羽着用之儀御野合格別不天氣之
節着用仕簪ニ先年被 仰渡候処、心得違之者も間々在
之、天氣合之善悪ニ不限着用之者も在之不宜候間、向後
前文之通之節計着用仕候様被 仰付候事

文化十三年

一御扶持人迄背割羽織御免之事

文化九年二茂御首尾在り

天保六年四月廿八日

一此度分先規通り御目付御上ニ付御供歩御供被 仰付候段
御首尾、尤本鎧為持候ニ不及段共ニ

一御目付役身分昇進被 仰付候砌ニ有之、此度御騎馬ニ而
御供不仰付候事儀、御月番権五郎殿分御首尾有之候事

文政二年

一御広間上の間御ふすまひつて并釘隠し放候節、御茶道江
相渡へき事、御中ノ間分御広間通御金具放候節、同所御
番人分御出入江可指出候事

同

一手錠四丁

内

一壺丁 仙御屋敷

一二丁 御用処

一壺丁 御大所

右之通御徒目付始末を以被相渡候事

同

一御前様御不快ニ付、高泉奎殿家中医師新塚保安被相頼罷
出候処、御広間中の間江此度ニ限り被相通候段御首尾、
尤弟子被召連候此小広間ニ而休息被 仰付候事

附り御不快之御容子¹²吟味之砌御書院御三ノ間ニ而被
仰付候事

¹² 容子：様子、容体のこと。

同

覺

一火の用心稠敷相守可申事

一御門兼而通用之者之外、面体不見知者猥りニ相通間敷候、無余儀品有之候ハ、相通可申事

附り何方之者ニ候共 御城中拝見等ハ不及申、無^マ無^マ品

御門下辺ニ立やすらへ之儀堅可制之事

一暮六ツ時^ハ御門通用之儀御役人之高下ニ不寄名元承届相通可申事

一夜五ツ時^ハ小門^メ可申候、急御用ニ而通用之者者名元并何方江罷通り候訳承届相通可申候事

一御城中^ハ相出候器財者勿論、何ニ不寄通判無之相通申間敷候、夜中通判御目付限り可申事

付り諸役人^ハ相出シ候通判、御目付当番代り合之砌見届ニ可指出事

一御役人中江礼儀兼而被 仰渡候通、無礼無之様可相守事

一大御門明立之儀、龜略無之様可仕事

一大御門辺疑敷者見当候ハ、承届、怪敷候ハ、搦取則可申

出事

一御客様并御使者等有之節ハ大御門番所^ハ下り居可申事
一番所前江はき物類不指置様可仕事

一平士之者つえつかセ申間敷候品在之被相免者格別之事

一御門下江御扣被 遊候節者番所ノ前江下り候而可在罷在

事

一橋立候節ハ増御門番人兩人被 仰付候事

右之通取締訖度相守可申事

文政二年四月十七日

大御門番所江

宝曆拾四年閏十二月十日

一中新田町西町・南町・岡町檢断 殿様御通り之砌御案内

仕度旨御願申ニ付、願之通被 仰付候事

文政二年七月

一御目見得之節何ニか引揃御用有之砌、御小性頭方^ハ御徒

目付江首尾相成候、此度別段御吟味罷成直々首尾致候様

被 仰渡候事、御月番八字和ノ傳右衛門殿^ハ

同

一御上江戸之節御門送之席之事

同

一女中通判之事、御目付ゝ出ル正月か

○

文政二年の譲リニ

一御赦免被成下人数、大御門番所江首尾之事

○

同

一御下町ニ不審遊人数人在之訳向々申聞候ニ付、御町奉行江相払候様申遣候事

○

同

一御役替之節、向々首尾致候得ハ御徒目付・御徒横目御小人御門番所か

○

宝曆十二年九月六日

一諸侍百歳已上長寿之者有之候ハ、頭々江申出、頭々ゝ其年之正月中無落切支丹所江可相達事

同

一御手伝被召上候御割合在之事

文政元年五月十八日

一样光寺上京相済罷下り候、已後於御書院御目見得献上物

指上御盃御料理被下候事

但シ殿様御麻上下并御小性計麻上下、其外御小性頭

・御目付継肩衣ニ而相済候事

一於御城下屋敷くニ花火相立候儀、先年ゝ被相禁置候、尤流星玉火之類者河原之於明地ニも堅相立間敷被仰渡之事

五月十三日 御奉行六人ゝ

寛政拾二年言極リニ在リ

一御蔵筒ゑ挺、実相寺南澤村門前家中文五郎相願貸被下候事、但シ四月ゝ八月迄

一御広間上の間御ふすまひつて并釘隠シ放候節、御茶道江相渡へき候事、中の間ゝ御広間通御金具放候節、同所御番人ゝ御出入江可指出候事

右御掃除等右ニ准候事のよし

明和二年三月

覚

大公儀 只今迄元来寺院ニ而無之百性所持之地所を寺院江寄付致し、又ハ讓地等ニ致候義有之、右之地所を他

之寺院或ハ院寺之塔頭等江讓致し、右場所江引寺等致し、

又ハ本地離未致し、願主勝手之宗旨ニ仕替引寺致、或ハ

当地返転寺号計水状等ニ在之を取立、引寺号ニ候儀并墓

所詰り添地を寄進境内江囲込候儀、右之類自今可為無用

候、百性者勿論たとへ領主・地頭たり共田畑猥ニ寺院江

寄付致し候儀容易ニ者難成事ニ候

右之趣可被相触候

明和二年二月

文化八年

一御広間御座敷并御席下御茶道持前之外御座敷、已来御番

人掃除致候様被 仰渡候ニ付心得居候様、御月番ハ助兵

衛殿ハ御首尾合ニ候事

明和二年

一諸侍并凡下出生之子共¹³押返候を堅被相禁候事

元禄四年ニも被 仰渡候事

文政八年ニも被 仰渡候事

13 子共…いじりも。

明和二年四月十五日 御内証御定

一御家中長病之者半ヶ年以上長病役被 召上候段宝暦七年

被 仰渡候処、此度別段之御吟味を以其年正月ハ九月迄

病氣之者諸士・御徒組迄御知行高尅貫文ニ尅切宛右御役

尅年分被召上候事

但宝暦七年ハ去年中迄半ヶ年已上病氣之者、右半ヶ年

之割を以御知行尅貫文尅切宛被召上候条、其向支配

頭江可申達事

一其年九月中迄ニ本腹相達候者其年分御役尅円 御免被成

下候事

一番代御奉公之者長病ニ候ハ、其身同然御役被召上候事

一部屋住御奉公仕候者、長病たり共右御役不被召上候事

明和二年四月

一仮手形を以請取候金御勘定目録相出引替同数之事

京・江戸江之御使者・御飛脚者下着之日ハ廿日之内迄ニ

御勘定指出可申事

御国之内御使者・御飛脚其外諸御用ニ而仮手形を以金代

請取候分、罷歸候日ハ十日之内外諸御用ハ相仕廻候日ハ

日数七日之内可指出事

享和元年十二月

一諸御役人中当番・非番相立勤仕之分、自今当番中不片付之御用次番江不相繼、当番中承知之者御用係り被 仰付事

同

一諸御役人当番之砌、去秋中酒不相用様被 仰渡候処、弥更禁酒被 仰出候事

文化三年正月御小人御馬取江被仰渡写

一御堀もく巻被 仰付候砌、御切米之内日数人数之多少ニ

よらず、壺人ニ付丸代百文、尤壺人ニ壺盃被下置候事、

御酒御賄御大所ニ而被下置候事品々在り

文化八年之御留ニ在り

寛政八年^仰

一徹山様御卒去之節御中陰中、武芸之稽古事并乱舞家業之者遠慮仕候様之被 仰渡候事

同

一過ル十二日 屋形様御卒去ニ付御徒已上月代剃申間敷候

事

右門触 八月十六日

右長髪ニ不及段廿三日御触在り

同

一夏荷五貫目四月々八月迄

御徒組已上御足輕已下二人

寄合ニ五貫目

同

一冬荷九貫目九月々三月品々

同断

同

一慶之字御留之事

元文三年^仰

一御広間前并御掃除為仕候様ニ常々被 仰付置候得共、御

広間番何^茂油断ニも候哉不被 仰付前掃除為仕候事無之

様ニ御座候、自^今者当番三日中毎朝見賦リ移り代り之時

分ハ当番・非番之筆頭立会掃除為仕候^者及申間敷候、

否¹⁴を能々吟味仕掃除為仕候ハ、可然相見得候、無油断

大所江申付掃除仕候様ニ可申付事

一掃除者朝ニ為仕可申事

元文四年

一公儀ニ而茂御足輕已下ハ青地合羽着用不申候ニ付而、御

家ニ而茂向後御足輕已下ハ青地合羽着用可為無用事

同

一御家中屋敷之内ニ而ちりあくた等堅燃申間敷事

文化九年六月留

一浪人侍并修験者等物もらいの分押もらい等之始末之事

文化九年十一月十一日留

一御家老衆ハ旧御家老・同着座迄諸苗字殿付ニ此度被 仰

付由御首尾合御座候

同

一大番頭迄片苗字殿付ニ被仰渡候由、御首尾合御座候

同

一外之儀者追而被仰渡候由、御首尾合之事

14 否……こゝでは「答」の意。

文化八年^①

一御騎馬等ニ而仙御供手鏈持等在之節、木馬ニ被成下被

仰渡之事遠方御用共ニ

同

一隠居願、名代奉公願、長病之者出行之事被 仰渡之事

天保拾壹年十月言繼ニ

一松島天鱗院¹⁵御機嫌伺ニ罷出候節、大御門片扉相開候様

御首尾合之事

天保四年御留 文政十四年被相改席之由

一山伏共御目見得之節、席割御書院廿三ノ間ニ而

(原本図)



15 天鱗院…原文ママ、天鱗院。

15 貞操院様卒去諸事御用帳 天保一四年（一八四三）

51

(表紙)

天保拾四年

貞操院様御卒去二付諸事御用扣

七月

御目附方

一貞操院様七月廿六日申之下刻御卒去

一七月廿九日御出棺、八月朔日御葬式、御入壙、同月三日

御法事

一廿六日詰合麻上下二而御機嫌伺申上候事

御役付已上

一御法事迄惣詰合上下二而罷出候事

一廿七日御役付列格迄御帳を以御機嫌窺申上候事、平士御
 徒者御広間御帳を以申上候事

一惣御役人中長髪之儀、御法事過勝手次第月代取可申事

付リ長髮等相願候者ハ格別之事

右張札御家老衆ヲ被相渡分

一市中魚類売買被相禁候旨、廻番御徒横目江首尾可申事
魚類商買被相明義追而被 仰渡候事

廻番
菱沼弥兵衛

廿七日

一御通筋屋敷之見分、小屋敷方二而致候事

一廿六日之夜御武頭兩人実相寺江御使者被
号之義在り
仰付候
御法

一御広間詰御武頭 山中半右衛門

鹿野左市

実相寺詰

一侍番所 石崎平太兵衛

藤田 奎之進

御尊骸御供

一御先御武頭
氏家權之助

戸田藤助

一御目付仮役
小平東之進

一御穴奉行
氏家庄助 高ノ仕治

一実相寺御掃除方
阿部源治

一御人足引配人

増井長右衛門

熊谷与五左衛門

山口与市

一大番頭二而

上様方御名代

松岡田室

一御火消御武頭

門脇静磨

16 於珖様御婚禮方御用覚書帳 弘化三年（一八四六）

52

（表紙）

弘化三年

於珖様

御婚禮方御用控

十月十七日

我妻五左衛門

十七日

一御守刀之袋并緒 おかち

於俣様之通り御出入藤助の申出

十五日

袋緒拝借手本藤助江渡ス

ク

一紬形付

同人

上ル

ク

一伊勢白

二反同人

上ル

ク

一小紬綿

二ツク同人

上ル

十七

一黒すはき御長棹

五棹之内壺棹

十二月御用迄二出来藤助咄

十八日

一かふ紺地江白御紋駕籠御看板

藤助の借受成哉

〔囿〕恵右門江渡ス

十八日

一御手形三拾枚拝借 おかち

下着帯

十八日

一御ひいな 藤助江渡ス

内理式つ式つ

五人はやし 壺通

ひし子々 壺つ

毎所御手入はやし道具

首ねはし

御次第之事明日上る

此前とお留様御事

十月十九日申出

一ちんさ絹 二反

一しけ島 二反

壺反上ル

一つむき島 二反

壺反上ル

一白もふか 二反

壺反

一小袖綿 十包

上ル

一黒絹^{くわ} 三疋之内

壺疋早速

御道中御ふとん

一もよききぬ

おいわい

一まくらきれ

右二品正月迄

跡は当月中二下

一白のまきさや

綸子分品おとり

御かや 利左衛門方江

一御薬たんす (十九日)

金具わらひて斗

蓋金具しんちう

十二月御用

一御平常 御針箱○

御金具

一御ひ重の ○

わらひて直し

しんちゅう二而宜

上ル

一御かね箱○

金具

一御文箱 壺ツ

蒔絵金具・緒共二

一御文箱 御紋ちらし 唐草うら内

一御薬御通 壺ツ

御金具・絹緒紅

○

一御旅御手箱 壺ツ

御硯并下ス板水入共

御鏡台の紐 紅

十二月御用

一御薬ためし 壺ツ

セと

十九日

御薬御ため セと

十二月御用上ル

一御足駄の緒 式足

十九日

さなた 壺足分

茶 ひろうと 壺足分

黒二而も

早速十二月

一御鏡 式面 十九日

早速 十二月

大七寸七分

一御鏡 壺めん ○

のと元御拵

本黒塗

是ハ壺ツハ壺廻

少く

一 御櫛台之金具 (十九日)

御鏡立も 十二月

しんちう

紐付十二月にくるめ

木白

一 御針箱 壺ツ

御金具

上てふつかえ

一 さきの

御硯箱 壺つ

下ス板御手入硯

水入共ニ

一 青地 御かけ

御硯箱 壺つ

御金具

御硯御水入共ニ

一 む地紫絹 壺反

仙ハ

一 御貝桶 壺対

右ノ御油断ノ紐

正月末迄ニ 上ル

一 御葉

御茶わん蓋〇 御紋

御台 蒔絵 雪すすき

かけ

下ニ在リ

一 御硯箱 御手入

竹二鶴

二月迄ニ

一同 御水入 御手入

御紋ちらし

一 御鼻紙台 壺つ

十一月十五日

上り

十二月迄

御金具銀

一御平常御鼻紙台 壱つ

御金具しんちう

一御挟箱等出来候事被 仰出候

一お留様 お俵様 御分

御次第 取合四冊

お留様御例ニ宜敷

十月廿日

手本ニ相出藤助江渡ス

手本切

十一月二日納

一板ノ五尺壱反 戻ス

但九十包

一紅絹壱疋 廿日

上

但疋ニ而五十三包

一同板ノ壱疋 上

十月廿日

但 七十四包 □ 藤助

廿日

一紫絹形付切 長の御櫛台十一月廿七日常吉江渡ス

十月廿日

一御鏡台 御茶たんす（小風呂敷ニ而包）

御旅手箱

三品

鉄之助江渡下ル

十一月十五日

御旅御手箱かかみとき方廿日申出

一御薬御茶わん蓋御台江金御紋置方ニ藤助江渡ス

一女帯地白茶金らん壱筋、右ハ松岩様御見拔右順蔵下リニ

持参、右純蔵江十月廿五日申出候事

江戸三百本

羽二重

一しんし 上ル

一はり棒 上ル

一さし 上ル 三本

一女はり箱 箱被相出

張方計

十一月朔日

一御守刀之袋緒之事

一御守方御刀掛之事

一十二月三日越四日、御結納十三日被為入、五日之御滯留

重役之者^者滯留

一御長持御壇^マ箭^マ之事、御たんすハ不出、金具計出来、黒

塗者御長持同

一御土産物之事、真珠院様御式男^江御反物、外ニ被下物之

事

一御供方四冊 奎之助殿^江相出ス

一此度之御次第被相渡候様申出ル

一御土産物并御行列帳共ニ申出ル

十一月二日申出 殿^江

一伊勢白 壺反

十一月三日上ル

十一月三日

一途中縞 式反

同

一板^メちりめん 三丈四尺

上ル

一十一月朔日 源治^江首尾ス

一十一月三日 おかち^江首尾ス

三十切朝御月番^江相出ス

十一月七日 嘉珍

一子持筋 御半 御上下 并

同子持筋御熨斗目

かちん色

藤助^江申出

十一月九日申出

一真綿 壺ゆい

十一月十九日上ル

十一月九日申出ル

一島ちりめん 壺反

上ル

同

一上田島八丈島之内 壺反

御土産物

十一月十五日

一おひ金 壺つ

熊谷常吉ニ渡ス

金具拵方ニ上ル

同

一御かね箱金具

同人江首尾計ス

十一月廿七日常吉江渡ス

十一月十六日

一ゆい綿 壺包 上ル

十二月御用ニ相成候

品

一御薬御たんす

内

御薬御茶わん蓋

同御台江御紋金

引両表裏角切ニ雪

すゝきかけ

御金くハにくるめ

一御櫛台 金具

御鏡台 ひも金具

一御鼻紙台

金御散御金具

銀之御金具雪の台座

上ル

一御旅手箱壺つ

御硯并二下ス板水入共ニ

新キ御鏡台の紐

十一月十五日

一 御轆尺看板 壹枚

帯はさみ腰帶 壹通

脚半股引迄

一 こんかんはん

壹枚

一 御檀笥御長持

御油断 貳つ

一 御草り取

黒羽織 壹枚

一 御箱の羽織 壹枚

正月納

良之助

○つゝら

貳駄分

○跡付

貳つ

○馬箱合羽

貳つ

おミ代江

○ふとんはり

壹本

新キ上ル 壹本ハ

しんし

○ふとん 三つ

○細引 四本

お梅細引 貳本

利左衛門細引 貳本ふとんはり

もふせん

於玳様御婚礼之節御役被仰付候二付 お俣様御例を以御手
当被成下候様御吟味罷成、向々御首尾可被成置候事佐々木
吾妻五左衛門諸苗字殿付

一 拾五貫文 おかち

一 拾二貫文 おふみ

一 正金貳切 長野

十一月廿一日

一黒ノ御枕 式ッ

但シ来年納

同

一黒御枕 上ル 壺ッ

金具之品物此度御用

十一月廿八日

十引綿 百串

廿九日上ル 廿九日上ル可申事

一御薬通之事

廿九日

市之丞方江下ル

良之助に頼

朔日

一御守刀掛 壺ッ

お俣様合拝借、常吉江御風呂敷共二

十二月朔日

一御守刀 袋緒共

一御文箱のひも

一十二の手箱のひも

一御旅手箱のひも

一御薬通のひも

一御鏡台のひもか

一御枕のひも式ッ

一御守袋 壺つ緒共二

十二月六日渡ス

一正金式切 長の

同

一十二貫文内

八貫二百文 源治江渡ス

三貫八百文不足

同

一拾五貫文内 おかち

九貫九百式十文

五貫八十文不足

十二切百五十文渡ス

十二月六日

一ひちりめん 阿部や

六日上ル壺疋

仙の六日

一さらし 三尺七寸上ル

一ひもふせん 式枚

正月迄ニ上ル同年中

一御ふとん 壺つ

惣右衛門江下ル

ひちりめん 四丈

七尺六寸 九尺四寸

大つくり

一綿百目

引綿壺切分

十二月廿日上

一御挟箱 式荷

一御長持本黒 壺棹

一御乗物 壺つ

御腰養と布共ニ

一御日覆 紐無し御かり請

一御茶弁 壺肩

一御守刀掛

一おしとね 壺つ

十二月十日

一御足駄之緒式足上ル

一御たとふ 壺つ

十二月十日上ル

十二月廿六日

しゅんけい

三月十七日 上ル

一おはり箱 壺つ

一さきの御硯箱 壺つ

三月

一竹の御硯箱 壺つ

一はしの御硯箱 壺つ

三月十八日上ル

一御長文箱 壺つ

一御文箱 壺つ

一青地御硯箱 壺つ

三月十七日上ル

□江下ル

正月十六日申出ル

御かみそり 式ちう

砥箱共二

三月二十六日上ル

二月廿九日

一ちんさ絹 壺疋

御手元二而御調金四切手形相出ス

正月廿九日

純蔵江

正月廿六日

一本ひりめん

の切 藤助江渡ス

正月廿八日

一ひちりめん 壺疋

一ちんさ絹 壺疋

上ル

紬 切紙

一浅黄片付 壺疋

一紫紬片付 壺疋

一しけ島 壺疋

二月四日上ル

17 於珙様御召物帳 弘化四年（二八四七） 53

（表紙）

弘化四年

於珙様御召御帳

三月

御替取之部

一黒ちり緬

但シ源氏之惣御もやう

一 緋りんす

但ほうらい惣御もやう

「 子

浅黄□らい惣御もやう

一 空色羽二重

但シ桜の惣御もよう

一 紫ちり緋

但シ源氏之惣御もやう

御綿入之部

一 緋ちりめん

一 □羽二重

但シ菊の御もやう

御こし高御うら紅

一 緋りんす

一 白りんす

一 御白 四ツ

一 紫紋羽二重

但雪持水仙御裾御模様

御紋雀比翼

一 麻の葉ちりめん

一 黒紋羽二重

但シ竹の御模様御紋

「 両御うら紅

一 浅黄□ぬ 式つ

一 八丈島

御うら黒

一 紫紬

但シ木苺の裾御もやう

御紋比翼雀御うら紅

鼠 はかた

一 御南戸紬形付 式ツ

「 中 式ツ

一 肥後縞

一 板メちりめん

但シ銀杏の御模様

一 御どう召 式ツ

御裕之部

一 藤色ちり緬

但、源氏の惣御模様

一 丹後縞

「」うら紅

一 浅黄ちりめん

「」 御重附

一 紫八ツ橋 御重附

一 途中紬

御単之部

一 縞ちり緬御重附

一 紫八ツ橋御重附

但シ鶴の御もやう

「」色羽二重御重附

一 浅黄惣御もやう

十 途中紬

御帷子之部

一路 御重附 弐ツ

一 壺つ つはめの御もやう

御重附

一 壺つハ浅黄つはきの御もやう

御重附

一 白地惣御模様橋

御重附

一 紫すきや 御重附

一 かすり 弐ツ

一 浅黄

御つけ帯

一 赤地

御帯之部

一 浅黄五郎

但シ地車の御もやう

一 糸ぞ錦

一 赤地金襴

一 黒しゆす

一 紫ちり緬
 御腰帶之部
 一 浅黄厚板
 一 板メちり緬
 一 無地ちり緬
 御夜具之部
 一 大御夜着 壹つ
 但 緋とんす 御うら
 くわ色
 一同断 同
 但 シしけ縞御うら
 くわ色
 一 御かいまき 壹
 但 シ紫ちり緬御うら
 紅
 一同断 壹
 但 シ板メちりめん
 一同断 壹ツ

但 シしけ縞
 一 御祝ふとん 壹ツ
 但 シへりとんすからみ
 緋ちりめん
 一 御ふとん 壹
 但 シしけ縞
 一 御ふとん 貳つ
 但 シくわ色
 一 御祝枕 貳つ
 御しとね
 一 御乗ふとん 壹つ
 但 板メちりめん
 一 御毛せん 四枚
 18 拝借品等覚書 年未詳 177
 お俣様へ拝借
 一 御箱紺羽織二枚
 一 右畳二枚

一 御笠并袋竹共二

一日御傘 緒

一 御供合羽 十二枚

一 緒呉座

一 黄九よふ 二枚

一

一 もふせん 壺枚

一 御挟箱 肩拔

鍵持 安太郎

きやり取 文治

善吉 博

平八ふ こんかんはん 二枚

持主 合羽 三枚

こんかんはん 三枚

合羽 十枚

覚

一來ル十三日御見舞之節、御刻限并御行列御道筋御昼所等

之事

一 御昼所迄御迎二被相出代合御人数之事

一 御昼宿向方御補理、右宿名前之事

一 御道具向被遣候節之都合之事

一 御供女中之内御先江被遣御手筈等之事

一 御皆子緋御祝義御取遣方之事

一 御誕生日之事

八月二十六日

一 御一家様御名調御近親様御属国之事

一 御精進日之事

十四日御修日

二十五日 二十三日 御朝斗

一 魚鳥八百や類御嫌物之事

一 御媒様江為御祝義御進物之事

一 御一家衆・御家老衆・御用人衆・御小姓頭衆・御奉参衆・奥年寄衆始、奥向重立候御役之名前之事

一 御婚札方御用係御名前之事

一 御老女中始、御女中御人数之事

一於玳様御附人并兼而御側近二被相勤候衆御名前之事

牛坂養藏ノ妻

道はた

惣兵衛

おふゆ

夜勤 千歳

下田 三間
十八間
壹畝廿四歩 貳拾文

一御乳母衆御名前之事

菅谷七左衛門 妻

川はた

一御供衆御女中之内永く被御進衆も可有之哉之事

御年寄女中耆人

下田 十二間
廿一間
八畝十貳歩 九拾貳文
〃

此度計御供

おかち

二三日計も

下田 七間
廿五間
五畝廿五歩六拾四文
〃

おふみ

耆年

下田 三間
廿五間
二畝拾五歩仁十八文
〃

同

19 大納戸御藏検地帳写 寛永二〇年（一六四三） 6

（表紙）

大納戸御藏御検地帳写

伊藤奎之丞内

上田 七間
十八間
四畝六歩 六拾三文
〃

ゑはた

上田 十四間
廿三間
壹反廿二步 百六拾壹文
〃

同

中田 十九間
十九間
壹反仁畝壹步 百五拾六文
〃

川はた

下田 五間
十一間
壹畝廿五步 仁十文
〃

ゑはた

上田 十六間
十六間
八畝十六步 百廿八文
〃

小やち

下田 十七間
廿一間
壹反壹畝廿七步 百三拾一文
〃

内 壹間
七間
七步三文 貞享五年
公義倒

江はた

中田 四間
十二間
壹畝十八步 仁拾壹文
〃

同

下田 十五間
廿七間
壹反三畝拾五步 百四拾九文
〃

右田合八反仁畝仁拾六步

此代壹貫三拾三文

内三文 公義倒

寛永貳拾年

三月九日

濱田四郎兵衛

上野三郎左衛門

大泉 満六

熊谷 勘三郎

足立 又兵衛

遊佐 勘五郎

第二章 家老たちの記録

20 古事部覚書帳 年未詳 179

古事部

一 隆岩様御代家老当地扨底、宇和野伝右衛門壱人二相成候
 二付、小姓頭安積此面・氏家平九郎・戸田嘉右衛門・赤
 沼源之進、同役中江先以家老方家政承り候様申付諸役人
 用事於詰処承り候様申付候例有
 一 村緝公御代、長瀬一許二付、家老壱宇・出入役壱宇被相
 登御詮議被仰付 村緝公茂御上府被遊御慎被遊候節家老
 扨底二付、伊藤五兵衛再職被仰付候写
 一 此度家老共被相尋候儀有之、御当地江被相登候処、当地
 家老職之者至而指支再職申付候間、此節病身二而用事并
 し兼候品等申候而者御家之為二不罷成候間、是非辞退被
 申間敷候、以上
 一 隆岩様御代家老当地扨底

古事之部

一 御先代様の家老・小姓頭者両之肱と思召し候二付、其器

二 当り不申者申付間鋪御伝有り

一 家老扨底之節、宝曆三歳高野甚右衛門を小姓頭の家老板役申付候古例有り

一 隆岩様御代家老当地扨底、宇和野伝右衛門壱人二相成候
 二付、小姓頭安積此面・氏家平九郎・戸田嘉右衛門・赤
 沼源之進、同役中江先以家老方家政承り候様申付諸役人
 用事於詰処承り候様申付候例有

一 村緝公御代、長瀬一許二付、家老壱宇・出入役壱宇被相
 登御詮議被仰付 村緝公茂御上府被遊御慎被遊候節家老
 扨底二付、伊藤五兵衛再職被仰付候写

一 此度家老共被相尋候儀有之、御当地江被相登候処、当地
 家老職之者至而指支再職申付候間、此節病身二而用事并
 し兼候品等申候而者御家之為二不罷成候間、是非辞退被
 申間敷候、以上

十二月廿二日

彈正

伊藤五兵衛殿

一村緝公御事 真岩様右御書、伊藤五兵衛江御書再職被仰付候事

同御書之写

一筆申述候、我等遠慮ニ不及候由、昨日之頃可被 仰出と存候処、爾今御沙汰無之、扨々無執事ニ候、五兵衛不快之由承候処、薬用不申由承り候間、是非薬用申候様ニ被申付候様ニ昨日奥方江申遣し候間、昨日の薬用可申と存候、我等下り候儀一円ニ今に相知れ不申候間、其許ニ而も相続候義吟味一円ニ取立不申指置、段々延引致し置候而ハ急ニ承り度と申て不相成物者諸勘定ニ有之候、扨又只今迄不相続ニ茂成り候茂、御勘定事不埒故ニ不相続ニ茂成候事ニ候間、此度検約取立候趣意者勘定事を専一与存候、むりにも勘定事早速不相成事ニ候間、先頃其元江直々咄し候通り菱沼清右衛門江出入仮役申附、勘定所江毎日相詰、勘定奉行江取合家中之諸勘定取立候様ニ可申付与存候、仮り出入共ニ而誰茂勘定事申付かたく候様ニ相見得候間、別而勘定所江被相附御家中諸勘定勘定所主立かり出入役被 仰付候

間、無遠慮御勘定奉行江取合見届仕候而御家中諸事新古共ニ勘定仕候様ニ菱沼清右衛門江可被申付候由、五兵衛江可申伝候、右之品者勘定奉行兩人ニも呼候而申渡し可然候、菅文左衛門杯も勘定有之候ハ、早速相出候様ニ仮出入仮相除キ候様ニ可申付候

一金石之勘定先以取立可然候、大工屋などの萱すくろなと之類ニ而急ニ不致とても物者跡江まわし候而可然儀と存候、夫連茂我等不存事ニ候間御相談之御吟味相入候事計、先江取立候様ニ勘定奉行兩人江茂申付可然候一当時用引等ニ而勘定相急申者有之候ハ、かり役之者吟味申候而指繰申候而勘定相出し候様ニ可被申付候、以上

三月十四日

村緝

伊藤惣左衛門殿

猶以五兵衛江此文指遣可申と存候処ニ、最前其方江咄し置候間、合点可有之と書付指遣候、五兵衛病中ニ候間、此紙面其方読み候而相談可被申候、此儀者最早申付候而茂可然事与存候、跡之事者早速之吟味ニて難成

事二可有之と存候、先以此儀もはや能候半と存候、此

旨五兵衛江疾与相談可申候、於花者早速申付可然候

一上納石二家中の借り石之不勘定早速二申付候様安兵衛

所江も申遣候、何とそ勘定相出、返し石致候様申付度候、右御書御本文江御書人被遊候

一享保十七年十二月廿二日、家老出入長瀬上納石之儀二付、仙府江被相登御詮議被 仰付候事

一同廿一年二而改元 元文二成、二月廿五日 村緝公御

卒去 六月五日 村通公 御継目智岩様御事、御懷守

御膳番列被 仰付 御幼少二付将監殿岩見事御用主立

被 仰付候事

一御幼少二付御目付兩人被相下候、同年十一月三日 彈

正様与御名改御元服 寛保三年 御額髪被為取、同四

年御懷守賜目十郎兵衛、上野勘右衛門重く御賞拵之儀

同年表留二有り略訖

一聯珠院様へ御懷守賜目十郎兵衛、上野勘右衛門、從

御内証品々 御意被遊何に事二よらす只今迄之通無遠

慮申上候様被 仰付、其段殿様江茂被 仰含候訳等被

仰付候事

一延享元年六月十五日 智岩様於御前家老列座大内金右

衛門を以 御年並二被為至御並方之御勤を茂被成置

御満足二思召候訳二賜目十郎兵衛、上野勘右衛門江被

仰出候而 御賞拵略ス表留二有り

一安永四年大番頭へ詰所以上迄之取扱始而被 仰出候儀

同年留二有り、且ッ同席衆申合候儀茂用留二有り略訖

一文化十一年三席へ諸文通之格大和殿へ申来候例有り、

右者別紙袖留二有り爰二略ス

一智岩様御年並之節 御条目被 仰出候、武家諸法度被

仰渡候事御例有り、左二

御用之儀御座候間、明十九日九ツ時御登 城被成候様

相通し可申由後藤孫兵衛方へ申来候間、其御心得可被

成候、以上

五月十八日

内藏様

津田丹波

御挨拶済御登城被成候処、御条目被相渡候事

一部屋住二而茂十五歳へ家老等申上候御用 御同座二而

承り候様御伝有り

一自身勤之儀者御法令相守、家格不取乱様御伝有り

一於仕立屋小人組并草履取、且ツ町方用達等江目見申付

候而、同所江出候砌座之間々出客之間裏縁通附ケ廊下ニ薄縁り敷置候節ハ草り不用、薄縁り無之時者上者草り相用候、表小姓先立行帰り同断、納戸江入出候節、目付役格ニ而相詰居候役々相詰候義、表方例之通り之事

一家老用申聞候ハ、窺筋歟、又申上候筋歟と承り届候上ニ表江相出用事可聞御伝用事不審之筋申聞候節ハ取詰候而糺し可申御伝之事

一病氣等相届置候歟、何そ品も有之於奥方用聞候節、奥老・老女役指引可相出、於表者膳番江可申付事

附り奥用人詰合無之節ハ膳番を以呼老女指引たるへき事、且つ家老相通し候節板縁通り廊下中頃迄帯剣許容之事

一家老用申聞候節不分り之キ、手元江留置熟見ニ可及御伝也

一表行通行之砌、不意ニ諸士之内申聞候節、向役ニ無之

候迎茂承り候様御伝有り

一台所持先年々平侍江申付、且つ無袴勤仕不苦、用有之候節ハ表メ切錠口江呼ひ出し申付候、納戸ニ而申付候時者同所廊下板縁通り迄呼罷出候ハ、可申付、然りといへとも身列等申付置候ハ、其方を以呼出し不苦、平士之者相勤居候而祝儀等奥向ニ有之候砌、夫婦共ニ膳組并茶之間迄召出し候古例有り

一無袴之義ハ台所持并勘定所勤仕難洪之者袴相免し候古例

一家老者不及申ニ小姓頭并相付通、且つ守役等師範等致し候者呼ひ出し候節ハ平伏之砌時上す、声入れと相応之言支可為会釈事

一出野等并忍ニ而通用之儀、大門通行御先代様々不被遊候、忍ニ而ハ南行ハ柳内五郎兵衛裏通、北者本丸搦手通女性共々通候、雖然夜中ニ及ひ候ハ、供之者門番江断通用不苦候事

一何方江加鶴落候而注進之節、出馬帰城之砌ハ供通りへ太儀之声、且ツ野火并出火ニ付出馬或者洪水ニ而出候節歟、

又者変事二而出馬之砌ハ不及申、急之事二而出候帰城太儀之会釈可致候、尤上府之節仙着并滞城同断之事

附り鶴落注進出馬并野火・出火等二而出候節、仕立屋口ハ相出供通り可申付候、馬場稽古二出候義同断之事

一城中門内江相伴通之役扣居候ハ、直二会釈其外者脇礼名披露、門外ハ相伴通り二而も名披露之上会釈、家老江ハ直々会釈之事

一於座之間繼目之礼目見得并家督並共二家席永代座之者者無役二而も其節者家並家席之方を以家老名披露之上直二声嫡子同断、然りといへとも家並二不抱して小姓頭配下役付以下礼目見得之節者平侍之方を以家老会釈之事

一於座之間相伴通之役申付候砌、何々之役被 仰付候

御意ニ御さると申渡し、直々礼目見得申付候節役々名披露、平伏之節者名元会釈出座無之、相伴通之役客之間二おゐて申為渡候砌者家老非番立合月番方二而何々

之御役被 仰付候 御意ニ御さると申述べ

一本相伴通りとハ家老并本医師・小姓頭・大番頭・部屋番頭、右五役者本相伴通り二而同役忝宇召出し相伴申付候、

且ツ出入・奥用人・仙台留主居并格列迄相伴通りと相唱ひ候へとも相伴申付候節者当番之者忝人江呼出し申付候、右役々申付候砌何れ茂座之間二而申付候

一家老申付候ハ、直々於奥方ハ熨斗頂戴目見、古例奥用人等可相計事

附り奥用人等於奥目見申付候、奥方古例有り、尤懷守同断之事

一能申付首尾能相済候後、平士二而も当日二限り乱舞中江声之古例有り

一実相寺并祥光寺江参詣、山門雨落際二而下乗、法事之節ハ山門内武頭扣居候二付、目付役并供頭名披露之砌会釈声、幼少之節ハ守役并目附役二而脇江立候方二而名披露、掃除奉行坂下辺二扣居候ハ、平侍二付名披露、脇礼・苗字共二脇ハ披露計、夫ハ客殿庖雨落際江列次第法事方係り役人出迎静ニ步行、坂之上り口東之方釣鐘ノ指向辺ニ火消武頭組子後口之方江纏・法波¹⁶・立付二而扣居候二付、脇ハ名披露二付会釈、夫ハ膳番役・出入役等迄脇ハ

¹⁶ 法波：原文ママ、法被（はっぴ）。

名披露会釈、家老・法事奉行等扣居候処ニ而足止メ会釈、夫々上り口玄関江先番小姓頭并近習小姓・表小姓相詰居候、上り口檜縁ニ而刀取、此処ニ而手水、夫々檜縁通 御佛壇の御づし有之歟 御位牌江御ふくさ懸り候ハ、直々上段江相通り候御仏壇前の御つし上り候而御位牌ニおふくさも無之被為有候ハ、御前へ渡り御礼申上候、夫迎も御ふくさ懸り被為有候ハ、前渡り御礼ニ不及、直々上上段江通り休足、屏風等ニ而かこわせ着替等時宜ニ応し可申読経御勤ニはたち候訳順々申上候ハ、屏風かこへ等之補理を為取着座 御供養江読経之節迎茂点座ニ不及、少數居直り候程ニ而宜敷敢而点座ニ不及候 御供養相済、焼香ニ相成候節ハ法事係り之馳走役・武頭・法事奉行江申聞、法事奉行之家老脇指取申上候ハ、静二位を取、沈香包之たとふ衣紋江はさみ少し出し候覚語ニ致し取安く心懸候而罷立 御香机前ニ而焼香御礼申上、復座進退共ニ先立刀為持候名代等相済、諸僧罷立御供養相済候ハ、先番之小姓頭を以実相寺ニ而も祥光寺ニ而も住僧并兼而目見申付候諸僧呼候而、目通之節

者上段闕際ニ平伏之節会釈之上法事首尾能相済、大慶と可申候、幼少之時ニも無之候ハ、相応之言葉つかえ可致候、実相寺最初ハ先立致候而畏り扣居候ハ、会釈帰り之節、同寺先立にて須彌壇御位牌前渡り御礼如初之実相寺見送之所ニ而中腰礼、先番之者江供揃申付置相揃、供廻り之処ニ而相立候事

一大力初而実相寺江参詣之節、住寺上ケ物仕候様文化年中申渡し置候例有り、帰りの節係り役人江会釈登山之通山門内ハ名披露礼受、目付役・守役・供頭等ニ而可致候、櫛番等之披露難相成候事

一法事済ニ付、実相寺ハ使僧を以機嫌窺申上候事

一上府之節、家老在仙ニ而迎之ため門内ニ扣居候ハ、在所と違ひ取扱之義ハ乗輿之戸を明け会釈直ニ可致候、然りといへとも門外ニ相扣居候ハ、脇ハ名披露之上ニ会釈之事

一上府之節家老在仙ニ而仙着取扱之義如前条、且つ在府中廻勤等ニ而出宿并帰宿共ニ其時々在仙之家老者玄関之板之間江可罷出候、於在所為見送之玄関江罷出候節ハ重ケ

戸際江罷出候ニ付相応之会釈たるへし

一仙・在共ニ於納戸酒盛之節、盃ヲ為取候者ハ櫛番以下不相成候、櫛番ニ限り 御先代様ハ被下置候而小姓ハ被相禁候事

一羽織着用之儀、座敷廻之外免許せしめ候、然りといへとも座敷廻りと相成候へハ禁之事

一手鐙者納戸江為懸置可申候、部屋住中之手鐙者広間江為懸置可申候事

一火鉢用ル事、十月朔日ハ三月節句限り也、二男・三男并弟等同席ニ而火鉢表座ニ而難相成、然りといへとも 於内座者幼少之節者寄合不苦候事

一火鉢之格有之候処、学文之砌内座ニ而余寒之節場者向役方ニ而火鉢可為用意候

一野火ニ而も火事場ニ而も出馬之節、家老扣居候ハ、甲頭巾ニ而も陣笠ニ而も取候而会釈可及候事

一出府之節、玄關重ケ戸際江連枝出候ニ付、相応之会釈可致候、下向之砌部屋住ニ而迎ニ相出候ハ、下乗之格ニ有之、然りといへとも父子之礼讓に有之候間、幼少之

節者懷守ニ而為申聞下乗ニ為及間敷与御先代様ハ御伝有り、其節下乗ニ不及慮外と申述候事

一学文道ニ而孔孟之構釈承り候節ハ、とき初并終之砌礼伏可致候、然りといへとも稽古一覽之構儀申付候而とき申候節ハ礼伏ニ不及候事

一万ヶ一城中出火之節立退之砌ハ小姓頭・出入役・奥用人・膳番・台所持等之者之内ニ而兩人供相勤候様ニ從御先代様被相定置候、第一 御看経所并納戸長持等印府之長棹大切ニ可申付候事

一変事之節ハ大門之釣鐘為突可申候、兼而家老并出入目附・作事奉行等要害廻り之役々立除、出し場并可為吟味事

一納戸脇之筒井道成清水与云々、当城往古城郭ニ御縄張無之前ハ大性院居住之由、文政中ニ焼失相成候新座敷ノ往古道成之跡ニ茂可有之との事ニ而、依而道成清水与言伝へ候事ニも可有之哉と御伝相成、以来同処江ハ不被相立、弥御伝ニ相成候由之事

一智岩様御幼少之節、下宮町百姓善四郎与申者沙汰之砌、

家老伊藤五兵衛自分を以右善四郎と申者牢江相入候節

智岩様江茂不申上、將監殿江茂御家事二付不申上不届

二付従上家老役被召放閉門被 仰付候節 御上府御慎

將監殿事茂出府被致慎被 仰付候砌、慎中広間玄闔明

り障子を立置候様可被成置与御奉行指図有之候例別紙

留二有り

一 仲間衆二男・三男・弟等之縁組先ハ三席を限り可為縁

約事相成候、於当家者是迄ハ三席江縁組も無之 宗親公

御実弟刑部宗氏延宝五年正月廿八日初而 中村之御苗字

拝領被 仰付百貫文分地之处、天和二年安房殿御苗跡宗

氏江被 仰付亘理江罷越候儀委細共家普¹⁷二有り

一 御先代様ハ御縁約之者を御尋被成候節ハ何そ被下砌、

御乳母等女姓¹⁸江ハ老女役奉文を以御尋被成下古例

一 御先代様ハ御玄猪等被下置候分ハ御縁約其者之一生被下

置候御引付有之候事

一家老并其他御尋被成下候者有之候節ハ近習小姓使者二

17 家普：原文ママ、家譜。

18 女姓：原文ママ、女性。

而被 仰付候 御先代様御例有り

一 御先代様ハ伊達家之御例二而御代替之節御朱印諸侍一

統江被下候事

御判物 伊達家之枝流

九代孫藤原義監

印と有り

右ハ

松岩様御判物二有り

一 御先代様ハ追服之家并御縁有之家御取立御例有り

一 城中之竹木并要害廻り者乱不可為伐取軍役之備二有之

候間、堅從 御先代被相禁候、雖然不叶節ハ家老・用

人・目付并作事奉行立合見分之上被耳立候而可伐取御先

例有り

一 領分百姓仕置之義、先年被仰出候通可申付、且つ家中仕

置之義家格有之といへとも第一可加小科御伝之事

一 隆岩様御代天保七年、五百年以来之大飢饉之節、家中大

小二か、わらす餓死相及候事二至り候二付、御小姓頭安

積此面・氏家平九郎并戸田嘉右衛門・赤沼源之進等被召

呼、御人払二而被遊 御意候由ハ 御先代様ハ代々御遜り人ニ而何れも我等当代ニ而取立候事ニ無之候処、餓死ニ為及候而ハ 御先祖様并御先代様江不孝ニ相成候処、左レハ辻外ニ手段も無之依而武器之外能道具之内宜數分質物ニ相入、其金子ニ而米穀相調させ家中相助ケ度候処、是又 御先祖様ハ御遜之道具ニ有之不敏之筋ニハ有是候得とも相払申と言ニ無之、家中たすけのためニ質物ニ致候事ニ而可然哉と存候、如何ニ可有之や一決ニ及兼候、家老・小姓頭ハ我等両之肱と相頼置候事ニ候間、工風之上可申上と被遊 御意候ニ付、御質物被相入候而も御家中餓殍被相助候儀者却而御先祖様江御孝道ニ可被遊御座と申上候節、成程夫ニ而御一決被遊御座ニ而、同年極月ハ御手段被遊候由之事

一衣服之御制從先年被 仰出候通、二男・三男・弟等其家ニ居候内者家紋竹萐等ハ着用不苦、他家相統之節其家ニ拝領無之候ハ、其身拝領之外ハ難相成候事

一大力十五歳年賀之砌於奥ニ祝儀相受候節、守役於同処ニ召出し盃為取候、当日ニ限り近習小姓迄茶之間ニ而盃為

取可申候、其内人初之小姓ニ限り見合候而座処ニ召出し盃為取候 右奥老案内也

松岩様御十五歳ノ御例有り

一三河守様ハ御代々幕之紋・高燈灯之紋并目印之分都而竹萐ニ引両と御代々被相附候処 崇岩様御代從 屋形様御直御無心ニ付目印之分ハ竹萐与引両一容ニ相付申儀用捨致呉候様御直々御無心被遊依而引両之代り雪す、きの紋可遣与御意被遊、家紋竹萐衣服之等之外、幕并燈灯等都而ニ目印之外ハ御無心後被相扣事ニ被為至候不重義、縱令者御直ニ御意被遊候ニも從御先祖様御先祖様江被進候義被相改候者 御不敬之事ニ而中々御直たりとも御受可被仰上様無之、又 御無心可被遊様も不被為有御事ニ候得とも、崇岩様御事者御儒者ニ被為有一入御格ニ無御叶 御礼敬ニ計御泥ミ被遊、只今ニ被為至甚 御残念ニ思召事ニ御代々御伝被遊候義与隆岩様度々御伝有り

一在仙中者供通之番頭以上江ハ一度肴物為取候、滞府中ニ候ハ、両度も為取候事ニ御先祖様ハ御仕成之事、右ハ膳番方ニ而御下被下候銘ニ而為取候、大衡村伯り屋鋪ニ而

も膳部之下可為取候

一上府中、留主居長屋へ參候砌、留主居之者へ何ぞ為取候
古例、先代之例見合させ可為取事

一仙府表二而神社・仏閣江 御名代被 仰付勤式別紙二
有り

一宿繼御奉書到来之節印府不相破様二印府切抜候而、紙包
み候而大切二可致御受申上候節、御印符致返上候と為書
候而紙二包み候を御受之状江相入返達之事、委細披露留
二有り、御奉書之義 御名代方被仰付候、宿繼成者小姓
頭専ら可相預候、御仕置き事二而御沙汰係り家中御咎等
之御奉書二候ハ、家老専ラ可相預候雖然御受等之義二
付候而ハ、祐筆披露留方二付小姓頭方二而御受方念入早
速可相立申付候事

切抜四方之図

印府 印府如図切抜



七八分四方 紙包

一御意付之御奉書之御受之時ハ御請可申上与為認可申候、
常々之首尾渡り事ハ御意と可申遣事、委細祐筆留二有り

一出火并野火出馬せしめ沈火二相成、帰城之節途中二而突
キ鐘為留候義ハ供立之目付并供頭之内江申付為留候、雖
然と大火之野火等二而深更迄も沈火無覺束節ハ日附相残
し、帰城之節ハ纏相残し置目付役并町奉行武頭等都而改
事係り可為情当候事御伝有り

一實相寺并祥光寺裏野火并出火危急之節ハ於寺内 御先代
御情当被遊候 御靈屋御同様之事住寺等居合不申他出之
節ハ 御木造 御自身御守被遊御例も有之候事

一重役之者宅江參り候義、且ツ近習通迄不苦、其他者吟味
又者時宜二可応事

一神社佛閣參詣之節近習小姓之供立無之候、仙府ハ可申付
候於在所も忍之供可申付候

一宝蔵院家流鑑稽古之砌家中二而も於稽(古)者礼讓可及
候事

一御先代様々書院広間等重き普請成就之節作事奉行并係り
之役人へ盃を為取申儀并褒美等都而旧記次第何役二よら
す可申付事

一賞罪共旧記を以旨といたし可申付事御伝有り

一 御先代様ハ財用方之役人部屋住之者申付間敷古例右鮎田
四郎太夫咎之節被 仰付御伝有之由之事

一 重役之者本末并分地致し候者父子兄弟伯父甥従弟并忌懸
之分吟味遠慮可致委曲別紙袖留ニ有り略之訖

一 御先代様ハ目付役之者折々内座江通し家政承取儀、専ら
安之事御伝有り

一 御先代様ハ城中廻り何ニよらす品替り候補理申付候砌者
目付江申出し候古例有り

一 屋形様御出馬先ニ而居館江御成相願被為入候砌、廣間之

三之間江刀為持置壹枚草履を懷中くわい可為致候事

一 附功者之親類耄人前々ハ相頼置品々義ハ文政五年留ニ相
印し略訖

一 八幡弓場江八月十六日相出候節、目代袋ハ供頭可為自由
事

一 二ノ構橋再興之節渡り初可致候、無左ハ家老名代可申付
古例有り

一 御先代様ハ領分并拝領之野場鷹狩并猪ノ山等者古例先規
ニまかすへき事

一 野場方一統小姓頭取始末事

一 布衣装束支度之節乗物詰ニ鏡相入可申候、乗物之内ニ而
着替候事時宜ニより有之我等のすかた相見得不申支度ニ
入用有之候間相入可申、且ツ布衣支度之時ハ足袋決而不
相成候、且ツ布衣装束之節者冠り之こふより廿日も前
ニママ二仙府留主居江膳番方ハ為申登、こふより註文可申付
候指懸り候而ハ難相出候事

一 御先代様ハ御代替節者役々持前之道具見候事

一 先年財用方不埒有之役々相除勘定見届之例有り

一 仲間衆家事等被 仰付候、他之家老等相越用事承り候節

一 近習小姓騎馬詰相除用明キ候ハ、手を打候而呼可申候事
古例有り

一 御先代様ハ近習向之義ハ先年誓紙を以勤仕被 仰付古例
誓紙納戸長棹有り

一 小姓頭并奥用人懷守膳番等ハ先以耳立候上可為相出候
直々表へ相願候義難成事

一 連枝取扱之義ハ寛政年中申出し置候古例有り
一 馬場南の方ニ有之候池ハ袖振り之池と言ひ大工屋絵図ニ

ハ無之候事

一大堰普請之節先年要害之係りニ付出馬之古例有り

一納戸藏之用申附鑑相預ケ候様申付候茶道ハ十徳免許之上

徒組ニ候ハ、身分昇進申付候、且ツ存慮を以十徳為取候

義と御先代様ニ被為有候事

右之茶道江ハ祈禱懸り兼帶ニ申付候例有り

一草り取并小人組目見之節、羽烟草^マ之上ケ物之例ニ而右之

烟草羽之儘寝所下敷ニ相成候古例也

一御廟前通り候節ハ中腰ニ而御礼申上候事

一御名代等之節も外様之御廟前通候節常式之通懸置有之候

時ハ礼なし 御前之戸ひらかり候節^者御例也、委細別紙

袖控有り

一吉凶何事ニよらす先例之引付ニしたかえ家老并小姓頭其

役々可相計時宜ニ依り増減可申付事

一仲間衆并両敬江之贈答常式、或ハ相たかへに代式拾疋之

申合ニ相成、小姓頭方ニ有之吉凶為知有之候節ハ小姓を

呼候而名代・使者等之義其時ニ申付、且ツ飛脚等信便之

義小姓頭申付候事

一吉凶為知事者家老持前ニ有之候処、飛脚等相立候義ハ小

姓頭可相計候、時宜ニハ小姓頭方^江奉文申付候事も有之、

且ツハ仙臺留主居方兼而之応復^{おふく}ハ是又小姓頭方ニ而申付

候事

一神社江 御名代被 仰付候節ハ齋戒ニ而相勤候ニ付、於

途中ニ誰々ニ出会候共勤前不及会釈諷脇供之者ニ可為断
事

附齋戒ニ付御礼受不被致と供頭可断候

一一ノ宮江 御名代被 仰付候献納之役御武頭取合ニ屋

敷江相越出会之砌、仲間不及許容旨下総殿ニ而其節之献

納役御武頭秋保善太夫^江下総殿留主居懸合ニ相成以来帶

劍仲間者不及許容与相濟候例有リ

一在府之節廻勤先ニ而仲間衆等先方ニ而諸稽^マ人等又者出入

之坊主等^江何そ為取候節、時宜ニハ何に可為取候儀も有

之事

一近郡近村之住居大番組等出入相願候ハ、登館之節目通申

付、出会之砌小姓頭指引可相出、間之外ニ平伏之節入れ

と言葉支、重ねて平伏之節入段々^与応答可致候、何そ上

ケ物等二而も致し候ハ、先刻者念入候事と相応二扱、会
釈振家老等江之扱を以 御先代様之御仕成候事

附リ御代官并横目其外之小役人等召出し出会同然たるへ
し何ぞ知行方二而相頼候節者何歟為取候義古例ニも有之
候、料理并酒為相出候故相応之言葉宜敷頼等之間を以可
扱向役方二而諸事談候故ニ巨細応答ニ不及事ニ候事

一 御參勤之節并御下向ニ付御迎、中田川原江相出候部

一 仲間衆并中田川原江相控居候砌、乗物之戸す、し戸立置

可申候、無左候得ハ海道御供通行之者礼讓ニ及候物ニ
候、且ツハ大進曆々¹⁹等及下乗候義有之候間、す、しの

戸立置候得者左様之義無之候、且ツ仲間衆先輩衆川原ニ
而会釈之節乗物ニ而相互に申合使者応答可及候、又者乗

物之内ニ而相互会之節ハ戸を為開相互双方之乗物之会釈
致し候事^茂有之候間、供頭可心得様ニ申付置候 御前

御召懸近相成候ハ、下乗相揃海道江順列次第立居候而最

早 御召懸ニ相成候節、沓数草履ニ直し仲間衆一同ニ相
揃候而控居踞踞 御下乗ニ而少し進ミ罷出候節 御会釈

19 大進曆々：原文ママ、大身（仙台藩の重臣）歴々の意。

御意も蒙り済而 御乗物江御移リ被遊候、夫之御供通会
釈相応ニ致し御供之御奉行江会釈相済候ハ、則川原控
場江引乗物江移リ候節仲間衆江相互ニ空礼会釈ニ而直々
出立 御参府并御下向共ニ手段同様、且ツ乗物之内ニ而
弁当等相用度義候ハ、す、し戸立置候而可相用候湯水同
断之事、用へ不申時ハ脇之方之す、し戸ハひらき置可申
候、乍去時宜ニ之脇之諸人供通之外見物人ニ而も脇之見
得候場ニ有之候ハ、其時宜ニ可応候事

一 中田町江小休致候節、小休宿江仲間衆之見廻之使者被指
越候ハ、忝次第段是之報礼使者相立申候様可致候事

一 中田川原立道具并供通立場之備三段与可心得供頭手段之
部

一 中道具并手鑓・長柄・傘諸卒徒組^{かちぐみ}ニ而一段ニ相控可申候
事

一 近習通之諸侍一段ニ相控可申事

一 目附役供頭幼少之節ハ守役并草履取ハ手近之一段ニ相
控、此備を以不崩様ニ 御召懸之節ハ飾立候道具共ニ控
居候後ニ被相進可申候、かさつニ無之様並居平伏為致下

座可罷有候、同勢混し不申様二三段二相控候心得專一之事

一家老不届有之召放し候後ハ諸役所并出入不相成候、存慮を以平服之目見得於座之間ニ申付候後ハ旧家老与致し中之間・小姓頭間迄相通し吉凶共ニ登城不苦候、平服之目見不申付前ハ 御先代様江御縁有之候逆 御廟参等相願候共不能許容候 御廟参ハ則 御目見ニ相准んし候事
一家老召放し平服之目見得不申付候前ハ咎メ中与可心得候

文通之部

一 関白様益御機嫌能可被為成御座 御家士江様

一 大納言様益御機嫌能

御家士江様

一 前大納言様 品々同断

一 内府様 品々同断

一 右府様 品々同断

一 中将様 品々同断

一 左近将監様 御勇健

御家士江様

一 伊預守様 品々同断

一 攝津守様 品々同断

一 左京之助様 品々同断

一 兵部太夫様 品々同断

一 出羽守様 品々同断

御家士へ様

一 肥前守様 品々同断

一 田村右京太夫様江 御安康

諸苗字様

一 若狭守様 御勇健

無苗字様

一 仲間衆江文通格通之時ハ諸苗字様常式通用之節ハ諸苗字美様、中書江ハ片苗字様御勇健御安康先様より申来次第相応ニ相認候事

一 安永年中御幼少之節從 公儀御目付罷下り候節、文通其外被 仰出候格合之儀者別紙袖扣ニ相印し候事

一 文化元年五月、三席分仲間衆之方江諸文通之格合左ニ

一筆啓上仕候 貴札拝見仕候 人々御中 御報 様 御

恐惶謹言 御悦 御札 御座 御容躰 御念 御勇健

御事 被為入 忝仕合 可申上 珍重 之御事

右之通之格ニ相成居候事

一仲間衆之家来、家老被申付為知披露有之節、悦之返翰左

二文言略ス、謹言之留祐筆方ニ有リ

何之誰殿 片苗字

伊——

一仲間衆奥方〆老女役申付候為知有之候節、奥方悦之文、

其老女へ遣す、相互ニ披露返文文言略す

平常

手前役人江文言略す

一家老江 何之誰殿 実銘一字

一大番頭并番頭迄 下江

何之誰与計

右言葉遣ひ并古例之部別紙袖扣ニ有之略し訖

御曆代様御懷守附上部

愛松丸様御事 御人初

一宗泰公 安積土佐

御元祖 御年忌御相当之節、先年御使者を以從 上御香

奠御備相成例在リ

京都伏見ニ而御誕生被遊候処、右土佐義從 貞山様御懷

守被仰付、山城ノ国伏見村江罷下、仙臺御二ノ丸ニ而相

勤罷有、岩出山御拝領被遊御取移被遊候節 苔岩様御卒

去被遊候二付 功岩様御代ニ御幼少ニ付從 義山様茂庭

佐月を以右土佐江御懷守御後見被 仰付候処、式ヶ年計

相勤寛永十八年十月六日病死之由古例略ス

千代松丸様御事 御人初

一宗敏公 大内藤左衛門

西野 右近

関 越後

御当代初而御一門ニ被成進候事、古例品々略す

俊岩様御事 御人初

一敏親公

伊藤与左衛門

明曆三年九月十七日御七歳ニ而江戸江証人為入質被相登、其年江戸ニ而御越年改元万治元年三月御暇之節從將軍家綱公御事 嚴有院様於大広間 御目見被 仰付、御時服式ツ御羽織地帋ツ御拝領、同三年ハ寛文四年迄毎年証人江戸江被相登候、其歳々之御越年、翌年之三月御暇之節ハ何時茂御時服式ツ御羽織地帋ツ御拝領、此年諸国一統証人被相免、此年御九ツニ御成被成候時被相免事一宗親公 御実弟刑部宗氏江延宝五年正月廿八日始而中村之御苗字拝領被 仰付候ニ付、高百貫文分地之由天和二年安房殿苗跡右宗氏江被 仰付、亘理江御越之節右分地之百貫文被召上候事

崇岩様御事

一村泰公 涌谷ハ御養子御守役ハ無之候 御当代家紋竹ニ崔引両之紋幕之紋并高燈^マ灯其外都而目印之分、衣服之外目印之分江雪す、き之御紋被下置候旨、御直御無心ニ付左様御受被 仰上御持懷御伝品々前ニ有リ略訖

真岩様御事

御人初

一村緝公

氏家清右衛門

享保七年御額江御角入古例有略す

宇和野茂右衛門

智岩様御事

御人初

一村通公

賜目十郎兵衛

上野勘右衛門

寛保二年御十五歳、御額江角入御袖留、同三年御十六歳ニ而御額髪被為取度御願相濟、同四年御十七歳ニ被為成御並方御勤をも被遊御満足被 思召旨被 仰出古例品々有リ略ス

聯珠院様御事、御年若ニ而御後室江被遊御成 真岩様ニ御代り被遊 智岩様御幼少御九ツハ御世話表御用御導被遊候而 御かんなん被遊候由、寛保三年御十六歳ニ而御男作被遊、御守役御取立、御十七歳迄も被付進度 聯珠院様思召候旨品々御守役江も被 仰出、御意被遊御事、御厭被遊候得とも表之御吟味ニ而御十七歳迄可被付進様

無之、乍然只今迄之通何ニよらす無遠慮心付候通申上候

様被 仰出、右之訳ハ

殿様江茂被 仰含候間、左様ニ相心得居候様被 仰付候

由之事

徳岩様御事

御人初

一村則公

皆川市郎

安永三年御元服也

石田助右衛門
矢内清兵衛

同八年御十五歳御角入

大内金右衛門

御袖留

同十年御男作被遊候

菅谷傳九郎

隆岩様御事

一義監公

御人初ニ無之身列有之此所

一宗秩公

菅利左右衛門

御人初

寛政八年御元服、同十年

大内惣右衛門

同

御袖留

遊佐新右衛門

目黒丈左衛門

文政三年始而御十二歳
斎藤新十郎

御十五歳御角入同十三年

御男作被遊候

安部弥惣右衛門

氏家平九郎

青木義三郎

宇和野傳右衛門

永根茂左衛門

曾根浅右衛門

斎藤新十郎

右大勢ニ有之御人初之外ハ身列昇進被 仰付候とか御役

替等被 仰付、大勢ニ可相成事

松岩様御事

御人初ニ無之身列有之此所

国井武兵衛

横尾雄五郎

同

同

同

御目見、同四年御元服也

同六年御額御角入、御袖留

同八年御男作被遊候

氏家平九郎

曾根長右衛門

大内紋太夫

右之通御先代様御守役被 仰付御成長御前格等并年月等

略之訖

永代家老席

鮎田新三郎

矢内清兵衛

中森空之助

柳内五郎兵衛

伊藤津之助

我妻五左衛門

安積秀右衛門

中川齋記

代々着座壹番座

宇和野文治

上野徐安

石田玄意

大内意純

梁川玄亮

花渚源治

小平東之進

西川重之助

永根茂左衛門

皆川政之助

遠藤治部之助

賜目新左衛門

菅谷源治郎

下席無席之医師・小姓頭・大番頭之席、右殿家老

片苗字可有之候

一式番座

氏家善助

上野周平

梁川潤之進

村上七右衛門

手嶋雄三郎

下席無席之出入・奥用人・仙臺留守居之席

一三番座

菅良太夫

横尾豊治

下席無席之町奉行・目附之席

一四番座

落合平馬

菅野保

石田兵治

中森太兵衛

安部新五郎

御宿庄兵衛

高橋直衛

熊谷惣吉

庄司駒治

片平源之丞

藤田源太左衛門

宇和野九十郎

戸田嘉右衛門

下席無席之当地足輕頭・在郷足輕頭・弓組足輕頭・

小人頭・作事奉行・長柄組頭・武頭格列・勘定奉行

之席

一五番座

咲久間百枝

湯山千代之助

波田野平八

濱田清之進

高野仁治

矢内清太夫

引地糸之助

千葉源助

門脇新六

猪狩惣太夫

遊佐彦之進

下席無席之金役・納戸金役・膳番・守役・供頭・部

屋附人・勘定目附・家老嫡子

右者正月元日規式之節召出候役席二有之候事

附リ常式者其役々高下又者列格之方を以召出候事

右席々永代座之嫡子并其身共ニ無役之節たりとも家督並并継目等都表立家ニ付候而目見申付候節ハ無役ニ而茂名披露、家老披露之砌如役付之名元声、乍然小姓頭之配下ニ而役付以下之役ニ而礼之目見等其方ニ付申付候節者小姓頭名披露如平侍之声ニ不及候事但し小姓頭披露之砌ハ目附・騎馬詰計ニ而呼出しニ不及、最初ハ小姓頭呼出也

一役列之部

家老	同指次	本医師
小姓頭	同列格	部屋番頭
大番頭	出入	奥用人
仙臺留守居	町奉行	目付
目附列	武頭格列	同上格
当地足輕頭	在郷足輕頭	
弓組足輕頭	小人頭	
新足輕頭	作事奉行	

長柄組頭 勘定奉行

表全役 納戸全役

膳番 守役 部屋附人

勘定目付

以上

但役替等申付列格相殘候者ハ其時之割入可召出候、高役ハ下役申付候節ハ相頼候と申先例在リ

一五節句三朔日出仕申附候節

内座引揃方

本医師 小姓頭 同列格共ニ

部屋番頭 大番頭 出入

奥用人 仙臺留守居扣所

目付 同列格 勘定奉行

表金役 納戸金役 膳番

守役 供頭 部屋附人

勘定目付

右役々ハ名披露ニ不及、直々罷出平伏之節、会釈声但し引揃相成出座、目付申上候ハ、着座、其節目付

相出候訳ケ脇指取候而申上候直々出ル、内座相済候ハ、目付其段申上、夫々家老共同役中相揃平伏、其節手を膝ニ上ケ会釈・声、重ねて平伏之節天氣宜敷朝成ラハ快晴と言葉、其日ニ曇リ候ハ、曇リと言葉、又ハ雨天ニ候ハ、雨天と言葉、大風之節ハ列風ミマと言葉、暑氣之節ハ大暑又ハ炎暑或ハ残暑、寒氣之節ハ大寒 大雪 寒氣 暖冬 又ハ向寒、春ハのとか 夏ハ向暑 秋ハ秋冷 早冬はやふゆハ寒暖と同様之類言葉也、重ねて平伏其節月番之家老披露、座ニ直り直々表座目付呼出し家老同断相出候表役左之通町奉行 武頭上格并列格

当地足輕頭 在郷足輕頭

弓組足輕頭 小人頭 新足輕頭

作事奉行 長柄組頭

右表座之者罷出候節目付呼出し、目付扣処、騎馬座敷通り候節家老呼出し、着座平伏之節会釈何れも同断、表座相済候ハ、其段目附家老江相届候上、家老々脇指取表座相済候訳申上ル、則納戸江引

附り目付之者家老披露、座ニ居合不申時ハ脇指取申上候、乍然家老披露座ニ居候節ハ何時ニ而も家老江相届ケ家老申聞候義格合之事

一表座相済候ハ、直々無役之着座之者共、座之間江引揃、大勢之節ハ二行ニも引揃候而相揃候ハ、家老披露、座ニ直居出座可申上候、直々納戸々出座之節家老何れ茂当日之御悦申上候旨披露済、直々納戸江入此節家老者脇指帶披露可申候

一出仕後、継目之礼并家督並目見又者役替等之礼目見相願置候ハ、前廉相揃ひやく為置無役之着座相済候ハ、可申付候事

但し小姓頭配下ニ候ハ、誰々によらす小姓頭披露、且ツ徒組ニ限り家督並継目共ニ小姓頭披露ニ先年々相済候事

一毎月朔望宿日出仕之部

本医師 当番ニ無之節ハ小姓頭筆頭出ル

小姓頭

出入 奥用人 奉葉加之医師

目付 膳番 懷守 供頭

但し当番二付列格二不抱其役二而出ル事

右相済表座当番武頭家老披露二而出ル、月番之家老
罷出候ハ、兼而之通会釈平伏時候之言葉二而重ねて
平伏、夫ハ披露座二直リ表座武頭呼出し名披露、平
伏之時名元会釈・声退出済

21 一ノ宮御名代被仰付部覚書帳 年未詳 180

一ノ宮御名代被 仰付部

一一ノ宮御名代被 仰付候儀、年内二御奉公ハ宿繼御奉書
到来之節御受為相登小姓頭方手段略す

御在江戸二候得者正月二日ニ 上府、同日晩ハ齋戒、四
日ニ塩釜二下リ、五日ニ相勤候、齋戒之日ハ服穢之人為
相払門前二足輕一人宛立番申付候

一御名代被 仰付候二付、御伝馬何正從仙臺宮城郡塩釜迄
上下被借下候首尾合申請度旨留主居方ニ而相届候、御奉
行月番江相出末書相渡候ハ、則御勘定所江相出伝馬七正

一ノ宮御名代被仰付部
一一ノ宮御名代被仰付候儀
年内二御奉公ハ宿繼御奉書
到来之節御受為相登小姓頭方手段略す
御在江戸二候得者正月二日ニ
上府、同日晩ハ齋戒、四
日ニ塩釜二下リ、五日ニ相勤候
齋戒之日ハ服穢之人為
相払門前二足輕一人宛立番申付候

之御判紙申請候手段略す

一在々 御名代相勤候節、近年御郡奉行江為相届候筈ニ安

房殿松嶋 御名代被相勤候砌、首尾合無之由ニ而於松嶋

殿等之心懸茂無之渴々首尾合候、以来在々 御名代被

仰付候ハ、無落様其時之同席中江向寄ニ被相通候様ニ

と、寛政八年大内縫殿留主居之者江首尾渡有之事

一御伝馬御判紙向後ニ而、御当地役前所江申遣役人呼寄拝

見為仕、且ツ塩釜江出立之節ハ先キ江罷越候者原之町検

断等江拝見為仕手段略す

一先年者御判紙帰之節、原ノ町検断方江供頭相渡し候処ニ、

近年不受取儀も有之、留主居之手ニ而直々相納候ニ付、

駅々手数相済候得者手元江供頭之者始末相願候砌者乗り

物之戸棚江相入置、右供頭始末ニ而大切ニ留主居江可相

渡候

一塩釜江帰之節、直々月番之御奉行江相越 御名代相勤候

段相届候、尤御名代相勤候節之装束ニ而宅江相出候事

一塩釜江下り之節 御名代前斎戒中ニ付、於途中縦令下乗

致候程之身分柄之輩江出会候共、礼受ニ不致候訳駕籠脇
合其段為断候、帰之節者常式之通礼受致候事

一斎戒中於途中出会ニ不能駕籠脇合断候、儀前々合振れ合
候儀茂有之候処、寛政三年安房殿吉田舍人江相談之上、
礼受不被成方ニ相済候

一御献納役御武頭之内、屋敷江相越御用伺之節出会之砌、
近年会釈茂無之内同間致候義もま、有之、達之上ニ会釈
無之内ハ同間難成訳ニ、安永三年数馬殿 御名代被相勤
候節済口有リ、安房殿方ニ茂済口有之事

一御献納役御武頭之介添ニ御徒組之内ニ而被 仰付候段申
聞罷越候ハ、取継出会酒等相出候事

一塩釜江之配府并御伝馬何正歩夫何人相出候文意向略す

附リ於塩釜勤式袖扣者別紙勤式ニ委曲有之候ニ付

此所ニ略し荒増相印し訖

六日

一上使を以 在処江之 御暇被 仰出候、尤七日ニ 御目
見被 仰付候由ニ付、六日御礼登城刀番裏打上下乗物
廻者平服

但朝五ツ時前八ツ時以後者月番之御奉行宅江相出候事

一七日朝五ツ時登城先番乗物廻共ニ麻上下

御目見相濟七日之御祝儀申、上下り如兼而之仕廻次第二在所之段月番御奉行并御宿老・両月番江使者を以相届候事

但差支有之登城無之時者七種之御祝儀詰合之者使者を以御宿老宅江朝五ツ時前ニ申上候、右口上書御宿老宛名右下り之届使者裏打上下

一同日一ノ宮 御名代届ケ

御名代帰之 御目見被 仰付旨首尾合有之事

一同日一ノ宮 御名代相勤候得ハ以上使 御野初御獲之おもの 雉子きし拝領、為御礼月番江相出候事

但当時 姓善院様御忌日ニ付、七種之御祝儀被相流申上候ニ不及候段、宝曆十三年十一月十九日首尾相成候事

右ニ付一ノ宮 御名代帰之

御目見雉子拝領御暇等之首尾合八日ニ相成候事も有之

候処、右者近年 姓善院様御忌日ニ而も七種之御祝儀被為受候事

一七種之御祝儀者部屋住之衆并隠居之衆母儀方兼而御悦事等被申上候衆者使者を以申上候事

但 御在国之節計也

十一日

一御帰国之御使者被 仰付候得ハ宿継を以御奉書ニ而被仰付候事、右者御奉書を以蒙かうむり候ニ付、御請計しかと与御帰国之御暇被 仰出候上之儀ニ者無之、当夏 御帰国之御暇被 仰出候ハ、御使者被 仰付候との儀ニ付、御請計追々 御着城之日右御礼申上候様、寛政四年下総殿被蒙候節首尾合有之候事

一同日御首途之御日限、巨理之留主居江御奉行の直々被

仰渡候事

十五日

一登城之節、先番麻上下

但上府中ニ候得者常式朔望共ニ登城致し候 御暇以後内用有之候段相届候而、滞府たいふ致し居候節者申上候ニ不

及候事

一病氣指支ニ而年始ニ上府不致、本服次第伺之上ニ上府

御機嫌窺候筈之事

但着則月番江羽織袴ニ而出

御機嫌相伺候事

一御機嫌伺と計本文ニ有之候処、元日指支使者を以御祝詞申上候而も、快氣後上府正月中者年始御祝詞申上候例^{れい}左之通

一明和三年・寛延二年・安永二年御相談之上 御先代様

御上府御祝詞被 仰上候、享保十八年七郎殿部屋住之御

り御相談之上被申上候、且ツ文化十年川崎ニ而追而快氣被致当番ニ付上府被成候処、御宿老〆正月廿八日御祝詞

被申上候様ニと剪紙到来之上被申上候、文化十二年

御先代様ニ而御相談書被相出候処

一ノ宮 御社参被 仰出候ニ付

御目見被 仰付候、御日合茂無御座候間 御上府被成候

二者及不申段首尾合等有之事

二月

一上府之衆初卯之御祝詞頂戴之御奉書、御奉行〆申来御受御礼等兼而之通

一初卯登城之節、染小袖半上下先番乗物廻麻上下、但

御入部以後初而之初卯御祝儀之節^者熨斗目ニ有之候儀、

延享二年右之首尾合水沢ニ例有之候常式^者染小袖ニ而登

城之事、右御奉書之御礼使者也、頂戴物之御礼^者御馳走

役を以申上候事

但右御礼之儀^者御奉行月番江出申上候ニ不及由、安永

六年石田豊前〆式部殿江添心^{そへん}有之候由、文化十年用留

ニ有り

一卯ノ日登城明六ツ時礼受等、式日之通詰所江通坊主を以

御目付呼^{よひ}、登城之段御奉行江届追而揃之段御目付江申聞

候節、御小広間御襖際^{ふすまぎわ}江東向ニ引揃也、委細別紙袖扣ニ

有り

一屋形様御出座後、御奉行指図ニ而御対面所御闕之内ニ疊

目江出座御奉行名披露

御会釈有之、南御障子之方へ着座、卯ノ日御祝儀申上候

旨御奉行披露

御意有之、詰廻江退出之儀ハ別紙袖扣ニ有之略訖

衣服之制之部

一野袴^{はかま}者番頭格以上之外者着用難成候事

但御番医師・御近習医師、或者御小姓頭仮役并見習之

者共ニ御城下外江御供之節着用者不苦候事

一踏込^{ふんこみ}者諸士ニ限り着用不苦、雖然御騎馬^{きば}并御供立、且ツ

火事場江者兼而

御免之輩之外者着用難成候事

但並御医師者御供立ニ而茂

御免被成下候、履摺^{くつすり}相附候而者野袴ニ相紛れ申候間、

仕立不紛様ニ可仕候、笹縁^{ささへり}者勝手次第之事

一野袴者踏込立附純^{とん}（緞）子・縺子^{じゆ}・統^{ぬめ}之外、巻物以上着

用不苦候

但詰所以上御小姓・江戸番・馬上之外、巻物以上難成

候事

一東照宮御祭礼之節、廻番之御目付踏込着用不苦候事

一絹之雜股^{そうもゝひき}引着用難成候事

一肥後之つきわき羽織着用不苦候事

一無地羅麵^{めん}羽織相用不苦候事

一羽織袴等之裏ニ巻物以上相用候儀、組士以下難成候事

但大番組以上ニ而も純（緞）子・縺子・統等相用候儀

難成候事

一紙子之衣裳殿中ニ而難成事

拝領物衣服之部

一御役付父兄拝領之外、着用難成候事

但其身御紋付拝領仕候者親拝領不仕候共、祖父拝領

御紋之品違候而も着用不仕候事

一御紋御免之衆^{もろ}ハ貫^{かん}へ候共、御召物着用難成候事

一御兄弟様ハ拝領物、御召物拝領同様ニ可相心得候事

一御親類様御大名方ハ拝領物者伺之上可着用事

一御紋拝領之輩、御召物拝領之輩、次男・三男・弟等他家

へ養子ニ参候而ハ御紋付着用難成候

但向之家ニ而御紋付拝領候ハ、不苦、女儀ニ茂右ニ可

准候事

一立牡丹御紋付ハ其身并嫡子之外着用難成候、嫡子二候共他家相統之者着用難成候

但右御紋拝領致候ハ、相互ニ着用可仕候事

一服紗仕立之麻上下諸士着用難成候事

一絹上下着用之儀、重キ御祝儀并熨斗目着用之節或者指立候 御目見之節指支候

一無紋之衣裳江麻上下着用之儀 御目見等之節ハ着用難成候事

但シ指立 御前江被召出候節も着用難成候事

一縫殿紋之衣裳江麻上下着用之儀、指立候節共ニ着用不苦、雖然於江戸指立候節着用難成候、御家一扁者不指支候事

一番頭以上布衣ニ而御供之節、召連候小姓者麻上下為着用事

一羅紗合羽、番頭以上并公儀支者着用不苦、右之外者着用難成候事

一芭蕉布之合羽者御供立ニ者難成候事

一羅背板之合羽、詰所以上御小姓組・江戸番・馬上之外者

着用難成候事

一狩場之装束ニ者羅紗・羅背板・緞子・縐子・統者勿論、

金糸縫不目立分者相用不苦、天鷲毛難成候事

一足袋者四月朔日〆九月八日迄難相用候事

但御給士之御小姓御数寄屋江罷出候者、且ツ隱居者・

次男・三男・浪人等者 御城中之外者不及吟味候事

一御城中革足袋、詰所以上共ニ相用不苦候事

一於御国許涼氣之節、帷子上着ニ仕候儀、肩衣着候節ハ格別、常々者時服上着ニ不仕候共不苦候、且ツ又指立候節者格別麻上下着候節無紋之衣裳着仕候儀茂可為勝手候由、享保十九年被 仰出、何れも可相心得候事

一於御国元指立候節ハ格別、常々者衣裳江半襟懸候而も不苦候事

一無垢着仕候儀御国元ニ而ハ不罷成様ニ心得違候者も有之様相聞得候所、左様之訳ニ者無之年始卯ノ日其外指立候御祝儀事御客等有之候節者御構無之、勿論常々者麓服用候事ニ候間、向々用捨可仕候事

一襟指・襟袖口別色之切れ付候様子ニ相見得申候所、同色

二而も不苦候事

一享保十五年九月六日、白無垢ハ法眼・法橋之外者難成候事

一御家老之嫡子、同名者詰所以上之御役人、番頭格以下者相改申候処、向後御奉行之嫡子同名計只今迄之通可相改候事

一同十七年五月廿二日、若老同名者詰所以上之者支配頭二無之候へ者不相改候処、向後番頭格以下者支配頭二無之候共可相改候、番頭格二而も支配之輩者可相改候事

一御一門衆始、御紋拝領之輩、次男・三男・弟等其家二居候内者着用不苦、且ツ家来ニ為取候事者小姓以上不苦、乍然主人紋付二而も巻物類者勿論、兼而絹布御停止之者江絹布之類為取候儀難成候事

正月三日御野初之部

覚

一御旗元御鉄炮一騎打仕候ハ、直々御向畑江並居如前々之から酸放し相勤可申候事

一御旗元御弓之者御長柄一騎打仕候ハ、立場札有之候処江並居可申候事

一御先馬始一騎打通、御山入之御供御行列立候分ハ御扣場行抜海道南側立場札有之所のり、段々並居人馬込ミ合不申様二行付扣居、一騎打過 御立之節御供之分ハ相勤可申候事

但し御扣場ハ仙台江罷帰候者善應寺馬場先之内人馬不込合様二片付居 御立以後直二可罷帰候事

一騎打過御山并御弁當場江御立以後罷越候者、供人数者善應寺馬場先之内江不込合様二片付居可申候事

一仙台江直々被相通候者一騎打仕候ハ、善應寺向作業道、小鶴新田ハ直々不滯様可罷帰候

一御扣場二被為立 御山入之節御行列惣御供岩切指向二而相扣、御山へ被為上 候ハ、直々御弁當場江遣ハし可申候事

一御龍被遊 御下野江御出之節、御野入之处ハ兼而御鷹野御供御定之通御供可仕候事

一御鷹匠者御野入之处江御鷹据罷出居、御野御供可仕候事

一 騎打并御供之輩別紙絵図ゑづ之通立場札為打置候間、前日
為見届置相揃可申候事

一 御一門衆始、御一家・准御一家・御一族・御宿老之輩、
供人一騎打過御扣場給人屋鋪前不入込様二片付扣居可申
候事

一 御行列御跡々御供之輩、朝七ツ半時天下馬前立場弘之
処江相扣可申候事

一 一騎打立場札之處江相詰候輩者宿々々直々罷越、七ツ半
時面々立場札江相揃可申事

一 延享二年正月三日

御野初之節一万石以上供人数定

壹万石以上

一 供人数三拾人高二召連、先鑓為持申候事

但し右之外者茶・弁当・立傘等たてかさハ御一門衆二而も脇道
遣し可申候由ニ付其通

三千石以上之輩

一小姓三人・徒之者三人・对之狹箱持式人・鑓持壹人・草

り取壹人・口付二人・沓箱持壹人・合羽持壹人、ノ拾七
人

千石以上之輩

一小姓二人・徒之者三人・持鑓壹人・狹箱持壹人・口付壹
人・草り取壹人、ノ拾四人

三百石以上御一家・御一族

一小姓二人

ノ拾三人

一 御一門衆供人数者兼而御野初に被召連候人数之通、御一

門衆・御一家・御一族之外、何れも一騎打行拔候者共、

衣装黒革衣黒立附二無之候共、革衣かわきん二候ハ、ふすへ革衣

二而も革衣所持不仕候ハ、常之法皮マダ二而も不苦、尤立

附じゆん茂右二准し持来を相用可申事

御野初二付衣装附左之通

一 御騎馬并御供之輩何茂革衣

但し御騎馬相勤候番頭格以上者松森御弁當場迄狩場之

装束同処ハ革衣

一 御野入御供兼而之通

一於御扣場御一門衆并御一家・准御一家・御一族・御家老

羽織、其外御奉行始何れも革衣

一松森御弁當場江直々参候者羽織

一御帰城以後御悦登城之輩ハ麻上下御山并御弁當場今直々
罷出候輩者革衣羽織ニ而可罷出事

以上

十二月

延享四年二月廿一日

屋形様御鹿狩之節

智岩様御事

村通様御願相済候部

一一筆啓上致候、来ル廿一日鶴谷山御鹿狩被 仰付候ニ

付、兼而御狩之節被相出度旨被願候由被為聞候間、御狩

場江可被罷出候、将亦御龍御免弓鉄炮之内ニ而勝手次第

御免被成遣候 御免御龍禿れ候ハ、御本龍江被罷出候様

御意ニ御座候 恐惶謹言

二月十八日

猶以御龍 御免之儀者御山奉行今可申達候、以上

内藏殿

後藤孫兵衛

ノ

元康

御表無差別

右御礼同日御登城被 仰上候、麻御上下ニ而御出也

一來ル廿一日鶴谷山 御鹿狩ニ付、懸沢 御龍御免被成遣

候旨 御意ニ御座候、以上

二月十八日

猶以御簾元足輕佐藤門之丞被相附、御供揃五ツ時ニ御
座候、以上

内藏殿

瀬上

右江者切紙奉書ニ而、御答切紙ニ而相済、右御礼ニ御出

不被成御免、御龍之義所柄一通リ之儀故、御受計ニ而御

出不被成候事

一來ル廿一日御鹿狩之節、御時指五ツ時ニ被 仰渡候所内

藏事

御城江相詰被申候而御跡今御山江被相越候儀ニ可有御座

哉、直々屋敷今罷出候儀ニ御座候哉、右之段相伺候様被

申付候

右二附札

昨昼御直々御咄し申上候通 御城へ御出被成、夫々御

先江御出可被成候、御時指五ツ時揃と届候処、五ツ時之

御供揃二御座候

一御龍江鉄炮式挺為持候而可然哉之事

右江附札 鉄炮式挺為御持被成候

一御免御龍江供何人位召連候而可然哉之事

右江附札 別紙書立之通二御座候

御山追之節脇 御龍御免二而直々右御龍江被相越候輩、

召連候供人数左之通

一御一門衆侍式人・手鑓持忰人

鉄炮持二人・草履取忰人

右之通二御座候

二月

一於御山何ぞ献上物被致可然哉相伺候様被申付候

右江附札 一昨日委細紙面二而申上
候通御献上物可被成候

右之通相伺候様被申付如斯御座候、以上

内蔵留主居

二月十八日

落合清左衛門

一明日御山江罷出申候、御昼場読東提下江供人数之者共

昼賄^{ひらまか}処申度候処、木立等^茂無之処二候間、まぐ二而囲^{かこ}ひ

相用申度候、右幕^{まく}打候而も指支申間敷哉、左様二無之候

而者^み猥^たり候様二も相見得候得者如何と存候間、御内々御

問合申度如此二御座候、常式と違大文字屋も参候儀二候

間、右之通二御座候

一先鑓等ハ御近村之儀二候得者為持申候者如何と存候得と

も、大文字屋も参候儀二候間、是又御内々御問合致候、

以上

二月廿日

伊達内蔵

後藤孫兵衛様

御別紙拝見仕候、明日御山江御出被成候二付、御昼場読

東提下江御家来賄^{ひら}処江幕二而御囲被成度儀御指支可被成

哉と被仰付候、正月三日御野初二も御家来賄^{ひら}処江幕為打

候儀無御座候間、明日も幕為打被成候儀者御指扣被成候
様二と奉存候、且ッ御先鑓之儀ハ為御持被成候而も可然

奉存候、以上

二月廿日

内藏様

後藤孫兵衛

一廿一日明小半時御出宿御登城被成候、御革衣同御立附二而御小人・御馬取・御草履取何れも革衣

一御先鑓二中鳥毛出ル、御登城被仰合候、間もなく御先江御出被成候、御簾元足輕佐藤門之丞 御城江相詰 御登城待上申候而、夫々 御先被成候二付御馬下馬々御召御乗物も為御待被成、御自分御昼場江被指置候様首尾申候事

武家諸法度被 仰渡左二

一文武忠孝を勵し可正礼儀事

一參勤交代之儀、数歳可守所定之時節、従者之員数不可及繁多事

一人馬兵具等分限二応し可相睹事

一新規之城郭構營堅禁止之居城之階壘石壁等敗壞之時者達奉行所可受指図也、櫓扉門以下者如先規之可修補事

一企新規諸徒堂成誓約并私之関所新法之津留制禁之事

一江戸并国二而も不虜之儀有之と言共、猥り二不可懸集、

在国之輩ハ其所を守り下知を可相待也、何所二而准行刑罪役者之外、不可出向可任檢使之左右事

一喧譁口論可加謹慎、私之爭論制禁之、若無捩子細有之者達奉行可受、其旨不依何事令荷膽ハ其咎本人々もおもかるへし并ほん主之障り有之者不可召抱事

附リ頭有之輩者百姓爭論ハ其支配江令談合可済之、有滞儀者評定所江指出し可受捌事

一国主・城主一万石以上、近習并諸奉行・諸物頭私不可結婚姻、惣而於結縁約者達奉行可受指図事

一音信贈答嫁取之規式、或者饗応、或者家宅當作等、其外万事可用儉約、惣而無益之道具を好ミ不可私之奢事

一衣裝之品不可混亂、白綾公卿以上、白小袖諸太夫以下免許之事

附リ徒若堂之衣類ハ羽二重・絹袖・布木綿、弓鉄炮者之者ハ袖布木綿其下二至り而ハ万二布木綿可用事

一乗輿者一門之歴々、国主一万石以上并国大名之息、城主

及徒從以上之嫡子、或者年五拾以上許之、儒医・諸出家者制外之事

一養子者同姓相應之者を選ミ、於無之者由緒を正し存生之内可致言上、五十以上十七歳以下之輩及未替雖致養子吟味之上可立之、縦令雖実子筋目違たる儀不可立事

附殉死之儀弥令制禁事

一知行之所務清廉沙汰之國分衰弊道路駄馬橋舟等無斷絶可令往還事

附り荷舟之外者大船如先規之停止之事

一諸国散有之寺社領、往古至今所附来ハ不可取放之、勿論新地之寺社建立弥令停止之、無抛子細有之ハ達奉行所二可受指図事

一万事応江戸之法度於国々所々可遵行事

右条々堅可相守者也

延享三年三月廿一日

一今度從 公儀御条目被相下候間被申上委細別紙之通二御座候由、右之通去月廿二日御登城被成候様御老中方御連名之御奉書到来御登城被遊候処、於大広間二万石以上之

御方、同御嫡子御一同 御目見、此間御法令被 仰出候旨上意有之、御老中方御取合畢而 入御以後林大学頭殿御中段二而御条目被読上御承知被遊、目出度御恐悦二被思召候、此段可申遣由、仍 御意御条目之写、江戸番馬上川村孫左衛門を以被差下候段、後藤孫兵衛方申来候間、御条目之写御一門衆始、御一家・准御一家・御一族之輩江可被相通候事

一享保十七年四月 御名代卷

此度於仙岳院御法事二付、主馬殿二而 御名代御勤被成候段申来候、仍而御下宿万日堂二御座候条、為御心得之申達候、以上

四月廿一日

主馬殿御留主殿
矢内源左衛門様

上遠野五郎右衛門

右御法事二付、自分承候儀を為覚之記し置候左二

一萬日堂江御宿払者五郎右衛門坏之方〆罷出候由、尤 公方様御事故、御苗字茂書り殿付ニも無御座由、仲間承り候得者申聞候左之通

写

伊達主馬

一御名代被 仰付候、御香御寺二而受取候由二付、高平勘
右衛門殿仙岳院二被相詰候故承り候得ハ御拝計被相勤候
故不被相渡候由被申候

一御役人左之通

御法事奉行

遠藤文七郎殿

出入司

今田彦右衛門殿

御目付

境野弥平治殿

御門番

水野八郎左衛門殿

遠藤助太夫殿

御火消

浅井八五郎殿

御賄方御勘定奉行

星甚之丞殿

合判統取

上遠野五郎衛門殿

御勘定衆

高平勘右衛門殿

菱沼甚右衛門殿

御徒目付

黒澤正左衛門殿

菅野樂之助殿

文七郎殿当座物書

浅野文五郎殿

一常々御法事之節、長上下文七郎殿・彦右衛門殿・弥平治

殿・甚之丞殿

一屋形様御名代

此方様

姫君様同御当日計

遠藤八三郎殿

御曹司様同断

修理様

一屋形様御香奠者上り不申候由、御布施者上り候由、此

役但木土佐殿

廿九日二被相勤候

一御曹司様御香奠献納役布施運之丞殿也

一此度者小ノ月二而廿九日御当日也

一廿九日真浄殿しんじやうでん二而

御名代御勤被成候、以後御座列之处江御退き御自分御拝

被成候而則御帰

右京様者御名代御三人過候後二被遊候而御帰也

一此度御名代初而御勤被成候处、御首尾能被相勤御満足被

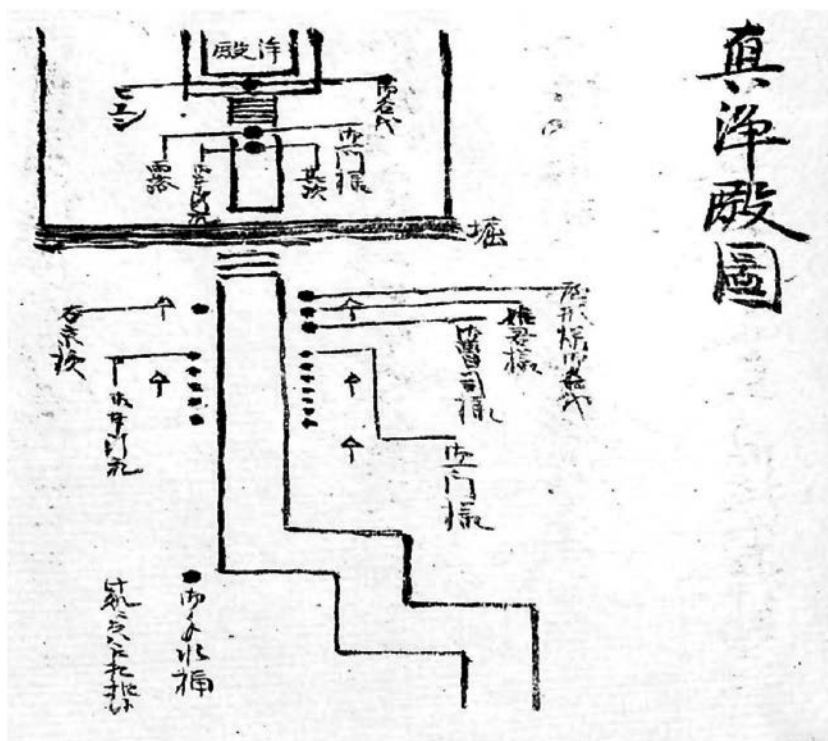
成候由、且ッ御世話被申上候衆江其段相加へ御使者被遣

候、廿九日二

文七郎殿 弥平治殿 仙岳院 正寿院 宝藏院

真淨殿図

真淨殿圖



一 御宿万日堂願主圓信所江ハ吉岡所右衛門を以金百疋被遣候、水引二而詣

一 殿様御弁当遣し御供江廿七日ニハ飯し、廿九日ニハ赤飯遣ハし候得共、早速御仕廻御帰被成候故、途中ハ持返し申候

一 橋下下馬附東ノ方、元文二年九月御曹司様御供西ノ方江附候間、西ノ方可然候

一 御供同処ハ御駕籠脇四人・麻上下御挟箱式ツ・御草履取
一人、右之通土器門迄参り、御挟箱ハ外ニ居、其外之者
内ニ入候、御挟箱者向後付勝手之門ハ入相出候時分も同
断

一 御腰物御挟箱江入候時分ハ御武頭衆江直々断申候、尤御
供ハ少々引下り申候而

一 御武頭衆江ハ御礼被遊候

一 御組之者、尤中式台ニ居候御小人江ハ御手を被下候、御
出・御帰り共ニ同断

但し近年ハ御申合之上、御面被遊候

一 御武頭衆薄縁之上江被下、御組之者者土地江罷出候

一 敷台の 御名代并御自分共二被為入候

一 御刀持も脇式台之上二居、御出之節本式台江罷出候

一 御名代衆御出・御帰共二御目付衆案内仕候

一 方丈二而 御拝被成候時分ハ出家先立縁之處江拝敷有之
御手ヲ懸御拝被成候、尤其節御出・御帰共二ぬくい縁
之内下縁通りを御通り被成候事

一 板挟ミを御刀持為持候、供二連候勝手門出入無指支候、
草履取計二為持指出候ニハ通判入

一 雨中之節、下馬橋本の御長柄土器門の内ハ御手傘

但御長柄ハ御徒四人之外也、其外二御長柄仕廻候時分
為持候ために御小人を参り候而可然候

一 御供之者ハ土器門迄傘指、土器門の内江入候時分ハ手二
持指不申候事

右二色雨中之節之儀、此度者雨降不申候故無其儀候

一 御先鎧為御持不被成様二、御触十三年十二月被出、此
度者为御持不被成事

但し当時者一統為持候事

一 仙岳院の直々布衣俣二而御月番要人殿江御出御出会

御名代御首尾能相勤候旨上座江御通り被仰達候事

一 御名代初而此度被 仰付候二付、御礼其節御下座被成被
仰上候筈二候処、御失念岩見様江御帰後、御半上下二而
御出被 仰置候事

一 右御名代御勤被成候趣、要人殿江被 仰達候、以後其節
御名代御勤被成候義二御座候間、御勝手次第御在所可然
由被申候二付、常々之通御達し段々被相出、五月朔日御
下被成候

一 四月迄御服中二御座候得共

御名代被 仰付候

一 御幕者御出被成候節張、御帰以後仕廻御屋鋪江持帰ル、
尤万日堂之口の引続勝手之方江計式張はり申候

但布衣支度之節ハ中けい持候而会釈之處、中けい額江
附候程之定規二而布衣装束之礼讓二有之候由 御先代
様御伝有リ

一 布衣装束二而相勤候様申来候ハ、則膳番江申付、留主居
手前江為申登、こふより註文可申付候、こふよりハ急二
相出不申物二而必失念難成品二御伝有之事

一元文二年六月四日 現姓院様二十七廻御忌御法事御修行之砌、因幡殿ニ而 御名代被相勤候之次第留主居留拔写左之通御先格ニ相違申候得者享保廿年五月廿四日

貞山様御法事之砌、御格式之通改而被 仰渡後成迄、右之通と被 仰渡候事、委細御留ニ有之義ニ御座候得共、品替り候儀後年為覚之内扣ニ相印し置候事

一御法事中、惣門ふち内江御先鑓御馬合羽并籠相入不申事、雨中之節ハ御長柄之傘為持候事

一方丈江之御出者瑞岩寺大鐘突申候、否御出之事御供廻仙台御格之通御先番御刀持兩人麻上下ヲ着、御供廻御脇三人御小人頭羽織外、御目付麻上下、其外兼而之通押兩人侍番所際ニ而御下乗、夫そ侍三人・草り取と人御供唐門ニ而留ル、唐門ふち人茂御供相入不申候事

但し雨中之節ハ草り取と人大門ふち廻り相入、敷台江御上り被遊候、則又元之通大門ふち出ル、御帰之節も雨中

ニ御座候得者同断之事

一雨中之節ハ御下乗所ふち長柄御傘御徒人と為持唐門際迄御供、唐門ニ而右者留ル同処ふち御手傘ニ而御出之事

附り夜中御出・御帰之事、侍三人之外、御小姓人・御徒人御燈灯唐門迄持參、唐門ふち持返し御帰之節者張番所之裏通ふち御燈灯廻し、式台四方之方ふち唐門前江廻し居候事、御供何れも御下乗所之脇江則引込升形所江留り居候、右者待番所向ニ御座候、御駕籠も同処ニ指置候事

但し唐門内、夜中ハ先番之者心得居候而小僧等相頼燈灯之手段專一之事

一御名代之外、御自分等ニ御座候得者大門ふち御通用御供廻同断之事

一此方様御宿坊傳曲庵てんきよくあん右者惣門内ニ御座候処、涌谷ふゆ御登り懸ケニ而御先鑓・御馬、其外御道具都而と宇御道中之通ニ而傳曲庵江門前迄召掛、門前ニ而一同ニ下馬を切る、御下向之砌も同断之事

右御法事中之外故指支不申候事、惣門外御通用ニ者何方江御見廻被成候共、御先鑓相立候事

一屋形様御名代

肥前様

一御曹司様御名代

因幡様

右之外御一門様方御自分御焼香

一御法事奉行

但本土佐殿

一御目付

阿形甚藏殿

右之通元文二年六月四日、涌谷御留主居在役勝又權右衛門ヲ寫取、岩手山江申上候事と有之候事

宝曆八年

御一門衆 留主居江

一衣服之品誰々ニよらす男女共に拝領物之外、羽二重以下之小袖可着之、但御一門衆并三千石以上之輩ハ御制外たりと言共、多くハ輕キ品を可被用候、御扶持人凡下并陪臣等其分限ニ応し享保年中衣服之制法を可相守候、且ツ又江戸詰之節御小姓・組江戸番組以上ハ格別之旨御条目ニも被相越候、且ツ衣服之制ハ正徳年中ニ段々被 仰出数ヶ条之事ニ而相紛れ候者も相聞得、自然御制法も相弛ゆるミ至而不宜候、仍之ヶ条被相載の候此度前以御吟味之上左之通御免被成下候

一御一門衆并三千石以上之衆衣服御制外たりと言共從 御先代被 仰出置候通隨分輕き品被用且ツ又緞子ぬめ等之類可為無用候、内室方及婦女茂可准之、尤縫箔ぬいはく等も

輕かるきを可被用候

但於江戸表者可為勝手次第第二候

一諸士三千石以下衣服之事

一於江戸他国ニ兼而卷物以上 御免之輩、於御国元も着用不苦候

一於江戸他国兼而卷物以上 御免無之輩、縮緬・紗綾・龍紋・茶亭之類江戸他国御国許共ニ着用御免被成下候

一惣縫箔・緞子・縐子・ぬめ之類、江戸・他国・御国元共ニ着用指支候

一肩衣・十徳・羽織・紋呂・紋紗もんしゃ、於江戸表着用御免被成下候

附り着古し候分ハ於御国元も着用不苦

一婦女・二男・三男・弟等者父夫等之分限ニ応し右之品着用不苦候

但江戸定詰之者、婦女縫箔ハ不及申ニ、拝領物共二只

今迄之通無指支候

一無垢むく之事、白無垢之外江戸・御国元并ニ勝手次第着用不苦候

但し諸組付士茂右同断

一縫紋之事、金糸・紅糸・紫指支候外之色ハ不苦候

但婦女・幼少之男子、金糸之外不苦候、諸組付士茂右

同断

一兼而熨斗目着用不仕、御番医師并大番組并御医師并ニ於

江戸熨斗目着用 御免被成下候

但御医師ハ於御国元も着用不苦候

右者大番組以上

一大番組之外、侍御乱舞御馬方御馬乗、或ハ並御乱舞等稽

相勤候節、前々巻物類 御免、御茶道ハ指立候節、十

徳・呂・紋紗も只今迄之通着用無指支候

附り古着之分、御国元ニおゐても着用不苦候、且ツ拝

領物御紋付も只今迄之通可相心得候

一拝領物御紋付等之事

一父拝領者不及申、先祖拝領之御紋付嫡子者不及申、一男・

三男・弟等も其家ニ居候内者着用不苦候、他家へ養子ニ

参候ハ、難成候、然といへとも向之家ニ而御紋付拝領ニ

候ハ、不苦候

附り婦女茂右ニ准し着用無指支候

一御一門衆始、御役 御免之輩ハ貫へ候共、御召物御紋付

先祖ハ拝領不仕者ハ指支候、御紋付拝領仕候者ハ婦女并

二男・三男・弟等も其家ニ居候内者着用不苦候

一都而拝領物者御紋無し共ニ於江戸・御国元も男女共着用

不苦候

附り婦女者縫箔之類も不苦候、男女共ニ緞子・繻子・

ぬめの類御国元指支候

一御姫様方・御兄弟様方ハ拝領物、都而御召物拝領着用之

格ニ可相心得候

附り御親類様方御始、御大名方ハ拝領物右同断

但巻物以上 御免無之者ハ指支候

一葵之御紋付御紋相直し着用仕候義、勿論妻子も着用不苦

候、御召物着用之格之事

一御一門衆始、御紋拝領之輩、次男・三男・弟等其家ニ居

候内着用不苦候

附り家来ニ為取候事、小姓以上不苦、乍然主人役付ニ

而も巻物類勿論、兼而絹布御停止之者江絹布之類為取

候儀者難成候

一御役目被召放候輩、以前拝領物御紋付等不及遠慮候、且

ッ御改易かいふき御仕置被 仰付候者も右同断

凡下御扶持人或者町人・百姓等衣服之事

一御旗元足輕諸組之者并右ニ准し候御扶持人、衣服先年被

仰出候通絹紬之類弥以御停止ニ候、男女共ニ布木綿之類可相用候

但し夏物晒ひのけ帷子半晒し等不苦候

一諸職人之内法体之者江戸・御国元共ニ絹紬以下 御免被

成候、勿論御用之品ニ其節ニ至り従上 絹類着用被

仰付候者或者於江戸・御国元外人会合之節絹類前々着
用來候分ハ只今迄之通可相心得候

一百姓衣服先年ハ被 仰出候通、弥以絹紬之類御停止ニ

候、男女共ニ布木綿着用、帶於袖口等も都而絹紬之類可
為無用候、勿論木綿合羽是又一切御停止ニ候

附り大肝入・山伏・神主・祢宜之類、其身并妻子共ニ

都而絹紬之類先規之通着用不苦候

一御城下町人衣服之義、門前町之者迄男女共ニ都而絹以下

御免被成下候、然といへとも分限ニ応し布木綿を可令着用候

陪臣衣服之事

一御一門衆家来者家老ハ小姓迄

一御一家・准御一家・御一族・御家老并三千石以上之家来

ハ家老ハ指次迄

一衣体代々着座之家来ハ此格ニ無之事

右之外羽二重以下并龍紋着用不指支候

但し布者巻物以上不苦候

一五百石以上之番頭格以上之家来并千石以上之平士之家来

右者家老指次迄外人江之使者、其外指立候節計絹紬着用
不苦候

右之外何れも布木綿を着用可仕候、勿論女者父夫之身分

ニ応し着用可仕候

附り木綿着用之者之内、小姓以上之者ハ帶袷襦袖不苦

候、勿論夏物者晒帷子不苦候、女メ右ニ准んし可申候

一妾者侍之娘ニ而も子マ共有之候共、衣服家来之格ニ可准事

一宿守者屋敷主家来ニ可准候事

右之通被 仰出候卷物類ハ不及申、先規被相定置候衣服之制此度被成下 御免候儀ハ畢境^{ミマ}何れも儉約勝手ニも可相成と前ヶ条之通 御免被成下候訳ニ候間、其旨を得面々分限ニ応し多くハ布木綿を相用、男女共ニ奢リヶ間敷義ハ不及申、花見を好み異様成義堅仕間敷候、若心得違御制法相犯し候者有之候ハ、訖度御沙汰ニ可被及候、此旨支配有之輩者頭々召仕候者主人々心を付御制法不相背様ニ可申付候、猶又御目付等江も別而被 仰付候条、何れも厳^{けん}ニ可相守候

附り御役付着用之義、若拝領仕り候得ハ何御役ニ而も不苦義ニ其身并先祖拝領不仕御役付才覚着用仕候義堅有之間敷義ニ候、是又訖度可相心得候

右之通御一門衆始、御家中ハ不及申、御城下・在々共ニ不殘可被相触候

右之通御奉行申渡し候間可被相通候由、御目付申聞候事詰之御門迄来輿之寺院左之通

一 仙岳院・龍宝寺・定禅寺・千手院・法連寺・瑞岩寺・陽徳院・覺範寺^{かくはん}・保春院・瑞鳳寺・東昌寺・光明寺・満勝

寺・輪王寺・孝勝寺・大年寺・萬寿寺・大満寺・天麟院^{りん} 右寺院乗物・立傘等ニ而供廻り然と致候節計、下乗小僧計召連候節ハ其通り也

一 文化八年田村右京太夫様江於途中御出会御会釈振之義ハ古来々 上々被 仰渡候義無之、且ツ仲間申合候義ニも無之、古来々御下乗御会釈之訳同年九月廿九日留主居届之例有り

一 同年正月登城之節 御門内摺筵^{すりむしろ}之上立傘難用^{たてかさ} 御門外詰之御門迄ハ草履^わ并立傘用、兼而乗輿之所ハ不苦訳、且摺筵敷出し迄不苦と有り、右之義ハ御小人目付々も不審ニ付供頭・御武頭へ懸合候処、逆も急雨雷之節手傘相用候儀ハ格別立傘ハ相成かたき旨申来委細ニ用留ニ有り、草履も摺筵之上難成候と有之候処、寛政四年 御入部御能見物之時分急雨ニ付摺筵之上立テ傘相用候由、品々同年萬定記留ニ有之事

一 同年式部殿登城之砌、被下懸直々御中奥江被出候節、仕来之通御式台前切石北ノ方江南北と並居、西向ニ供被相揃候処、御武頭々不審有之、以来ハ石壇南之方江被相揃

候様可被成、尤御中奥へ御越之節ハ新御門ハ御通行ニ而御指支無之義と為知、同年七月三日申来候義定記留ニ有之候

一御城御堂 御名代之砌、御縁通りハく、り之俣ニ而詰処ハ御堂迄之間、先年ハ御縁通りハ仕来ニ而御座敷通りハ総リ解通行不同有之、以来ハ不同無之訳ニ大和殿留主居ハ相違候訳、同年定記留ニ委細有之候事

一同年四月瑞鳳寺

紹山様御廟御造営畢而御供養之節、式部殿自分拝之砌拝所之義、御目付山崎源太左衛門江被問合之所御門御地覆之内際ニ而御拝被成候様ニと相答候ニ付、右様ニ覺無之被存、係リ御奉行後藤孫兵衛江被問合ニ相成品々有之、御香机之際ニ而以来被覺候通拝被成候義も同年定記留ニ有之事

一大番頭 上使之節、玄関前江挟箱相入候義懸合ニ相成候処、以来難成旨大番頭江被 仰渡候由、信濃殿留主居江首尾渡り有之、且ツ石母田備後 上使之節等同年定記留ニ有之候事

一佐々伊勢義暑中承知致度状之内、啓達と申文言有之為及相談候処、書役間違龜略之候分、文化十二年定記留ニ有之候事

一文化十二年九月十八日、式部殿御宮町通行被致候砌、御不斷組馬場太郎と申者不礼之節、御同人供頭横山傳五郎及始末相違不申内ニ、先方ニ而相違、達之延引不審相成候節、附札ニ不礼等之者有之候ハ、始末可仕旨、兼而被仰付候を以及始末候義相当不致事ニ候間、以来不礼之者有之候ハ、其時々被 仰付御始末被成候様ニと附札ニ有之候事

一寛政十二年遠州様御子様御妾服たりとも此様之字相認候様ニと首尾渡り有之事

一同年九月、近江殿御苗字此例之字ニ相直り候事

一文化十五年御奉書御受後、病氣之達しハ直達ニ、以来相成常々病氣達しハ留主居達し也、且ツ又他国御用蒙り候砌之病床者願を相成候訳、先年相改し候品々定記留ニ有之候事

一同年六月廿日、安房殿登城之砌、中ノ口ハ茶弁被相入候

義、御目付不審二相成、以来火入湯風呂等相除候共、湯入茶弁二相紛れ候ハ難相入訳、畢竟茶弁ハ野合之品ニ而下馬ニ相扣居候分之訳共二首尾渡品之義、同年七月定記留ニ在、但先年ハ御門并中ノ口詰ニ被申断、火入湯風呂等指除候得者相入来候処、以来指支ニ相成候事

一 隆岩様御代、文政九年十二月中、茂庭周防不礼申上候ニ付、大和殿と御吟味之上品々御達被遊候御文意之内拔書左ニ、仲間江三席取扱之形ハ土下座之者兩人重役先立之者行帰并二薄緑リヘ罷出、重戸際江刀持之者罷出居、書院江誘引、仲間ニおゐて口上相伺及出会候節ハ其主人ニ書院江相出、内座江相通リ候節ハ直々案内致し、玄関鏡板江送り、且ツ安永三年迄ハ三席取扱薄く、同四年以来重く取扱ニ相成候趣意并ニ御書加ヘ被相達候一卷、委曲定記留ニ相印させ有之候事

一 古来仕来も段々被相削候処、先年ハ私之仕来ニ者無之、従上被相定、且ツ重く被成遣候も畢竟當時之事ニ無之、従御先祖様被相据候義ニ有之候処、前書之通臨氣応変ニ役々不審相成候を定規相成候事ニ而ハ、重く被相立

候義を御目付并御武頭始、御小人目付等其御役一扁ハ供頭等江不審ニ相成、直々古来之仕来相削られ候事ニ而ハ難相済、尤臨時ニ承リ済可申様も無之、此末共ニ不審等有之候節ハ供頭并向役ニ夫々相答為置仲間衆評議無之して自分ニ難相済、且ツ又臨氣応変之不審を直々被相削候事ニ而ハ於後々ニ往古

上之御趣意を輕蔑致上候筋ニ有之、元禄年中以来古例被相削候義数多有之、無扨事ニ而此末仲間衆重吟味相達不申不叶事ニ最早相成候趣、茂庭周防不礼致候砌大和殿御開口ニも有之候由 御伝有之前文之通り、文化八年四月瑞鳳寺紹山様御廟御造営畢而式部殿御自分拝席之義、御目付山崎源太左衛門江被問合候節ハ 御地覆内際と相答、御同人覚行違候ニ付後藤孫兵衛江被問合候得ハ被覚候通 御香机之際ニて相成、何事ニよらず覺無之して取合候筋有之向之存慮ニ計随ヘ候事ニ相成候而ハ往古ハ被相立置候位階自分として相落し候事ニ至リ候而、容易ならざる事と御伝被遊候事

22 府内袖扣 年未詳 183

覚

一享保十五年八月十六日

遠江守様御事者御家柄別段ニ候処、田村隠岐守様 伊達

若狭守様御同然格様令御直名ニ而被仰上候由取合不申事

ニ候、向後御家老名元披露状ニ被相調可然奉存候

右之通御同列様方被仰合候様ニと奉存候事

右ニ付仲間一統直名ニ而申上候義相扣披露状ニ相直し候

一関白様・大納言様・右府様・左府様・内府様・中将様・

少将様・且ッ披露状ニ可相認御方委曲祐筆披露留ニ在

文通之部

一新年之御慶賀目出度奉存候、弥御勇健可被遊御踰歳珍重

之御儀奉存候、右御祝詞為可申上如斯ニ御座候、猶奉期

永陽之時候、恐惶謹言

月日

花押

若狭守様 参人々御中

隠岐守様 同断

一改年之御慶賀不可有尽期奉存候、弥御安康御踰歳可被成

珍重奉存候、右御祝詞為可申上如斯ニ御座候、猶期永陽
之時候、恐惶謹言

月日

花押

田村織部様

但兼而御通用申上候御方様略ス、委細祐筆方披露案文

留ニ有之候故不能綿密候事

御奉行御宿老等江遣ス文面之部 様字

一筆致啓達候、冷氣ニ候得共、御堅固ニ被相勤候哉承り度

存候、私無異儀罷有候、無音ニ罷り有候間、如斯御座候、

恐惶謹言

月日

何之誰様

但先年ハ拙者と認候処、中古令私と認候、往古者江戸

表并拙者と申文言夫々有り

一御状拝見致候入御念仰預り忝次第二御座候、恐惶謹言

御一家御一族 様字

一筆令啓達候、冷氣ニ候得共弥御堅固ニ御座候哉承り度存

候、私無異儀罷有候、無音ニ付如斯ニ御座候、恐惶謹言

月日

但し先年ハ拙子杯と認候事

御小姓頭

脇番頭 様字

一筆令啓達候、寒冷ニ候得共、弥御堅固ニ候哉承度存候、
私無異罷り有候、無音ニ付如斯ニ候、恐惶謹言

月日

但先年ハ拙子と認品々同断

一御状令披見入御念示預

忝次第

附文言品位様ノ字氣を相付可申候事

御鷹匠頭 奥年寄

御曹司様 御小姓頭江 様字

一是迄者一筆進達致し候、末者此旨可申遣と相調可申候事

御城番ハ御武頭迄 様ノ字

一筆申達候、寒冷ニ候得共弥御無異ニ候哉承度存候、我等
無異儀居申候、無音ニ候間如斯ニ候、恐惶謹言

月日

一御状致披見候、入御念示預忝次第

御勘定奉行ハ

評定所御役人様

一筆申遣候、寒冷ニ候得共弥御無異ニ候哉承度存候、無音
ニ候間如斯ニ候、恐惶謹言

月日

一芳札致披見候、入御念示預忝次第

大番組へ様

一筆申入候、御無異ニ候哉承度存候、我等無異儀居申候、
無音ニ候間如斯ニ候

月日

一芳札令披見候、入御念示給過当之至ニ候

仙台重き寺院江

殿様なし何寺何院と認可申候事

一筆致啓達候、寒冷ニ御座候得共弥御安康ニ御座候哉承度
奉存候、私無異罷有候、無音ニ付如斯ニ御座候、恐惶謹言

月日

寺院役者江殿

一筆申述候、寒冷ニ候得共弥御無異ニ候哉承度存候、我等無異儀居申候、恐惶謹言

月日

一芳札令披見候、示給過当之至ニ候、恐々謹言

中間衆江格通之時ハ平様ニ而通用可致候、乍然自筆を以通用兼而之信便者表書諸苗字美様ニ相認、中書宛名者片苗字美様ニ可認事

一筆致啓達候、甚暑之節ニ御座候得共弥御安康ニ被成御座候哉、土用中為御見廻如斯ニ御座候、恐惶謹言

月日

御状致拝見候、就暑中ニ被入御念被 仰聞忝次第二御座候、恐惶謹言

月日

何之誰様 格通宛名

伊誰様何之誰様と自筆ニ相認候儀ハ平常之通用たるへし、何之誰様と美様ニ認、中書ニ伊誰様と認候事ハ自筆向計ニ而格通取替しハ祐筆方披露留ニ計有之候

自筆ニ御安康或ハ御勇猛と入変り通用可致候、何れ先方謙尊して申来候ハ、夫々相応ニ返翰可申達候事、私拙子小子不佞等杯自筆可相認候事

前文之通、堂上方并披露状之分ハ表祐筆方披露留ニ有之候故、相洩らし自筆并直名ニ相認候分計書印候

冷泉前大納言様江如恒々奉申上候文意者別紙ニ有之略之訖一仲間衆家来家老役被申付及披露候節、為悦申遣候文面委細祐筆方披露留ニ有之候
宛書左ニ文意略す

何之誰殿

伊彈正

一御奉行以下江直書申遣候節ハ自筆と名元脇下江相認方ニ御先代様方被遊候事

一大番頭以下之屋鋪江直々之見廻、隣家たりとも難相成候、大番頭以上江者直見舞不苦

隆岩様御代、隣家松本出雲大番頭被 仰付候、以後初而御見舞ニ被為入候節、右松本出雲儀御入被成下難有仕合ニ奉存候旨御札ニ罷出、且ツ家来共御取扱無調法申上候由
段御様捨被成下度旨申上候由

松岩様御同道御在府被遊候砌ニ而、右出雲取次御懷守横
尾雄五郎相勤候よしの事

一文化元年五月三席分仲間江諸文通之格

一筆啓上仕候、貴札拝見仕候

人々御中 御報 様 御 恐惶謹言 御悅 御礼

御容体 御念 御座 御勇健 御事 被為入 忝仕合 可

申上 珍重之御事

一享保十八年四月、南部大膳太夫殿御通路被成度御相談相

濟候間、途中ニ而御家中下馬仕候様ニ可仕候事

一同席方申合候分、且ッ

隆岩様中村日向分御聞被遊御袖扣左之通

一先番麻上下裏打上下羽織着用之事

一夏ハ戾子肩衣着候儀裏打上下ニ准んす、且ッ裏打上下と

下とハ継候而も宜敷、麻上下之上江裏打袴ハ不都合之事

一御入部翌年戾斗目長袴元朝計

一元朝分三ヶ日麻上下

一正月五日麻上下

一正月十五日麻上下御入部、翌年ニ限り戾斗目

一五節句麻上下、但三月三日黒小袖紋付

一七月七日白帷子

一九月重陽色之小袖紋付、九日花色小袖紋付、御節俵中御
免本式之服付也

一六月朔日 八月朔日、麻上下白帷子

一二月朔日 御年直しの節ハ麻上下

一卯ノ日御祝儀麻上下

一六月十六日嘉祥之日、登城之節麻上下

一御暮麻上下

一御名代婦

御目見之節麻上下

但し追而登城ニ候共麻上下

一神社仏閣江 御名代并自分拝共ニ参詣、麻上下年始為御
礼之旧冬上府初而麻上下、登城之節裏打上下

一御参勤ニ付上府初而登城之節麻上下在所江之 御暇被下

候節茂麻上下

一御機嫌伺ニ上府始而登城之節、麻上下月番宅ニ而申上候
節者其年始可申上節計裏打上下

一 拝領物有之上府登城之節者麻上下御礼申上候節裏打上下

一 御慰御能被 仰付候節、先番羽織装束所江詰候者ハ裏打上下適宜ニよるへし

一 我等羽織ニ而平常

御機嫌窺ニ登城之節、尤羽織

一 玄猪之儀者 御入向之儀候へとも御祝儀ニ付、万一登城之節麻上下

駕籠供麻上下着候部

一 年始御規式江登城之節麻上下 但し其外共ニ同席衆始メ

御役ニ付親類方江越候節麻上下

一 五節句麻上下

一 卯ノ日御祝儀登城麻上下

一 神社 御名代麻上下

一 正月五日 一ノ宮江

御名代相勤帰府直々登城之節者旅装束、為年始五日相勤候節者

御名代帰之 御目見被 仰付候節麻上下

一 御下向之節中田々直々登城御礼申上候趣意を以旅装束ニ

而可然事ニ吟味相済候事

一 公方様御法会 御名代并自分拝共ニ麻上下

一 御霊屋 御廟江

御名代之節、尤 御法事之節

御名代 自分拝共ニ麻上下

一 御同所江自分罷出候節ハ御年始と御正忌日麻上下常々御月忌ニ者羽織

一 御官位御歛上府之登城 御入輿被 仰出、尤 御入輿

相済候 御歛ニ上府登城之節麻上下

一 御入輿為 御祝儀 御能見物御料理被下候節

右三ヶ条ニ准んじ重立候御歛登城之節ハ麻上下

一 家督無 御相違

上使を以被 仰渡候節、月番宅江御礼ヲ申上候節麻上下

一 継目 御礼登城之節麻上下

御役列之部

一 御一家 准御一家 御奉行 御一族 御家老 御一家御

一族之隠居御家老勤候者

大屋形様御老若年寄

御旗奉行 大番頭 大番頭格以上之隠居并三千石以上之輩

右者大番頭格以上

一御近習御用御申次着座大番頭

御部屋御用人大番頭相勤め候者之隠居之列

一大屋形様御用人江戸番頭出入司 御小姓組番頭 御小姓

頭 御申次 御鍵奉行 番頭格以上之隠居 御一家之惣

領 御一門之二男三男 御一家並之惣領 御一族之惣領

法眼法橋

右者番頭以上

一着座御医師 御家老惣領 若年寄惣領 御旗奉行惣領大

番頭惣領 御一家 御一族之二男三男 御徒小姓頭脇番

頭 御鷹匠頭 奥老

御部屋小姓頭 御城番 御町奉行 御祭祀奉行

御近習目附 御不断頭 御給主頭 御名懸頭 御旗元足

輕頭 公儀使 御郡奉行 御近習 御目付使番代々着座

代々御盃頂戴御番醫師御役目二付御召し出し隠居

御部屋御近習 江戸番組頭 御小姓組頭並御武頭御附人

御練合方吟味役 番頭格以上之惣領 御知行割奉行京都

御留主居 御金奉行 山林奉行 相去御足輕頭評定所御

役人 袖ヶ崎御屋鋪役 御証文預り主立 諸木御植方

御番醫師合詰所以上之格勤候者之隠居

右者詰所以上

遠州様御役人御取扱

一御家老 此方若年寄上列

一組頭中老 此方若年寄次列

一御用人 此方御申次次列

御小姓頭

一御勘定奉行 此方御召出次列

御目付 此方御武頭之次

一御本々 先輩次第

御近習

一ノ関役人御取扱

一御家老 此方奥老次之列

一用人 此方御名懸頭次列

一番頭寺社方本ノ小姓頭

此方評定所御役人次之列

一町奉行

此方江戸馬上次ノ列

目附

以上

一布衣之節、足袋決而不相成事

但病足ニ而用度事も候ハ、其節相届ケ可申候、部屋住

ニ而者不相成候事 御名代被 仰付服付布衣と申来

候節こふより註文申付候

扇子足袋御触之事

一御前江被召出訖度

御目見被 仰付候節、扇子者御次ニ抜き置可罷出候、披

露之輩も右之通ニ可致候

御通之 御目見仕、或者並居て居り一同之御礼申上候節

ハ側ニ拔置キ候様可仕候事、披露之輩も側ニ拔置候様ニ

可仕候事

一足袋者九月九日ハ三月晦日迄はき、四月朔日ハ九月八日

迄ハ御免之輩并御宮仕之御小姓者格別外者はき申間鋪事

但御数寄屋御囲ひ等ニ寄、御茶被下候節ハ格別之事

右之通礼式ニ候、茶其心得ニ可申事

一享保十四年摺蒔御触ノ事

一御城中并仙岳院ニ而摺蒔敷候義、草履はき不申ための儀
ニ候所御心得違ニ候哉、稀ニ者御はき被成候御方茂御座
候様ニ相聞得、右之訳ニ御座候間、重ねて被相扣可然候

事

一御参勤御下向之砌、中田江罷出候節 御左右江相扣候義、

毎度振れ合候ニ付、但木山城を以文化八年九月十三日御

発駕之砌、以来無振合吟味預り度旨御奉行江申談候所、

追々後藤孫兵衛申聞候ニハ已来

御参勤御下向共ニ何時も御前之御右之方江罷出候様吟味

之旨、同人を以申聞候、右之段向々江も首尾合ニ及候由

ニ申聞候

一公儀御用ニ付上下仕候者、御自身御精進日発足并ニ着仕

候儀不及遠慮候事

一御参勤御下向之代り合御精進日ニ無構事

一公儀御法事中ニ者発足着仕候儀、御当日ニハ遠慮致し、

其外ハ御法事中ニ而も発足着仕候儀不苦候

一 毎月八日 廿四日 廿七日 四月十七日 五月廿四日

十月十一日

一 公方様 御代々 御両親様 御年忌 御法事二付、鳴物

等被相止候節ハ只今迄之通詮議可相止候、右之外之御法事御年忌二付鳴物被相止候節ハ其御当日之外ハ御法事之内詮議仕り、新縄懸・新牢入拷問之両事者可相止候

但御法事之節ニ限り可為前条通之事

一 御悦事或者表事二付て鳴物被相止候節并御家中之事ニ

付、鳴物等被相止候節共ニ諸役人登城 御悦申上、亦者

奉窺 御機嫌候事ニ候ハ、

屋形様計り之御事ニ無御座、御一ヶ所様江申上候儀ニ

而茂詮議可相止候事

一 花押江丸点決而不相成候品者

屋形様御代々被相附候ニ付不相成候事

正月元日之部

一元日朝明六ツ時登城、染小袖半上下

御代替初而之節ハ熨斗目長襦袢、明半時大手御門番両側江会釈詰之御門番江も右同断、御武頭張番江会釈、御玄閥脇御小人目付江会釈、御玄閥鏡板脇御小人組頭帶刀ニ而詰居候江茂会釈

但御門番御小人目付等江住古者手を相出候処、近年仲間申合之上面ニ相直し候事

一 御広間四間江会釈、詰所兼而之通 御前退出、以後御客間之裏御縁合通用之仲間揃之上、同朋を以御目付呼何とも揃候段御奉行江可申達由ニ御目付江談候事

一 御太刀馬代御目録式枚重ね、上之芳章紙横折ニ而調様左之通

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

以上

名 実名

右御太刀御目録先番持参坊主を以詰所江為相出、右御太刀ハ手前合不相出候節ハ出入之物書ク留附、又者坊主之

内とか外二も出入之役人之内江先番之者方二而相頼可然
者在之候ハ、相頼、前広ニ御納戸ノ拝借相頼ミ置、元日
ニ先番罷出請取坊主を以前書之通詰所江持参

一 近年御太刀者先ツハ坊主を以御納戸ノ拝借之由を以詰
所江先番之者坊主を以遣ハし献上物之金代ハ上二而御
取替、追而御取立ニ相成品有之、奥方等ノ生ニ御肴等献
上者手前ノ指上候事

一 其身々御祝儀申上、御盃頂戴御引渡御相伴相濟下り之
節、年始廻勤可致事

一 仲間不揃、御奉行不揃、御宿老不揃、若年寄江戸詰之外
不揃、右三役病氣相達不動居輩江ハ廻勤不能候事

一片倉小十郎江茂相越候事

御規式之御次第

一 引揃之節、御太刀目録面々持参、御客之間表御縁通上之
方江引揃、二行三行ニも相揃、二段呼懸有之、御太刀ハ
御奉行江相渡し候事

一 表御対面所御闕之外、三疊目ニ御太刀目録、御奉行上之
四疊目ニ而御礼御会釈之上御闕之内江据り上座之

衆御勝手之方江着座、段々御左右江千鳥懸ニ着座、御闕
之外ノハ御一家・御一族両側江着座、外家柄御目見着
座、濟而宝蔵煮上ル屋形様御箸付被遊候節御一同頂戴
箸付

一 御土器御銚子上ル

御会釈之上御箇ノ四疊目江置、是御頂戴擲飯御肴頂戴、
則帰座

御会釈有之返盃、此節御盃御手自被相渡、御宮此三方江
上ケ持参見合御礼申上、帯刀本座江直り候、御闕外着
座之面々江御肴無之候事

一 御規式濟而献之引一同平伏、御柱之外江附キ退柳之間通
之節無御礼、御客之間之扣処江退く、御一家杯者御勝手
之方江引取候事

一元日ノ三日迄者詰之御門摺筵在之ニ付、仲間方一統侍四
人御門内江相入、草履取者御門外ニ相扣、雨天ニ候得ハ
草履取呼立傘相入候事

一 挟箱者詰之御門小門ノ相入、直々中之口相通溜りに為扣
候、小門ノ相入候儀指支無之訳、享保年中但木土佐ノ

觸有之定記為留候事

一摺筵之上、詰之御門内ハ不及申、右御門外敷出しの上ニ而も草履用候儀者難成訳、文化八年相濟候、右地移外敷出しの上ハ先年ゝ用來候所、前文之通文化八年ゝ難成訳ニ相成候事

一雨天ニ而摺筵取払ニ相成候ハ、草履取ゝ人・立傘役ゝ人相入候事

一急雨ニ而摺筵取払ニ相成不申内ニ候得者手傘相当之事ニ文化八年御小人目付江為欠合之往覆之卷ニ有之候事

一登城之節、矢倉拝有之候共、先番之者御式台江罷越、供頭等へ寸分之品たりとも指出し申候義難成御法之由、文化七年右様之義有之、御武頭ゝ不審之上相据候事

一御腰物等拝領之節、先番御式台ニ而、供之内江相渡し、其者携たつさへ御番所江右之訳相断申候上、脇江付添へ御門相出し候義不苦候事

一御式台鏡板御小人組頭等相詰候間、先キ番ニ相詰候者右江障り不申様ニ見合可申事

一先番相勤候者、主人御式台ゝ上り下り之節ハ跡江続キ候

節、正面ゝ上下指支無之候、端立ツ而之節ハ脇之小口ゝ通用可申事

一御在国之節、病氣等ニ而名代使者を以御祝詞申上候部一元日明六ツ時名代并副使登城、名前手札式枚持參坊主を以御目付・御徒目付江相出事

一口上書御奉行物書江指出し、太刀ハ前広坊主を以御納戸ゝ借り受候事

一名代之者習札有之候事

一御客之間御縁通江引揃相成候、太刀目錄者御申次江相渡し、御申次呼懸之上、柳之間呼出際ゝ二疊目江罷出、御奉行披露之

御目見、直々時計之間之方江引取、右使者前々ハ脇差帶御目見仕候所、寛政七年

桂山様御入部以後御差支相成候ニ付、品々相達置候処、文化九年以來相帶候義難成旨被 仰渡候事

一御読有之候隠居母儀内室御祝詞申上候分使者を以御肴一種指上候、手札を以御目付江相断候儀口上書等指出候義等前々同断

右者虎之間於張出 御目見被 仰付候事

右両条使者下宿之砌ハ物書方江下宿相届候上、下宿之事

一名代使者前々者十日程相過呼出之上、披露相濟候由之奉

書相渡され勝手次第在処致候様被 仰渡候処、文化十一

年之頃ハ留主居呼出之上御奉書被相渡候間、何時二而も

勝手次第罷下り候而も可然哉之事

右名代使者文化十四年二も呼出し無之、留主居呼出し二

而被相渡候処、前々ハ使者之者呼出し二而被相渡来候段

相達候処二、文政二年ハ前々之通名代使者呼出し被相渡

候事

一使者 御目見被 仰付候御礼、在処往覆之日積りを以詰

合使者を以申上候事

一同席方年始・歳暮・暑寒都而指定り候分、指出し報礼無

之筈ニ申合候、雖然直々被見廻候ハ、何時二而も報礼使

者を以申達候

一不時吉凶事之分ハ相互ニ報礼使者遣候事

二三席之内、両敬之分向之方ハ之使者延引ニ成候共、此方

より起して遣し可然事

一三席ハ起して遣候節ハ報礼ハ兼而使者を以申遣候事

一曆々之輩式台前横薄縁江取次番呼出し祝詞申置候義も有

之候ハ、一応者通り候様申述、押し而申置候ハ、承知致

し置キ報礼も相濟し、追々登米之例通以来之義承候義穩

便之取扱ニ而可然事

右者明和八年真坂二而右様之義有之、欠合之上相達候処、

儀礼之義ハ難成事ニ首尾合有之候事

一上府之上、元日当病等之節早速両月番江右之段相届ケさ

セ候、尤名代名前御宿老へ為相届候事

大門開キ候義并式台広間取継之扱、安永四年相改候部

一同席方御出之節、取扱者取次番兩人、横薄縁り相外し切

石迄罷出、先立重役之者薄縁へ罷出可申事

一御家老相越候節ハ取次番兩人出迎送り共ニ薄縁へ相出可

申事

但片倉小十郎江ハ凡而御家老並之取扱ニ相成候事

一大番頭格以上江ハ取次番一人板之間迄出迎送り之節ハ薄

縁迄相出可申事

右者大門為開可申事

一番頭格以上之取扱、大番頭格以上同様可為致、大門ハ開キ不申事

一詰所以上ハ歸り之節計、板之間迄送り可申事

但し板之間下之方末之方ニ相出させ可申事

一大番頭以上之平侍江ハ歸之節、板之間中程下之方ニ為座付候而送り可申事

一同席方々之使者歸之節、板之間中程上之方江座付為送可申事

一御徒使有之候節ハ縁通上之方へ為座付取次可申候、答相出候節ハ重役之者次肩衣ニ而出会相渡し可申候、且ツ茶菓子等為相出候事

一組士御番外等江ハ歸之節、重^{しけと}戸際迄為送可申事

一三席使者ハ重戸際迄為送可申候、家老使者ニ限り板之間迄送り可申事

門番所之例格

一仲間方御出之節、土下座制声相懸させ可申事

右制し声為相懸候義ハ享和元年申合之上、以来共ニ相据

り申候事

一御奉行始、詰所以上迄札席江相出居可申事

一大番頭格以上門為開可申事

右格以上之寺院江も同様之事

一元日々七日迄門為開可申事、其外五節句等ニ而も為開間敷候

右之内指合日有之候日ハ為相開申間鋪候事

但在処ニ而ハ正月三日野初開陣迄為開候、目付首尾定例之事

二日

一部屋住明六ツ時登城、献上物服付等其身同様御規式済而礼廻り右同断

但病氣等ニ而上府不相成候ハ、使者を以御太刀馬代献

上品々同断

一幼少中者正月五日出府被成候様ニと享保十三年定首尾相

成、五日上府、七日頃御祝詞申上 御目見有之候事

一初而之 御目見相濟候、以来年始・暑寒・諸御悦事申上候様願候而も、其翌年始而年始申上候節病氣等ニ而上府

成兼候ハ、何日ニ使者指出し可然哉之訳、十二月中相伺候得ハ正月二日使者を以申上候様指図有之候事

右使者在所爲相登、虎之間張出しニ而

御目見被 仰付、右御礼申上候義前ニ同断

一 先年ハ十五歳ニ相成候得者年頃ニも候間、爲見習之御規式江も罷出申度相願候、如願相済候得者二日之御規式江相出候、十五以上ニ而も柔弱ニ而者何時ニ而も願不相出宜敷事ニ相見得候事

一 幼少ニ而御規式江相出さる内者病氣等之節ハ勝手次第之事ニ而、十二月中指合之訳計御宿老江相届後、快氣之訳ハ達し届無之候而も宜敷事ニ候、御規式江出候節ハ其身同様ニ而快氣之段共ニ其時々相達候

一 江戸御大名方江年始状御奉行物書江頼、御便りを以爲相登候事

三日

一 御野初之節、上府之仲間方明前出宿、松森江出案内一騎打相勤、直々於御龍御機嫌相鏡、松森御昼江ハ御先ニ出屋形様御出を待上候事

但案内御立前茶并合羽箱乗物等 屋形様御出前今市橋元迄先江遣置候事

一 明六ツ前出宿、藤川橋元今段々席札相立銘々控場江入

一 屋形様御出前ニ乗物長柄茶并合羽箱之類一騎打行列ニ用ひ無之品者^者宅宇此丘尼板少し手前江相廻し置

屋形様御召し懸之内へ申上候処ニ而、仲間方番頭之立場江相揃

屋形様御下乗御宿老披露御意有之、御通り過ぎ筆頭之立場江揃候節ハ、供立ハ小姓・手鑑・草履取計り也、其余之同勢ハ銘々之扣場ニ居り

屋形様御通之節、手鑑并道具ハ相伏セ不申候事

但小姓通ハ仲間方後口六^{うし}、七間も隔扣居り可申事

一 一騎打初り之段、御目付・御徒目付ハ供頭方江指図有之候間、段々一騎打相初り候案内、茶屋之前坂ニ而惣体陣笠取ル

一 屋形様御前馬上ニ而手綱捌^{さば}鎧外し馬上之御礼申上、供者御礼なし 御休所東之方御幕張之御後口通江上り暫扣^{しばり}へ段々一騎打相済引揃へ相成 御目見、御奉行披露之御弁

當場江御先キへ可被相越由 御意有之退出

但し供通りハ御休所東之方江扣居、惣同勢道具等ハ右

東之方海道際江扣居り、是ハ乗物ニ而松森江相越候事

一案内御休場込ミ合候間、前以御同朋相頼先立相成方ニ取

計へ可然事ニ候

一松森御弁當場江出、同所坂下者下馬ニ而同勢此所江扣上

之御陣屋御門前ニ而、御門内侍三人・草履取忝人入扣

所江入候而、暫休足挟箱乗物者忝本松之下ニ置候事

一屋形様只今御召懸之段通達有之候節、脇差計ニ而御門脇

江出 屋形様御下乗 御意有之、御家老披露之御陣屋江

被為人、御跡江引続扣処江詰候事

一雉子献上者使者を以松森御昼所ニ而指上候事

一口上書御宿老宛名、乍然御宿老御供ニ無之節ハ御奉行宛

名ニ而相出候事

一雉子献上之口上書并在所之衆 御機嫌伺之口上書共ニ全

体御宿老披露ニ付、以来御宿老宛名ニ被相出候様ニと文

化十四年正月相済候事

一右雉子雌雄何ともわな鳥而指札雄鳥之背中ニ付候事

但雄鳥は人ニかたとる

上切そき二寸

四寸五分

五寸五分

右竹長サ壹尺小枝附壹寸五分ニ二寸

長サ五寸

雉子二名

右口上書献上之雉子共ニ御供之御奉行物書へ相出為相勤候事

一前々者藤或ハ葛藤^{くず}ニ而結候様ニ有之候処、近年染麻之縄

ニ而結候義も在之候事

一同所於 御昼ニ御相伴相済 屋形様御出立御跡江引続

直々登城 御帰城之御悦申上候事

但朝出ハ右登城迄立附羽織ニ而、登城前刀番麻上下ニ

而出ル

御弁当御規式御次第

一同席方出座

御目見今日之御悦申上御奉行披露之

御意有之、御右之方江着座、御左り之方江ハ御家老着座、

御長鮑上ル、御野初之為御悦儀雉子此節献上御奉行披露

之 御意有之御膳上ル

御入部之節計二汁五菜

御嘉例之焼雉子上之

御相伴同席方御家老御吸物御盃御肴被遣依 御意返上、

御指流同席方三疊目御家老、四疊目次二御山奉行、四疊

目御茶御菓子濟而一同二御礼申上、御奉行披露之

右御祝儀御規式濟而七五三之螺吹 御立二相成、御立之

節御幕之外江同席方相揃

御目見 御意有之、御奉行披露之 但此節者刀帶し候事

直々御跡江引続七北通御帰直々登城 御帰城之御悦申上

御奉行謁

一 御帰城之御悦部屋住者 御帰城前二麻上下二而登城

御機嫌相窺、先番供通共麻上下、且ッ病氣二而上府無之

候得ハ 御野陣江雉子献上なし、其身計使者を以 御休

所江 御機嫌相伺候

御帰城之節者父子共二使者を以御悦申上候事

右何れも口上書

一 御入部始而之御野初之節、熨斗目半上下常二染小袖也

一 宝曆十二年首尾渡写左二

御一門衆

覚

留主居江

一来正月三日御野初之節、御一門衆供廻リ之義前々之通可被相通候

一 御一門衆分於御弁當場二雉子二、前々之通献上可被申候

一 上府之御一門衆之内当病二而不被罷出候衆者前々之通以

使者御野陣江献上可被申候

一 ノ宮 御名代之衆者三日今齋戒二候間、使者を以雉子

献上可被申候

一 御一門衆之内病氣幼少二而上府不被致候衆者前々之通り

御野陣江以使者

御機嫌被相窺、雉子献上二不及候事

一 御山江御供之輩、從御城革衣

一 御一門衆并御宿老衆羽織

一 松森御弁當場江直々参候輩、羽織

一 御野陣首尾能相濟候御悦御一門衆 御帰城後麻上下二而

登城、御山并御弁當場今直々被罷出候衆ハ革衣羽織二而

罷出御悦可被申上候事

一一ノ宮 御名代之御一門衆使者を以可被申上候事

一御一門衆并息方病氣幼少之衆ハ御悦使者を以可被申上候事

右之通芦名豊前方方申来候条相達申候事

写

但天和以前者戲動と称し銘々思々之装束致候様ニ御首尾合有之候処、天和之頃ハ御野初と称し候様ニ用相成り、陣羽織等ニ而相働候様宝曆年中前文之通首尾合一統革衣ニ而相勤、文化九年 御入部、同十年初而之御野初二付諸事先規之通被 仰出候ニ付、勝手次第有合を以陣笠羽織等相用候様首尾渡、同十二年ニも陣羽織又者法皮等有合次第着用不苦、何ぞ新ニ用意致候義者相扣、有来之分ハ着用致し候様首尾渡り付、其以来陣羽織用供通勝手次第陣羽織・法皮等相用候事

文化十年正月

一宗秩公御野初二被為出候上、御不快ニ付 御帰城之御悦ハ不快ニ付、右御悦申上度以使者如斯と申御趣意ニ而被

仰上候事

一同席方服付陣羽織小袴、供廻服付野装束陣羽織股引、小姓頭供頭者陣羽織立附陣大小勝手次第相帯候事、小姓頭・供頭者自分紋附羽織相用候儀羅紗等ニ而も不苦候段文化十年首尾渡相成候事

一同席隠居内室方之使者

御帰城前罷出居 御帰城則口上書物書江相出相勤候

一一ノ宮江御名代被 仰付候、同席方二日ハ齋戒ニ付、御野初江不出使者を以雉子松森江指上 御帰城之御悦是又以使者を申上候事

四日

一年始ニ付大年寺瑞鳳寺江

御廟参之事

但刀番乗物脇共ニ麻上下

五日

一上使御野初御獲之雉子一拝領、為御礼登城部屋住拝領御礼同断、部屋住拝領者其身ハ申上候事

但刀番供廻り共ニ麻上下

一右雉子 上使令御先ニ取遣候ニ付、取次番受取台江載セ

置書院上之床令壺置目ニ置之

上意有之、則其所江出頂戴

上使取扱之部

伊達誰殿

附札ニ而相答

伊達誰殿

承者仕候何之誰○

明何日何時

上使何之誰相勤

申候事

何月何日

右之通申来候節、名元下江附札取次番名前判

一上使参着前、御城歟宅江歟遠見相附、尤何時頃可相勤由

為承置外、遠見足輕所江指置候事

一大門開き候事、門番兩人奥羽織袴股立ニ而下座

一門内江家老老人留主居相扣居候事

一式台横薄縁江切石与取次番兩人

一主人式台迄出迎直々先立

一上使刀持老人重戸際へ扣居

一上使書院上間江通、上使刀ハ次ノ間縁通刀掛ニ置之

上使少し進んで

上意相述蒙之上勝手江退

一熨斗・煙草盆・火鉢・菓子・茶、右畢而順々引之則主人

出坐御請之節

上使又以上々之方江進ミ、其節御受申上直々 上使引取

送之義前同断、且ツ相出候菓子不相用節ハ直ニ包ミ徒之

者江相渡候義も有之、相送り候家も有之、又者送り無之

家も有之、不同ニ相成居申候処、文化十年御目付令留付

を以内々不同之義相談も有之ニ付、迎茂相出候菓子ニ候

間一統相送候方可然旨申合之上、以来一統菓子ハ相送候

方ニ留主居之吟味相据候訳申聞置候事

一上使方用係り之者何れも麻上下

一上使引取、則月番之御奉行江出御札申上候事

但し昼四ツ時過ニ候得者登城御札申上候節、麻上下供

通常服

一上使相勤候御目付江太義之段使者申遣候事

但右使者裏打上下着用

心得二相成候部

一御規式ニ付登城之節者不及申、朝出仕之節ハ前夜時計茶道江申付置、近習通并一刻早諸事申付置候肝用之事

一上使有之候節ハ前日ハ表向之節者不及申、無油断申付置所々江足輕遠見申付見合支度、役々相揃置床飾并饗応之手段無滞申付置、待請候而門前江罷越下馬致候所ニ而、玄關上ニ出迎石壇中程江參候節、壇橋江下り鏡板ニ而中腰礼会釈、直々案内大書院縁通案内 上使縁通上之間江上座ニ着座、主人書院縁通中之間江入同処上之間闕外江相扣 上使上座ニ着座後、扇子取闕内ニ畳目之通江進ミ上意を蒙り勝手江引

御意之御請申上直々案内之手段同断、衛氣を沈取扱專一之事

一御規式之節并都而

屋形様御会釈被遊候節之御模様御気味はくり上不申様平伏之手段能々氣付可申事ニ候秘事也、御盃頂戴之節并返盃等之御御会釈被遊候間、心を付候様ニと 御先代様ハ

御傳被遊候事

23 公内袖扣下卷 181

袖扣下卷

一村通様御代 寛保三年

一所拝領之輩其所之百姓町人自分仕置之儀、戸結三十日を限り繩懸押し込三ヶ条之外日数之窄舍難成事ニ候処、去夏内藏殿百姓下宮村善四郎を日数ニ窄舍被申付候、近年繩懸等差支不申との義被及御聞不苦と被心得違候哉、向後右三ヶ条之外不被罷成候事、右ニ付家老中川伊兵衛仙府江被招呼同年十二月十日丹波宅江呼出し同人出会左之通

一伊達内藏殿百姓善四郎と申者、御目付江直訴申出候ニ付、御詮議被成候処、右善四郎先達而岩出山窄に日数七日被戒置候由申出候、窄舍申付候義地頭自分仕置ニ難成、百姓・町人日数之窄舍自分難被致義ニ在之候、依而近年繩懸等ハ差支不申との義御聞及、若窄舍茂不苦と被心得違候哉、向後者可被相扣由、内藏殿家来江先頃御町奉行申

談候事

右之通二而窄舍被 仰付候義御自分二者決而不罷成義二候間、此御時節別段之義を以不被及御沙汰由承り候前後之通申談候義候条、内藏殿江も御心得違御不念之義役人共不念之至二相聞得候間、右係り之家来共何様二か被仰付、内藏殿令其段御奉行中江可被 仰達事二御座候、内藏殿二も御不念之段何様二か可被相達事二御座候

十二月

右御書付伊兵衛二丹波方令相渡候二付、岩出山江茂申上、尤家老耄人被相登候様申下、大内惣右衛門登り、伊兵衛者川崎江廿一日罷越品々申上候由之所、将監殿二茂御登り不被成候而ハ罷成間敷と被申、十二日二被登、十三日丹波方へ御出内々相談被致、十四日孫兵衛方江将監殿御出 御吟味被成候処、内藏殿二も御登被成御不念被相達可然、尤其節用番家老役目被召放閉門被 仰付候而御仕置被成被 仰達候筈二御内々相済、孫兵衛令之書付共二左二留置

村通様御登之義八十七日夜通、十八日八ツ時御出立、

十九日朝五ツ前程二御上着被遊候事

一将監殿御遠慮御家事二付被相達候事

元禄拾四年八月

一各様御知行所百姓・町人死罪之義、為御自分不被相行筈二御座候処、各様并大身之者別段之様二相心得候哉自分仕置申付候者も在之様子二而、寛永年中被 仰出候趣御国中一扁二相守候様元禄七年被 仰渡候、併先年者各様方之外諸給人と計被 仰渡候哉

貞山様御代令引続元禄七年迄死罪共二御自分御仕置被成来候、死罪之義ハ不輕義二御座候間、御心得違を以御自分被相行候義二無御座候条御存念御願被成度思召二候得とも被 仰出候儀と御異儀被 仰上候段、当時如何と何様被相守被成御座輕罪者御自分被 仰付候事と何様御心得被成御座候処二、御郡司方二而ハ一式百姓・町人之義ハ各様方御知行之内も御自分不被 仰付筈と相心得候様二在之成悪キ儀共御座候事輕候共、对 公儀表御制法之類、且ツ又他之知行江引張之爭論等ハ前々令御郡司方二而首尾仕候条、未々を以無御異儀思召候、各様方

御知行所肝入俟断立替り等之義御手前二而被 仰付、其
外之義も御自分御仕置被成 公儀御用指支無御座候間、
御知行所一扁之百姓・町人他江引張無之分ハ各様方二而
御自分被 仰付様二被成度、古来死罪共二御自分二被
仰付来候所二自今一円各様方二而輕罪等迄御仕置キ不被
仰付、御郡司方二而計諸式相濟候事と百姓・町人相心得
候ハ、御知行所之百姓・町人領主々々之下知を輕し諸事
被 仰付候義違背可仕候、然ル時者色々申分も可相出義
無扨思召候条、死罪之外者前々之通諸仕置キ御自分二被
仰付度思召候旨承知仕候吟味仕候通左ニ申上候
一惣而罪之者之義ハ輕罪共二委細御吟味被遊、近年者江戸
之御格式をも被聞召合別而御念被為入候二付、死付等も
先年之御模様とハ品違申候、前々ハ死罪之外者評定所二
而何^茂吟味仕御仕置相濟申御格二御座候故、評定所二而
先例も取合委細吟味之上御仕置之首尾仕候得共、以後相
達 御耳不応 思召義も在之、追而重く御仕置被 仰付
候者も御座候、各様方二而ハ 上之御格御不案内ニも御
座候而被 仰付候ハ、評定所之御仕置と相違仕、或者死

罪二可罷成者追放ニ罷成、又者一郡一村之追放之者^茂他
国追放ニ成候事も可在御座哉、然ハ御領内之御仕置不同
二相成候条死罪之外も御自分之御仕置二被 仰付候格ニ
者難相定義と吟味仕候、且ツ又各様方御自分二被 仰付
義末々相達 御耳不応 思召儀など之候而ハ、上二
も被遊にくき儀難計奉存候、左候得者各様御為ニ^茂不可
然義と奉存候

一各様方死罪之外御自分御仕置罷成御仕置不同之義も御座
候而者御家中之者之仕置と違百姓・町人之御仕置御領内
区々ニ罷成候義ハ、他国江之聞得も不可然^{畢境}御為不宜
義と奉存候、偕又各様方ニハ 御先代ハ元禄七年迄死罪
迄御自分二被 仰付候由二御座候得とも、近年者 公儀
二而別而微細ニ御吟味御座候故諸国共二御模様替り申由
ニ御座候、勿論此方二而ハ一入被為入 御念、從 御先
代被遊来候御仕置をも諸事江戸之御仕置ニ 准し被相改
候条、たとへ只今迄御自分二被 仰付候義ニても此段被
相改候筋と奉存候、況や元禄七年二改而被 仰出候趣を
以刑罪をも御自分之御仕置二不被 仰付格ニ罷成候処、

此度又以死罪之外者御自分之御仕置ニ被 仰付候様罷成
義當時不相応之様ニ奉存候

一 肝入・検断并御用相勤候者役目申付候義、肝入・検断之
義ハ御郡方ニ而吟味仕各様方御用人迄も相通指支於無之
者申付候様首尾可仕候、其外之御用達之者当座之義申付
候迄承り合候而申付候と在之義ハ指支申義も可在之候
間、以後成共申通地頭方ニ達而障り有之者ハ致吟味差除
候様仕、可然と吟味仕候

右之通吟味仕候而、此旨何れも様江被 仰通、御尤ニ奉
存候、以上

八月七日

布施和泉

遠山帶刀

富田壱岐

津田民部

中村日向

大和様

安房様

右孫兵衛ハ將監殿江相渡し候書付之由也

一 伊達内藏殿百姓玉造郡下宮村善四郎御目付江致直訴候ニ
付被遂御詮議候処ニ、去年岩出山自分牢に七日戒置候旨
申出候百姓町人地頭自分仕置候義ハ戸結縄懸押し込三ヶ
条之外ハ難成事ニ候間、向後右三ヶ条之外者可相扣由、
御町奉行右留主居之者ニ申渡候由申聞被致承知候、右牢
舍申付候義ハ内藏殿江も不申聞候而、相入家老役人被承
届候所ニ、近年縄懸等指支不申との義及承申候而、右江
泥^{なつみ}牢舍申付候義も指支不申義と心得違、伊達將監殿江も
不申聞家老伊藤五兵衛指図仕り、右善四郎牢舍申付候段
申聞候御格と在之義心得違、其上内藏殿將監殿江茂不申
聞指図仕、日数之牢舍申付候段重キ不届至極ニ御座候ニ
付、右家老伊藤五兵衛義役目召放閉門被申付候、依之内
藏殿ニも被致上府自分遠慮相達被申候、此段私親類ニ付
相達申候、以上

十二月十九日

津田丹波

一 伊達將監殿義元文元年内藏殿用事被承候様被 仰付、引
続右用事被承居候処ニ、此度内藏殿家老伊藤五兵衛義
品々在之候而、内藏殿ハ仕置被申付相達被申候、右用事

將監殿江も不申聞候得共、用事被承候様二被 仰付置候
義故被致上府自分遠慮相達被申候、以上

十二月十九日

津田丹波

一村通様將監殿二も御遠慮被成、広間之戸^{はんけん}半間明ヶ候而、
明り障子立置候、右二而能候由將監殿江孫兵衛咄し在之
候由二而被遊候事

伊達内藏殿

貴体様百姓玉造郡下宮村善四郎義去年御自分窄江被戒旨申
出候、御自分仕置之義ハ格も在之義二御座候処、御家来共
心得違貴体様并伊達將監殿江も不申達、窄舍申付候家老伊
藤五兵衛役目召放し閉門被 仰付候、仍而貴体様二も御自
分遠慮被成候段上府被成被相達、此御時節二付御沙汰相濟
候義二候間不及御遠慮二候、御家老御仕置被 仰付候義御
尤之義承知仕候、江戸江も為申登相達 御耳候様可仕候

伊達將監殿

此度伊達内藏殿家老伊藤五兵衛義品々在之内藏合仕置被成
候段被相達候、右用事貴体様江茂不申達候得共、内藏殿用
事御聞被成候様被 仰付置候義故、上府被成御自分遠慮被

成候段被相達候、此御時節二付御沙汰相濟候義、且ッ貴体
様江ハ不申達事二御座候間、不及御遠慮二候江戸江も為申
登相達 御耳候様可仕候

右之通留主居之者江申上候様二と物書喜左衛門申候由、且
ッ同人申聞候者内藏様・將監様二も対馬宅江御札御出被成
候様可申上由、仍而罷歸り候而申上候二付將監殿御同道二
而対馬宅江御出被成相濟、丹波宅江も御立寄御礼被 仰上、
廿日御精進日二付而、廿一朝八ッ時之御供揃二而御下向
被遊、將監殿二而ハ廿日二直々御下り被成候由品々在り略
訖

一寛保四年三月五日改元延享二成

宗村君

屋形様御在江戸四月 御発駕

御入部五月朔日御着城

同年二月九日留主居之者江被呼出仲間相揃、同十一日登
城之処御目付山下三郎兵衛江相詰候段相届候由、御徒目
付佐藤右傳様如例虎之間張り出しへ引揃、於御客之間遠

藤対馬直々左之通申渡し、御目付山下三郎兵衛呼懸ニ而何れも出候由也

御一門衆

一 享保廿一年今先規之通御在國中廿日宛之御番被相勤進退相応人馬等被召連被申様ニ可被 仰付之處、御用捨被成遣猶更儉約を被守御奉公可被心懸旨品々被 仰付、其以來年久敷義ニ在之、且ツ 御代替ニ御座候条如先規之人馬等も召連被申候様可被 仰付候得共、此段者先以引続つキ御用捨被成遣候間、只今迄之通り弥可被心懸候、偕さて又年來御番をも不被相勤候而ハ本意ニも在之間敷、仍而当夏 御暇被 仰出御下向被遊候ハ、廿日宛之御番被 仰付旨

御意ニ御座候

御番割等之義ハ追而可被 仰出候

一 御番之外、御帰国年始御参府共ニ可被致上府候

一 息方上府之義ハ只今迄之通可被相心得候

豎紙ニ書マり候

右御書付物書服部兵太郎并清野半藏今相渡、右御答・御

礼共ニ以使者可被申上由、且ツ使者之趣意ハ御礼を主に御答も右使者可被指出由、尤口上書両通ニ致候様申聞候事

一 所拝領之輩、其所之百姓・町人自分仕置之義戸結三拾日を限り縄懸押し込三ヶ条之外、日数之牽舍者難成事ニ候条、向後右三ヶ条ハ自分仕置仕不苦旨旧冬於評定所被仰渡趣承知仕候、右ニ付相伺候趣

一 大肝入・村肝入・検断ニ而茂拝領之所ニ住居仕候ハ、右三ヶ条之通者自分仕置申付候而も苦ケ間敷候哉之事

一 町場之者ハ他之地形計持候者ニ而も拝領町場ニ住居仕候ハ、自分仕置仕苦ケ間敷候哉之事

一 大肝入も拝領町場ニ罷在候ハ、手前知行ハ所持不仕候共右三ヶ条之自分仕置仕苦ケ間敷候哉之事

一 大肝入・村肝入・検断共ニ自分仕置キ仕候節者何方江も断届ニ及申間敷候哉之事

右之品々御吟味御差図被成下度相伺候様ニ在所今申来候間、此段相伺申候、以上

内蔵留主居

四月廿四日

落合清左衛門

右之通内々相伺候様ニと御奉行衆杯、氏家九十郎殿江咄し
在之、評定所御役人中吟味ニ而下書氏家殿被遣候百姓・町
人仕置之義元録年中 大和様・安房様御取合在之、此後
一円ニ仕置等相成不申様ニ成申候処、享保廿一年所拝領之
御方右三ヶ条者御仕置被成候而能御座候段御吟味相濟候得
共、御評定所江被 仰渡候ハ、右御仕置等之義承候者在之
候ハ、向寄ニ相通候様ニと計り被 仰渡、此方様ニ而去年
中百姓日数窄舍被 仰付候品々ニ付御手前ニ而伊藤五兵衛
役目被召放閉門被 仰付
殿様ニも御上府御遠慮被相伺候御遠慮ニ不及候由被 仰渡
候、偕又御奉行衆御訖度御触等ニ而も被相出候様被成候
ハ、可然由、評定所相達被申候処、先年無訖度と被 仰
渡候間、此度御触被相出悪く候間、誰力相伺候様対馬殿被
申候、依之私ニ相伺候様ニと氏家殿右之通り下書被遣候、
矢内清兵衛殿・中川伊兵衛殿御登之節御相談申候処相伺可
然由ニ付、右之通相伺書氏家殿江遣候事
一所拝領之輩、其所百姓・町人自分仕置之義四月廿四日日

附ニ而御評定所江相出置候処、御吟味之上御奉行衆江相
出候様ニと氏家九十郎殿御申来、四月廿九日遠藤対馬
殿江相出置候処左之通申来候事

一申談候義有之候間、御家老之内宅江被相出候様可被致対
馬被申候、以上

六月三日

内藏殿

堀口喜左衛門

御留主居

挨拶相応

右之通申来候ニ付、矢内清兵衛三日ニ罷出候処、最前御評
定所江被相達候、御在所御自分御仕置之義左之通ニ御座候、
御留主居衆を以被相達候処、御仕置之義ニ御座候間、御家
老江申談候様ニと対馬被申候由、堀口喜左衛門殿を以左之
通御書付被相渡候、尤 御仲間様中御家老江も相通候様ニ
と対馬殿御被 仰渡候間、其御心得御承知可被成候

覚

一戸詰 日数三十拾日を限り

一縄懸

一押し込

右之通所拝領之衆、其所之百姓・町人仕置申付候義不苦候事

但し町場之者ハ縦他之地形持候者ニ候共、拝領町場ニ住居之事ニ候間、自分仕置申付、町場外村住居仕候者ハ自分仕置指扣可申事

一村肝入・検断ハ自分仕置申付候以後其所之御代官・定役人・大肝入江仮役申付候ためニ計り相届ケ可申候事

一大肝入も拝領町場ニ居候者計前廉御代官方江仮役等吟味仕候上、戸結・押込之式ケ条ニ限自分仕置不苦候事以上

右之通ニ御座候、御名元無之分ハ御名元御書付何れも様御受判を以此者ニ被相廻可被下候、以上

六月四日

矢内清兵衛

大和様御家老始壱宇

一御用之義候間宅江被罷出候様ニと対馬被申候、以上

三月六日

安房殿

御留主居衆

内蔵殿

御留主居衆

堀口喜左衛門

右ニ付罷出候所、堀口喜左衛門殿をもつて対馬殿へ御奉書
宅通宿繼御判紙共ニ被相渡候、御受者宿繼ニ而、御札者御家老御使者也、略訖

一筆致啓上候

姫君様御産之節御覧之役被 仰付旨

御意ニ御座候、恐惶謹言

三月六日

内蔵殿

遠藤対馬

別而啓上仕候、御登被成候時節之義ハ五月末江戸御着ニ可被御心懸候由被 仰出候、以上

三月六日

内蔵様

遠藤対馬

一右御札として中川伊兵衛八日ニ被相登候、同夕後藤孫兵

衛宅江罷出相勤候由之事

内藏殿留主居江

伊達内藏殿

口上

姫君様御安産之節、御^{きよしん}籠之役被 仰付難在仕合冥加至極ニ
奉存候、右御礼為可申上以使者如斯ニ御座候、此旨各御心
得頼入存候以上

三月八日

伊達内藏

遠藤対馬様

後藤孫兵衛様

黒沢要人様

但し御^{やたけの}籠之役とハ矢竹之役と言々

智岩様御十七歳之年三月寛保四年也

覚

姫君様御懷胎之御様子ニ付御着帯被遊候处、此間^{きしんせんあん}橘宗仙院
御吟味之上御懷胎不被遊候由ニ被 仰上候、依之 御産御
用被 仰付候輩登り指扣候様被 仰出候旨江戸へ申来候
間、御登御指扣被成候様ニと奉存候事

右御礼之義取合候处、涌谷・亘理へ在所へ使者を以申上
候由之处、御上府中ニ有之事故直々御礼ニ御出被成候様ニ
と成要人宅江出候、御曹司様江御在国ニ候得共不申上候
事

御幼少ニ付御用事伊達将監殿被承候様被 仰付置候所、当
拾七歳ニ御成被成候間、将監殿御用被承候義被相除候旨被
仰出候条、左様ニ御心得可被成候、以上

将監殿留主居江

伊達将監殿

伊達内藏殿幼少ニ付用事入念被承候様被 仰付置候所、内
藏殿当拾七歳ニ被罷成候ニ付用事被承候義も御遠慮之段被
相達候ニ付相達 御耳ニ候所用事被承候儀被相除候旨被
仰出候、其段 内藏殿江も申達候、其御心得可被成候、以
上

寛保四年五月十七日御双方江右之通被 仰渡為御答留主居
孫兵衛宅江相出申達候事

一御用之儀御座候間、明十九日九ツ時 御登城被成候様相通可申由、後藤孫兵衛方の申来候間、其御心得可被成候、以上

五月十八日

内蔵様

津田丹波

御挨拶済

右二付十九日御登城被成候処、御定目被相渡候事

但し御定目之御文意者別紙袖扣相印候二付、此所江相略候事

一 覚 彈正殿留主居へ

去年中御在所江御目付被相下候節被遣候 御朱印之内二家中仕置之義并重役大方之加増等ハ可被相伺由被仰出候処、御目付被相揚候上ハ此以後御伺及ヒ申間敷哉之段承知仕候、御目付も被相揚候間御窺二及不申候事

延享三年二月廿八日

一將軍宣下せんげ為御祝義去廿一日御老中方御招請御能被仰付、伊達安房殿・後藤孫兵衛始、御家来江本多中務太夫

殿・松平能登守殿御盃被下、諸事御首尾能御饗應相済、御帰以後

屋形様為御札中務太夫殿・能登守殿江御出御機嫌能被遊御帰候、但し外略す

將軍宣下せんげ御悦等申上候為後年相印申候、先年申上振相知不申例引二小姓頭方二而迷動致候義二付相記候事

元文四年四月

一御当代様御幼少中將監殿石見御家事之節、伺後足輕以下青地合羽着用停止二被成候事

右者上二而も御足輕以下着用被相留置付まか、当方二而も差支候方と御吟味之上被相留候事

一將監殿当方目付証文之案紙夫々不宣文意在之候二付、被相直へき哉と取上熟覽被致候由、乍然加筆逆者不被致由之事

一安永三年家中縁組之例在之事

一村通様享保十二年八月十一日御誕生被遊候二付、廿日御一重之御祝義之節役付并着座格列諸寺院并諸組付迄

御目見被 仰付候、御代々御的例在之候事てきれい

一同拾六年十一月十五日

村通様御袴召初之事、且ツ同二拾壹年

村通様御繼目之節御懷守に御膳番列被下候例有之候事

但し御五ツ之時御袴御召初被遊候事

一宝曆三年冷泉様御官位二付、御進物之例在之候事

一同七年大内意安上京二付、冷泉様江御進物之例在之候事

一同十一年相伴通并役目付江御会釈振被 仰出候事

一元文三年三月隱居願家中共指出申候義、子共拾七歳前、

且ツ六拾歳前停止之事

但し病氣之次第二吟味可申付 御先代様御例之事

一同四年名代奉公、其子拾七歳前可為無用次第之事、且ツ

病身二而名代奉公相願候義難治症者格別常体者難成候

例、又ハ病氣薬用中二而も可成者勤仕可申付事

但し当番用難相勤候ハ、様子書医師証状召上候事

一無僕二付医者江薬取二參候義ハ不苦、其外病中出行停止

たり、雖然鬱症うつしやう二而出行之節生之方二候ハ、病症医師可

相達事

一寛保三年三月家老書付をもつて何れへ成共為申渡候節ハ
目付役方二而書付読渡し可申付候事

智岩様寛保二年御十五歳二而御額江御眉入御座留被遊、
当年始而 御參府江御見送二中田江被為出、同三年拾六
歳二而御額髪被取候事

一安永六年正月廿五日精進日二鉄炮打候義そはなし二而
も、又筒つゐばう二而も為停止でうじ、且ツ家中前二而玉入相禁候事

但し寛保三年十二月廿五日来年御並方を

智巖様御十六歳二被為成候、極月御届被遊候事

一安永五年宇和野甚助江永代席吟味之事

一同年目黒丈左衛門江知行被返下候例、同年於佐沼おみよ

鉄漿初二付江月院様御筆親被相頼進物之例

一同四年八幡御神事二付鮎相備候例

一七代村則 大力彈正内蔵大丞

明和二年御誕生御治世拾九年、御寿三拾七之御間

御拝領物并御家中御取立略

一安永六年三月十五日御元服之節品々被 仰立御人初御懷
守皆川市郎・石田助右衛門御加恩被成下、且ツ又矢内清

兵衛御人初二付御同断二付、外記之助江父清兵衛御人初二付思召被為出、右外記之助江御高三百文被返下候事

一同拾年二月五日

村則公御拾七歳二被為成

御繁榮之御勤被遊候二付、御懷守皆川市郎品々被仰立御召之染御小袖被下置事

但し品々略記

一 村則公安永七年十二月廿五月初而御年始二御登之事

但し寛政八年 御麻上下御拝領二付、相伴通令御礼受

被遊候旧例在り

一 寛政十二年二月九日

隆岩様御事同年御十七歳

宗親様 鉄五郎様御男作御元服

御父子様御書院江御出座二而御刀被為進候御例之事

但し鉄五郎様御一ツ御不足二而御拾六歳二被為成候事

一 野初之節家老江自分龍相免古例之事

但し御当代御不如意二被遊御座御一生之御内唯御一度

祐定之御腰物鮫鞘八角之御鐔一腰御拵被遊候由也

一家中末期願昼夜何時二不限可為相出、且ツ子共奉公之者并目見相濟候者ハ末期願相出候二不及、病死直々可為相配事

一 代替之節、家中由諸書可為召上候事

一天明二年他国飛脚并仮手形引替之限日申渡無品延引之者仕置申付候古例有之事

一座之間指支候節ハ於書院出仕札相受候古例之事

但し寛政三年五月八日玉造郡御代官安原甚兵衛江於書

院出会引両之紋付帷子被下候例在り

一 野初之節、責子奉行平侍目見、脇礼苗字共二名披露之節面可致候事不及会釈事

一 老女役申付させ候節ハ奥用人相附、於客之間家老月番申

渡候事

但し非番之家老立合可申候事

一家老役申付候節、其者方二而同席方并京都迄為知申上候

事

一 五拾歳以上之者家督養子相出候例

一 仙府隣家たりとも大番頭以下江八見舞不致候事

但し役替ニ而大番頭以上ニ相成候ハ、見廻之例

一在仙中廻勤先ニ而泊り候義ハ難相成古例之御伝在り、先
年川崎織部殿江酒相出候節沈醉被致候而、竟ニ酔臥被成
夜を被明候砌

宗秩様 義監様御揃

御在府中ニ付從

宗秩様御教諭被仰進、早朝之御見廻被成候御銘ニ被成候
事

但御兄弟之御間故、左様ニ被成進候御趣意尤ニ被仰進

候御伝之事

一上江戸之節供中江申渡候旧例之事

但し目付役ニ在之候事

一安永六年横山喜平太と申者被仰立、知行割替申付候古例
之事

一足輕組付たりとも存慮等申上候ハ取上げ相用候而、其文

意紙面印府御長掉江

御先代様御仕廻被遊候古例在之、印府長掉ニ被相入在之
候事

但し御直御始末之御傳在り印府長掉者鑑共ニ直ニ始末
印府之例也

一御先代様之重キ御書附并要害ニ付普請願ハ不及申城
屏櫓門 普請手入等之節ハ直名願ニ而相出し、且つ願書
指図等申来候ハ、印府長掉江相仕舞候事

一宗秩様文政年中御上江戸被仰蒙候節御直筆ニ而御袖扣被
遊大方堅張四冊御認被遊候、御直留御印府御長掉江御入
被遊候而、御用之節ハ御直御出し入被遊候

義監様御上江戸被遊候節御書入被遊候義御祐筆ニ被 仰
付候節、為御覽之右御直留被遊御上江戸前被相至候而

宗秩様之御直伝も被遊候事

一安永四年村則様御部屋江御移し被遊、同七年初而

御名代ニ御野初江御出之例有り、且ツ此節御部御番頭・
御懷守・御小姓等江文通之義被 仰付例も在之候事

当年松窓寺始而御目見被 仰付、裏打御上下ニ而被為出

御盃被遣候節、請山之祝義ニ盃を遣と 御意被遊頂戴返

盃済候ハ、料理遣と御会釈被遊候事

一同年古川辺江御出馬之例在り

一屋形様御出馬之節、親類之内相頼候例文政五年九月例在り

但し同年親類遠藤大藏御近習御申次相勤候節相頼、前

以罷越居内外補理方承合候別紙袖扣二印候事

一同三年実相寺輪番二付

御目見被 仰付候例在り、且ツ実相寺・祥光寺・満願寺

右三ヶ寺江不時目見并請山等二付申付候節ハ何時二而も

麻上下二而出座取扱之義別紙袖扣二在之候事

一天明二年

村通公 村則公 実相寺江大盤若転読二付被為入候御例

在之候事

一正徳五年鶴打上候者賞しの例有之候事

但享保七年

大之助様御下帶召初御祝義有之候事

一享保十六年十二月廿六日

清鏡院様御隠居所江御移之事

同二十年改元文四月十八日御三歳

一兵力様御髪置之例

同十六年十一月十五日御五ツ

一村通様御袴召初之例在之候事

一同年四月八日大之助様川崎江御移被成候例在之候事

一元文四年隠居願并名代奉公退役願相出候格、且ツ小姓頭

并奥用人・膳番等之役者退役等相出候砌者先以内覧二相

入候上ニ表立願書順を以相出、無異義候ハ、退役申付、

且ツ応時宜候而近習向之義ハ為申付候例手元方御先例在

り

一宗秩様御代御膳番菅谷七郎右衛門勤仕中退役願書直々順

を以小姓頭江相願相出候二付、從 宗秩様我を見捨候存

慮二候哉と御酒盛之節、御直々先キ二御しかり被遊後二

御さとし被遊難在 御意被成下、全体御先例為御聴被遊

候御伝之事

一御先代様御代々御懷守之義ハ御直思召二而被 仰付、表

方吟味二計二不相成 御直 御工風被遊候由上二而も

貞山様御代々御直思召を以被 仰付候二付、三河守様江

從

貞山様被相附 千代松様江

義山様被相付如形御法ニ付進退ニ役頭吟味ニ不及

御直ニ被遊候御手元御法例之御伝ニ被遊御座候由、且ッ

大力方江相附候小姓^茂折入被 仰付候事ニ從 宗秩様御

伝被遊候事

一御先代様御役替被 仰付候節、近習之義ハ役頭吟味之

上 思召相伺候上ニ外不相成、且ッ役替等都而家老并小

姓頭直々罷出外様共ニ 思召奉窺候御法令之由、是又

御直伝被遊候事

附り役替之義ハ存慮を以申付、且増減^{増減(まへり)}ニ付申付候事ハ

格別乱リニ指替申間敷御伝之事

一八代泰親^{やすちか} 後改宗秩^{むねきよ}

大力内蔵彈正讃岐^{さぬき}

御治世治四拾六ヶ年、御寿六拾三歳御拝領物并御家中御

取立等表方之留ニ在之略訖

一天明三年御誕生廿日御一重ニ付御宮参并御家中役付并諸

寺院組付迄 御目見被 仰付候義略訖

但し御宮参御三才之節、御先代様被遊候御例

一同五年御髮置、同七年御袴召初、且ッ御下帶召初等略訖

一寛政八年御元服、同拾年御額江御角御袖留、同十二年御

男作被遊候御祝義等表記録ニ在略訖

一御人初御懷守等御称拳事、都而表記録ニ在り、尤首尾能

相勤余役江被相廻候義略之訖

一天保三年正月廿一日手嶋雄三郎御軍用金五百切献上ニ付

品々被 仰渡、平景盛^{たへのかげもり}之御刀御拵^{こしらへ}ニ而御下緒^{さけ}付同人江被

下置候事

但右御金五百切御軍用御備在之候間、弥御備相立居候

事

一御代替之節ハ役々相預候御道具都而御覧相成候御例之事

一上ニ而ハ御軍用金并御当用金迄御覧ニ相入候由之事

一文化三年下一栗村白井十太郎御取立、且ッ同人方江

御先代様并御連枝被為入候御旧例在之候事

但奥御用人菅空之丞御膳番ニ而菅直人相詰候由、白井

萬吉申伝候事略之訖

但し御膳等も指上候よしや

文政二年三月十四日

一家業人家督無之末期ニ至リ急病養子相願候節、少も其業
ニ携候者相願候ハ、格別一円其道ニ不入候者者吟味之上
可申付御例申出在之候事

天明六年四月廿八日

一松村七右衛門三拾ヶ年以上物書相勤候二付、加増之例在
之候事

一同年田村左京太夫様カミ在在所道法并知行高先鍵道具・駕籠
看板・押工看板等御望申来候事

一同八年永井丹後年始取扱之事

一明和二年在所要害野場川拝領之書立表留ニ在之候事

一同年沼川上ノ野場書上同断也

一寛政十三年正月廿日村則公御卒去被遊候節 御位牌実相

寺江被為入候砌、御人初御小姓中嶋又三郎御看経被為出

御渡御守被 仰付御供也

一寛政二年四月二日梨崎喜栄弟子取立ニ付上地之知行為合

力之被返下、且ツ五分一催合并手伝之三ヶ条弟子取立中

免許之例在之事

附十徳免許ノ例徒組茶道二候共祈祷方并蔵用申付候節

八十徳 御先代様カミ御免許被遊候、勿論茶道江名被下
候事

御先代様思召を以被下候事

一寛政九年四月廿九日真坂辺之百姓集会シノヘ噪立候二付

村則様御出馬御備被遊候事

但し 宗秩様御拾四歳御振袖被為召御出馬被遊、六拾

人町出放川原御備迄被為出候品々同年表留ニ在之候事

但御陣羽織被為召御陣大小御支度御広間上之間ニ而被

遊、大御門鐘御出立御相図ニ被仰付、御供何とも法皮

御供也

一同九年宗秩様 御召馬ニ米倉秀吉并本町清左衛門献上例

在之事

一同年梨崎喜栄江御加増被下候事

一元文五年家中子共角入男作家督並等目見之古例之事

一宝曆四年 御安産之節、満願寺并楊泉院江

御目見被 仰付候古例之事

同十四年

一屋形様御出馬二付、御鷹野并鷹迄献上之古例在之候事

寛政十年

一鉄五郎様・源九郎様御兵術之御師範千葉伊右衛門江被仰付、同人方江御酒等被下候義御部屋方御番頭始末二相成候例在之事

同年

一式部殿江中嶋十郎殿様之懸合在之候事

享和三年三月廿八日

一宗秩様御守役齊藤新十郎江鉄五郎様・源九郎様御附人二被相頼、御料理之上竹二雀御紋付御上下被下候御例在之候事

但し高役之下役被 仰付候節者被相頼候と被 仰付御先格之事

一文化元年六月三日満願寺於書院始而 御目見被 仰付候砌、御上下二而御出座月番披露会釈済而盃銚子出ル、重而満願寺呼出候節酌之節請山之祝義二盃を遣スト被遊平伏盃遣ス、反盃済而料理出ト被遊平伏、且ツ肴も遣候事但し南障子江会釈之上退座成ハ重而会釈二而盃江出也

一九代義監 大力内蔵彈正

御治世五年、御寿三拾八歳

一文化六年御誕生被遊廿日御一重之御祝義 御宮参并役目付列格并諸寺院組付等迄 御目見被 仰付候義略之訖一同八年御髪置、同十年御袴召初、且ツ御下帶召初略之訖但し御下帶ハ紅白と御二色也

邦義君様に

一文政三年始而 御拾二歳之時也

御目見九月朔日二被遊、貞行之御刀御拝領之数之札在り右御刀天保拾年御拵之俣二而織部様御出之節被進候事同四年御十三歳

一御元服之節、因州景長御刀御拝領被遊、且ツ義ノ御一字御拝領被遊候外品々略之訖

但し品々別紙袖扣二在之候事

同六年八月朔日御拾五歳

一御額江御角入御袖留被遊、御懷守并且ツ御縁之者に御袖下被下置候事

同八年御男作

一御男作 御懷守横尾雄五郎・齊藤新十郎に永代座被下

置、且ッ被 仰立等略之訖

一御拾七歳ニ被為成御具足召初被 遊候節、御懷守御側廻
り御支度ニ附上、且ッ軍師并御小性頭・御小姓等も附上
候御例別紙表方旧例ニ在之候ニ付略之訖

一御甲ハ從

宗秩君御事

御父君様被進被為召候事

一御具足之儀者前々御手入被 仰付、且ッ御召初二付被召
候御衣装ハ蓬萊金縫散し

松翠院様御事

御母君様御婚禮御結納之御衣装御仕立直し御縫詰ニ相成
御軍例之由、前々向々申上被相出候而御仕立ニ被 仰
付候委細同十二年表留ニ在之候事

一御当代様天保年中庄内領百姓共數百人集会、御境目尿前
口くんしうらん群集乱入之様子ニ付、同所上御うわしまりメ之義定居之役人ちゆしんニ付被遊 御出馬六拾人町出放れ川原場御備被相立
被相留候御名挙他国ニ相聞得、且ッ從 上御称挙被為蒙
仰御都合御能、尤酒井左衛門尉殿さいもんのじやうも為御礼申来、且ッ

家老共并向役一統江迄御謝礼として銀子等被遣候次第別
紙表方留ニ在之候事品々略之訖

一藤五郎殿江

おゆふ様御縁組被 仰出候而、御婚禮之節右藤五郎殿御
引廻被遊候ニ付、御同日前以 御出府被遊御同道御登城
御目見御取替并御引渡御規式 御盃御頂戴被遊候御次第
別紙御袖扣在之候事

袖扣下卷 終

24 岩出山伊達家覚書 年末詳 216

壺 永代着座所持之者平士之節、五節句三朔日 御目見
所被相改候事

一永代着座所持之者平士之節、五節句三朔日御悦ニ罷出
御目見得是迄御客之間御縁通ニ而 御目見被 仰付候
処、此度御吟味之上当月朔日御座之間江壺同引揃置候
而 殿様御出座月番之者左之通披露着座之者共御悦申上
候を披露、則

殿様御納戸江被為入候、已来右之通ニ而御目見得被 仰
付候方被 仰出相済候事

右ハ寛政三年六月御用留ニも相記置候事

式

一御当地御足輕佐藤郡太左衛門無家督ニ而死亡ニ依家跡被
相潰候次第

一御当地御足輕佐藤郡太左衛門末期ニ及家督無之口上書親
類加判ニ而相達申候由、支配頭横尾喜兵衛右口上書指出
申候ニ付段々承届申候処、親類之内二男・三男等も無之
上者右郡太左衛門拝領御知行至而惡地ニ而不出物成故、
脇ニハ家督茂無之よし申出候ニ付、右口上書請取置同列
共江も相回し 御前ニ茂入御覽ニ候上本請取之首尾申候
得者即刻病死相達候、右ニ付死亡^ニに依而家跡被相潰候趣
御書付支配頭相渡し為申候事

尤家財欠所者不被 仰付候、母一人有之候ニ付、右引籠
処者承届申達候様支配頭江申渡候事

右ニ付加判親類笹木与治右衛門并山中門之丞遠慮相達申
候ニ付、承済日数三日ニは 御免被成下候事 右は寛政

三年六月也

寛政五年五月御草り取相勤申候、御馬取徳助無家督末期願
相出シ家跡被相潰候事品郡左衛門同様也

参 大口村湯守吉郎右衛門御入湯之節御用ニ相成候様御殿

建立仕上度趣存慮伺願指出候次第

一此度古広間大破ニ付造替仕候処 殿様御二方様御縁者様
方御入湯被為成候節者 龜湯治人入込之座敷ニ御座候得者
新ニ御座敷構指掛拵方之義ニ者過分ニ金代相入御村方諸
人足諸入料相掛り、御不自由之御入湯被遊候義ニ御座候
間、造替之席ニ御座敷構仕度義ニ御座候間、御次之間ハ
拙者自由被成下御座之間尙間者 囲置候様仕度奉存候間、
如願之御下知被成下度奉存候、拵方之義ハ先日内々相伺
候通御下知被成下度奉願候此段宜被 仰上被下度候、已
上

願人 吉郎右衛門

与頭 養助

寛政三年六月

肝入

遊佐兵吉殿

肝入末書御村扱末書ニ而御出入役江出ル右ニ付左之通

相届候而書付相出し申候事

此度湯守吉郎右衛門存慮伺書指出申候ニ付左之通被

仰付候事

一御式台相付可申事

一御座之間附書院御紋三ツ引両可相付候事

一欄間江者九曜相付可申候事

一惣青海ニ仕置被為入候節、御次間ハ壱宇御本陣ニ御用立

候様御殿ニ心懸置候様被 仰付候事

一無屋作り等者御殿之儀ニ候間、御指支無之候事

一御座之間之儀者縦大進歷々衆入湯ニ茂御手前様ハ御指図

無之内ハ自分ニ貸渡之義被相禁候事

一御座之間之外、御式台ハ常式吉郎右衛門ニ自由被 仰付

候事

一右ニ付同村ニ於て為作事料御山壱ヶ処被相渡候事

右之通被 仰付候間、各其心得向々江早速首尾被申、御

普請成就相成候様可被申候、已上

御家老連名

同年同月

御出入衆中

右之通被 仰渡作事過半出来之砌、同村肝入方ハ御郡

方江及造達ニ段々御奉行衆まで及達ニ余り結構成普請ニ

付取撥候様御首尾渡之由吉郎右衛門申出候ニより左之通

御願被相出候事

大丞拝領御知行之内大口村川度与申所ニ温泉有之、折々

大丞始家内湯治茂被致候得共、旅宿ニ可被致作事も無御

座、雜人之湯治人共指置候処を湯治度毎ニ普請被致旅宿

ニ相用被申不自由相致候、先年者同村住居之家中千葉格

左衛門と申者、広間同人先祖ハ壱本松太郎左衛門と申

者、福在之者ニ而鷹野等之旅宿相預作事申付母屋作り青

海付之書院等迄相付普請為仕旅宿ニ相用 獅山様御境目

江被為入候節茂上原と申所ニ而鷹野御旅館ニ被 仰付候

事ニ有之、鷹野川狩ニ被罷出候節茂不自由無之所、右格

左衛門困窮大破ニ及作事も相下ケ旅宿ニ可申付様無御座

不自由被致候折柄、右川度湯守吉郎右衛門ト申者居宅之外に別而湯治人指置候作事仕候由、右之内 大丞旅宿ニ茂相成候様間所相立湯治人指置不申候様ニ作事旅宿守之願申出候ニ付、幸と鷹野川狩猪鹿狩之節旅宿相兼作事申付度、同村ニおゐて山林沓ヶ処右為入料相渡シ大丞兼而好之通住文相渡シ作事為仕候事ニ御座候処、同村肝入方⑤御代官衆江及造達結構過之作事御制外之外之所取撥候様ニとの御下知相成候、吉郎右衛門方⑤申出候沓包向々⑤申出候、右作事者百姓作事ニ候得者御制外之義ニ御座候処、大丞旅宿ニ申付湯治人も指置不申候様座敷江者附書院相付、右居所之傍ニ物置不覆之間少し為相構、右者湯治人等不相入次之間⑤料理之間迄ハ常式吉郎右衛門方ニて仕候様申付作事為仕候義ニ御座候、前書ニ茂相見得候通、先年沓本松奎太郎左衛門と申百姓茂右同様母屋作り青海付書院等迄為仕被相立候所 獅山様御出湯之節御野御殿御用立御郡方御入料も相掛不申御旅宿被遊本望至極ニ被奉存候義ニ御座候、勿論湯元之義者元来板敷・天井・長押等御免之由ニ而、右作事茂在之候而、他所他国

之者も入籠大進歴々衆茂被參候場所之義、大丞様宿と申義ニてハ日立不申候得ハ外国之御外聞も如何与右之通ニ被申付候常式御歴々御湯治ニも大丞旅宿可有之候間借用被致度と申来候義、間々御座候処、答ニも行当り其度毎雜人共入込之間所普請等申付饗応被致候義ニ御座候故、数年右普請望居候得共当村指当り候義茂相弁兼候故打捨被置候処、吉郎右衛門志願ニ付大丞好ミ通住文申付候儀ニ御座候、全百姓作事ニ者相紛不申様依之紋所等迄相付候様為仕候、前々茂右例数多御座候知行之外ニ申付候例茂御座候、沓之迫鬼首村荒湯ニ茂旅宿有之只今者焼失仕候而仕繼無之候、且伏見村ニも野場旅宿之作事為仕候儀ニ而、全百姓御制外之作事仕候ニ可相紛様無御座候、青海ト申候得者垂木青具之様ニ相聞得候得共、梁鼻青海与申候而、風雨之節湿風ヲ相請候までニ而軒端相延し候作事ニ御座候、母屋を住文申付候得共切破風ニ仕、煙之吹抜申候様ニ仕候得者嶽山近処に而雨雪吹入申候故、雪国之屋根窓同様ニ屋根之両端江扱首相立切破風ニ仕り煙相抜ケ候様作事仕候事ニ御座候、右之通ニ而百姓作事ニ無

御座候、大丞申附候作事ニ御座候間、向々御指支無之様御下知被成下度可奉願候、已上

大丞家老

寛政三年十月

永根助兵衛

同

柳内五郎兵衛

同

賜目新左衛門

同

遠藤弥右衛門

右之通御願被相出候所、同六年二月仮屋之御趣意ニ被相願候御身被相戻候ニ付、同年三月又以左之通

大丞拝領御知行之内、玉造郡大口村川度と申所温泉有之、折々大丞家内湯治被致候処、旅宿仮屋連茂無之、湯守吉郎右衛門雜人之湯治人指置候所を湯治度毎ニ普請被致旅宿ニ相用不自由被致候、且又他所之者茂入籠之場所ニ而御外聞も有之義、大丞御歴々御湯治ニ茂借用申来候得者其度毎ニ雜人入籠之間所ヲ普請等被申付、同所江仮

屋作事被致候、雜人之湯治人等指置不申、大丞家内湯治并大進歴々衆ハ借用申来無実義節被相用候、此段御届仕置候様被申付如此ニ御座候、已上

寛政六年三月

大丞家老

柳内五郎兵衛

〃

皆川与市左衛門

〃

遠藤弥右衛門

右之通被相届候所、同年六月晦日左之通被仰渡相濟候事

熊谷斎殿

美濃

伊達大丞殿御知行玉造郡大口村川度湯元仮屋被相建候由、如別紙被相届候処、右ニ付候而者最初及吟味居候処、湯元之義ニも有之、此度別段之御吟味を以被相届候通ニ而被指置候方と同役中吟味候条、其心得向々江茂可申渡候、已上

六月卅日

尚以右二付最初願被相出向々及吟味居候忝卷ハ此度不及吟味候方と令吟味候間、其心得可有之、右吟味忝卷留置申候、已上

右之通順々を以御村方江御首尾渡有之候段、大口村肝入兵吉方ハ御村扱手前江申出候趣ヲ以申達候事

御徒目付始末二被 仰付御町役見届

四 欠所代始末并右代被召仕候様被 仰渡候事

一欠所代只今迄者御城下御足輕支配頭方ハ被相渡被指置候処、別段御吟味を以当年ハ御町奉行方満代二被仰付、右

代御遣方左二

一御牢御修覆料

一何か被相尋候者有之、御足輕等尋二被遣候節被相渡候事

一橋之御繕金代二被相廻候事

右之外御遣料二不被相廻候事、右之段正月廿八日会所二於て御町役門崎惣内方江被申渡候事

右之通被 仰付候処、御町役品々御勘定之義相願候二付、御吟味御勘定弘被相除冊同牒江被相渡受弘御出入聞判二而

仕候様被 仰付候事

宝曆拾四年之御用留二有り

五 玉葉請取候節左之通受取候様被 仰付候事

一鉄炮拾包二而猪山被 仰付候者者藥忝放二五包カキリ

一小筒二而右同断被相出候節者藥忝放二貳包かきり

一御用鳥打被相出候者者 忝包五分かきり

右之通被相出候者者相心得居候様宝曆四年正月廿八日御小

性頭青木新兵衛江申渡候事

寛政三年六月十八日仙御留主居青木新兵衛御役替被

仰付候二より指紙左之通

一筆令啓達候、今般御手前江大番頭被 仰付之旨御意候、

恐惶謹言

六月

彌右衛門（花押）

新左衛門（花押）

青木新兵衛殿

五郎兵衛（花押）

助兵衛（花押）

右之通二而指紙仙台江為相登申候、先年矢内源左衛門御留主居役方御家老見習御用人被 仰付候砌者一筆致達候と相

調、諸苗字ニ而恐惶謹言と相認候やト相見得候、此度御吟味之上御家老役等御留守居役ハ被 仰付候儀者品違之義、此度者前文之通文字調ノ様共ニ右之通ニ而苗字無シニ而遣し申候事

文化十二年五月朔日松岡第八郎江指代リハ御留主居被 仰付候御例を以指紙為相登候、併無苗字書判之内吟味可申候

七 文化三年二月廿一日満願寺後祐真入院之事

一廿一日入院ニ付、同日晩丸三菜ニ而御料理被下候事

一満願寺被召連候人数江御賄被相出候事

一寺附御武頭菅谷傳九郎裏打上下ニ而相詰御賄被下候事

一揚泉院看坊無量光寺取持被 仰付相詰居候ニ付御賄被下候事

一入院相済否菱沼傳九郎月番宅江只今入院之段相達候事

一同晩満願寺月番宅江被罷越入院仕候段相達申候、則御小性頭を以 御耳ニ相立申候事

一同寺御席次第 御目見得被 仰付候様寺附菅谷傳九郎を

以被願候事

一筆致啓上候、明三日朝 御目見得之上 御料理相遣候旨御意ニ御座候、恐惶謹言

三月

(花押)

尚以 殿様御不快ニ付大力様江御目見得被 仰付候間、其御心得明半時御登 城可被成候、已上

但シ殿様御不快中故奉書文言前々ハ相違申候

一大力様御書院御中之間御着座、献上物御扇子箱壱つ御卒江取越、御敷居ハ三畳目下江御小性上置月番披露ニ而御敷居より二畳目江満願寺被相出、御目見得相済御障子際江着座被致候と御料理相出候様月番江 御意有之、月番其後申述候と則被為入候事

一御同座ニ而御料理丸三菜ニ而御酒・薄茶・御菓子とも二出ル

献上物

一殿様江御扇子箱 壱つ 一大力様江御菓子箱 壱つ

一御前様御茶袋 御兄弟様方御寄合ニ

右之通指上度申候、前々者御銘々被指上候様天明八年二茂

相見得候事

六月廿二日前書之通

殿様御目得懸之義ニ付左之通

一筆致啓上候、明廿二日館後四ツ時 御目見得被 仰付旨
被 仰出候、同刻御登城可被成候、恐惶謹言

六月廿二日

(花押)

満願寺

遠藤弥右衛門

一献上物等者前々相済居候故、献上物なし、兼而之通

御盃被下候事

寛政三年七月十六日矢内七兵衛居家焼失ニ付、火元并

組合隣家相尋候処、此節柳内五郎兵衛・鷗目新左衛門

組合ニ付被相尋之次第 御家老役之節事

25 岩出山伊達家覚書(前欠) 年未詳 215

(前欠)

在之候ハ、右之内能筆ニ候壹人ニ而由、何レ御相伴通ニ

在之候得ハ能筆ニ候

月番万物書共振廻

一右振廻者同役衆相済候已後料理左ニ

一酒肴 三種 一せんばんニノ汁之内壹菜折付 一汁

一香の物 焼物菓子色々 但菓子取越出ス

正月二日 御野初ニ付、物書共月番宅江寄合之節左ニ

御帳改之節共ニ

一吸物ニ而 酒出ス 酒肴二種

同月御帳改之節左ニ

一物書共二月番之者賄相出ス、何そ三菜位ニ而酒茂出ス

十二月御用寄合之節、見合御用相片付候ハ、月番

之者賄相出ス可申候、是以同様之事

廿二

寺方江御賞之節之事

一実相寺隠居機輪和尚御扶持方掛献上之節御、書院中之間

ニ而御書立を以絹拝領之節ハ御家老例座月番、右書立続

候而被 仰渡候事 但シ此節機輪病氣ニ而代僧相出被申

候事

一延寿寺・松窓寺江明和三年六月朔日御知行沽却ニ付、御

割替之節茂同役列座御書院ニ而月番直々御書立読候而被

仰渡候事、御書付ハ御目付江相渡候而兩寺江相渡ス、
右者壺ヶ寺ツ、相出被 仰渡候事、兼而御割替之通御礼
御目見等ハなし

廿三 御家老嫡子御小性之間并御近習等被 仰付候御礼親
申上候事

一相田半左衛門御家老之節、嫡子武膳太御狭箱役被 仰付
候二付、当番御小性頭を以右武膳太御狭箱役被 仰付候
御礼半左衛門申上候事

一安積孫右衛門御家老之節、同性秀右衛門御小性之間江被
召出候節、右孫右衛門御礼之義同役衆江茂相談、当番御
小性頭江相談候者秀右衛門御小性之間江被召出難有仕合
奉存候、右御礼二ハ態と罷出候様ニも相答不申詰合ニ候
得者申上候段、御小性頭門崎新左衛門相談申上候得者
御前御覚茂右之通ニ被遊御座候由ニ而御礼相済候段、右
新左衛門申聞候事

一明和三年十一月右秀右衛門御近習御小性見習、御小性頭
合被 仰渡候二付、孫右衛門当番御小性頭ヲ以御近習御
小性被 仰付難有仕合御礼頼入候訳御出仕ニ罷出候節

直々申談候事

廿四 藤左衛門様御出之節

一藤左衛門様御当地江御出之節ハ当番御武頭江当番御目付
謀代り合ニ而御取次方御小性頭江取合相勤候様首尾可申
事、御出帰り共ニ案内御小人罷出候様支配頭江月番合首
尾可申候事、但し御門下江御家老同列御迎ニ罷出候様後
会所江相詰御小性頭之間江罷越シ御附人ヲ以御機嫌伺可
申上事御帰りの節ハ御家老同列中御式台江召出候事服付
之義在之節可申合候事

一藤左衛門様御出立後 御前様江御悦可申上事

廿五 不届有之御咎之上屋敷替被 仰付候事并願之上屋
敷替之事

一花洲安兵衛不届有之御知行被召上候、以後屋敷替被 仰
付候節八月番宅ニ而非番同役壺人相詰、右安兵衛親類相
出被 仰渡候事

附右安兵衛屋敷江吾妻五左衛門屋敷替被 仰付候儀者
御客之間ニ而同役壺人相加り申渡候事

一双方合屋敷替願相出候而願之通被 仰渡候節ハ左之通月

番方二而末書御屋敷奉行江相渡可申事

右願之通吟味候処、重キ願ニ候得共、双方勝手を以奉願儀ニ候間、如願被成下候条、其心得兼而之通屋敷替後御帳面相直し候様可被申候、以上

年号月日

御家老連名

屋敷奉行宛名

一御町奉行江茂組合人之義首尾可申候事

但シ御知行等被下置被召出候者、屋敷等被下置候節も組合入御町奉行江首尾可申候事、御徒組ニ被召出候節茂同断

廿六 宮床六郎様奥様御婚礼已後初而御出被遊候次第

一宮床六郎様奥様御婚礼初而安永五年八月廿八日御出、同日麻上下二被 仰出、当番御目付江月番分首尾申候

一御相伴分御目付格列迄柳町江御迎ニ罷出候様月番分相触候事、何茂麻上下・十徳ニ而兼而之処江

一五ヶ町検断共先年角田 信寿院様御里入之節、釈迦堂橋迄罷出居直々御案内仕上候二付、此度茂右同例を以被仰付候事、羽織袴ニ而麻上下二而罷出候節八下町長作

前江出候由、御町奉行青木新兵衛申聞候事

一御相伴通分御役目付迄之呼懸、奥御用人松浦格左衛門ニ被 仰付候事、釈迦堂橋迄罷出待上居、柳町ニ而呼懸仕候、検断共ハ宮床床御供頭也

一右畢而御役目付 御両館様江罷出御帳江相付御悦可申上事

附御家老者御両奥御用人を以申上候

殿様 若殿様江御小性頭を以申上ル

一御客様江茂御機嫌伺御悦ともに奥御用人を以申上候事

一宮床御家老分御脇迄八人御料理被下置、外ハ御酒計被下置候

一宮床奥様九月八日御家老一字御目見得被 仰付、於御膳組ニ右奥様分御酒壺樽・御肴生貝鯛二枚御局を以被下置候間、則御礼申上候、右御酒・御肴於奥方相披候様御内々奥方分被 仰出候二付、於奥方相披候事

一御逗留中御家老老字分御歴ニ相成候物指上候様御内々御出入国井十郎左衛門二被 仰付、御菓子指上候事、御出入分も指上候様ニ相聞得候

一九月廿一日宮床奥様御披二付、御相伴通分御役目付迄御見立、大御門下江罷出候様月番分相触候事、御出立已後御兩館江罷出御相伴通計御悦申上候事

(図省略)

右之通御見立二召出ル

一女中町御門外分乗申候御供乗懸右同断、検断并御用達者御見立二罷出候事

二十七 御座之間御指支之節、御書院二而御出仕被 仰付候節之絵図

(図省略)

廿八 御上府之砌御門送詰所之事

一御医師・御小性頭・御出入御重役、右江者御供触并時指迄月番分触也

一御広間番為相登候儀ハ 名前御小性頭を以 御耳二相立可申候事

一御留主中ハ御小性頭大番頭謀代り、大番頭指支候ハ、御目付被 仰付候事、右者御出府前二相伺指置、御出立已後可申渡候事

(図省略)

二十九 公儀御沙汰二相成落居被 仰付欠所代被相納候始末之事

一欠所代相納候様申来候ハ、左之通 前書左二

内蔵様御家中御足輕誰持道具左之通

一——何十文 何

一右同断 何

右之通拙者儀セリ買付右代上納仕候

玉造郡岩出山本郷

年号 何町 誰判

月日

右之通相払申候所相違無御座候

同年同月 石崎甚左衛門

渡部太五七

御足輕末書二而指支申候段、品々仙台御留主居分申来候

二付、御徒目付石崎甚左衛門并御徒渡部太

五七右兩人名前二而為相登申候、此已後 公

儀江相納申候欠所御払物在之節者並御徒忝人御仕来二而

被相出候 右之通伊達内藏家中足輕誰不届御座候二付、
追放被 仰付、持道具欠所二被相行候二付、欠所之首尾
仕、右払代何百文相納申候、以上

月日

安部新五左衛門判

右之通書付二仕候而 仙台御門番御足輕定番ヲ以評定
所江御留主居相出申来候事

一仙台〆申来候者部屋住之者者膳碗等家財二無之候間、相
入不申候びん道具ハ改二無之候得者評定所指支申候由申
来候間

已後者部屋住之者者ひん道具相改候

此様二御徒目付江首尾可申候事

一何 何程 一 一

此代何百文

此代何百文 外

右〆何百文何口

右〆何十何口

此代何貫何百何十文

右之通安房様御家中御小性組凡下二被相落候、何の誰殿
家財欠所いろ／＼前文之通直段付候而買取申候儀実正二
御座候、已上

亘理郡五日町古物買

年号月日

惣十郎判

右之通拙者共立合相払申候所、相違無御座候以上

御徒目付 壹人 清野丹宮判

考役 壹人 鈴木伊左衛門判

大番組 壹人 高橋衆太夫判

右三人末書二而被相出候由、御留主居方〆申来候事、片
書等二而被相出候儀者無之事

右之通伊達安房家中小性組凡下二被相落候、天野喜平太
不届御座候而御仕置被 仰付候上、家財者欠所二被 仰
付候二付、欠所之首尾仕、右払代相納申候、以上

何貫何百文

右留主居

月日

千葉十郎左衛門判

右之通亘理〆欠所代相納申候御例二在之由二而、安部新
五左衛門相下申候間、末々為見合之記置也

卅 沽却御達之節余給人并御藏入在之候而取合之事

一内藏御知行所志田郡馬寄村之内、鷹の巢百姓伴左衛門義

年貢懸り御座候二付、段々致催^マ足候得共難渋仕候、仍而
沽却禿願別紙之通申出候間、沽却被成下度候跡田地之義
者散田立付始末為仕指置申候、且松坂團治殿御知行所持
仕候間、御取合申候所御同人分諸懸無之段申来、如斯二
御座候、以上

内藏家老

年号月日

何人連判

今 七三郎殿

右之通松坂殿義書入候義ハ宝曆九年九月氏家縫殿殿舟越
村御百姓持合在之、其節御同人江取合至、御達之文言江
も右之通ニて此度も右之御例を以被相達候事

一公儀御藏入所持之百姓ニ相見得候ハ、右達書相添御代官

衆江取合申遣、答次第可被相達候事

一沽却御達之節、余給人衆在之候ハ、御村扱方御出入吟

味取合候、已後御達江書入可申候事

三十一 御家中廻番被 仰付候始末之事

一五ヶ町并御家中前共ニ如例年之春中廻番雪路払候ハ、被
相出候節左之通

一御徒目付老人御小性頭江首尾可申事 今ノ御徒横目也

一御小人老人支配頭江首尾可申事

一御出入江何時ハ廻番被相出候儀首尾可申事

一御目付江も右同断

一御小性頭を以何時ハ廻番被仰付候首尾仕候由可申上事、

右廻番之儀大体者御目付申出候事、若不申出候ハ、月番

ハ申渡候事

世二 御家中前上り屋敷在之候ハ、掃除并垣結方之事

一掃除并垣結方被 仰付候節、屋敷奉行ハ垣結方并掃除被

仰付候様仕度由申出候間、御出入江首尾可申候事、御出

入方御作事奉行江首尾相成候事、奉行方ニ而垣結掃除

共仕候事

26 見聞雜記 天保元年（一八三〇） 48

天保元年九月虎松様御鼻□□拝領仕候

天保三年九月 殿様御印籠拝領仕候

〆五年十二月廿八日 殿様ハ黒の人羽江雪すすき御紋付

拝領仕候

〃虎松様〆御帶拝領仕候

右之通誰方□候□

立紙

組合替始末

横折紙

拙者共組合何某余組江被相廻、何某被相入五人組二被成申候、仍而組合始末如此二御座候、以上

組合連名

年号

月日 御目付連名

御知行替願

奉願口上覚

一高五貫文

何某

内

一田代何百文

〃何百

一高壱貫文

内

一何百文

何

〃何百文

右之通双方勝手を以当地〆承候御知行替御度内々申合仕候処 御上御指支不被成御座候ハ如願被成下度仍而親類加判

を以奉奉願候以上

一藁竹 三駄

一藁竹 七駄

一杭 五荷

右之通壱ヶ年置二被相渡候処、当年申受別二御座候間可被相渡被下度

天保二年

五月

我

一 天保三年六月

御用在之御指紙二而

町江被触候写

町裏御堀二而□□義者勿論洗す、き等都而相用ひ候儀御要害堀之義二候間、先年〆被相禁置候分ヶ而町御門〆上之方人眼無之故か不浄之物を洗、不浄之悪水等迄も流入候様二

相聞得不届之至二候間、惡水等不^レ入様^レ流仕置、常式御堀きわ江不致通用様垣囲等仕置、家内之者ハ不及申、当座ニ参り居候者ニも可申付置候而、御役人者勿論夫々見当り申出候ハ、訖度御吟味被仰付候間、堅相守候様裏御堀「^一」通り可被申渡候、以上

六月

御家「^一」

御町奉行「^一」

「目義ニ伊藤」

御目付已上諸役人「^一」平士ニも若者共杖つき候者

相見得「^一」者[□]段、若者共杖不相成「^一」候

御城中江雪駄はき登城致候者も相見得申候御、用ニ而出入

致ニ者余之処江出入とハ相^{□□}候事

右之趣ニ相見得申候 右ハ 智岩様被 仰出候

由也、平士の老人者願上ニ而御免之

事

天保四年凶作ニ付佐竹侯御家中江被 仰渡ノ写

去年不作、今年猶不熟ニ付、六郡飢渴同様趣ニ相聞得申候、飢民共餓死ニ相及候者も可在之心痛之至ニ候、是迄夫々餓死ニ相及候者在之候而者我等從御先代引続「^一」

「保本志不相立候、且つ隣国江相」 「之至ニ

候依而如何[□]共」 「候間、此節を存何れ

も」 「相互ニ救合候様、此宿趣末々之

「^一」存候、勿論手元壺身之義者何程^{□□}忍可申

候間、思慮相尽し可申聞候、是迄 御先代御遜りの品々武器之外、重器たりとも手放候義不苦候間、此志ニ基キ當時之危急相救候様可計候、此旨役人共江も可申含候事

此文言写置^{□□}致候様ニ付写置

享保拾六年三月改而被 仰渡候覚

一上方様御通り之節遠方罷通り者御通り奉拝見候而も下ニも居不申無礼ニ罷通候者も在之候、自今御通を奉存候ハ、下ニ居無礼不仕候様ニ可仕候、此段ハ下々内之者世倅等迄兼而可申含候事

但し相背候者在之候ハ、品ニ合訖度曲事ニ可 仰付候、尤内之者等相背候者在之候ハ、主人」

可被 仰付候事

一重キ御役目之者并ニ支配頭」

「者

を敬、惣而無礼無之」

」

上たる者ニ無礼無之」

」

一惣而奉公人之子共ハ何ニ而も芸」

」

制度可仕儀ニ候様壹円左様之事心付不申」

」

見得候、第壹物書候儀者其身ハ勿論御用ニも相立候義ニ

候所ニ、少計物書候得者其通りと存候外、子共制度も不

仕遊□計ニも無構致成長、其子も不自由を致させ御用ニ

も相立不申候、自今ハ親々右之段ヲ相心得子共物書候事

第壹ニ制度仕、其外何ニ而も其身勝手次第ニ芸能心懸候

様ニ可仕候、尤無益之遊事不仕候様可致制度事

但し若キ者ハ其身たり共右之心懸ケ可仕事

一奉公人養子之儀ハ五拾歳内ニ申合願指出可申候、勿論由

緒在之者之内、親類血脈致吟味可申合候、万壹親類之内

ニ無之候か、又者在之候共、指支有之者ハ他人ニ而も又

ハ他所方」 「儀ニ候間、申合願指出可申候、双

方」

判を以指出可申事

但し養子ニ申合」

」

吟味仕候者も在之養子ニ申合」

」

老年迄家督無之者茂」

」

候□□ハ持参金并知行持参之儀申合候儀者壹切御停止

ニ被 仰付間、親類共迄右之心得ニ而吟味可仕候、若

相背候者在之候ハ、連判を以親類迄曲事ニ被 仰付候

事

一末期之願之儀、其子共御奉公仕候者ハ勿論、御目見得相

濟候者ハ末期之願指出候ニ不及候、病死仕候段ハ早速差

遣ニ無之親類支配頭江可申出事

但し子共無之者病氣指重り候ハ、養子早速致吟味願可

申出候、子共在之候共幼少ニ而御目見得前ニ候ハ、末

期之願指出可申事

一縁組之義士ハ侍合取組可申候□士ニ候内ニ相懸無之候

ハ、御徒組迄ハ不苦候、其外合ハ申合間敷候、尤縁組申

合候時分ハ支配頭江願可申出候事

但し後妻ハ輕キ者ハ取組候共

其

節支配頭江願可申出

一御侍組縁組之義士ハ

御足輕等成共又者御足輕等

成共可申合候、町人・百性ハ申合間敷

ハ候儀も在之候ハ、町人・百性ニ而も縁組申合不苦候、

其節願相出、尤何方ハ申合候共支配頭迄願指出可申事

但後妻ハ輕キ者ニ候共不苦候、是又其節願支配頭江指

出可申事

一御足輕組ハ已下御組之者ハ縁組之義、百性・町人成共不

苦候、併支配頭迄願指出可指図受事

一市用相足候者奉公人脇指計ニ而往来仕候者も間々在之様

ニ相聞得候、至而不宜事ニ候、自今無余儀市用在之候

ハ、大小を指市用相足可申候事、市用相足候ハ、早速罷

歸市中ニ久敷罷居不可申事

一士之分隣江罷越候時分脇指計、或ハ近隣ニ候得者無刀ニ

而罷越候者も間々在之様ニ相聞得不似士ニ事ニ候、自今

士の分門外江罷

隣候茂大小を指往来可仕事

但し小進之者

ハ勝手次第たる

一隠居科之事

從公儀被 仰

高十ヶ壺相分可申候、乍去少進之者

壺相分候而者

其隠居至而及迷惑候儀可在之候間、三貫文以上之者

十ヶ壺ニ相分、三貫已下之者も段々右ニ准シ其進退高二

応候而、其隠居之者渴命も不仕程ニ相分ケ可申候、子共

たる者ハ難義吟味品在之候間、親類共吟味之上相分候様

ニ可仕事

但し三貫文以上只今迄十ヶ壺過相分け者当年ハ改而

拾ヶ壺相分可申候、三貫文以下と過分ニ相分候者も在

之候ハ、進退ニ応し相改相分可申事

覺

一御足輕以下御組之者他所ハ縁組仕候ハ、相窺可申候、御

知行所中ニ而申合候儀ハ支配頭

届指図可仕事

此度被 仰出候縁組之儀ニ付

相伺候義在之候ハ、右之「

申候、尤此紙面之通写置自「

義左衛門 齋藤

勝右衛門 安積

享保拾四年三月廿八日 八郎右衛門 中森

五左衛門 吾妻

五兵衛 「」

菅利左衛門殿・毛利正左衛門殿

菅谷弥「衛門殿

天保五年二月凶作ニ付永代御知行遜り被 相「候ニ付、御

知行遜り「」

奉願「」 立紙

高何貫文 誰拝領御知行

高何貫文 誰拝領御知行

内

一田代何百文

六石「

何村誰分

誰

何百文

右ハ誰方「永代御知行遜り受申「

右之通り双方勝手を以「拙者拝「

代誰方ハ遜り受申度内々申「

御上御指支不「

親類加判を以奉願「

御徒ハ重判無シ

手前ニ而も高四百三拾五文

右ハ「

五年「

相免候節「

六月廿八日迄ニ而「

三人ハ遜受候

我妻直治

一手作高抱地高を遜り置候を御知行替致候節願相出候様

一高田代何文

式石「

右ハ拙者手作高二御座候所、内様を以抱地高之

遜り置候高「 」「間誰方ニ而近々願□出候

ハ、手作高ニ被成下度候、右の様なるものニ御

座候而済

一御改之節当初者御「

印判重判□相「

永代家列

御一門

御一家

准御一家

「 」「

切支丹御改

午ノ年 手前

酉花

御宿老

着座

御太刀上

御召出

未ノ年 菅

大番組

御城番組

長□ニ付親類矢内清兵衛判請合

従是侍分

一上四人内 男式人

我妻弥市左衛門

御同朋

御茶道

御徒小性組

御徒組

女式人

印判書判なし

御不断組

御鷹匠組

御給主組

御名懸組

御本帳ハ組合請合

新御名懸組

御台所人

出入司支配

本郷御給主組

一松島御名代相勤候節、当日ニ松島出立不被存候得者自分

従是侍已下

馬ニ而相立候由也、能々御聞配御勤可被成候等心得如斯

檢校

衆分座頭

御馬乗

御伯楽

但シ松島出立致高城ニ宿候得者「

御乱舞之者

御旗之足輕

御足輕御小人

已下□
御免之者

相立候外ニ候間、能々御聞「

御掃除□主

御次料理人

並御足輕

御当日ニ無之とも「 」「出候とも松島ニ而「 」「

ニ候得者指支無之事

御小人

御近習鉄炮組御足輕

本郷御足輕

御本丸御門番

御町同心

諸役所江被差置候
御足輕並之者

御飯屋守

御小人並之者

御「

御松林守

御路地之者

者「

御城下町検断

御「

御座船之頭

御水主之者

御「

御三階屋

御紙漉

「

御郡用方御用相勤候者

御目明

天保六年六月暑中御見舞之節

御両家

亘理石見様

小梁川内膳様

大立目日向様

大松澤出雲様

石川筑前様

遠藤帶刀様

中村左衛門様

梁川主水様

花覚院様

古内筑前殿

古内主膳殿

御母儀殿

御内義殿

大條監物殿

上遠野伊豆殿

御母儀殿

御母儀殿

右ハ何茂様ハ

何茂様江

天保六年六月ノ廻紙

一夫死去之後実子養子又者親「

「越他江嫁し候類

俣在之候「

「□嫁し候儀者「

「

ニ在之候

附り夫死後二至り実家「

「候ハ、品々ハ御吟

味被成下候事

一手間代先後ハ十日壺切、此後ハ十六日壺切壺□香ノ物

一「「

御指「

「

代壺貫「

「

大豆壺斗八升

天保七年十一月十三日覚

一米古六升 大豆百三四十文 代壺ノ五百六拾文

□八九升 小豆百八九十文

一

天保八年二月廿三日

〃三月廿三日

一古米 五斗壹盃

一古米五升壹盃

大豆 百七十文

一大豆百九十文

代耆ノ五百文

五月朔日

七月末二相成

一古米五升壹盃

一古米壹斗

大豆百七十文

小豆百十文位〆八九十迄

代耆ノ五百文

十月

十二月

一新米二斗

一米壹斗七八升

大豆七十文位か

大豆八十五文

小

無役之役例

有備館目付
御近習御小性格

御検地上廻り

御木藏役

長瀬御藏役人

人馬割御召具足役

大工屋本ノ

村々山林奉行

御扶持方渡方并御囲籾方

御備金御貸方係り

御大所持

仙御大所持

奥方御破損定奉行

本郷用水方

「」

徳川家系図

八幡太郎

式部大夫

義家——義国——新田大炊之介義重^{上野}——領主御上西入道

新田足利之元祖

義国藏人 義貞祖

義範 山名祖

義俊 里見祖

義季 徳川四郎

頼氏赦氏家持俊氏——徳川太郎政義

修理亮親季

松平

徳川左馬之介有親——二郎三郎親氏

三州坂井二而卒

酒井五郎氏忠・忠世
徳川二郎三郎泰親

松平修理之介親長

〃和泉守常家

〃紀伊守

親忠 徳川左京亮——徳川藏人長親

信忠二郎三郎

桜井内膳信定

松平勘耆郎

松平勘四郎利長

藤井□□

二郎三郎清康——廣忠卿——家康公

類族御改役 御酒造方

御下屋敷御火消并御厩頭

御野場方 御家老附物書 御勘

御立山并海道奉行 御留主居指代り

尿前御関所定番 丁主立

奉願口上覚

奉公人前

一高田代何百文

壹う 誰御知行

右之通誰御知行手取高二御座候処、双方勝手を以当地分本銘六石小役付之所二石銘無小役を以誰抱地高二被成下度奉願候、万壹上り地等二も被成候ハ、本銘六石小役付を以永御散田ニ被成下度奉願候間、此段宜敷御申上願度候、以上

天保八年

何月

本郷上下の目付

地肝入

但二礼

相出候得者

壹礼ハ

誰殿

右之通願相出申候間如願御吟味被成下度申上

同年

同月

右之通抱地受遜り願指出申候間、如斯二御座候御座候以上

一^{上六人}_{下四人} 合拾人内^{男六人}_{女四人}

遊佐源作

春直 花押

一上式人^{男一人}_{女一人}

山中東衛

定之 花押

天保九年二月改山中出ス 花押

拙者共組合三人、去年御改迄四人組二御座候所、御改後氏家順藏出奔、佐々木始断罪ニ被相行、当御改二人ニ而相出申候、仍而組合減り之始末如此御座候、已上

山中東衛判

天保九年二月

遊佐源作判

御町役と

御目付江兩役江出ス

一天保九年六月十一日千葉友郎実父

中ニ付相伺候得者親類共兼而用之度

ニ付門の脇をかきを破相出候事 門の南の方

一文政拾二年六月三日家督願済、天保元年三月三日家督并

御目見得済、同年四月十八日御近習御小性仮役、同二年

十月本役御下屋敷詰、同月十八日御取移、同三年閏十一

月廿八日御膳番御同所詰、同五年七月御書物役兼、同七

年四月四日 虎松様御附人兼帯、同拾年三月三日五左衛

門と拝領、同十二年三月六日御目付仮役、同七月廿一日

本役御小人頭兼帯、弘化元年二月朔日在郷御足輕頭兼

帯、翌二年二月朔日御免、弘化三年八月廿二日御守役仮

役、同十月六日奥御用人、同四年五月四日御免、同六月

朔日御目付被 仰付候事

一三河守様之御儀御願御座等被成候節三河守殿と相達不苦

由之事二百ヶ年御意之節

「相達候由」

也、心得印置者也、尤之事ニ存候

嘉永元年九月廿八日奥御用人被仰付、同四年三月三日大

番頭被 仰付候事

末那板

長二尺八寸高四寸
横四寸五歩

一八苦 生苦 老苦 病苦 死苦 愛別離苦

五陰盛苦 求不得苦 怨憎会苦

一知死期時

上旬一二十九子午卯酉三四五丑未辰戌六七八寅申巳亥
中旬一二十九丑未辰戌三四五寅申巳亥六七八子午卯酉
下旬一二十九寅申巳亥三四五子午卯酉六七八丑未辰戌

一觀音 具ニ云觀世音又云觀自在 如意輪

十一面 聖 馬頭 准胝

千手

貞山様江追腹之衆

一大規喜右衛門 十三 一小野仁左衛門 十二

一矢野目伊兵衛 八 一入生田三右衛門 九

表

三十三間二尺 小平慶治郎 小平		三十三間三尺 花潤源治 源治		三十三間二尺 梁川主亮 主亮		三十三間二尺 菅野保 保		三十九間三尺 我妻五左衛門 三十三間 五左衛門□□	
祇十五間		祇十祇四間尺口		八間四尺		十廿間		和區川十川十川間 川十川間	

裏

嘉永四年十月 御屋敷方々写置		一菅野庄左衛門 ^(勝) 六		一南治郎吉 ^(次)	
一桑折豊後 十		一佐藤内膳 三		一石田将監 一	
一渡部權之丞 ^(通) 十四		家来一人追腹		家来二人追腹	
一古内主膳		一茂庭采女 二		一青木仲五郎 ^(忠) 四	
一遠藤九郎兵衛		家来二人追腹		一小平太郎左衛門 十一	
一矢野又左衛門		一加藤重三郎 五		一喜清	
一小野寺清左衛門		一桑折豊後 十		中山藤右衛門 我家二而切腹ス	
一笹原鹿之助		一渡部權之丞 ^(通) 十四		鈴木文右衛門	
一鈴木一角		義山様追腹之衆		一平田惣左衛門	
一田中□□		木無瀬道念		一花見岡弥兵衛	
家来「」		中山藤右衛門 我家二而切腹ス		一工藤与喜衛門	
		鈴木文右衛門		一後藤十兵衛	
		一古内主膳		一遠藤九郎兵衛	
		一矢野又左衛門		一小野寺清左衛門	
		一小野寺清左衛門		一笹原鹿之助	
		一鈴木一角		一田中□□	

一茂庭茂兵衛

□□四人

十五品方

一金 銀 銅 鉛 錫 湯 火石 拾石^{ヒロイ} 石灰 石膏 藥

雄黃 明凡^{モウ} 焰硝^{エン} 白土

御膳番方膳宰録写

御家老衆^江達書

一筆啓上仕候

何々御祝義二付、来ル幾日御酒被下置旨

御意ニ御座候 恐惶謹言

花押

月日

猶以何時御登城可被成置候

苗字無之殿付 封ノ表ハ実名 表苗字名

御用之義被成御座候間、何時被召出候様被 仰出候条、御

登城可被成置候、以上

苗字無之様付

御登館「」

御小性頭衆^江

御相伴通^江被下物有之候か、何ぞ重立被 仰出「」

連名ニ相認諸苗字殿付

附御小性頭衆^江計二而も重立候節ハ如右通例之時ハ左

二

御用之義被成御座候間、何時召出候様被 仰出候条、御登

城可被成候、以上

諸苗字様付

御相伴通^江

御用之儀被成御座候間、何時召出候様被 仰出候条、御登

城可被成候、以上

諸苗字殿付

役方ニ付御用被遣候節ハ諸苗字様付

御役目付^江

御用之儀被成御座候間、召出候様被 仰出候、以上

諸苗字殿付

通例之御用者様付被 仰出候 御意ニ御座候ハ御役目付^江

計相認可申事

平侍^江

御用之儀被成御座候間、可被召出候」

諸苗字殿付

御徒組江

御用之義有之候間、召出可被申候、已上

諸苗字殿付

御役方一篇之御用も同様之事

御足輕江

御用之義有之候間、召出可申候、已上

一凡下町人御用達等ハ殿付手前苗字無

大御門通判覚

一何之何方江被相下候条、無違乱相通シ可申候、以上

年号

諸苗字

月日

大御門番頭と

吾妻家文書を読む 解説参加者一覧

岩出山古文書を読む会

高橋盛	菊地優子	青山善之
阿部弘樹	阿部政喜	荒関千枝子
石ヶ森勉	伊藤房江	大内充
扇明美	大場和賀夫	笠原直子
門脇卓	経田耕介	後藤真由美
今野鈴子	今野正則	佐々木孝志
佐々木光秋	佐佐木美穂子	佐藤ひろ子
佐藤利博	高橋恵美子	高橋武光
高橋利昭	高橋雅彦	高橋稔
竹内敬一	千葉康	鴫田勝彦
富田精耕	中條俊江	橋本富夫
三浦栄夫	宮田尚夫	村上俊則
村上美智江	門間安行	遊佐章裕

東北アジア研究センター叢書 第76号

吾妻家文書を読む 第一集

—岩出山伊達家の組織—

2025年2月20日発行

編著者	荒武 賢一郎 岩出山古文書を読む会
発行者	東北大学東北アジア研究センター
	〒980-8576 仙台市青葉区川内41
印刷	小宮山印刷工業株式会社